第三種郵便物認可

女學世界

第一巻第二號

口繪




季節向新柄流行品を取揃へ階上階下總體に陳列致有之
倘御休息室をも取設け置候間御慰に御子樣方御連れ遊
ばされ緩々御遊覽なし下され度奉願上候
四番賣場
地方よりの
御注文に對
してはくわ
しき御案内
書有之候間
御一報次第
御送り可申
上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目
東京電話本局
特五一一五
一二一七
一八六〇
大阪電話東
特四七三
一六五〇

女學世界第貳號目次

(甲の二)

(甲の三)



有栖川宮御息所慰子殿下



梨本宮及同御息所



安藝の宮島



男爵夫人花房千鶴子君

毎月一回一日發行

少年世界

定價 一冊金十錢 六冊前金卅八錢 八冊前金七拾五錢 郵税一冊一錢

明治三十四年 第七卷第參號 二月一日發行

口繪

特別口繪
常陸山谷右衛門
軍艦内の大相撲
アートペーパー

○陸軍大臣男爵兒玉源太郎君○紀州蜜柑入丁風景○新刊兩主筆少年時代○欧行端書通信○濃飛育兒院○馬來半島鍾乳洞○加奈太赤十字隊運動○奇なる動物(大口鷺鳥)

記事摘要

(博文館發行)

(乙の一)

●月やく忽ち下る確證薬●

月經調節 調經丸

壹週分薬價送料共六拾錢●貳週分同上壹圓拾錢

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止にても必ず程よく下す特効あり、但し此薬は多量に用れば**流產**する恐れなきに非ず故に姙婦に飲むを禁ずる程なれば毒血悪血を一掃すること請合なり▲本劑壹週分を用れば貳參月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又貳週分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず程よく下すこと確證す▲本劑定量を用れば**毒血悪血**を流すが如く滲らひ淸血を加へ身躰の健康を保ち元氣を増し勢を加ふ▲總て婦人の病の多くは月經不順に基くものに付月經不順より起る氣鬱、頭痛、眩暈、逆上かたこり、胸わるき、手足腰ひゑ、白血、長血、血塊、血ぶとり等の諸病に用ひて必ず根治する無類の特効あり‥實に婦人病の薬王‥早く試みよ

(注意) 月やく不順或は止るを豫防するには毎月壹度宛本劑壹週分を服用し置けば決して**止ること無き**を確證する所なり‥‥婦人諸君記憶せよ‥‥

(證明) 前文御免却說私妻義永々月經不順閉止症の為め大に困難致し各地病院の治術を受け候も更に其効なく誠に困り居候處去月貴店專賣の調經丸貳週間分服薬致させ候に忽ち其効を奏し最早全快に致り候間此段御厚禮申上候也次に私近傍の婦人愚妻の全快を傳聞し是非共貴薬取寄せくれとの依頼に付甚御手數樣ながら貳週間分大至急御送薬被下度別紙為替券相添へ御注文旁々御謝禮申上候也との書を寄送せしは熊本縣玉名郡高瀨町美並健次郎氏なり其他如斯感謝狀は續々到着して山の如し爰に略す



專賣 (東京神田 五軒町十九) 日新館藥房

(無料進呈)

人間萬事金の世の中

新奇發明、至大有益、一擧して**大金儲**をなし得べき新案を詳記せる六十ページの雜誌(即ち摘要錄)壹萬部を限り無代進呈す希望者は郵税四錢送れ直に送呈す速に見よ眞に就業致富の眞方針

東京市神田
五軒町十九

日本授產館

◎奏効確實 器械不要

簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械薬品等を要せず此インキ一品にて簡便訊速坐上立ところに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得べし◎即此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹するものにして一枚の原稿より凡七八十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得るものなり

◎定價 二オンス入壹瓶代 送料共 金四拾錢 爲替神田局 郵券壹割增◎

發賣元 神田區末廣町三十八番地

中村屋商店

(乙の二)

貴族院議長公爵近衛篤麿公題辭
外務通商局長杉村濬君序文
東亞同文會幹事國友重章君閱
東亞同文會幹事恒屋盛服君著

新版

朝鮮開化史

東亞同文會藏版

全壹冊洋裝
上製金文字入
正價金壹圓
郵税金拾錢

朝鮮八道興亡變遷大史

全篇を大別して**四編**とす**地理編**には天然地理○平安道○咸鏡道○江原道○慶尚道○全羅道○忠清道○京畿道○黃海道の地理變遷より歷史版圖沿革境外地域及び**日韓兩國地理上の關係**を縷述し**人種編**には天降人種より扶餘種族○半島關係の各種族漢人種の殖民幷に人種の大變動○日本人の殖民○扶餘族の半島大移住**文化編**及ひ**外交編**には現時韓國の實情に至るまで最も詳細に最も趣味多く編纂せられたり吾人之を一讀して以て東洋の近狀に詳通すべく又世界の大勢にも通ずべし

文學士白河次郎君著

支那文明史

（全壹冊）
上製五十錢
郵税十錢
並製卅五錢
郵税八錢

文學士白河鯉洋君
國府犀東君
合著

支那學術史綱

全壹冊
正價廿五錢
郵税四錢

湖南内藤虎次郎君著

支那漫遊 燕山楚水

全壹冊
正價四十五錢
郵税六錢

西島良爾君著

實歷 清國一斑

全壹冊
正價廿五錢
郵税六錢

（乙の三）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

東京美術學校教授　小杉榲邨　校閲並序
女子高等師範學校教授　關根正直　序文
女子高等師範學校教授　佐方鎭子　校閲
女子成立學校講師　齋藤圓子　編輯

包結之栞

女學教科

●定●和綴美製二冊金九拾五錢●郵税金八錢●

美麗温雅なることを嗜好するは女子の特性たり裝飾品の手藝に巧妙なるは亦女子の長所たり禮儀作法は我國古來の要技にして最早世人に忘れられんとするものあり即包み折物及結物等是なり曩に女子成立學校講師齋藤圓子先生此に慨する所あり多年の經驗より包物、折物及結物を沿革的に蒐輯し且之に一々圖解を施し是に小杉、佐方兩先生の校閲を得し書にして女子教育を益する最も良書なり

增訂 **女子手紙之文** 華族女學校講師 小野鷲堂先生書 半紙本全一冊●定●正價金四拾錢郵税金六錢

東京女學館講師 國分操子先生編纂
日用寶鑑 **貴女の栞** 和綴美製全二冊正價金一圓六拾五錢帖入金一圓八拾錢

女子高等師範學校教授 關根正直先生編纂

學習院教授 坂正臣先生書 **筆のゆきかひ** 半切半紙形和綴全二冊●定●正價各金四拾錢郵税各金六錢

發行所 日本橋區通一丁目 電話本局四一一四番 **大倉書店**

外國語學校長 男爵神田乃武君校閲
東京教科書編纂協會 石川辰之助君編

初等英語作文教科書

印刷鮮明　紙質精良　四六版
全壹冊洋裝　正價四拾錢　郵税六錢

今や世は十九世紀を去りて二十世紀に入れり、英語教授はスイントンの時代にもあらず、會話文典の時代にもあらず、實に心理教案の開始の時期に至れり、本書の如何に必要なるかは既に江湖の知悉せらるゝ處殊に今回文部省檢定濟に相成候公私各學校に於て陸續教科書に採用あらんことを希望す

發兌元 東京本町 **博文館**

(乙の四)

女界の二傑



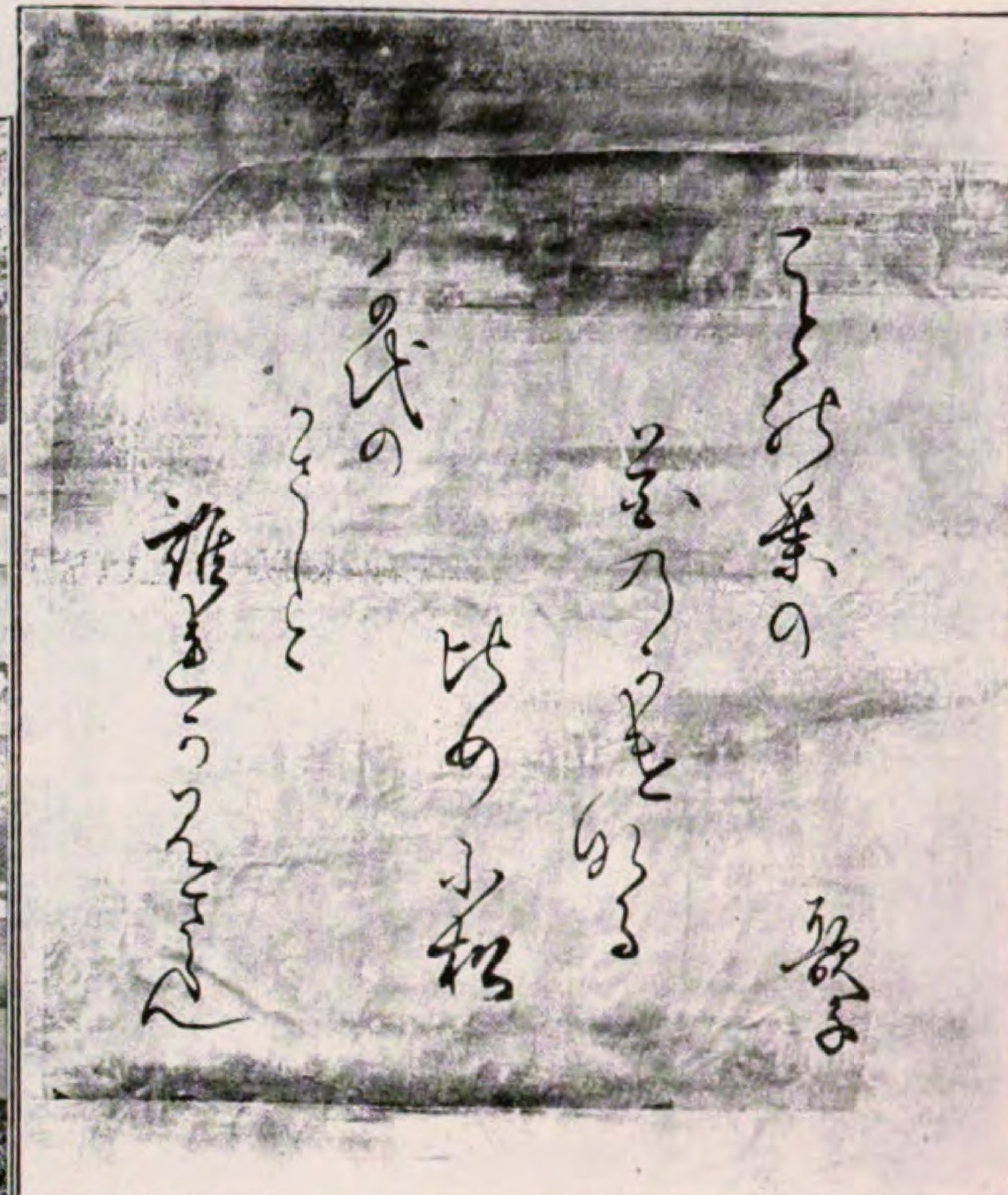
棚橋絢子女史



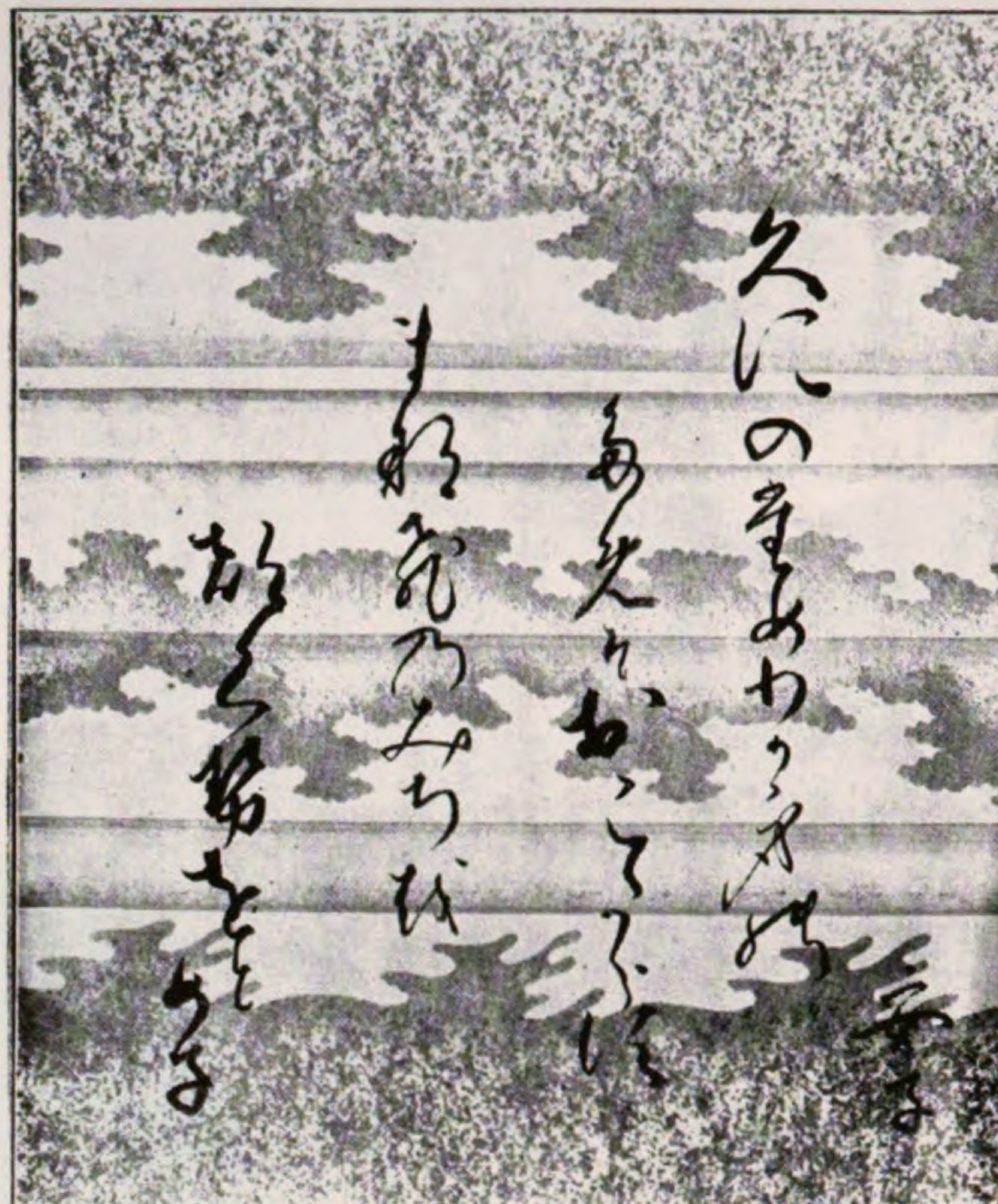
鳩山春子女史



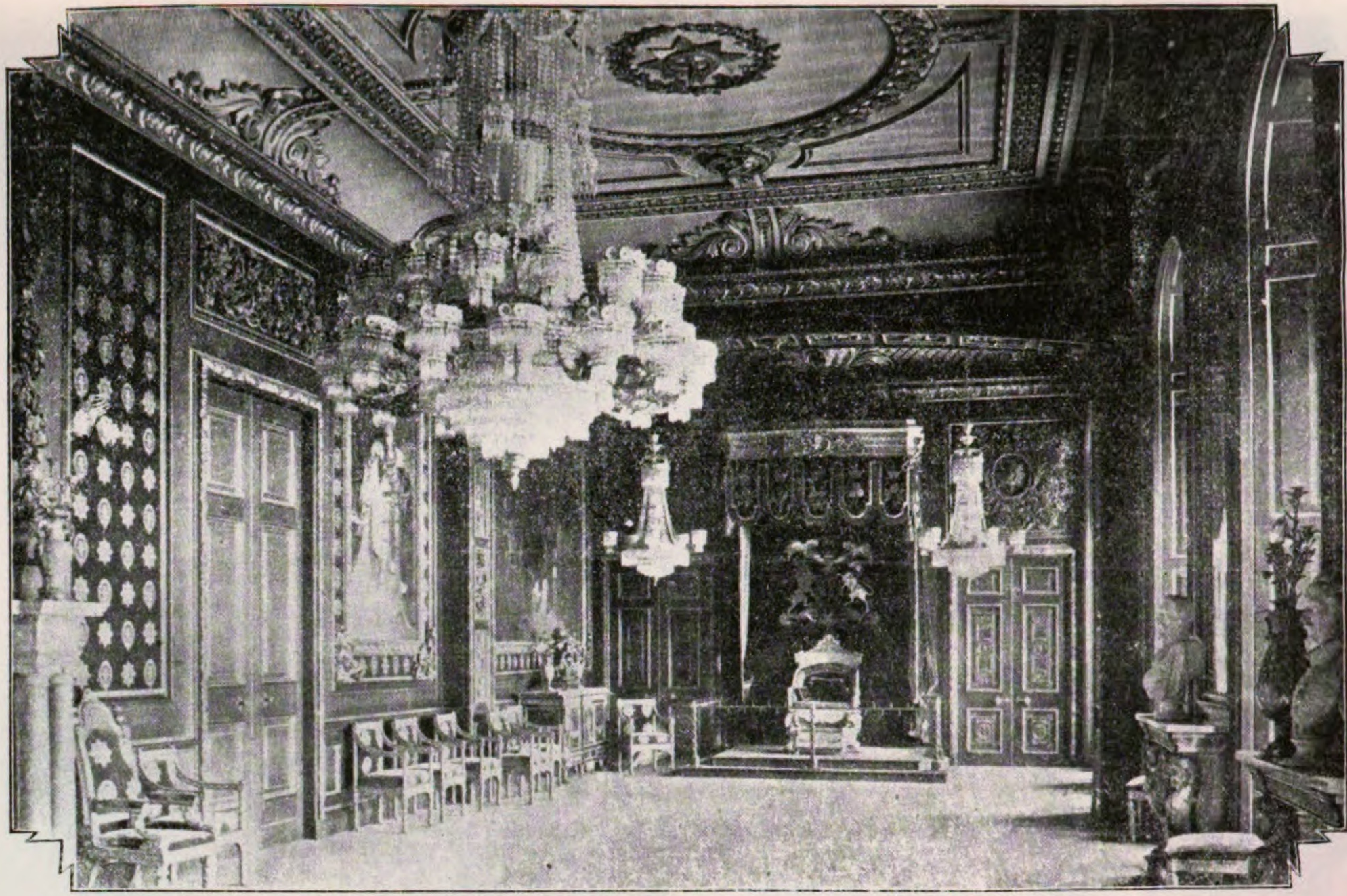
東京女學館卒業生とランキン教授



下田歌子女史の祝歌



毛利公爵夫人の祝歌

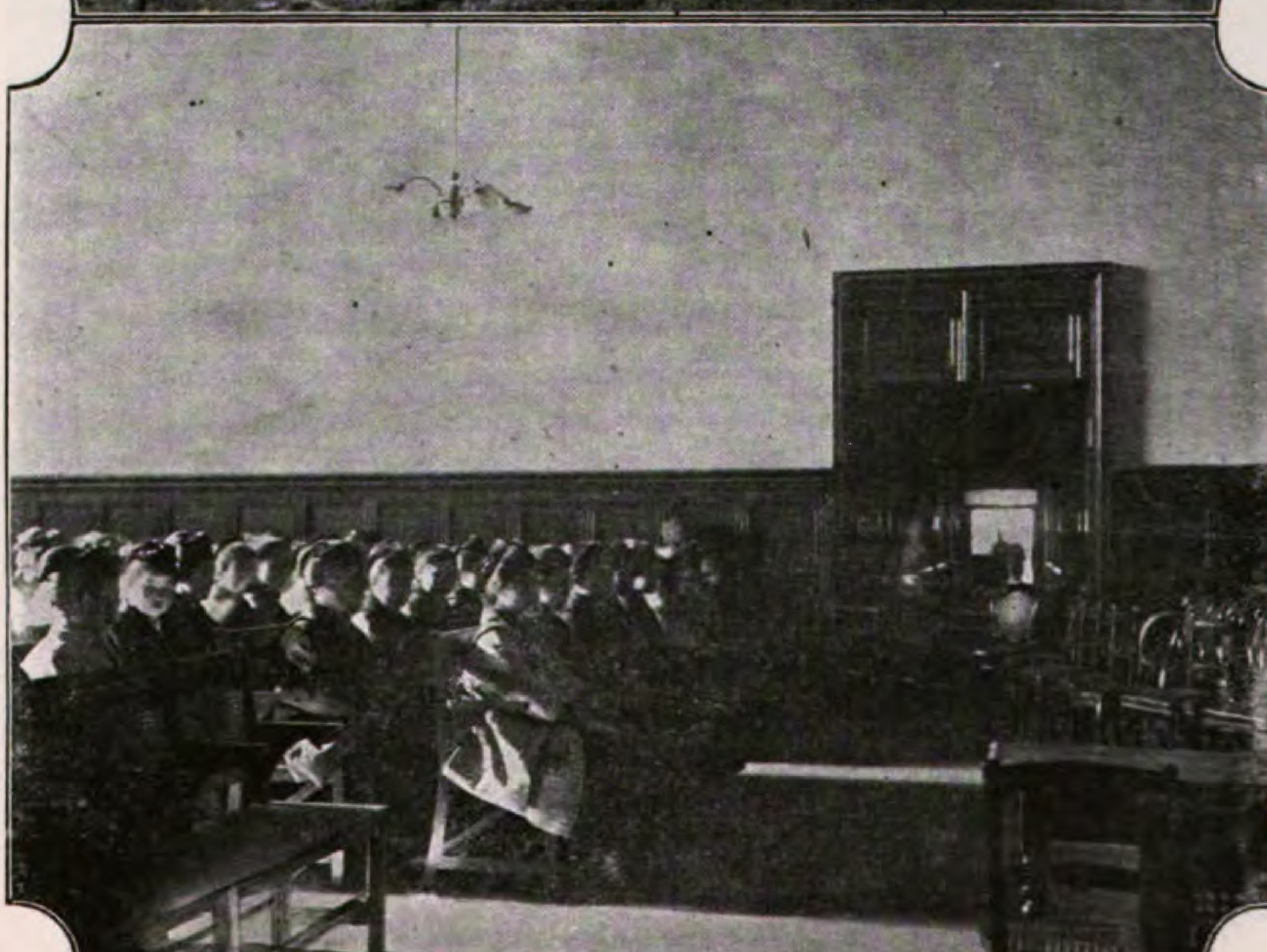


ウヰンゾルの宮の內殿（英國女皇の離宮）

東京女學館

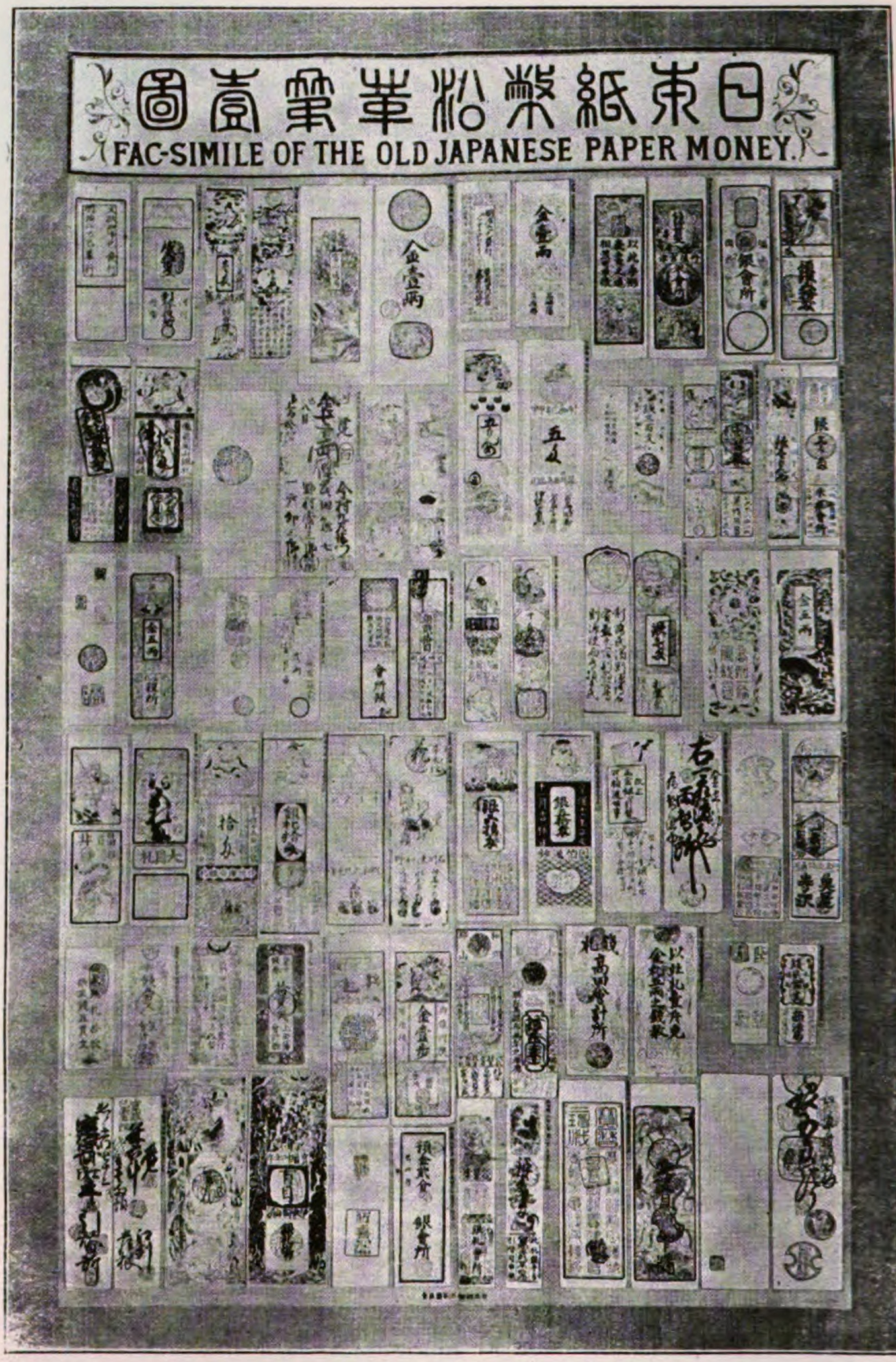
校舎の外觀





講室の集會

（齋藤紫白撮影）



（齋藤紫白撮影）

（東京女學館の備品）



サラミスの凱旋



鳥　と　花

(丙の一)

全部完成　家庭文庫

華族女學校學監正五位下田歌子女史著

下田歌子女史、學東西を究め、一種超凡の新智識と新卓見を以て、現に子弟敎育の道に從事せらる。本書各編皆な精實を極む、故に他の空論と異り、上下を通じて、一般社會の家庭上に適用するは勿論なり。全部十二冊、皆な是れ著者が多年の實驗上より出でたるもの、如何に在來の家庭書類と、其趣を異にするかを驗せられよと云爾。

正價　一册金三十五錢◎三册前金壹圓◎六册前金壹圓九拾錢◎郵稅一冊六錢

第壹編◎女子書翰文
第貳編◎女子普通禮式
第參編◎詠歌の栞
第四編◎料理手引草
第五編◎婦女家庭訓
第六編◎母親の心得

毎月一回發行
全部十二冊　和装菊判

第七編◎家事要訣
第八編◎女子手藝要訣
第九編◎女子普通文典
第十編◎女子作文の栞
第十一編◎女子遊嬉の栞
第十二編◎泰西所見家庭敎育

新刊◎泰西所見　家庭敎育

第十二編……全壹冊

社會の汚隆は、家庭敎育の良否に閲つて分れ、延きて邦國の盛衰に及ぶ。社會の改良を說く者、先づ家庭の改善より始めざる可らず。本書は多年女子敎育に熱中せらるゝ著者が、歐米漫遊の際實地に調査したる家庭敎育の狀況を叙し、以て模範を示されたる者、敎育家社會學家は勿論、何人も一讀を要すべき寶典なり。

發兌元　博文館

（丙の二）

(丙の四)



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆





野口小蘋女史筆

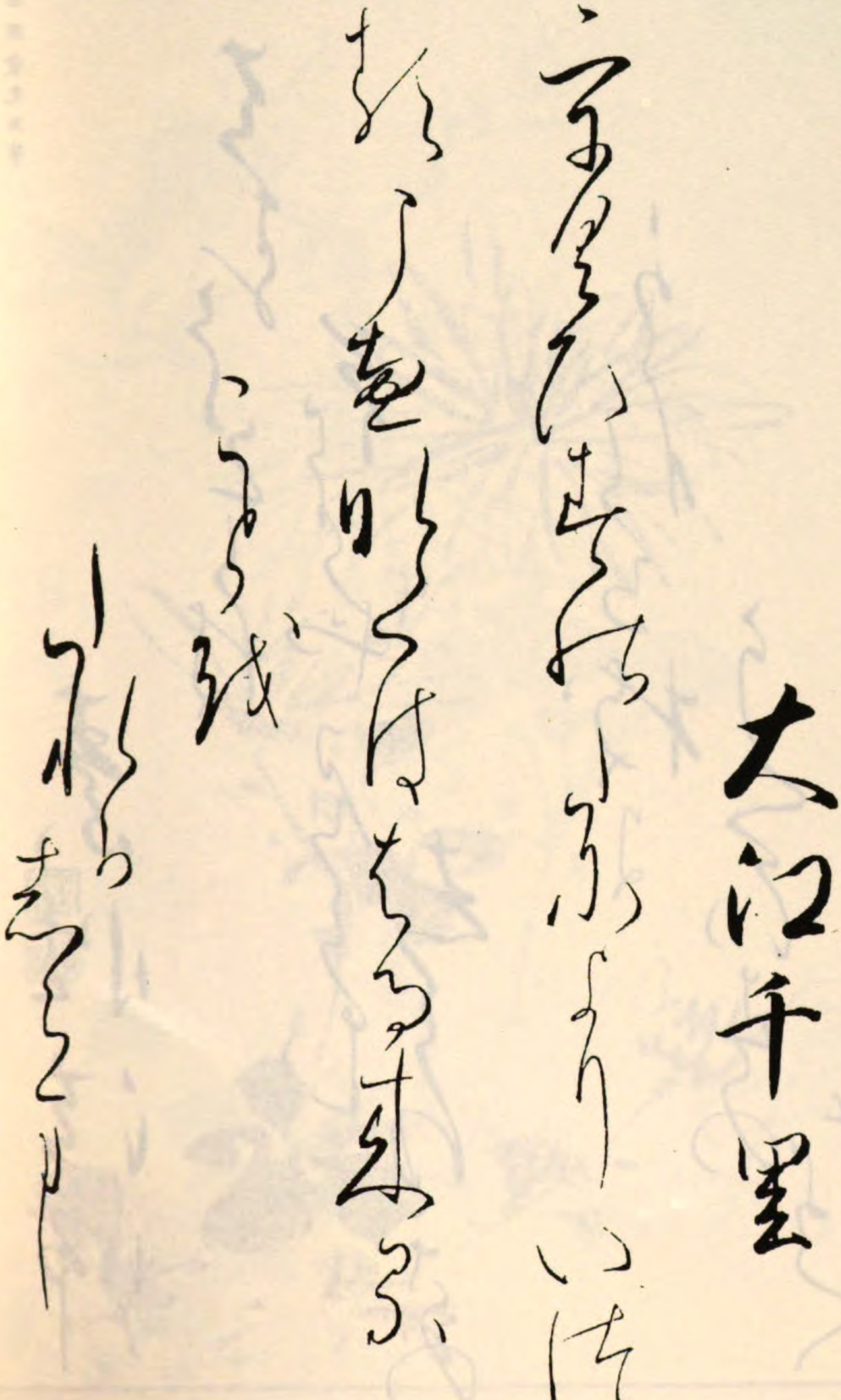
野口小蘋女史筆



素性法師

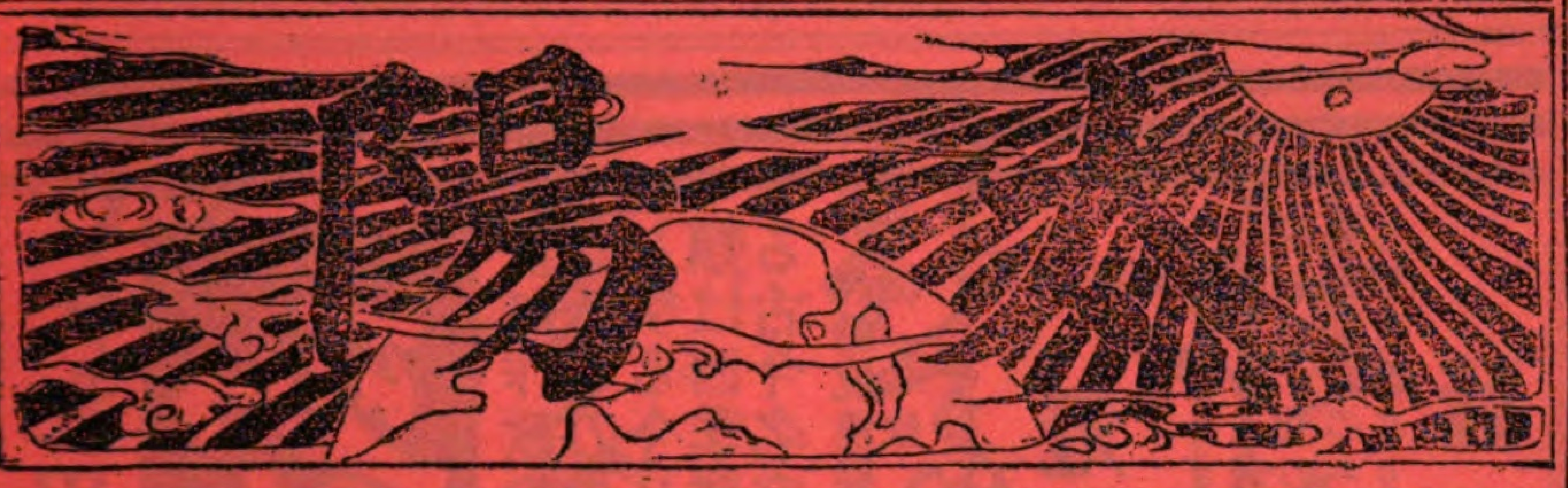
[illegible]

多田親愛先生筆



御光母振ハ風采のよし
御家熊母何にて世らせ候
その白いは見舞申上ぐたく
存じたる要見事　明朝

旅海にては不為かまへ
折々千艱く日を暮し候
寄せ候おきては粗末なる
使をもつて此国に趣き候はしこ



第七卷　第貳號　二月五日發行

口繪（其の二）

定價（一冊金三拾錢○半ヶ年分（增刊共八册）金二圓二拾錢○一ヶ年分（增刊共十六册）金四圓二拾錢○郵税一册三錢

女學世界

明治三十四年二月五日發行
第壹巻 第貳號
紀元二千五百六十一年 西暦一千九百一年（辛丑）

論説

女子の徳義

棚橋絢子

女子敎育の隆盛を希望することに於ては、予も亦た竊に人後に落ちざるを信ずるものにして、如何にして、女子の敎育を熾ならしめ、又其敎育に依りて我國女性の品格を高ふし、以て社會家族個人に於ける女子の地位を進め、完全なる感化を普及せしむべき乎、是れ吾人の常に懐に忘る可らざる所なりとす。

女子の德育に就ては、世間に種々の議論あることなるが、その社會、公共に對する點は姑らく措き、その個人の身を修め獨りを愼む點に於ては、予は女大學流を以て最も可なりと爲すものなり。

女子に於て其慎むべきこと心得べきこと少からずと雖も最も慎み最も心得べきは猜疑心なりとす、凡そ女子には賢愚を問はず、老幼を論せず、この猜疑心なきものは幾稀なり、されは之を慎み之を抑制せざるべからざることは固より言ふを俟たず、若しこの猜疑心なければ婦徳に於て已に強半を備へたりといふべき程なれども、さて此弊は容易に去り難きものにて女子大方の罪惡は概して茲に淵源せりと謂ふも亦大過なかるへし、この一の猜疑心は各種々の方面と種種の事項に發露して、女徳を汚損しその品位を傷くるの甚しきは吾人の常に見る所なり。

近來の男子動もすれば家庭圓滿の快樂を欲せずして、或は路傍の墻花に快樂を採る薄倖の風漸く盛んなるを見る、是れ歎ずべきことにぞある、表より其罪は男子にありと雖もその主婦たるもの亦た其責なしと云ふべからず、何んとなれば、其主婦たるもの生平能く心を用いて、舅姑に事ふるは云ふまでもなく、能く夫に事へその身を以て家庭團欒の中心となり一家圓滿の快樂ありなは殊に放蕩なるものを除くの外は亦誰か内を外に忘れんや、畢竟内の圓滿ならさるより遂に他の遊蕩に流るゝに至るなり、故に一家の主婦たる者は其夫の如何に論なく己れの和順を失はさる樣慎しまざるべからず、予はこの覺悟を今日の女性殊に主婦たるべき人の念頭に置かんことを希望するものなり。

又た舅姑と嫂との間、兎角不和に陷るは、封建の昔も明治の今も都鄙押しなべて見ることなるが、這は何とか之を調和してこの忌むべき一大弊害を除去するの道なきかと平素竊に想ひ居れり。願ふにその罪兩者にあるは勿論なれど、素と家庭のことは學問よりも實驗に據らざるべからず、舅姑は學問の有無は姑らく措き實驗に於ては二十年若くは三十年の經驗を有し居れり、新に嫁し來れる媳は妙齡にして未だ何等の實驗なし、是を以て多年の經驗ある舅姑の眼より更に實驗なき媳の爲すことを見れば、何事も不足勝にしてもどかしきより遂に知らず識らず小言も出づるなり、然るに媳たるもの能く己れの本分を辨へ從順なれば爲めに不平の鳴なく其意に遵ふべきも、さわ行かざるもの世多きに居れり、殊に少しく學問にてもあれば、無學なる舅姑の言を輕蔑して容易に服膺し難く、是に於てか和氣靄々たるべき家庭にまゝ風波は起れるなり、殊に此の風波は無學の媳よりも、學問ある媳の方に多きを見る、眞正の敎育を受けて女德の尙ぶべき貞淑の重んずべきを知れば、尙ほ此裡に處してその守るべき所を失はざるも、往々學問を生嚙りするの結果は一層風波を高からしむるに至るものあるは浩歎に堪えざるなり、而して又た年老たる舅姑は兎角氣が燥ちて、瑣々たる媳の不行屆を見ても之を心に收むるを知らずして直に口に出すなり、左れば媳たるものの如何に從順なるも餘り善き感情はあらざるべ

し、故に舅姑たるものは媳の越度は成るべく恕して之を補ふ心得なかるべからず、然らざれば到底、舅姑と媳との間に於て和融を保つこと能はざるべし。

女子には勿論學問も必要なり、藝術も必要なり、殊に文明の世に處しては此等のこと最も必要にして、啻に賢母良妻たるべき資格を造らざるべからざるのみならず、女性としての本素を充分に發揮するの道を講せざるべからず、然れども何よりも女子に最も肝要大切なるは從順なることなり、假令如何なる美貌を有するも、如何なる學問を有するも、如何なる藝術を有するも女子にして苟くも從順の性を有せざれば、多く稱するに足らざるなり、女子萬の德操は一の從順より來ると云ふも亦過言にあらざるなり、從順と言ふも唯だ如何なる事にも、理非に頓着なく從順なれど言ふにあらず、又た叩頭折膝を以て從順の本色と爲すものにあらず、胸底三寸の裡に凛然侵すべからざるものを存して、而して外に露はるゝ所は從順ならざるべからず、内に凛然侵すべからざるものなくして、唯だ外に從順のみなれば、時に或は人の勸誘に動かされて知らず識らずの裡に貞操を汚損することあり乃ち新に寡婦となりしものにして、その齡猶ほ若く殊に容色にしもあれば、人、勸誘するに或は再嫁を以てすべし、此の時に際して唯だ從順のみにして、内に凛然たるものなくんば、殊さらに婦德を汚損するとも思はずして大に婦德を破る

とあるべし、勿論今日の社會に於ては、再嫁のとは往昔封建武士の家庭に於て嚴しく論せるほどには云はず、亦た社會の一部に於ては此の事を以て婦德を破るとも思はざるべし、斯かる社會斯かる風潮の世にありて嚴にこの制裁を女子に加へんとするは少しく無理なる注文なり然れども一たび百年の苦樂を共にせむとして夫婦となりしものは、素より一心同躰ならざるべからず、既に一心同躰とすれば、その夫の亡きの故を以て再び他に嫁するが如きは、倫常として有らざるべからざることにして、その婦德を破るや大なりと謂はざるを得ず、斯かる說は浮薄なる今日の社會には或は容れられざるべし、然れども予は生平斯のことを懷抱するものなり。

予は亦た女子には眞實乃ち眞心の大切なるを知るものなり、眞心は單に女子のみならず、男子にも同じく大切なるは言を俟たず、而も女子に於て最も大切なりと謂はざるべからず、人の天性には、能と不能とあり、亦た氣の利きたるものと氣の利かざるものとあり、是を以て後者に向つて前者の如くなれと責むるも不可なり、予は我家に召使ふもの又は予の子女の爲せるとを見るに是れは果して眞心を以て爲せるものなるか否やに心を注ぎて、その爲せるとの立派なると否とを見ざるべし、假令その事は立派に出來たりとするも、眞心より成れるものにあらざれば喜ばず、假令へ不出來なりとするも、眞心より成れるものは亦たその不出來を咎めずしてそ

然らざれば彼等をしてこの眞心を涵養せしむる能はざるのみならず、假令ひ彼等に眞心あるも之れを衷心に受取る能はざるべし、故に一家の主婦たるものは常に此の眞心の大切なるを知り一家族を涵養すれば習ひ性となりて圓滿なる家庭を作り出さるべし。

右の如く眞心が土臺となるが第一なり、兎角此の眞心を失ふより、大にしては國家の不爲を引起し、小にしては親子の親しみを忘れ各別居し夫婦別あるを忘れ喧嘩の絕間なくばては離婚などいふ忌はしき結果を見るに至り同胞の兄弟と墻にせめぐ樣なる憂を生じ、朋友の位を失ひ、己れを利せんが爲に其妨害となるをも顧みす世に擯斥せらるゝ姿に成行も此の間違より生する害なれは常に此の間違なき樣心懸れは國家に對して不都合もなく、一家團欒の樂みをとり、夫婦睦ましく兄弟樂を共にし、朋友の交誼益增進するは皆な眞心の外部に顯れて喜ふへき結果を得るものなり。故に聖人は性に從ひ情をたむるを學問の第一として說き給ひしも亦此義ならんと思はる、都て人の天性は皆善なり、其天性を磨き出せば善人君子となり身を立て名を後世に擧るを得、耳目鼻口の情欲に引さるれは小人惡人となるが故に此耳目鼻口の欲を防ぐ事を心懸け有形より無形の學問に進み世間の女子の品位を高むる事肝要なりと思ふ。

家庭



學齡兒童と家庭の注意

塚本はま子

學校敎育の普く世に行はれしよりこのかた、年を經る事卅年に滿たずといへども、都鄙の別なく、山間僻地の嫌ひなく、小學校の開け行きて、男女とも滿六歲に至れば、就學すべしと規定せらるゝ事、眞に悅ぶべき事なり。然れども今より卅年の昔に遡れば、學校なるものは士人の外、絕えて腦中に置かさりしものなればにや、今の小學校に對する世人の希望、要求も、まことにふさはしからぬか多く、學校の方針にして、往々家庭の兩親に誤解せられ、兩親の希望も亦、學校の主義と齟齬する事尠からずと聞く。果して斯くの如くならば、實に子女敎育の上に於ける暗潮にして、まことに嘆くべき現象といふべし。然れども細かに考ふれば、その原因の多くは、兩親がその子女を學校に託したる日より、敎育の大任は、擧げてこれを學校にのみ委任し盡くしたるが如く考へ、家庭に於ては全くこれに關係せず、少しの敎訓薰陶をも與へざるものあるに基づくが如し。もとより小學校に於ては、智育はいふも更なり、德育、躰育の如きも、決して忽にするにはあらざれども、何さま一日數時間の授業に過ぎねば、如何に達識活眼の敎師にして、兼ねるに博學多才を以てすとも兒童の性情、躰質に應じたる、十分の敎育を施す事は難かるべししかも德育と躰育との如きは、終日終夜身を以て監督し保護する兩親だに、なほ手落なき能はざるものなれば、これを擧げて學校敎師の責任とすることは、眞に思はざるの甚しきものといふべし。諺にも子を見る事親に如かずとかいひて、普通の家庭に於ける兩親は、其子の性癖習慣等につきては、無論何人よりも洞察し盡したりといひ得べければ、假令學齡に達して學校敎育を受けしむるに至れりとも、家庭に於ける兩親の敎育に

關せる責任は、寧ろ重きを加ふるも輕くなるべき道理はあらじ。然るに世の人の多くは、己が子女に施すべき家庭敎育に就きて考ふる事輕きに過ぎ、學校敎育を見る事重きに過ぐるが故、隨てその希望、要求も不相當なるに至れるが如し。元より一度人の親となり、天より託せられたる其の子を敎育するに當りては、正義の人類として、又忠良なる國民として子孫を殘すべき事、實にその義務なれば、終始十分の敎訓を與ふる心得あるべきなり。然るに父親なる者は、多く家外の事務に當るものにして子女の薫陶敎育にのみ、心を用ひ得べきにあらざれば、勢ひ家庭敎育に關しては、母親が十分責任をもたざるべからず。故に今次々に學齡兒童に對する、家庭の注意を述べんとす。

◉就學につきての注意

前にも述べし如く、今わが國の學制にては、男女とも滿六歲に達すれば、小學校に入學せしむべき定めなれども、まづ身躰の發育が就學せしむるに適せりや否やを考へ、不幸にして若し發育不十分なりと認めなば、よく醫師と相談して後定むべし。若し就學の早からん事のみを望みて、心力躰質に超えたる無理なる勉學を強ふる時は、躰質の愈々羸弱に陷るべきはいふまでもなく、はては、心神さへ萎縮して、常に人の後にのみつきて、愉快に活潑なるべき幼少の時代を、空しく過ごすに至らしむべければ、就學の初期は、假令滿七年以上に及ぶとも、心身の力の十分なるを待ちて後、就學せしむるをよしとす。

さてその子女の躰質も、十分に發育し、心神も亦、相應なる能力あるものを認めなば、まづ就學せしむべき學校を撰むべきなり。學校は規律正しく、監督も十分に行き屆き、敎師の學德高くして、良き感化を生徒に及ぼすべきを撰み、徒らに道の遠近、通學の便不便或は授業料等のみをもて、定むべからざるなり。

◉入學後の注意

家庭にのみありし女子が、始めて學校に入學したる時は、假令その授業時間は三四時間にして、學科も亦遊び事に等しきが如く思はるゝとも、兒童の身に取りて重

苟なる事は、大人の考へ及ばざるほどならん。ことに我國の家庭の如きは、規律立たざるが多く、朝起就寢の時間より、食事遊戯の時間等定まらざるもの、少からねば、數十分間椅子による事も苦しく、食事の時刻の定まれるも苦しからん。故によくその健康に注意し、食物の營養分を多からしめ、睡眠時間の不足なきやうにし十分その心身の疲勞を休むるやう注意すべきなり。殊に學校を信じ、敎員に悅服するやう、常に家庭に於て注意する事大切にして苟にも學校の缺點、敎員の批難など、兒童の耳に入らしむべからす。又時々學校を參觀し直接に授敎する敎員管理者とも懇談して、性情の良否學業の勤惰より總ての事を相談して、よく學校の主義方針と家庭の躾との齟齬なきよう一致せしむる事。最も肝要たるべく、學校よりの命令約束等は、勉めて守らしめ、少しも輕ぜしむまじきなり。

◉復習豫習等につきての注意

尋常小學校に在る時期、ことにその一年級二年級ぐらゐにては、復習及び豫習せしむる必要全くなかるべし。高等小學に進みても、復習は一時間内外に止め、これすら無理に强ひざるをよしとす。兒童はもと腦力銳敏なるものなれども、又薄弱なるを免れざれば、學校以外にて多く腦力を使用せしむれば、必要なる授業時間に、倦怠を招き、注意して敎師の說話をも聞く事能はざるに至るべければ、自然に心力の發達を害し、智識の進步をも妨ぐるに至るべし。豫習も亦、高等小學以上の事にして、その方法と時期とによりては、多少必要なる事なしともいひ難けれども、他に敎師を求めて、學校にて學ふべき學科を、豫じめ學ばしむる等は、全く無益なり。たゞ無益なるのみにはあらで、却てこれが爲、學校に於ける敎科の興味を薄からしめ、注意して熱心に敎授を受くる心なく、空しく時間を徒費する弊を生ずるのみならず、已れが既に了解せるものを、朋友の理解に苦しめる狀をして、輕侮の念をさへ起し、傲慢なる考をも生ずるの階梯となるべく、又心力過勞の弊害もこれに伴ふに至らん。たゞ豫習として適切なるものは、舟の話をきくべき時に、舟を觀せしめ、地理、理科などを

學ぶに當りては、休日等に、近郊を散歩せしめて、自然物を觀察せしめ、遠近廣狹の觀念を養ひて、興味を起さしめ。或は裁縫の豫備として、人形の衣服を弄ばしむる等なり。

◉試驗成績及び競爭

試驗前に至りて、勉強せしむる事の不可なるは、識者の既に認むる所にて、近時は稍廢れたるが如くなれども、時として兩親が　その兒女の成績佳からん事を望むの餘り、强て復習せしむるものあるが如しといへども、只さへ試驗中は平時より、過度に腦力を使用するものなるが故、隨て消化力も弱まるべければ、消化よくして營養の價値ある食物を與へ、睡眠を十分にせしめ、なるべくその心力を勞せしめず、運動をも平時の如くなさしめて、身躰の異狀なきやう保護すべし。これ實に無上の試驗準備ならん、試驗は、かく兒童の心力上、害あるが如くことに女兒の如きは、往々これを心配して、健康を損ふ者なしともいひ難ければにや、近頃各小學校に於ては、學年及び學期の終りに、試驗を施す事は大概あらさるが如しといへども、尙ほ學業の成績を調査し、これを表はすに、點數或は評語を以てし、得點の順序によりて、優劣をつくるもあり、或は家庭にのみ通知してその注意を引くもあるが如し。何れにしても、家庭に於ては、他人と比較し競爭せしむる事なかるべし。競爭の結果は、多く怨恨猜忌等の念を起し易ければ、たゞ自前の成績に比して、如何なる結果なりやを注意せしむれば足れり。然れども又、放擲して、成績の良否を全く意に止めざるが如きは、家庭敎育の任務を果たさゞるものなれば、よくこれを監督し、若し成績のよからざるが如き場合には、不注意より來たれるか、不勉强の致す所か、家庭の事情に基づくか、又身躰の弱きが爲か、年齡の少きによるか、心力の發育不十分なるか、抑々天性の然らしむるかを判斷し、敎師と協議して、これに應じたる敎育法を考へざるべからず、決してその不成績なる原因をも究めずして、徒らに叱責を加ふるが如き事あるべからず、これ無効にして、且弊害を生ずべきものなればなり。

◉朋友及び交際につきての注意

子女の學齡に達して、小學校に通學するほどとなれば、近隣の兒童、又は通學の途次同行するもの、或は席次の並べるといふが如き事がらより、特別に親しき朋友のあるに至るものなり。もとより子供心にて交際するものなれば、心の合へりとか、互に敬慕するなどといふ觀念より起れるものは尠しといへども、ながく交際せしむれば、善惡とも自然にその感化を受けて、性情嗜好より、言語擧動まで似通ふに至るものなれば、兩親はよくその朋友を撰みて、なるべく家庭の事情も同じく、性質善良なる子女を求めて、交らしむるやう注意し、且年齡相應に情誼を盡し、義務を果たさしめ、深切をもて交らしむべしといへども、朋友多きに過ぎて、監督行屆かざれば、相携へて我儘を行ひ、悪しき結果の生じ易く年齡稚なければ稚きほど、其の影響甚しきものなれば、十分警誡して慢りに朋友と遊ばざるやう、幼時に於ては殊に監督する必要を覺ゆ。

◉服裝携帶品等につきての注意

家庭の身分には、貴賤貧富の差もとよりあるべしといへども、同じ學校に集まりては、共に一の生徒たるに過ぎざれば服裝はいふも更なり、携帶品等に至るまでその身分相當にせんよりは、その學校の生徒たる分限相當にすべきなり。男兒には一二小數の學校を除くの他、かゝる注意を要するは稀なれども、女兒には公私何れの學校にても、年を追うて驕奢を誡しめ、質素を奬勵せざるはなきに、事實に於ては、日に月に服裝携帶品等の奢侈におもむくを見る事、まことに歎かはしき事といふべし。富豪なる家の女兒が纏へる衣服は、學校に於て見ればこそ美服ならめ、その家庭に在りては、常着たるに過ぎざるべければ、その生計の度よりいへば、別段驕りの沙汰といふべからざるも、貴賤貧富の區別など少しも知らざる女兒が、己が家庭の生計の度低きとは知らで、美しき服裝高價なる携帶品をもてる朋友をみては、ひたすらに羨ましく、無理に兩親に迫りて、晴着を纏ひて學校に行かん事を希ふにも至るべく、若し家庭にして十分事理に通じたらんには、その子を諭し

てかゝる願をば、容易く却くべしといへども、往々、子供心に斯く希ふは、無理ならぬ事なりとて、慣れその情に驅られ、家格に外れたる美服を纏はしむる者なきにあらず。かくの如くして奢侈の風、甲より乙に傳へ、乙より丙に及ぼして、滔々驕りの潮流にまかれ、相率ひて共に奢侈の淵に沈むに至ること、又珍しとせず、或は服裝外飾等の念盛になり、運動を害し、衞生に適はざるを意とせず、勉學を疎かにしたゞ服裝にのみ注意する輩も出づべし。甚しきに至りては、他の美服を羨みおのが粗服を恥づるの餘り、廢學轉校等の不幸を生ずるが如き事もあるべく、學資より他の濫費多きを恐れて、長く學校に置くを拒む兩親も顯るべし。さればその身假令富貴なりとも、わが子女をして學校敎育を受けしむる間、ことに小學校時代に於ては、暫くおのが身分を忘れ、如何なる服裝が學校生徒たるに適すべきかを考へ、寒暑を凌ぎ運動を自由にし、質素にして他の羨望を招かざるやうに調製して、これを用ひしめ、その子女にも學校に在る間は、服裝等には心を勞せず、專ら勉學にのみ身を委ね、その家富有にして、地位も亦高からば、よく朋友その他に對しても謙遜の德を傷けざるやう、自ら質素にして模範を示すの志、幼時よりあるべき事を家庭に於て敎へ諭す事肝要ならん。假令其の生計の度低く、おのが子女をして、相當の服裝をだにせしむる能はざる者なりとも、既に勉學せしむるの幸福なる事を諭し、衣服の如きは、垢つかず破れざる限りは少しも人中に出でゝ恥づべき事にあらざる事を心得しめ、且その子女をして、おのが粗服も身分に比しては、他の美服にも増れるものなる事を考へ、悠然としてみづから恥ぢず、泰然として人を羨まざる習慣を養ひ、その稚き心にも、人の眞價は操行正しく、品性も亦善良ならば、衣服裝飾等は、敢て上下する價あらざるものなる事を覺らしめなば、却て敎育上思はぬ美果を結ぶに至らん。携帶品としては、文房具、鞄、風呂敷、傘の類より辨當の如きに至るまで、衣服と同じ心得にて撰むべし。辨當の如きは、高等小學以上の女生徒の間には、往々その小さきものを好むの風あり、競ひて辨當の量の少き

を誇り、空腹を忍びて歸宅し、いそがはしく間食するものの多しときく、されば、よくその大小等はもとより、辨當の菜をも適當の物を撰みて、子女等の望にのみ左右せらるべからず。

◉附添人及ひ通學途次の注意

我國の習慣として、立派なる門戶を構へ美衣美食する紳士にても、その兒女の附添としては、無學不能なる一老婢に過ぎざるを見ること、珍しとせず。これまことに思はざるの甚しきものにして、敎育思想の一般に低きを證するが如き感じせらる。然れども僕婢なりとて忠實にして事ごとに、干涉せず、放擲に流れず兒童の意のまゝに命令せらるゝ事少なき、快濶にして注意周到なる者ならば、先づよき附添といはざるべからず。たゞ敎育なるものは、相當の學識を供へ、經驗をもちて兒童の爲に心服され、畏敬せられて後初めて成功すべきものなれば、とても下婢從僕の類のよくし得べきにはあらじ。さればなるべく敎育し得る資格ある人を擧げて兒女の附添とすべき習慣は望ましき事なり。通學の途次同行せしむべき者も、亦下婢從僕の類が多けれども、これまた害ありて益少き事多し。抑〻尋常小學校に通ふべき年齡となれば、大概は一人にて危險なきものなれども、途次に慣れ危險を感ぜざるやうになるまでは、見送らしむるもよかるべし。病氣にもあらず、又暴風雨雪といふにもあらざるに、腕車に乘りて通學せしむるは、たゞ衞生上運動を缺くの嫌あるのみならず傲慢の心を養ひ、怠惰の習慣をつくる等、その害いふべからず。されば大なる危險なき道路にして、さして遠路といふにもあらずば、一人にて通學せしむるをよしとす。然しながらもし途中自由の我儘をなし、惡戲をなすが如き證跡あらば、よく監督してこれを誡しめ、稚き時より公共の德義を破るが如き無責任の行爲なきやう、敎訓すべき事必要なり。

以上述べたる、學齡兒童の家庭敎育者が、注意すべきことがら、中なほ洩れたるも多ければ、猶折を得て特に女兒の爲に述ぶる事あるべし。　（完）

食品の獻立（承前）

溪流女史

前號には獻立法の心得を述べて、食物は身躰を養ふ事を主なる目的とするものなれば、營養の價値あるものを第一とし、消化よきものを第二とし、第三には配合に注意して、營養成分の何れをも過不及なからしめんが爲、蛋白質物、脂肪、炭水化物の標準をあげ、これに基づける獻立表を示したるが、かゝる分析表めける、無味乾燥の物にて、ながく讀者を苦しむるは、著者の本意にもあらざれば、本號にはやゝ異れる方面より、獻立法に關する注意を述ぶべし。

○○○○○○○○○○

（第四）嗜好を滿足せしむべし　食物は身躰の營養をもて、主要なる目的とすべき事は、前に長く述べたるが一家和樂の一原因も、亦食物にあることとは忘るまじき事ならん。人の食物に於ける嗜好は、その面の如く、各々異りて、甲は濃厚なる食物を好み、乙は淡泊なるを嗜み、丙は獸肉を厭ひ、丁は薯類を嫌ふが如きあり、國風習俗の差に隨ひ、幼時より食し熟れたるを佳品とし、見慣れぬ料理には、箸下すだに、躊躇するも珍らしからねど、要するに多くは美味を好み、粗食を嫌ふの念に外ならねば、家長の滿足を買ふにも、舅姑の歡心を得んにも朝夕その嗜好物を、巧みに配合料理して、その食膳に供ふるには若かじ。

試みに思へ、終日家外の繁忙なる務めに奔走し、あるひは書齋に閉ぢ籠りて、一意文筆の技に腦力を絞れるものが、たま〳〵肩を休め、足を伸べ、その食膳に向へる時、假令一粒の鷄卵、一杯の牛乳に營養分は十分なりとも、一の美味なく嗜好品なくば、何をもてか滿足すべき遂には歸途、料理店に酒を呼び、肴を命ずるが如き習慣を生じ、果てはあるまじき行をさへ爲いだし、身を持ち崩し、財を費すの類、世に尠しとせず、これ元よりその不德不行跡の然からしむる事なりといへども、こゝに至らしめし原因に就きては、主婦たる夫人も、亦十分責任あるべきなり。さればまことに、食膳の事は些細なる注意に似たれども、嗜める食品を、好みの如く調理

して、暖かき手の給仕を加へて進めなば、假令精養軒の滋味なく、八百膳の美味に及ばずとも、家長が終日の勞苦を慰めて餘あらん。されば自然に、家外に事務を執れる者も、歸路を急ぎ、宴席の珍味を捨てゝも、家内の手料理を味はんと希ふの念も起らん。若し世人皆斯くの如くなるに至らば、自然に家庭の神聖も保たれ、個人の品格も打ち上り、叫ばずして宴會の改良も行なはるべく、風俗の矯正も容易からん。啻に宴會の改良、風俗の矯正のみならず、延いては國家の秩序をも正しうし、社會の罪惡をも減ずるに至るべし。よしたとへさまでの效果は收め得ずとするも、一家の者が好める食事に舌鼓して、團欒する事は、まことに美しき風俗ともいふべく、斯くの如くにして、平和も維持せられ、親睦もすべきなり。されば營養の價値を考へ、消化の良否をも撰み、滋養分の配合もさまでの不都合なしと認めば、なるべく家長の嗜好、老人の希望を考へて、獻立すべき事、主婦たるものゝ義務にして、家の爲、世の爲、正に然かすべき天職ありともいふべし。

さて嗜好を滿足せしむべき一手段としては、食品の配合、調理に變化あらしむべき事なり。いかに好める物なりとも、朝夕、毎日、同じ物同じ料理のみならば、必ず飽きて厭ふに至るべく、又營養といふ點よりも、假令滋養に富めりとも、常に同じものゝみならば、その內不足する成分もあるべく、完全なる營養とはいひ難からん。されば味の點よりは、調理法の變化を要し、營養の點よりは、原料の異るを望むべし。強ちに初物はしり物といふが如き、さまで營養の價値なき不廉の食品を集めずとも、獻立の變化はなし得らるべければ、よく研究して、その技倆を示すべきなり。

嗜好を滿足せしむるに今一つの手段は、國風及び習慣を考へて、家人の食し慣れたる食物、味ひつけたる料理を用ふるやうすべきにあり。いかに滋養物なりとも、名を聞きても、氣味わるく覺ゆるもの、膳に載せたるを見ても胸わろき感じあるものなどは、強ひて用ふべからず。若し無理に食したりとて、害とはなるも滋養とはならぬものなり。殊に老人、又は敎育なき婦女

子の如きは、この弊深きものにして、これこの爲、一家の平和に傷つくる事は珍らしからぬ例なれば、他に害なきかぎりは、なるべくは國風習慣に隨ひて、獻立し料理すべきなり。

（第五）經濟に注意すべし　如何なる場合にも、又何事を行ふにも、家政の事は經濟に注意すべき事、肝要なるが殊に食物は習慣となり易きものにて、假令粗食に甘んぜし人なりとも、一旦、美味に慣るゝ時は、容易く再び質素なる食物には移り難きものなれば、常に、美味芳香を備ふる、不廉なる食品、或は徒らに人の好奇心のみを滿足せしむべき、珍物初物などの類に、營養の價値に添はざる價を拂ふ事などは、眞に不經濟の極にして、贅澤といふべきなり。

然れども亦、廉價なる粗食のみを以て、經濟とすべき事も大なる誤にて、例へば一合の米飯と、半斤の牛肉とを食すべき代りに、五勺の粥と數片の澤奄漬とをもて餓を凌ぎたりとせんか、その當時は十數錢の消費を免れたるが如く見ゆといへども、元來食物は空腹を滿たすが爲に取るものに非ずして、人躰の活動作用に隨ひて、消耗する躰内諸機關を構成補充し、或は躰温を生じ、躰力を出すの基となるものなる事は、既に前號に說けるが如くなれば、五勺の粥、數片の澤奄漬より得たる營養分にては、到底一合の米飯、半斤の牛肉より得べき蛋白質、脂肪、炭水化物等もて、構成補充すべき、躰内諸機關の消耗部は、補ひ得べくもあらざれば、必ず遂には、躰力減じ、心力衰へ、物の役に立たざるに至り、時としては病氣にさへ罹るべき恐あれば、決して經濟上利益ありといふを得ず。されば蛋白質物、其の他營養の價値ある成分に富める食品は、割合に不廉なりといへども、却て贅澤なりといふべからず、知らず識らずの間に吾等の元氣を增し、躰質を强壯にし、十分なる活動作用に堪へしめて、人生の幸福を味はしむる事を得しむるに至らん。

されども爰に尙、考ふべきは習慣上食物として、貴重さるゝ物と然らざるものとありて、市價も亦大概はこれに準ずるものなり、然るに營養上の價値よりは、關の

代りとして鰺を食するも、鰹の代りとして鰯を用ふるも、秋刀魚、鹽鮭、家肉等を食膳に上すも、決して害なくして、經濟上には利あるを見ん。故に食品を購買するには、珍客の饗應、若しくは老人、病者の好みの外は、なるべく市價廉にして、新鮮なる營養分に富む物を撰み、家人の体質を養ひ、一家の經濟を保つやう、萬事に心がくべきなり。殊に魚肉類は、天候等によりて、市價に變動あるものなれば、若しその不廉なるにあはゞ、獸鳥肉の如き、大概日々同價なる物と融通して用ふべき事、又一種の技倆ならん。

以上述べたる食品の獻立は、まことにその心得の一端たるに過ぎざれば、實際その要路に當る主婦は、よく一家生計の度を考へ、驕らず吝ならずして、その身分と勞力とに應じたる營養を家族に與へ、家長の嗜好老人の希望を滿足させ、一家和樂の基たらしむべし。

（完）

姿見かゞみ（つゞき）

水原翠香

○翠香が幼時、其父母の家庭甚嚴にして、何事を爲るにも、敏捷にする事を專と、敎育せられしかば、嫁して後も、姑と共に佛參などする時、侍女等は皆、姑の身支度に、惣掛りと成りて騒ぎ居る隙に、獨り我部屋にて、粉裝し脱捨の跡仕舞までも爲終へて、靜に行きみれば、未衣裳着の最中なり、花嫁の方速にて、歳甲斐なしなど打笑ひて、いつも感賞せられたりき、されば、又我女兒等をも、其流義に敎育したりき、極彩色に化粧たりとも、一時間もあらば、衣裳附迄爲畢るべし、淡薄ならば、卅分とかゝる物に非ず、此事は自ら試て確乎たる事なれば、保證して申す也、尤熟練を要し、かつ平日より、粧事に心を委ねて、注意するに非されば爲能はざる也、

◎化粧の仕法

○粧事に心を委ぬるとは、裝飾の事、一切何によらず克

注意して、第一には、身を清潔にして、假にも垢を溜めおくべからず、又紅白粉を始め、油元結の類、何品にても、遣ひ切らざる先に用意して、何時にても不自由なく、用の足る樣にし、糠袋なども、手まめに縫ひおきて、破たりとて、俄に裂を探して、仕立る樣の不都合あるべからず、手足の爪を延さず、又深爪を切らず、耳垢、鼻屎を溜めず、口中を克掃除し、衣服の類も、常に入所を定めおき、いざ入用の時に臨て、何が知れず、彼が見えずなど、搔探す事なく、着更るべき物品は、早く取揃て、一包とし置き、すべての事、後手つかぬ樣に爲れば、身拵迅速に出來得る也、

○女兒のうちに垢脱を爲おくべし、其法、毎日湯を遣ひては、白粉を貌頸ともに、よく〳〵摺込べし、俳優遊女等の、垢脱て、美艶なるも、日毎に白粉を濃く塗ては洗ふが故のみ、同し人なれば誰にても、同一理なれども、彼等は白粉を塗るも洗ふも、其職業なり、尋常の婦女子は、化粧をのみ事として居るべきに非ざれば、一家の妻と成りて後、化粧に隙を入ざらむが爲に、處女のうちに垢脱しおけば、素貌にても美くしく、化粧とても、只サット手早くして、十分美麗になるもの也、病などにて、久しく化粧を廢して平愈のゝち、始て白粉を施せば、粉浮て打附かぬもの也、さる時には、先始に、白粉を少し濃く、貌頸に塗りつけて、是を手にて、地の熱して赤くなる迄摺込めば、白き垢よれるを、拂ひ落しては、摺込〳〵して、白垢の出ずなるを度として、湯を遣ひ、洗ひおとして、改めて、常の如く、白粉をすれば、新粧美くしく落附て、美麗なる艶を出すもの也、病氣に非ずとも、たまに白粉する人は、此法を試みたまへ、

○極彩色に濃く塗るには、頸へ油を引べし、此仕法は、堅油を豆粒の大さに欠取りて、兩手の平にて、緊敷擦れば、和らかに成るを、其油は下に置きて、手に付けたるを頸へ擦り込み、腮の下迄まん遍なく擦り、又油を始の如く、兩手に擦りては、頸に移すべし、扨後、生際の毛をも、此油手にて撫上げ、櫛にてときつけおきて、反古紙を揉和らげて、サッと拭ひ、扨白粉をば、太き眞なし筆にて、生際の毛につかぬ樣に、際を畫きて、二本

足、三本足、隨意に造るべし、油引たる時は、手にては宜からず、必筆眉刷毛にて塗るべき也、合鏡にて、寫し視ながら塗るべし、扨絞りたる手拭にて、メト押へ拭ひて、上部に浮ぶ粉を去り、別の水刷毛にて、少しヅヽ水をつけて、輕く刷く事一遍、耳の後、腮の下等にかたまれる處、又行屆かぬ處はなきや、合鏡にて克吟味し、斑を直し、最後に又、別の刷毛にて、粉白粉を少宛つけて、薄らぎたる處を繕ひ、頸出來上りたらば、脱たる肩を入れて、貌にかゝるべし、貌は油を引ずして、先紙を揉和らげて、鼻の脇の筋を克拭ふ、爰は膏のよく浮く處なるが故に、膏を拭ひ去るは、紙を以てするを宜とす、扨鼻上より塗始て、夫を顋腮に延し、額は別に、少し薄くして、際の目立ぬやうに、霞のかゝれる富士山をみるが如くなるを宜とす、すべて、髮の生際、及び眉毛に、白粉のかゝらぬ樣に塗るべき也、貌は頸より薄く、手拭を絞りて拭ひ去り、一遍水刷毛を掛けて、終に、粉白粉を鼻上に叩つけて、全く畢る、

○幼年の兒の化粧に、額を頸と同じく、眞白に際を立て塗るは、甚見苦し、况て額を剃上げて、毛のある處までも、白粉を塗込は、いよ〳〵見苦し、天禀額廣くとも、化粧にて、少しにても、狹くみせんとこそ、努べきなれ、額際の白粉濃きは、假面を被たる如くみえて、見にくき物なれば、小兒なりとて、額を富士に造るはよけれど、薄くすべき事勿論也、額迄も眞白に塗るは、只假髮を被る時のみ、演劇舞踊等の造りは、舞臺面と稱して、特別に白粉を濃くし、相皆を畫がきなどするは、遠見に、明瞭見するを專とすれば也、夫を尋常の化粧に疑似するは、心得違も甚し、舞臺面は油畫の如し、遠くみれば粲然なれども、近くみれば、怪化めきて、甚見苦しき物なるを思ひ合すべきなり、

◉顏を直す事

○化粧を立派に爲すましたりとも、時間移れば、顏の膏浮出て、爰彼處に斑々出る物なり、殊に幼年の少女は、喰物なども繁く、又自身には何の心もなければ、大人よりも早く脱易し、是を直し繕ふ事を爲ざれば、けはひせぬよりも見苦し、京阪にては、化粧に凝る故に、顏を直

す事をも怠らぬを、東京にては、遊處者の外は、大かた、始に化粧したる儘にて、終日顔を直さぬ人多きが如し、されば、物見遊山にも、家を出る時は、美麗に化粧したる顔も、二三時間を經過たる後、殊に時候暖氣にて、汗など出れば、地の膏浮きて、額頬鼻頭瞼等、すべて肉の凸處は、白粉脱落て、皆鼻の兩脇、耳際などの、筋有りて凹める處々、白く〳〵目立ちて、何とも名狀すべからざる、奇態變手古なる面像と成り、他のみるめも笑止にて、寧化粧ず、素面の替らぬがましならむと、氣の毒に思ふを、本人は、自分の顔は見えずともいへ、同行の母姉さへ、是を注意せず、平然に笑ひさゝめき行くは、いかなる心ぞと不思議也、京阪にて、婦人集會の、休憩所に入りみれば、顔直しの爲に、水を汲茶碗、欠望を告て、遲く至る者は、先のあくを俟ざるべからず、東京にても、舊幕頃には、箱せことか稱する化粧道具を、帶に狹みて、顔を直す用意せしとみゆるを、維新以來、さる物も皆中絕したりしが、近頃又チラ〳〵と見ゆれども、只飾りとして、時計と一般に携帶するのみ、實用する人有りやなしや、婦人集會の場處にても、顔を直す人は、雨夜の星よりも稀なるは、其法あるを知らぬにや、又は面倒なりと、打放主義なるにか、然りとては、婦人として、不嗜も甚し、其位ならば、白粉など爲ざるにしかず、爲る程ならば、始終替らず有りたき事ならずや、老婆心に、顔の直し法を記して、若き婦人に忠告せん、

○中食などの跡にては、必便所へ立ちて、手洗水にて嗽し、口中を清潔にし、口紅あらば、洗ひ落すべし、打茶碗に、清き水を汲み、傍に置きて、化粧道具を取出し、半巾にても何にても、衿膝に掛けて、衆に汚さぬ注意し、先懐紙を揉和らげて、顔に浮たる膏を克拭ひ去り、眉刷毛の一方■に、水をつけて、全面を刷けば、逆上下りて、甚快きものなり、然して後、一方の水氣なき方にて、粉白粉を少宛つけて、程よく繕ひ、最後に、紅を付けるなり、風に吹かれて、髪の亂たらば、水を附けて搔上ぐべし、

○食後ならずとも、觀劇などには、愁歎場に泣かされて、涙を拭き鼻をかみなどする故、一入白粉脱易し、始

より其心して、顔白粉は、薄く施しおき、幕間にもされさい顔をなほすべし、

○紅のつけ様、白粉を吻へ塗りかけおきて、筆にて紅を濃く附けて、唇に明瞭と際を引き、其内側は、次第に薄くボカして、舌を唇の端迄とゞかぬ程に些出して、舐れば、工合よくなる也、但し歯に附かぬ様注意すべし、紅指にてぬるは宜からず、

○口の大なる人あり、女としては見にくき物なれば、是を小さくみせんには、吻へ白粉を濃く塗り、紅を唇より一部斗も内側に、前記の如く附くれば、其幾分を見消すべし、扨假にも、大口をあかぬ様に心掛け、笑ふにも、扇か袖を掩ふべき也、

○眉の作り法、眉は遠山の薄靄したる如く、又空にほのめく三日月の如く、薄く長く、ボッとしたるを最上とす、性質濃く生たるは、細長く剃り造るのみにてよし、生様あしきは、其惡き處を剃去て、好處の不足せるを、書添へて補ふべし、是をかくには、日記筆の尖のきれたるを用ゐて、別に墨を附くるは、却りて宜からず、唯嚙み濡して、毛の生へ様を考へ、夫と違はざる様に、極細密に毛筋をゑがく、上部を少し明瞭に、下部は暈をよしとす、額際のあしきを補ふも、此法を以てし、毛筋をゑがくべし、決してベタ〳〵と塗べからず、工に爲しおほすれば、眞の如くみゆるなり、尤巧妙を要する仕事なれば、不器用者にては六ケ敷なり、拙き爲様をすれば、妖怪めきてみゆるなれば、醜くとも、生得の儘の方ましならめ、

○眼の人並よりも小なるは、顔の淋しく見えて、引立たぬものなれば、白粉を施したる跡にて、瞼より眥の處を、絞りたる手拭にて拭ひて、其處へ、紅を極薄く、肉色程にして、眼の輪廓をゑがくべし、是も熟練して上巧に爲すれば、幾分か大きくみゆるもの也、

○鼻の並はづれに低きは、前に記したる、頸へ油を引く法にならひて、油を指先にて捺りて、兩眼の間より、鼻柱の筋を引き、揉紙にてサッと拭ひて後、眉刷毛に白粉をつけて塗べし、油を引きたる時には、決して手にてすべからず、惣じて、白粉の濃き所は高くみゆるもの

也、

○鼻の高すぎて、節などあるは、女には餘りよき物にあらざれば、低き人の反對に、顏白粉を有かなきか程薄くし、鼻に粉を叩き付る事をせず、額頬とも、全面一樣なるべきなり、

○湯をつかふ時、耳を克洗ひて、疎にすべからず、耳は常に鬢の毛に觸れて、油氣の絕ねば、垢も溜り易きもの也、自己の眼によく見えぬ故に、顏頸に白粉を爲ながら、耳に垢を溜めおく人あり、他の目には克みえて笑止なるものあり、又洗ふ事は洗へども、拭ふ事届かずして、耳廓に、糠汗干着て、粉となりたるも、見苦しきものなり、

◉手足の注意

○膩身の人は、手足の荒る事なけれども、荒性の人は、水づかひせずとも、やはり多少の荒は免れがたし、况や、庖厨の事を執り、掃除雜巾掛等のはたらきを爲れば、忽ち胼胝を生し、人にいはれぬ苦痛を忍ばざるべからず、如何なる藥を塗りたりとも、春暖の季候にならざる限りは、癒る物に非ねども、成るべき限りは、防禦策をも講ぜざるべからず、他なし、唯、出來得る限り、手足を大切にして、保護するより外策なし、○濡手を、火に烘べからず、必克拭ひて後に爲べし、○米をとぐには、始を生濡の湯にして、克揉洗ひ、二度目よりは、水中に手を入れず、杓子にて交返して、幾度も水を換へて濯ぐべし、

○干消を手にて摑むべからず、面倒にても成るべく灰通しにて匕ふべし、

○掃除を爲には成るたけ、塵埃に手を觸れぬ樣、物を拂ふにも、下に置きて、手に持ちながら拂ふべからず、雜巾掛も微温湯にして、度々取替へて、泥の如き中へ手を漬すべからず、事畢らば入浴し、さも爲難くば、手及び顏をも、克洗ひて、リスリンを塗るべし、

○冬季、手を温むるに、火に烘るは、疾く煖まれども、荒を增す物也、同じ火氣にても、巨燵は害なし、然れども、家により、人に依り、巨燵にあたられぬ時には、懷に入れて煖むるをよしとす、

○膩手の人は、水仕業には苦なき替りに、衣類の汚れ甚しければ、常に手巾手拭を放つ事なく、殊に衣服を着更たる時には、猶更注意して、拭ふ事を怠らず、手を膝におく時は、必半巾を折りて、其上に置くべし、足は夏にても足袋をはくべし、

○足の汚れたる程、むさく穢はしきはなし、手は我目前にありて見ゆる故に、何かつきて汚るれば、速に洗へども、足は一寸見えず、かつ面倒なる故に、黒光に成るまで、襪はぬ人多し、自己こそ見えね、背後に居る人は、殊にめに附くなれば、恥づべき事なり、勝手働中に、座敷へ呼ばれ、又は玄關の取次に出づるにも、襷前垂を脱すと同時に、足裏を反しみて、洗ふ暇なくば、濡雑巾にて、手早く拭ひて、走行べき也、

○男女を公平に視て評する時は、男は粧ひ飾らずとも、さして醜き事なし、女が、若男の如く粧はざれば、其穢く見苦しき事、云ぺからず、稀には、天禀の美人もあれど、夫は例外にて、概して、男は、美男と云程ならぬも、女程鼻低きも稀なれば、頰の膨たるも尠く、況や尻の突出て、姿の醜きは有る事なし、女には、是等は敢て珍らしからず、啻人間のみならず、鳥類にても、雄は羽色美麗に、雌は何等の美もあらず、鳴聲までも劣れる也、女は粧飾して始て美となる、されば、縦ひ家事にいそがしくとも、些の隙を考へて、手敏速に形態を造るべし、一日も放棄してよき物ならんや、是より又巻を替へて、衣服のことをつぎ／＼に述んとす。

初春の料理

春江女史

同じ食物にても料理の法如何によりて、旨くもまづくも、なること、今さらにあらねど、一家の庖厨を統ぶる主婦はその折々の物につき、料理の心得は肝要なり、料理の手際よきはたしかに、家内經濟の一つにて、また實に家庭和樂の一法なればなり。初春の惣菜料理の一二を記せば、

◎鯛うしほ、鱗腹腸を去りよく洗ひ、適宜に切り鹽を

ふりて三十分間程置き、水にて洗ひ笊に入れ、沸騰ちたる湯を掛け、水にて冷し居き、鰹節汁を鍋に入れて沸たたせしところへ鯛を入れ、鹽醤油にて鹽梅し碗に盛るなり、但し鹽味にて醤油をひかへたるが佳し。

◎鯛ちり、前の如くして洗ひ程よく切りて骰子形豆腐と盛合せ、別に卸ろし生薑、燒海苔等小皿に入れ、また別に橙酢柚酢の中一品と醤油を別々に置き小鍋に出し、昆布を敷き湯をさし加へ座敷にて火鉢を掛け、鯛と豆腐と火に透りたる頃掬ひ出し酢醤油藥味にて食ふなり。

◎蛤蜊の杉田煮、大あさりを鹽むきにし、貝の汁を別に器に取り置き、玉子を割りて能かきまぜたるを剝身と共に小鍋にて焙り、玉子煮の如くし、さて此中へ前の貝汁へ食鹽少し交ぜたるを入れ、またザッと煮あげるなり。之に千切柚を口とし器へ盛りて、さて蓋の絲底へ梅花一二輪を置きて景樣とす、淡泊にして味美なり。

◎さつま煮、鷄肉を骨付のまゝ切りて、鍋に入れ、水煮をなし、次第に起つ浮粕を掬ひとり粕の無くなるを度として、人參、午房、大根、銀杏、里芋、筍子、葱、豆腐などの中二三品を撰み、善く〳〵湯煮して味淋、又砂糖にても少し加へ醤油にて味をつくべし、少し汁あるを宜しとす。汁には卸ろし生姜妙なり。

◎鮟鱇のいり鳥、小切り身にして、胡麻油にて焙り、味淋と醤油にて味をつけ山椒の粉をふりかくべし。

◎半片の雲丹田樂、半片を幅四分丈一寸位に切り湯煮にして竹小串に挿し、雲丹を酒醤油にて塗る。

◎白魚の一ちよぼを四つ五つに分けて極細き串にさし、霜降り、鹽水にて、コロし、遠火にさつとつけ燒にして膳に上す、粉山椒をふりかく可し、白魚の筏燒とは是れなり。また鷄卵を解きて上にぬり遠火にて炙るもよろし。

◎款冬の薹を細かにして油にていゝため佃煮にすれば、貯藏によろしく一寸うまきものなり。

◎鮪をさいの目に切り油にてイタメ味噌と砂糖とにて味をつけ煮る、家煮とて旨味多し。

◎筍と獨活を湯がき、味淋と醤油にて味つけ味噌にて木の芽和へとす。
◎獨活を心にして油揚の薄くへぎたるを巻き乾瓢にて結びて好く煮るべし、信田巻出來るなり。
其他布巾に豆腐をのせ温灰の上にて乾かし切りて田樂燒とし、木の芽味噌ぬる、木の芽田樂、さてはあんかけ豆腐のさくら豆腐等あるべし。

菓子の話

金龍子

◎京阪の地方、いづれの所に至るも、最中と云ふ菓子更らになし、故に京阪の地方より、あらたに上京したる人の、最中を懷中善哉と誤まること屢々ありて珍らしからず。
◎懷中善哉は東京の菓子屋にもあり、其格好誠によく最中に似たり、湯を注げば速成の汁粉となる、一寸面白きものなり、製法も亦最中に似たり。
◎蕎麥饅頭とすはまとは、京阪の地方にありて、東京及び東京の附近には、あまりなし、いづれも上等の物にあらず、中華饅頭は、大阪に多く、すはまは、京都に多し。
◎京阪地方、殊に京都に於て多きは菓子屋より、茶箱といふものを出だす、三十錢位のものなり、そは即ち讀んで字の如く、茶箱なり、細長き箱の内を三段に仕切り、上の棚には、羊羹或は、餅菓子蒸菓子などを入れたる小さき菓子鉢を置き、中の棚には、種々色美しき菊菓子を、盛りたる皿其皿の下に帛紗を敷き、傍らに薄茶を少し入れたる棗と、茶匕を置き、下には樂燒の薄茶茶碗など入れたるものなり、來客の時など一寸氣取りたるものにして、然かも亦た便利なるものなり。
◎東京の源氏豆、京都の人は蓬來豆と云ひ、大阪の人は、東京と同じく源氏豆と云ふ。
◎東京の甘納豆、京阪の菓子屋、いづれの所もこれを製せず、金時或は小倉といふもの、趣き稍や甘納豆に似たるあり、これは京阪の地に多くありて、東京に於てはなし。

◎京阪の人、餅菓子といふこと、更にいはず、鶯餅も、蕎麥饅頭も、しぐれも、鶴の巣籠も、共に併せ、呼んて、一様に蒸菓子といふ。

◎羊羹に、煉羊羹と蒸羊羹との二種あり、煉羊羹は普通の羊羹にして、蒸羊羹は、米の粉と交へ煉りたる羊羹なり、故に其色、小しく薄く、味はひて亦、いとゞ不味なり、京阪の人これをウイロと云ふ、されどウイロと蒸羊羹とは其實別なり。羊羹の中に小豆の粉、形のまゝに殘れるものあり、東京にもあり京阪にもあり、然して兩地いづれも共に等しく、これを田舍羊羹といふ、猶此外に丁稚羊羹といふものあり、其品質惡しく、よき人の前に出すべきものにあらず寧ろ駄菓子の部に入るべきなり。

◎東京の鹿の子餅、京阪の人は、小倉饅頭と云ふ、牛皮饅頭、これを千歳餅といひ、鹽釜を白雪糖と云ひ、開化饅頭を南京饅頭といひ、栗の水飴を乳ギヤウセンといひ、あんころ餅を砂糖餅といひ、大福をおやきといふなど、外にも甚だ多けれども、今は一々にこれを記臆せず。

◎ぜんざいとは、赤豆のあんを溶せる汁に米の餅を入れたるものにして、汁粉とは同じく赤豆の中へ、米の粉にもあれ、小麥粉にもあれ、すべて粉にて造りたるもの、即ち一種の團子を入れたるもの、これ京阪に於ける汁粉とぜんざいとの區別なり。又東京の汁粉屋に於て、煮雜と普通に云ひなすもの、京阪の地に於ては、スマシといふ、序に云ふ、東京のきみ、京阪に於てはきみとは、云はず、實際はバラゝといへども、素人は知らず、京阪のきみとは、東京のもろこしなり、故に其きみ團子、或はきみの餅といふもの、東京のもろこし團子なれば、初めて東京に上りしものも、或は初めて京阪に行きし人も共に一様の不思議を懷く、つまらなきことにしあれども、これ又兩地に於ける、相違の一つなり。

◎鹽煎餅といふもの、京阪の地方には殆どなし、かき餅は到る處に多く鬻ぎて、鹽煎餅の如く用ひらる、小料理屋にて、通しものにかきもち又はあられは出す處さへあり。

◎しるこ屋、或は蕎麥屋の行燈に、御膳と書くと京阪にありてはなきことなり。
◎正月に食ふ餅、熨斗餅を四角に切ると、これ關東の風にして、京阪地方は皆、一升を四五十位、小さく取りてこれを丸め、お供の如くにしてこれを食ふ。
◎五月の節句、柏餅の外に粽といふもの京阪の地に於て多く製す、あまりうまきものにあらず。

主婦の心得

物品購入に就ての注意、何品に限らず品物を買入れやうとする時には先づ其物の使用道を考へ夫れに由て撰定せねばなりません、例之實用に供する爲めてあるか又裝飾に使ふのであるか或は人に贈與するのであるか、といふ事を定めて其上に常用に供へる品であるならば、第一番に其品物の性質及び製作方が鞏固であつて其價の廉ひのを撰ぶやうに致し、又裝飾に用ふる品物でありますならば、成丈風雅やかで其色形の配合もよろしく優雅にして美麗に又高尚なものが宜しい、殊に室内裝飾品など、申すものは、其もの、高尚なると野卑なるとに依つて其家の主人主婦の心も知らる、ものでありますから是等の品は普通の日用品とは違ひて少しは價が高くても其身の分に應じて成るべく高尚なのを用ふるが宜しい、又さうは申します者の價が高ければ必らず高尚な品とは申されませぬ、隨分世の中には價が高くても野卑なものもあり、廉價でも高尚なものもありますから其の邊は主婦の氣轉で廉價で高尚なのを撰むのが經濟上手であります、又人に贈與すべき物は豫め其の價の程度を定め其程度の内にて先方の人の性質、氣風、年齡等を斟酌して成べく先方の意に適ふやうに心懸くるのが肝要であります。

◎物品購入の制限

總て物品を購入しまするに就いては制限を立てるといふ事は肝要な事であります。此の制限が嚴かでないと他出した時に許多の物が目に觸るゝに付て彼れも是れも必要でない物を買入て後には何の役にも立たず、爾

うかと云ふて人に遣る程のものでもなく、又さすがに打捨るのも惜しいなどいふ樣な事で、果はそこらの棚に押上げたり、納戸の隅に押込んだりして置まして煤掃でもする時の手間つぶしになる位で誠につまらない譯です、是等は皆此の制限の嚴しくない所から起る弊でありまず、夫れから今一つ注意すべき事は總て物を買入まするに一時に澤山求める時は價も廉く付きまして一寸は經濟の樣に思はれますけれども扨其物が澤山に貯へてあると、勢ひ濫用に傾く弊があります、又物品を永く貯へると自然減耗する、のみならず、一時に纏めて出す金にも自然利息の勘定が損といふ事にもなります。

小兒衛生一斑

藥劑を用ふるは兵を用ふるが如しとは、古き諺なり、兵器を猥りに動す時は、人を殺すの害あり、又人を殺すの害ある代りに惡を懲すの德あり、藥劑も亦然り、猥りに用ゆるときは、大害を釀すものなり、大人はともあれ、小兒に猥りに藥を與ふるときは、故意に身躰の發育を妨げ羸弱のものとなし、天稟の健全を破るに至る、されば世の母たるものは、持藥なぞと藥を與ふるは必ず禁ぜられたし。まづ藥は非常なる毒物と云ふ思想を抱き居て然るべし、病魔に攻められ、くるしむときは、止むことを得ず用ひて病毒を殺すもの也、服藥すれば、とて經驗なき庸醫の診察を乞ふは危險なり、殊に乳兒の如き未だ言語をなし能はざる者には、尤も注意して醫を撰びて診を乞ふべし、古き諺に病傷は、猶療すべし、藥傷は最も醫し難しと、この語を能く記臆して一朝病魔に侵さるゝ時は、醫を撰み、診を乞ふを忘るゝ勿れ。又病に臥すも服藥せず神佛にたのみ、或は巫覡の言に任せ方角の吉凶にて醫者をたのみ、術の頁拙は更に頓着せざるものあり、又猥りに醫を代ゆる人あり、人々により與ふる藥一致せず、其爲めに、治療方は亂雜して遂に病者を挽回する能はざるに至る。

病氣を起して狼狽せんより寧ろ、病氣に罹らぬやうに

注意せばよし、之れには飲食を節制し起居常を守り、過勞を來たさず攝生せば可なり、又寒中とて世の母たるものは小兒の衣服につきあまり暖をとりすごさゝるやうにせよ、人には、習慣と云ふことあり、寒氣に向ふ時に襟巻をなせばその冬は、到底すて難きものなり、衣服も亦た然り故に古人の說に飽食暖衣は、身を破るの基と云へり、山野に住む鳥獸を見るべし、冬になりて、別に被物はなし、併し死せず、これ習慣性なりと知るべし。

◉小兒の營養

初生兒に最も營養品として適當なるは、母乳なれど、もし母貧血性にて乳の分泌せざるか或は乳房を害することあるときは、乳母若くは、家畜の乳汁に依らざる可からず、併し乳母をして小兒を營養するは、其の選擇に注意せざるべからず、且つ畜乳は多くの危險あるを以て苟も母たる者は、成べく自己の身軆を健全に保ち自己の乳汁を以て、餌養とすることこそ望ましけれ。乳汁の量と性質とは營養物の含窒素量に關するものなれば、居常習慣の食物をとればかなり、併し脂できるの又惡しく香氣ある例へば、蒜、葱等は、多量に食すべからず、成べくは全く用ひざるを望む、少量の葡萄酒は適當せり、併「アルコール」分多きものは、よろしからず。

授乳するに必要なる要件は、温浴し身軆を清潔になし、空氣の流通よき處に適當の運動を成すべし。第二乳は猥りに與ふるなく、整然と時間を定めて、與へよ、何となれば乳汁は號泣を靜める爲めに、與ふるものにあらざればなり。第三母は決して兒を懷になし褥に就くべからず、誤つて小兒を窒息せしむるの恐あり。

生後七ヶ月を經過せば一日に三回位に抑制すべし、少しく鹽を加へたる肉養汁を雞卵半箇次に一箇に和し與へ、先づ齒牙發生し始むる頃には、穀粉を水及び乳汁と共に給してよし、二枚の齒牙發生したるときに、授乳は大に減ずべし、大人と同じく定期に牛乳を與ふるはよし、されども黴菌の危險を避くる爲め煮沸するをよしとす、這は又別に條を設けて說くべし。

◉遺尿

遺尿は男子の方、女子よりも多し、初生より十二三歳位まで時としては二十歳を過ぎて治せざるあり、この原因は脳の尋常ならざるによるか、睡眠酣なるときまでも尿が膀胱内に、充滿すれば、尿の通常刺戟にて醒むるものなり、小兒は未だ脳の發達不充分なる爲め、これを感ずること鋭敏ならず、故に遺尿するなり、遺尿を攝生的に治療なすには、小兒をして、就眠時前數時間液躰を飲むを禁じ、背臥せしめず、必ず側位をとり、横に臥せしむべし、又嚢を腹部にまき冷へざる樣にすべし、その嚢には、紐を附け、その紐を脊栓の上にて結ぶ、さすればねがへりをうち背臥するときは結節の爲めにいたみを感じ眼をさますべし。

遺尿するとて苛責するは策の得たるものにあらず、「フオーゲル」氏は一小兒につき甚だしき罰を加へたり、小兒は、おそれ局所を小紐にて結束し、翌朝に至る甚だしくはれて遂に病となりしと云ふ。

◉すりむき

小兒は皮膚非常に、軟き者なる故に皮膚と皮膚とふれてすりむくことあり、最も臀部腋窩及び頸部に多し、小兒健全にして肥滿せるものは、自然すりむくも羸弱なるものは、襁褓の、ぬれたるものがふれて、生ず、故に、襁褓は濕はざる樣に注意すべし、このすりむきの豫防として皮膚のふれる處には石松子の末をふりまくべし、こは乾燥せしむる目的なり、その他日々適當なる温湯に浴せしむるを可とす。

◉疥癬

疥癬は皮膚内に生ずるものなり、一家に一人の患者あれば、一家盡く傳染す、故に初發の者は注意して、治療すべし、併し其治療とて小兒と大人とは自から差あり、小兒は皮膚薄きを以て、あまり刺戟を加ふべからず、最も適當なる療法は、「ペーリウバルサム」十五ぐらむを用ゆ、或は「アルコール」十分を加へて後に用ふるも可なり、日暮に之を塗擦して翌朝芥子湯に入り、十分塗擦すれば疥癬蟲を全く撲滅せしむるを得べし、患者の衣服は充分洗滌すべし、成べくは煮沸して洗へよ、然らざれば硫黄にて蒸せば猶よし。

●凍傷

母の懐にあるものにては、四肢の凍傷なぞは、まづなきものなれど、歩行し得るに至る時は勢ひ発るべからず、雪を抓み戦争を成し、其興に乗じ凍傷となることは、往々見る處なり、然る場合には凍傷となりし局部例へば足ならば足を充分雪を以て、こするべし、決して直ちに煖むることをなす勿れ、若時すぎて、皮膚甚だ乾く時は「ヨヂユームチンキ」をぬるべし、又は脂肪に火酒を混じてぬるべし。

●小兒の看護

小兒の際起居の習慣より鳩胸又龜胸の佝僂病に罹るあり、これは小兒の臥寢法、負背法、抱法の不正より起るものなり、又學童となりて、此病になる者あり、これは机に寄りかゝるよりなるなり、故に讀書其他稽古をなす時は、椅子によりかゝるとも机によりかゝらざる様にすべし、特に女子は脊柱骨灣曲を起し易し、故に時々裸體になして、脊椎の狀態を檢しもし、少しなりともまがりし様なれば醫士の診斷を乞ふべし。

小兒の口中は必ず清淨になせ、乳齒と雖も成齒の如く注意せざれば後年に危害を生ずるなり、齒は人の知る消食機關の第一位を占め、且つ容貌に關係あり、故に常に注意して熱物或は冷物を食はず殊に硬きものをかみくだかざる様になせ、小兒は鼻にて呼吸することを慣らすときは、口中自ら清らかにして肺に入る空氣も亦鼻中にて塵埃を防げばなり、猥りに粗硬のものを食する時は、齒の表皮なる琺瑯質を磨銷し實質をあらはし、炎を起す事あり、又擦衝を起し或は、齒齦變色して、暗紫色となるなり、粗悪の磨粉を用ゐるよりも、寧ろ清水を、やわらかき齒刷にてそゝぎ齒牙を洗淨するにしかず。

婦女子の齒は男子の齒よりも弱し其原因は種々あらんがまづ姙娠すれば酸味を好むこの酸味は齒に大禁物なり、その禁物を好むによる、又胎兒に齒牙の組織を形成する石灰質を與へざるべからず故に石灰分を多く食ふは必要なり、又或博士の説によれば子宮の病患が齒牙より來りしといへり、又懷妊中に齒痛を覺ゆることあ

り、その痛みは子宮の新に作用をなして漸々に神經を刺衝するより起るものにして、齲齒より來るにあらず、されば齲齒の治療をなすも益なし、益なきのみならず、非常に害あり婦女子は比較的男子より齒を健全に保つことを務むべし。

小兒の歩行を始むるに注意を要す、身躰の發育は頭部より、下肢に及ぼすものなれば頭部は非常に發達するも下肢は未だ發育せざるものなり、故に世の母たる者は、早く歩行せしめんとて、無理に立たしむるものあり、これ人情なれども發育の不充分なる爲めに不具と成る事あり、故に能く注意すべし。

小兒の脉搏及び男女に於ける脉數の大躰を知ること又婦女に必要ならん、十二歳迄は漸次脉搏を減ずと雖も、婚嫁期には、一身に變化を起し增加し、又此期を過ぐれば再び減少す、六十歳以上に至れば更に增加す、胎兒は一分時間に百以上の脉數あり、婚嫁期八十內外三十歳頃は七十內外なり。

ある生理學者の說に寒冷なる大氣は、温暖なる大氣より新陳代謝を盛になすと然り寒中は暑時に比べて食慾はすゝみ消化を完全ならしめ精神活潑となり、皮膚より排泄せる水分の量は減じて尿量の增加を見る。

冬期は大氣冷却するを以て、吾人の躰温を奪ふ、この結果は、塞冒となる、甚だしきは四肢の關節弛緩す、これを「インフルエンザ」と云ふ、寒氣猛烈なるときは、血液の循環を不順になして、腦髓又は肺臟又は心臟等に集り頭痛を覺ゆるに至る故に冬期は皮膚の薄きもの即ち小兒は新築の塗屋に置く事を禁ず凡て乾燥せる大氣の室に遊ばしめよ。

一室に閉ぢ籠りて、久しく居る可からず、大氣中十分の一以上の炭酸瓦斯を含むは、健康に適せず、故に多數の人の充滿せる室內に決して、久しく居るべからず、何故に炭酸增加するかと云ふに、日常用ゆる點火料又は人々の呼吸作用より起こるなり、冬期は室をしめこむこと多し、故にこの注意に及ぶ人の知る「カルカッタ」の暗洞とは其の昔「ベンカーレン」の大將某が「カルカッタ」に於て十五「メーテル」立方の土坑中に英國人百四十六

人を捕縛せしことあり、然るに十時間の後に至り唯僅かに二十三人のみ生存し他の百二十三人は盡く窒息して死せりと。これ全く炭酸瓦斯增加して呼吸作用を營む能はず、終に死したるなり、世の上流社界は、知らず下等社界に至るも小兒を伴ひ劇塲等に至る者あり禁ずべき事なり。

◉飲食

卵を食すれば胃中にて消化するを實驗するに、胃液をとり出し、之に卵を入れ躰温位の温度になせば、卵は消化するを見る、何故と云ふに胃液の成分を見るに「ペプシン」及び游離の鹽酸其他鹽類ありて別に「ペプシン」と鹽酸とを混じ躰温位の温を與へ之れに卵を入れしに消化せり、之れ人工的なり、何れにしても卵の消化するを知る、又一般に蛋白質の胃の内に入れば之を消化する爲め、鹽酸を作る之を作るには、血液の中にある食鹽にぞある、食鹽は鹽類を出して躰内の水素と化合し、鹽酸を作り其殘りし「ナドリウム」は血液の成分に過剰のものたるを以て、排泄す、然るに消化作用やめば過剰の鹽素を再び血液に戻す、故に、血液にて食鹽を造る爲めには、食鹽を取らざるべからず、都合よき事には、吾人の食物としてとる料理の中には多の食鹽を含み、或は吾人のとる食物の内には恒に必要なる量より多量の食鹽を含む故に特更に食鹽を取るを要せず、普通にては一日に十「グラム」より四十「グラム」の食鹽をとる者なり。

吾人の食物に必要なるものは蛋白質、炭化水素類、脂肪なり、人間は食なくしては、生活する能はず、併し卅日間絶食するも死せず米國にては四十日間の實ありしとかや、蛇の如きは彼岸より彼岸まで、食をとらずして生活すと、併し此れは脂肪脾臓又は骨の如き生命に左程關係せざるものを、食となすならんと云ふ、これ等は例外として、食物は必要なるものなれば唯一言すべし。

肉食は消化し易し併し蔬菜を加ふれば一層消化力をます、肉は血液となる多くして、糞尿となる少量なり、蔬菜は凡て消化よく養分を含む、殊に人參、芋等の如きはよし。

五穀は躰中にて脂肪を生じ血液を補ふと雖も、赤血球

に化する分少く、糞尿に化する物多し。
菓子は胃腸の面を損するものなり、何となれば、菓子は多く穀類と砂糖とにて製したるものなれば糖質は血液中にありて、消化力を有せざるものなり、殊に子供には病源となる故節制ありたし深窓に長じ、絹布を着する小兒は常に上等にして甘味の甚たしきものをとり、下流に長ずるものは身に木綿の麁服をつけ甘味少なき菓子を食ふものと、大人になりてその强弱如何を見ば容易に了解すべし。
茶は「タンニー」と云ふものありて、收歛强壯になる効なきにしもあらざれども量過ぐるときは、消化機を傷ふ、故に注意して用ふべし、小兒には、なるべく禁じたきものなり。
酒は適度なれば興奮劑として必要なる場合もあれど酒客は消化機を傷ひ身躰衰ふるは言ふ迄もなし、又肥滿するものあれど、之は脂肪肥滿とて、筋肉肥滿即ち壯健になりたるにあらず、大酒家の子孫多く、病患を遺傳すと歐洲にては發狂の子孫を出す、何れにしても、酒は飲むべからず、小兒には、無論飲酒は嚴禁すべし、喫烟も禁すべし。

◉食量と健康

歐洲人と我國人とは、風土習慣を異にし躰重の如きも大に差あり即ち我國人は平均五十五六「キログラム」なれど歐洲人は六七十「キログラム」なり今參考の爲めに左に記す。

	蛋白質	脂肪	含水炭素
帝國大學寄宿舍	五三五、〇	一九、〇	四四〇、〇
高等師範學校	一一四、八	三一、四	六三四、九九
陸軍士官學校	八三、〇	一三、七	六二二、四四
陸軍兵食(米飯三食)	八三、八	一四、八	五三三、七
海軍兵食	一四五、四	五三、五	五五二、七四
鍛冶橋監獄	五六、七	七、六	四四六、八
日本人標準食	一〇〇、〇	二〇、〇	四八〇、〇



傳記

惹安達克（上）

文學士　中内蝶二

（一）序説

一個巾幗の身を以て、馬を矢石の間に躍らし、窈窕たる花顔は雨に痩せ、燦爛たる金髪は風に亂れ、薪に臥し、膽を嘗め、自から百歳の壽命を犠牲を供して、國家千載の社稷を全うせし希世の女傑は、これ佛蘭西の惹安達克にあらずや。

巴は勇ましき女なりき。されど、身はもと武將の家に生れ、その勇は、たゞ夫の爲めにあらはしたるに過ぎずして、これを回天の偉業と稱すること能はざるなり。木蘭もまた健げなる女なりき。されど、身はもと武將の家に生れて、その功は、たゞ父の爲めに立てたるに過ぎずして、これを回天の偉業と稱すること能はざるなり。畢竟するに、巴はたゞ日本の女傑のみ、未だこれを世界に誇るに足らず。木蘭はたゞ支那の女傑のみ、未だこれを世界に誇るに足らず。武勇百代に超絶し、英風萬古を聳動し、これを世界にもとめて其比を見出すこと能はざるものは、それたゞ惹安一人乎。

惹安は眇たる農家の一少女のみ、もとより武士にもあらず、貴族にもあらず。しかも一朝奮然として起ち、貧窶鄙賤の身を以て、三軍の將權を握り、國家の運命を一身に擔ふて、回天の偉業を遂げ、上は國王の大寶を定め下は民庶の窮厄を救ひたる所以のもの、豈また故なしとせんや。われ佛蘭西の史を繙きて、惹安の傳に至る毎に、始めは無限の壯快を覺え、終りに無量の悲哀を感じ、悲喜交も胸中に迫りて、双涙自から眼にあふれ、巻を閉ぢて噫乎と叫ばざること能はざりき。まことに、われは安惹が赫々たる功蹟を羨むとともに、また其悲酸なる末路を憐れむものなり。

さらば惹安は如何なる人ぞ。今その事蹟に入るに先ち

て、暫らく當時の佛蘭西を説かしめよ。

（二）百年戰爭

今を距ること六百年の昔、紀元千三百年の頃に當りて、佛蘭西の國王に非立四世といふ人ありけり。三男一女を生みしかば、公主以沙伯を以て、英王義都華二世の皇后とし、三人の王子は相續いで父の位を嗣げり。これを路易十世、非立五世、查爾斯四世といふ。三王不幸にして儲君在らざりしかば、查爾所四世殂落の後、國人相はかりて非立四世の弟ハロイス公查爾斯の子を迎へて嗣と爲せり、これ非立六世なり。然るに、英王に嫁ぎたりし以沙伯の子義都華三世は、これを聞きて自から思へらく、非立六世の血統は、我身に比して遙に遠し。今佛王の位に登らむもの、我を措いて誰かあるべきと、屢使を佛蘭西に遣りて、これを詰りしかども、如何にせむ、佛蘭西歷代の定典によれば、女子にして王位を踐むこと能はざるを以て、英王の母后以沙伯すら、既に佛王に登ること能はざるに、その太子たる義都華にして、いかてか斯かる要求を爲すべき理あらむと、佛人拒みてその難問に應ぜざりしかば、英王いたく憤りて曰く『よしや、女子に踐祚の權なくとも、其子男子たらむには、何ぞ不可なりとするに足らむ。彼れにして我要むる所を肯て拒まば、我は兵力に訴へても望みを遂げてやは置くべき』と、紀元千三百三十七年、自から英佛兩國の王なりと布告して、翌年兵を發して佛蘭西の土地を襲はしむるに至れり。これぞ有名なる百年戰爭の發端なりける。

これより兩國の間に戰亂絶えず、英軍の勢猖獗をきはめて、戰へば勝ち、攻むれば取り、佛の州郡大略その手に陷りぬ。

紀元千四百年の始、佛國正統の太子查爾斯の時に至りては、城壘悉く英軍の占領する所となりて、佛軍最後の根據は、たゞ疴爾頁の一城のみとなれり。英軍は此城を攻め落さんとて、大兵を以て十重二十重に取りかこみ、城の周圍に壘を築きて、全く內外の連絡を絶ち切りぬ。佛兵は死力をつくして防ぎ戰ひけれども、敵は兵勢日に加はるのみにて、味方の兵は次第に盡き、救

援の兵續き至らねば、城兵今は如何ともすること能はず、運命日に危急に赴きけり。是時に當りて、若し惹安なかりせば、佛蘭西の社稷は永く祀を絶ちたりしならむ。

《三》 幼時の生活

惹安達克の生れたる時は、紀元千四百十二年の正月にして、處は佛蘭西の片田舍、ムユーズの谿谷深きドムレミーの小邑なり。父母は賤しき農夫なれば、一年三百六十五日、朝に出でては野に羊の群を牧し、夕に歸りては燈のもとに紡績裁縫の業を勵む外には、別に變りし務めもあらず。殊に戰亂の世の習ひとして、文化普ねく僻陬の地に及ばねば、十分なる教育を受けたるにもあらず。男子ならねば、もとより武術を學びたるにもあらず。門閥もなく、聲望もなく、たゞ溫順なる田舍娘に過ぎざりき。

惹安は幼き時より、神を敬ふの念極めて深く、常に寺院に詣でゝ、鐘の響きを聞くことを、此上もなき樂みとせり。齡漸く九歲に達しける時、英吉利とブルガンヂーと二國の聯合兵、佛蘭西の國中に亂れ入り、戰塵濛々として、劫掠狼藉至らざるはなし。鄕黨の青年、劍を執りて起ち、進むで敵を拒ぎて重傷を負ひ、流血淋漓として歸り來るを見る每に、惹安慘然として敵營の方を望み、悲憤の涙に袂を沾はさゞるはなかりき。

敵軍の兇鋒益熾にして、馬蹄ドムレミーの土を蹂み荒らさむとするに至りしかば、惹安の一族近隣の人々難を避けて遠く山中に逃れ入り、暗雲漸く收まるに及びて、相率ゐて舊の棲土に歸り來れば、慘なるかな酷なるかな、古山の風色昨日に異り、住み馴れたる家は見る影もなく焚きこぼたれ、貯へ置きたる糧は、殘す方もなく奪ひ行かれたり。今宵よりは、何處にか寢ね、何をか食らはむ。天道如何なれば、邪しまに與みして、この良民に禍するやと、惹安は天を仰ぎて、神を怨みしこともありと。

惹安が幼時の生活は、たゞ神を信ずる念の人に勝れて厚きのみにて、その他に著しき行爲はあらはさゞりき。生來同情の涙多くして、敵國の驕暴を惡む心は人

に劣らざりしも、もとより婦女子の身を以て、國家の運命を擔うて立たむなどいふ、さる突飛なる考はあらざりしなり。さらば、惹安が回天の偉業を建つるに至りし動機は何處にか存する。

（四）神の密旨

古來英雄豪傑の生ひ立ちを見るに、多くは奇怪なる傳説のこれに伴ふを常とす。惹安が生涯の經歷の如きはわけても此際會を免るゝこと能はざるなり。

頃しも千四百二十五年の夏の日のことなりき、惹安は例の如く後園を逍遙しける時、何處ともなく、『惹安よ、惹安よ』と我名を呼ぶものあり。驚きて顧みれば、一道の光明赫灼として寺院の方に燿き、三人の天使空より降りて惹安が傍に來り、凛然として神命を傳へて曰く『起て、惹安よ、汝は佛蘭西の社稷を救はざるべからず、速に將軍ボードリクールの下に行け』と、天使まさに天に歸らむとするや、惹安は何となく別離の情に禁へず、涙を流して共に伴ひ行かむことを請ひしと云ふ。惹安は一たび神の密旨を蒙りてより、夢に現に、屢かかるまぼろしを目擊し、天神は常に、佛蘭西を救へ、社稷を安むぜよ』と告げぬ。初めの程は、唯事の奇異なるに思ひ惑うて、深くも信ずること能はざりしが、天使の出現度重なるに及びて、次第に自信の念を喚び起し遂に勃然として、匡濟の志を起し、母國の危難を救ふを以て、己が天職なりと確信するに至りぬ。

一たび斯くと信じてよりは、惹安が決心再び動かすべからず、速かに將軍の許に至りて、身を以て軍に從はむと欲し、一日父の前に出でゝ其よしを語り、家を出づるの許可を乞ひしに、父は娘が日頃の行爲と云ひ、今また其自から語る所を聞くに及びて、全く心の狂へるものとし、一言の下に其言葉を斥けぬ。惹安は止むことを得ずして、近き邊の村に住める伯父の家に至りて、悉さに事の始末を語り、涙を揮つて更に言葉を改めて曰く『父は妾が願を許したまはねども、一度神命を蒙りし上は、空しく打ち棄て置くべきにもあらねば、一日もはやく密旨を査爾斯殿下に傳へて、阿爾良城の危急を救はざるべからず。願はくば、妾をヲークーリユールに在

る將軍ボードリクールの許に伴ひ給へ。妾は渠に倚りて、國王の朝廷に入るべき道を開かむ』と、伯父も惹安が熱誠に感じて、その請を諾し、遂に惹安を携へて、ヂークーリユールに趨く、時に紀元千四百二十八年五月十三日。

（五）出發

惹安は伯父の紹介によりて、將軍の前に出づることを得たり。臆せる色もなく將軍が面を見上げて、『妾は神の示現を蒙りて、佛國の危難を救はむが爲に來れり』といふ。將軍驚きて熟ら惹安が容貌を見るに、天生の麗質は自から棄て難きも、服裝賤しき田舍娘なり。殊に纖弱なる身を持ちながら、赤手を揮つて國難を鎭めむなどゝは、道理を解するものゝ言葉とも覺えず、必ず狂女ならむと思ひぬ。

惹安は猶も語りけるやう『我主は王なる查爾斯殿下の窮厄を憐れみ給ひ、密旨を妾に傳へて、國難を救はしめむとす。願はくば、妾が爲めに、之を殿下に傳へ給へかし』と、將軍怪みて『汝が主とは誰のことぞ』と問へば『天に在ます神をいふなり』と答へぬ。將軍は愈よ惹安を狂女なりと信じ、大に伯父を罵つて直ちに伴ひ歸らしむ。

豫言者も人に信ぜられざることあり。惹安が滿腔の熱誠も、遂にボートリクールを動かすこと能はざりしか。將軍もとより人を知るの明はなかりしと雖、想ひ見よ、惹安はこれ農家の一少女に過ぎざるとを。この時に當りて、誰か其奇怪の言を信ずるものあるべき。さらば惹安が蒙りたる神の示現も、遂にこれを查爾斯に傳ふべき術なきか。

この歳七月、ブルガンヂーの軍隊は、またもや國內に侵入して、ドムレミー村の附近を蹂躙し、孤城日まさに落ちなむとせる痾爾艮城を圍める英軍に聯合せむとすとの警報しきりに到り、佛蘭西の運命、いよ〳〵危うく見えしかば、惹安は慨然として傍觀するに忍びず、『時到れり、時到れり』と叫びつゝ、再びヂークリユールに至りて、將軍に謁して曰く『佛蘭西國の危急は眼前に迫れり、今は一日も猶豫すべき時にあらず、願くば、妾に

假すに一隊の兵士を以てせよ。妾はそを率ゐて、直に狗爾良城の圍みを解かむ。よしや、肉は裂け、骨は碎くるとも、もとより厭ふ所にあらず』と。雲の如き英將猛卒も、敗衂の餘燼を如何ともするなき今の時に當りて、惹安何者なれば、かくは神命にかこつけて不敵の言を爲すや。教育もなく、門閥もなき田舍娘の身を以て、よしや神通の威力をそなへたればとて、今日の危機を如何にかすべき。將軍はなほ惹安が言葉を信ずること能はずと雖も、その激烈なる熱情を止むるに由なく、好むがまゝに其地に滯らしめ、狀を查爾斯の許に報じぬ。

チークーリユールの人々は、何時しか惹安が言行を聞き傳へ、風評次第に廣まりしかば、將軍に仕ふる二人の騎士、或日惹安と會して其赤誠なる言に感じ、共に護衞の任に當りて、進むで皇居に導かむと約し、發程の日も既に定まりしかば、將軍も心ひそかに萬一の僥倖を賴みつゝ、請ひにまかせて一隊の兵士を貸し與へぬ。

惹安は幸にチークーリユールの人々の好意によりて出發の準備全く整ひしかば、紀元千四百二十九年二月二十五日に此地を發す。時に戰亂相嗣ぎて、敵國の軍兵國中に横行し、道路蔽塞、旅況頗る困難をきやむるを以て、惹安は勇敢なる騎士の護衞あるにも拘らず、なほ萬一の危難を慮りて、全く男子の裝ひをなし、甲冑に身を固め、手には長槍を執り、腰には大劍を佩けり。悠々として馬に跨れば、騎士は前に進み、弓手は後に從ふ惹安が得意おもふべきなり。

（つゞく）

紫式部と清少納言

鹽井ふく子

一條天皇嘗て宣はく、朕、不德なりといへども、唯人を得るの一事は、敢て延喜天曆の世に讓らずと御自讃ありけるとかや。誠に、此の朝には、男子には四納言と呼ばれし藤原齊信、公任、源俊賢、行成をはじめとして他の道々にすぐれし人々の多く、女子には清少納言、和泉式部、赤染衞門、伊勢大輔、紫式部などの才女多きが

中に、清少納言、紫式部は尤も和漢の學にすぐれ、實に我が國文學上に一大光明を與へたるものにて、其の才名は永く千載にながれ、其の文は遠く万世の至寶とかゞやきぬ、

殊に、貞淑温良の德をも備へ、よく孝に、よく貞に、よく忠に、よく慈に終始つゆ婦德を損ずる事なく、たゞに其の文辭をもて、千歲の模範たるのみにはあらず、其の德行またよく後世閨閣の龜鑑としてあまりあるは、實に紫の一もととす。

紫式部は、有名なる源氏物語の作者なり。又他に日記をものしぬ。これまた紫式部日記とて、同じく今の世に傳はりぬ。此の二書の世にすぐれたることは、今更云ふまでもなき事ながら、今そのあらましを云はんに、日記は、式部が上東門院に仕へしほどの記事にして、見たるまゝ、思ふまゝを記るしたるもの、其文章優美に、當時の儀式、風俗をさへ考證するに足り、且つ其の人となり、行ひをも伺ひ取らまほしき事の多く、後世女子のたづさへて益少なからぬ書なり。

その源氏物語に至りては、實に空前絕後の大著述にして、一部五十四帖を以てなり、一帖毎に名を付せり、其の書のめでたさは、古來多くの學者の定論ある事にて今更拙きものゝ云ひけがすべき事ならねど、其の文詞優麗にして、意匠もまた巧みに、めでたしと云ふもなべてになりぬべし。其の中にはみだりがはしき所もなきにあらず、さる故に、學者中或は此の書をいさぎよしとせず、又式部が性行をもおとすものなきにあらねど、それは、紫式部の眞意を知らぬ偏說なる事は、古來また幾多の學者の論じおかれたる事にて、其日記をよみ、其性行を察せば思ひ半ばに過ぐる者あらん。又此の書を愛するものは、源氏物語は、一の道德の書にして、當時世の淫風の吹きしきるをなげきて、そをこらさんためにつゞりたる懲惡の書なりとまでほめたゝふる人あるを本居宣長之を排斥して、こはたゞ單に社會の眞相をうつしもだせるものなりといへるは、實を得たるものと云ふべし。

實に其の文の艷麗なる、其の筆の婉曲なる、其の想像の

豐富なる、古來未曾有の大著述にして、其の意匠は、佛者は之を論じて佛典より出でたるものとし、其の五十四帖は、天台六十巻に擬したるものにて、生老病死、有爲轉變を説き、なほ進んで世間常住壞空の法文をたて煩惱即菩提を示しゝとゝき、儒者はまた此の書は莊子、史記に基き、一字の褒貶は春秋に則り、以て仁義五常を諭すなど説く、されど、それも非なり、かれも非なり、しかも此書の功妙に驚くのあまり、人或はその一女子の手になりたるを信ぜず。或は。父爲時の意匠になれりと云ひ、或は道長の加筆ありたりと云ひ、或はその非凡に驚くのあまり、人力のみの能くする所にあらず、佛の冥助を受けたるものなりとて、「西宮左大臣、安和二年大宰權帥に左遷せられ給ひし時、式部、幼きより仕へ奉りて、なげきに沈みける折りふし、大齋院より上東門院へめづらかなる草子や侍ると尋ね申させ給ひけるに、うつぼ、竹取やうの物語はめなれたれば、あたらしく作り出して奉るべきよし式部に仰せありしかば、式部は石山寺に通夜して、此の事を祈り申しけるに、をりふし八月十五夜の月、湖水にうつりて、心のすみわたれるまゝに、物語の風情そらにうかびけるを、忘れぬ先きにとて、佛前にありけり大般若の料紙を本尊に申しうけて、まづ須磨明石の兩巻を書きはじめけり。これによりて須磨の巻に、今宵は十五夜なりけりとおぼし出てゝとは侍るとかや。後、罪障懺悔のために、般若一部六百巻をみづから書きて奉納したる云々」と河海抄にしるしありて、佛の助ありたればこそ、かゝる非凡なる大著述をもなし遂げたるなど、例の浮屠氏の己が田に水ひきての言を信じて傳ふるもあり、それ等の説のひがごとなるは、古人のとく排斥せし所にて、爲時の助をからず道長の助をからず、佛の助をもからずして、作りたる日記と其筆法の同一なるを見も疑ふべからず。あはれ、かやうに他の力によりてなれりとせらるゝ所を以ても如何にこの物語の非凡なりしかは知らるべし。

その紫式部とは、上東門院に仕へてより稱せられし名にして。其の本名は傳はらず、父は越前守爲時とて、藤原冬嗣が後裔、菅三品文時の弟子にて、其の文名は

世に聞え、歌をもよくせし人なり。母は常陸の介爲信の女なりとぞ。

式部幼きより頴敏、學を好み、その兄惟規がまだ童なる時、其父、之に史記を教へし折り、兄の惟規は遲く覺えたりしを、式部は傍聞きして、敏く之を覺えたりしかば、文に熱心なる父は、いたく式部が敏才に感じ、常に式部の男子たらぬをなげかれしよし、其の日記にて知らるゝなり。惟規は、爲時が長子にて、式部は爲時の季子にて四人めの子なり。而して、惟規また決して凡人にあらず、學も歌も人にすぐれ、其歌はまた多く後拾遺集以後の撰集に入りて秀ぐれたるもの多し。之を見ても式部の幼きより非凡なりしは知らるべくして、其の父の男子にあらぬを恨みたりと雖、式部遂に男子にまさりたる大著作をなせり。父が草葉のかげにて如何ばかり滿足したりけん。あはれ式部又孝の至りと云ふべし。

長じて右衞門權佐藤原宣孝に嫁して、一女をまうけたれど、不幸にして、夫、とくみまかりぬ。源氏物語は實に其の寡居の間の作にして、後、一條天皇の中宮、上東門院、女子の才學あるものを尋ねられし時、召し出されしにて、そは、寛弘二三年の頃の事なりとぞ。その參見のさまを今昔物語にものしけるやう、「式部がありさま、かゝるめでたき事も、作り出したる人とも覺えず、裳唐衣きたる姿、容體、もてなしなど、いとおやうし、心もとなげにてぞ侍りける云々」と記るしあるにても、其物語の上東門院に仕ふる前の事にて、めでたき事どもつくり出でてしとは、源氏物語の事にて齋院のために上東門院のつくられしと云ふは、非にて石山寺にこもり、佛の助けを得しなど妄說なる事は知らるべし。しかばかり才高き婦人なれど、そのふるまひに出でゝしかりと見せざりしは、此の一節にて察せらるゝ如く、其の後、上東門院につかへて、大に恩遇を被り、人より睦じきものにせられしかど、式部は其の才にほこらず、其の寵に狎れず、終始たゞつゝしみて仕へしのみならず、上東門院御學問の志切なるまゝに、式部にせめて白氏文集の中の樂府を教へさするなどにも、なほいたく包みたりしなど、日記を見て知らるゝふしいと多し。

式部、もとは、藤原氏なれば、藤の式部と呼ばれしを、後源氏物語の紫を作中女主人公として、心を注ぎ、いみじううつしたればとて、それより紫式部と呼ばれしとぞ又一説には、藤式部は優ならぬ名故、その色をとりて名づけしとも云ひ。また、式部は一條天皇の乳母の女なり、ある時、天皇、之は我がゆかりのものなれば、あはれと思ひてよとの玉はれしを、

むらさきの一本故にむさし野の
　月は見ながらあはれとぞ見る

と云ふ古歌より紫とつけたりしなど云へど、前説しかるべしと云ふ。また日本紀局とも呼ばれし。そは、天皇、かつてその物語を人によませ玉ひつゝ聞こしめされ、此の人は日本紀をこそよみけれ、誠に才あるべしとの給はせけるを、女房ども聞きつけて、やがて日本紀の御局とつけたりとのよし、日記中に見えたり。さやうの事をうはさゝるゝにつけても、式部はたゞ耻かしう、己が子たちの前にも包みたるものをと、ます／＼うゝしみしは、其才のいよ／＼高きにて、なほ、日記にも、物語にも、女の才學だて、ほこりかなるをいたく忌み、遂に自からさやうにつゝしみしは、誠にめでたき事にして、今やうの女生徒にはあらじかし。

式部、またかんばせも世にすぐれたり、其夫を失ひしより、思ひをよするもの多く、或はよもすがら門を叩きてかへりける人もありけるとかや。その歌集に

かど叩きわづらひて歸へりにける人のつとめて

よと共にあらき風ふく西の海も
　いそべに波はよせずとや見し

と、恨みける返事に式部

かへりては思ひ知りぬや岩かどに
　うきてよりけるきしの仇なみ

式部がうきたる戀、仇なる人をよせず、一意に苦節を守りしは之れのみならず、御堂關白道長もまた式部が才色に迷ひ、挑みし事もしば／＼にて、殊によもすがらわた殿にたちて、一夜戸を叩きしかど、式部はおともせずあかしたる其の翌日、

よもすがら水雞よりけになく／＼ぞ

まきの戸口に叩きわびつる

と道長のよみておこしたりしに、

たゞならじとばかりたゝく水雞ゆゑ

あけては如何にくやしからまし

と式部の返しゝ事、又日記に知られたり。而して當時世は淫風ふきしきりて、大内の女房たちの中には、猪をやむものさへありと云ふ濁世に、式部は、ひとりその操をおとさず、しかも、上東門院の父にて、當時道長と云へば飛ぶ鳥もおちんばかりの勢ある人にも恐れず、遂に、其身をけがさず、而して、またあながちに耻かしめて、其の怒りにふれざりしは、流石は世に處する事のいみじく、且つは、さばかり才能賞せられ、いたく寵遇を被むるも、遂に高屋の鬼をして伺はしめざりしくまなき才智と云ひ、げに世にならびなき烈女と稱すべし。

式部、また絲竹管絃の道にも妙を得、裁ちぬひのわざにもたけ、且つ、よろづの事に博識なりしは、上東門院の御方に、かつて琴ひく人の今まゐりしたりけるを、院、此の女房に琴ひくよしはなれぬ名をつけよと式部に仰せられしに、いはこすとつけたりければ、門院いたく御ほめおそばしたりとぞ。いはこすとは、琴ぢのさきに緒のあたる所にて、世に彼の名を知れる人いと稀なりけるを式部知りて、名付けしは、清少納言が、中納言隆家卿が扇の骨を、更にまだ見ぬ骨のさまなりと啓せしを、さてはくらげのなりと云ひしと好一對の才にて、いみじき有識と云ふべし。

式部二女あり、長女を賢子とて、また學ありて歌をよくす、太宰大貳高階成章に嫁し、後に後一條天皇の御乳母となりて、大貳三位と稱せられぬ。次女を辨局と云ひて、左衞門督兼隆に嫁し、後に後冷泉院の御乳母となりぬ。かく二女ともにかしこくも万乘の至尊の御乳母となりて、才名ありしは、紫式部が敎育の致せし所にして才色と云ひ、德行と云ひ、一もかけし所なく、千古の一人と稱せらるゝも又うべならずや。

清少納言もまた紫式部と同じ時代の人にて、皇后定子の宮に仕へたりし女房にて、天武天皇の御子、舎人親王の後裔、清原の深養生が曾孫、かの梨壺の五人撰ばれた

る元輔が女にて、枕草紙の作者なり。我が朝随筆ものゝ率先にて、年々随筆に、いにしへ、今、から、やまとに亘りてめでたきは枕草子云々と記されたり。其の文のめでたきは、先哲のまた既にあげし所にして、源氏物語にならびて、またやんごとなき物とせられ、洵にめでたき筆の跡、春はあけぼの、ほの〴〵と匂ひそめし筆には朝日子のかげも實に異に匂ひぬ。逸氣奔放、輕快、豪放、其の一氣呵成の筆鋒の鋭き事は、源語も及ばぬふし多しとは今古の學者の共に、感ずる所にして、其の才のいみじきは、皇后かつて、雪の朝に、左右をかへりみ玉ひて、少納言よ、香爐峰の雪はやと仰せ玉ひし時、少納言、直ちに立ちて、御簾を捲きぬ。これ、白樂天が詩に「香爐峰雪捲レ簾督、遺愛寺鐘歌レ枕聽」とあるに基きしものにて、その敏捷、人をしておどろかしむるはげに此の一事のみならず、五月ばかりに、月もなく、いと暗き夜、女房や候ひ玉ふと人々のゝしりて來りたるに少納言折りふし宮に侍しけるに、誰ぞ出てゝ見よと仰せ玉ふまゝ、例ならず云ふは誰ぞと呼びながら出てゝ見るに、物も云はず簾をもたげて、そよろと吳竹の枝をさし入れたり。おい、此の君にこそと少納言の云ひたるに、いざや、これ殿上に行きて語らんとて急ぎ去りぬとか。これ、晋の王子猶が、竹を植て、此君と稱すと云ふ古事より、竹を此君と稱せるにて、博識にあらずば、如何で之をとみに答ふべき、此の事、行成も聞きて、誰が敎を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をば云ふぞと賞されしとぞ。此の外才氣の掬すべきもの實に數ふるにいとまあらず、皇后二つなくめで玉へば、主上もまた其才氣をめでさせ玉ふ事しば〳〵にて、雪の消ゆるを、人々とはかり、少納言が言葉のあたりし折りふしも、日來はなべての者と思ひたれど、今日なん異なりし人と思ふとの玉はせ玉ひけるとか。さばかり才のいみじかりければ、掌侍にもなさんとまでの評定さへありたりとかや。

されども、其心、いとはやりかにて、才氣をほこるのふし多く見えたるに、女の德を失ひしと其品行をいみじうおとしむる者多し。

げに式部は道徳家なり、其行ひもまた女子の鑑としていみじきものなれど、これは、其の才氣と共に英俊にして、やゝもすれば、はやりかなる事多く、今少しつゝしみを加へば、かやうのそしりもなかりしならんを。然れども或人孔子を論じて曰く、孔子は禮を重んじたり、一も禮、二も禮、禮を以て天下を治めんとす。されど、禮は末にて、誠が本なり、誠ありて敬生じ、敬ありて禮あらはる。もし誠敬の心を修むるを知らずして外形の禮に迫らば、つひに、僞善者を出すに至らん、漢學者に虛禮多きはその結果にて、莊子は之を冷視して、天にうそぶきしなりと云ふ。今その草紙をくりかへし、少納言の性行を伺ふに、實に其の才にほこり、男子を男子とも思はぬふし多く、つゝしみを失ひし點は大なる缺點にて、紫式部はこをおとしめて、其の日記に、「清少納言こそしたりがほにいみじう侍りける人、才がり、さかしだち、まんなかきちらして、侍るほども、よく見れば、またいとたへぬ事多かり、かく人にことならんと思ひ好める人は、必ず見おとりし、行すゑうたて侍る云々」と評され、後の者も、さればぞ清少納言は遂に世にあはずして、後にはおちぶれたりとそしる。これはこれ、後の學ばんものゝためよき教へにて、げに如何に才あり、能ありともほこらんには身危うく、又その身は如何にいさぎよく、きようなりとも、つゝしみ忍ばざれば、世に處する能はざるは、近頃、己れのいたく悟りたる所、實につゝしむべき事にはあれど、つらく思ふに、かうやうの人は、またかの陰險、猜忌の心はあらず、また誰にも曲げて歡心を得んとの野心もなく、誠意よろこばゞ、二つなくよろこばれん、さらずば憎くまるゝとも諛らはじ、そしるものはそしれ、おのづから聞きなほすをりもあらん、さらずば、たゞそしられてあらんとのいさぎよき心は卷中往々見る所ろなり。而して其の初ひまゐりの時に、實に心よりの敬意はあらはれぬ。少納言いつも其の至敬を以て君をめで奉りしは終始かはらず、之が時を失ひしも后の宮の御父道隆公かくれさせ玉ひ、其子伊周公、隆家公など罪を得て遠く流され玉ひ、あまつさへ皇后の宮もかくれさせ玉ひ、世は全く道長の世

となりて、皇后の生ませられし御子敦康親王さへ、天位を得ぬばかりの世となりぬ。清少納言如何でかやうの世にまた仕へん、少納言が世を失ひしは、二つなくめでられし君を失ひたればにて、思へばいさぎよきものを。かの殿上人とは誰なるや、道隆にへつらひ、また道長にへつらふはまだしも、人の心のおくも知らずして、元輔がむかし侍りける家の傍らに清少納言のすみけるが、いたくその家あれて、垣根などもくづれたる前を亘るとて、少納言は無下にこそなりにけれとて、車の中に云ひけるを、少納言忽ち簾をかゝげて、駿馬の骨をかはずやあるとのゝしりかへしゝ言葉、げに貧老に屈せざるの氣概も見え、その身躰は老いても其の才氣はなほ朽ちず、殿上人をして呆然たらしむ。あはれ、むかし、清女は、翁丸と云ふ犬の、猫のためにいみじき罪を得て、犬島にやられ、歸り來れるを、いみじうあはれがりぬ。清女をしてたゞ此殿上人とかへしめば、から時をも失はざりけんを、紫女は、逆境の中に順境にあひ、諄々として身をつゝしみ、己れを守りぬ。清女は、春の野に放たれし駒のたゞいさみ、たゞいばへて、其の身のつゝしみを知らざりしは、男ならば英俊とも歌はれつべきを女子たゞ徳を欲せば、つゝしみを加ふべき事にこそ。

苦は樂の種たのしみはくるしみのたねとしるべし、主人と親は無理なるものと思へ、下人は足らぬものと知るべし、恩を忘るゝことなかれ、子程に親を思へ、子なきものは身にくらべ近き手本とすべし、掟におぢよ、火におぢよ、分別なきものにおぢよ、酒と色とは敵と知るべし、朝寝すべからず、分別は堪忍なり、小なる事は分別せよ、大なる事は驚くべからず、九分に足らば十分にこぼるゝと知るべし、
正直は一生の寶、堪忍は一生の相續、慈悲は一生の祈禱。
（水戸黄門光國卿教訓）



學術

小兒の哺乳につきて

醫科大學　石原笠軒

摘要
一、乳哺の種類　母乳、牛乳、人工哺乳、
二、如何なる時に母乳を用ふべからざるか、急性傳染病消化害ある時、發熱ある時、脚氣の時、
三、乳母に關する注意
四、人工哺乳中牛乳に關する醫學的の注意、牛の疾病と乳汁との關係、人乳と牛乳との比較、哺乳上一般の注意、煉乳に就き撰擇、人工營養の事

◉哺乳の種類

私は小兒哺乳を三ツの種類に別けます、
第一が實母の哺乳であります、
第二が乳母の哺乳であります、(また里子)
第三が所謂人工哺乳と申すものであります

◉母乳

先づ、第一なる實母の哺乳は、最も自然の次第でありまして、便利の點に於いても、愛情の點に於てもこれが一番宜しいと云ふことは、皆様世の母たる御方の能く御存知の通りであります、然るに、時と場合とによりては此様な都合よき事が出來ないと云ふことに遭遇します即ち、小兒に乳をやる事が出來ないのでありまして、それは

(イ)實母に乳が出ない時　幷に乳が、少く、又は、質の良からぬ時
(ロ)實母が一定の病氣に罹りし時

てあります、乳が出ない時には、無論、仕方の無い事でありますが、又、乳の少いとか若くは、乳の質の良くない時はどうであるかと申すに、小兒科の醫者の所によく診察を乞ひに來るのを見ます、それは。何處に何うと云ふ定た、明白な病氣が無くとも、全身がやせこけて、大變に弱はり切ッてゐる小兒であります、是等は、大抵營養不良の爲めでありまして、母の乳を見ますと、乳の分泌の分量が少いとか、乳が薄いとかが原因であります、(勿論人工哺乳を行ッてゐる分は別ですよ)、から云

ふ時には、乳母を雇へばよいのですけれども、そうする程でも無いならば、人工哺乳に依つてもよいのです、是は、次に申します、また、實母が一定の病氣にかゝりました時には、どうでありましようか、病氣と申しても、一定の病氣の事で、何んな病氣でも皆んな、同樣に考へんければならぬと云ふのではありません、譬へば、輕い寒冒に罹ッたとか、大した事は無いけれども輕度の腸加答冒があるとか、云て、それで直ぐに、哺乳をやめるにも及びません、哺乳をやめなければならぬ病氣と申すは、大抵(イ)母が、急性傳染病に罹ッた時、(ロ)母が大變に胃腸を害して食物が充分に取れず、躰が弱ッて來た時、(ハ)其ほか急性傳染病で無くとも、發熱が高い時、それからまた、(ニ)脚氣に罹ッた時などが重なものであります、

◉急性傳染病

そこで、(イ)急性傳染病と申さば、御承知の通り、腸窒扶斯とか、赤痢とか、虎列剌とか、疱瘡とか、痲疹とか、猩紅熱、實扶的里、痲拉別亞、ペスト其他でありますが、扨て、此等の急性傳染病を煩ッてゐる母に小供を近づけるのは傳染の虞ある事は云ふに及ばず、先づ皆樣が恐るべしと感ぜらるゝのは、病毒即ち病原をなす處の黴菌が乳房を經て乳汁に混じ、小兒に傳はるかの點でありましよう、然るに、大抵、これは杞憂に過ぎぬのです、母躰の內部からして病毒が乳汁に混じて分泌することは、殆んど無い事であります、然らば何が恐ろしいかと申すに、唯今の處で確かにかうと云ふ研究をして證明したと云ふ事實は些ないのでありますけれども、病原をなす處の黴菌が母の躰內にて有毒性の物質を作くり、これが躰內に廣くゆき渡るからして、從て乳汁にも混じて、分泌する場合がある爲めに、小兒の身躰にも害となります、(勿論、小兒の胃でも、幾分か如斯毒物に抵抗する、成分を分泌することではありますけれども)、それから又、一ッは、こんな病氣に罹ッて居る母は身躰が全躰に弱ッてゐますから、乳の成分も平生と違ひ、不充分でありましよう、是等の點からして、急性傳染病に罹ッてゐる時は小兒に哺乳することが出來ない

のであります。

◉消化障害ある時

それからまた、(ロ)母が大變に胃腸を害し、嘔吐や下痢が劇しいとか、(食中りなど申す時、急性胃腸加答兒とか、種々の中毒の時など、)食物を充分に取ることが出來ない時には、哺乳をやめなければならぬのです、これは胃腸が悪い時には、普段の時の樣に消化が良くなく、胃腸の内で悪いものが出來てやはり、全身に回る樣なこともあるし、また、乳も不充分であるからであります。

◉凡て發熱高度の時

それから、(ハ)發熱が高度の時にも乳をやることをやめなければならぬのです、一概に發熱が高いと申しても、おわかりにならんかも知りませんが、これは、急性傳染病でも其内に急性熱性傳染病と申すのがありまするが其極々初めには隨分醫者の方でも、熱のほかに、あまり著明の症候が現はれてゐない、爲に、直ちには、診斷即ち病名を下し兼ねます事があります、又、それに限らずとも、寒冒でも、なんでも、發熱が三十九度近くも上る時は全身の新陳代謝に變化が起りますから乳も變ッて來ましよう、それてゐるから、凡そ發熱の高い時には、傳染病であらうが、あるまいか、哺乳を見合せた方がよいのであります、

◉脚氣の時

次に(ニ)脚氣であります、これに就きては小兒科の弘田博士が研究致されまして、一昨年の十二月に報告になりましたから、詳しきことは、其頃の醫學雑誌を御調べになればわかりますが、かいつまんで申しますれば、博士は其前の文献にも書いて無く、又何人も公けにした事の無い事を御調べになッたのです、母親が脚氣病にかゝれば、その乳を飲む所の小供も、これに似たる病を發するのである、即ち小供は乳を吐くとか、氣分が悪る相であるとか、小水の出が少くなッて來るとか、が主である、其ほかに脚氣の樣な症候が加はッてゐる、此時哺乳をやめば、小供の具合が良くなるのであります、しかし、母の脚氣の輕重と小供の病氣の、輕重とは必ずし

も相幷行はしない、

斯様な次第でありますからして、母が脚氣の様な氣味であれば早く哺乳を止めなければなりません、素人の皆さんにおわかりになる様に申さば、動悸がするとか、或は足がだるいとか、足や、また其他が痺れるとか、或は足に腫が來たとか、等の症候があれば早く醫者に見て貰ふのは無論ですけれど、自分でも氣を付けて、小供の哺乳と脚氣との關係に御考を及ぼされんことを希望するのであります

◎肺結核の時は如何

尚一ッ病氣の事でありますが母親が肺結核に罹ッてゐる時にはどうであるかと申すに、やはり、病原菌が乳汁に混じて、分泌はしない様です、又、大した、毒のある物質をも乳汁に傳へぬ様であります、されども、此時は醫者に御相談なすッて、どうしたらよいかを御糾しなさい、小供には、母親の咯嗽噴嚏等から直き其下の乳房に纒れゐる愛兒の吸ふ空氣中に、かの恐るべき結核桿菌が傳はりて肺に達し得る虞がありますし、又其乳房に、此病原菌が付着してゐる虞もあります、母親の方から考へて見ても、あまり乳汁を吸ひ取られては身躰の爲めに宜くないのです、

次に第二の乳母に就きて一寸御話を致します、

◎乳母に關する注意

前に述べたる如き、やむを得ぬ事情に遭遇すれば、仕方無しに、乳母を傭はなければなりません、皆さんの家事向、小兒の育て方、などの事を書いてある書物には、何れも乳母の撰み方に關して八ケ間敷述べてありますが、乳母の生質がどうとか、多少の敎育が無くてはどうか、そんな事は措きまして、私は、此處に些細の様な事ではあるけれども其實は決してそうで無い大事な事であると云ふ事を御注意申したいのは、小兒の育て方は看護が第一であるにも拘はらず、乳母と申す者は、大抵、無責任の者が多いので、自分の愛兒を放なして置いて他人の内え來る様な者は、必ず、止むを得ぬ事情を控へてゐるに相違無いのですから、尙又、敎育ある者が自家を離れるなどの場合もめッたに無いのですから、無責任

なのは當然です、或人が乳母の事、或は里子にやるなどを惡口云ッて育兒請負業なりと申しました、實際適評であるます、それゆゑ、乳母などは、實のおッかさまが居ない處では、亂暴なる取扱を致します、又自分の内に傭ひ入れて置いても、小兒が泣くとよくないと思ッて無暗に泣かせ無い様にしようとして、時間の經ゝぬに、乳を當てがひして、大きに小兒の躰を害する様な事を惹き起します、であるからして、決して、乳母には目を放なしてはならぬのです、殊に小兒が病氣でもして、これが回復し、其のあとの養生の爲めに、暖き處えでも轉地をさすに、乳母ばかり、つけてやるなどは、注意を要すべき事で御座りましよう、こんな事は誠に大切の事であらうと考へます、

◉乳母を撰擇する事

乳母でも、前に書いて置きました、病氣の事は、やはり同様に適用致します、それから、これを撰ぶに注意すべき事を簡畧に申しますれば、遺傳病なきや否や、肺結核癩病、殊に田舍、漁村、等より來れる者には黴毒を注意する事、また、其婦人は度々流産（妊娠七ヶ月以前に出産せるもの）早産（妊娠七ヶ月より九ヶ月）せざりしや、其の産みし小供は、かよはくして、夭折せざりしや否や等を、調べ度いのであります、其ほか、身體上の詳細なる事及び乳汁の善し惡しは、醫者の鑑定が必要であります、

◉人工哺乳牛乳

終に第三の人工哺乳に就きて御話致します、人工哺乳は第一牛乳（生乳）第二煉乳第三牛乳より製したる種々の滋養品等を以て致します、牛乳でも、東京などには、牧牛屋が狡猾で、所謂公德の何たるを知ら無い者が大多數でありまして、ずるい事ばかりを致しますから、實に困ッだものです、到抵醫者が望む様な牛乳を得るとは、近き將來では、だめでありましよう、牛とても、人間と同じ事で、病氣にも罹れば乳汁も惡くなります、牛乳屋は人間の衞生などを頓着せずに搾り取りて配達もしましよう、此頃の様に鵞口瘡でも流行すれば、尚々困ッたものであります、衞生警察も段々と發達して行ま

すれど、是亦、吾人が滿足する如き狀態に至るは仲々間違いことでありましよう、それから又、病氣の內でも、牛の肺結核は隨分多いものでして、これも充分の檢査監督が屆いてゐないのです、そこで、前にも申した樣に乳線を經過して結核桿菌が乳汁中に分泌することは無いのですけれども、牛が咯痰して、其の殘りが、口中に止まりて唾液に混じ、これが、頸から胸に傳はりて終に乳房に付着してゐて、それでもて乳汁に混ずることは確かにあるのです、であるから、牛乳も隨分危險なものです、能く煑沸すればよい樣なものですけれども、殘ッた部分が器にでも付いてゐる時には、永い內にはこれから傳染せぬとも限られません、

次にまた、牛も人間と仝樣に消化障害を起してゐる時分には其の乳汁も惡くなるのです、また、食物が不充分であるとか、粗惡であるとかすれば、やはり、乳汁も惡くなるのです、此等の事は、とても、需要者の方で、どうともする事が出來ないのです、

右樣の次第で、牛乳も隨分、よく無い點があります、これは、我邦今日の程度上誠に止むなく、遺憾なる事情であります、しかも、都下の乳屋でも、皆が皆惡いにも限りませんから、能く醫者に御相談なすつて、良乳を撰び愛兒に授けられ度いのです、檢査法の事は今申しません、

◉牛乳と母乳との比較

牛乳は人乳に比すれば消化がよくないものです、何ぜかと云ふに人乳にも牛乳にも、其成分中に乾酪素と云ふものがありまして、是は、蛋白質の一種でありますが胃に這入りますれば、胃液中の鹽酸の爲めに一旦凝固をするのです、所で、牛乳中の乾酪素は人乳のに比すれば此凝固が大きいのです、それゆゑに、これが消化して再び溶けるのが人乳のに較べて遙かに困難であります、であるからして、牛乳は、其の儘で、小兒にやるとは出來ません理由が御わかりになりましようと思ひます、然らば何の位に薄すめたら、よろしからうかと云ふに

◉牛乳を稀釋する標準

生後日數	牛乳の分量	和する水の分量
三週間	一ニ付キ	三
四週より八週	一仝	二
三ヶ月より五ヶ月	一仝	一
六ヶ月より七ヶ月	二仝	一

八ヶ月以後は水を和するに及ばす

大抵、こんな割合であります、尚、少しばかりの砂糖を加へ、甘味を付けてよいのです、砂糖は、乳糖の良い分を薬店から求めて用ゐるか、或は、そうゆかねば、極上等の白砂糖を用ゐます、

牛乳は、必ず、用時に當り、十分間以上位は煮沸すべく小兒に飲ませる時には、凡そ人間の躰温即ち攝氏檢温器の三十七度位に冷却してやるのです、熱いのも、冷いのもよくないのです、

◉哺乳の回數

哺乳の回數は人乳でも牛乳でも皆同じ割合にし、且、規則正しく、時間を定めてやるのです、生後一二ヶ月の間ならば、一時間乃至一時間半位に一回とす、三四ヶ月の間ならば二時間より三時間位は一回、其後は大抵皆さんの御經驗で、よい見當が付きます、哺乳の時間がよく定まれば便通もよく整頓して來るわけであります、

◉哺乳器

哺乳器は綺麗に清潔にして置かなければなりません、殊に乳の内に脂肪を持ッてゐますから、これが器の方々にくッ付いて、爲めに、一層他の汚ならしきものが、着くのであります、哺乳器は使用後は、よく洗ひ拭ひ、凹みたる部分などは歯磨刷子で掃除し、脂肪を取るには水一合に曹達一匁位の割り溶かしたるもので洗ふとか、又は、石鹸水で洗ッてもよいのです、夏分には度々綺麗にする必要があります、

◉コンデンスとミルク

次に煉乳であります、これは、隨分、用ゐて危險の少いもので、此點ではむしろ、牛乳(生乳)よりはよいのです、しかし唯今では、これにも澤山の種類がありまして、其の内に、粗惡濫造を免がれぬのが多いです、摸造もあります、誠に撰擇に困るわけです、醫科大學の小兒科で、

調べになりましたのでは、

◎最良なる煉乳

煉乳中最良なるは左の如し

(1) 鷲印にてNew YorkのHudson 街71番 Bordon商會のもの

(2) 俗に彩色人形印と云ふものにて彩色せる女が立ッてゐる印あるものの英語にてAngulo-Swiss と云ふ字があります

(3) Nestle's Swismilk

等であります、其他は大抵不良のものです、最も右の分は代價は高い方のであります、

煉乳は、砂糖分が澤山含まれゐるのですから水の割り方は澤山せんければなりません、

終りに牛乳より製したる種々の滋養品は、あまり混雜しますし、又、あまり普通に用ゐませんからして、此度は畧しまする、

◎人工營養とは如何

序に一言致し置きますのは、人口哺乳と云ふことは、人工營養の一部分でありまして、人工營養とは、これよりもッと範圍の廣いものであッて、決して乳類のみを用ゐるに限らず、又、小兒のみを養育する目的に限りたるものではありません、老人にても、病人にても、能く、醫者が行ふ所のものであります、此事を一寸御記臆を願ふのであります、

(完)

日本名蹟雜話(一)

文學士　喜田貞吉

はしがき

名蹟とは名所古蹟といふ事を省畧したので、此日本名蹟雜話に於ては、周ねく我國の名所古蹟を、順序を立てゝお話しする積りなり、扨、名所には如何なるものなるか、古蹟とは如何なるものなるか、之は一寸説明するをの必要あり、廣い意味から之を云へば、名所とは名のある所で、古蹟とはさきに何か事件の有つたところとの義なれば、あらゆる山川都邑、森林藪澤、原野湖海、社寺

塚墓、等、何れも名蹟ならぬは無き次第なれども、又極めて之を狹義に解して、名所とは、むかし或る有名なる人が、其地の事に就て歌でも詠み、其歌が有名なる歌集にても出て居るとか、或は有名なる人の紀行に其地の事が載つて居るとかしなければ、名所とは云へぬ事の樣に思ひ、又古蹟といふも、極めて著名なる古人の邸宅の蹟とは、墳墓とか、有名なる書籍に出て居る古社舊寺とか、古城址とか、古戰場とか、その他歷史上特に由緒ある土地とかに限るもの〻樣に思ふ人また無きにあらず、我等がこゝに說かんとする名蹟とは、右に述べたる山川都邑等、その他一切のものを含むといふやうなる、極めて廣義のものにては無けれども、さりとて必ず古書に出て居なければならぬと云ふ如き窮窟なるものにもあらず、名所にはむかしのもあるべく、今のもあるべく、去年有名なる事件が有つたところとて、舊蹟と云ふに云へぬ事も無かるべし、若し、先人の筆に上つて居ぬところをも名蹟の中に算ふるは不都合なりと、自ら好んで窮窟がる人あらば、失敬ながら我等の此筆を始として自今之を、名蹟の仲間入りせしめ給へと申すへしと爾いふ、

一、畿內の名蹟

畿內といふ名義

畿內とは山城大和河內和泉攝津の五ヶ國の總稱であつて、むかしは歷代の帝都が多く大和の國にあつた故に、其天皇の御座します所の近傍數國を、特に斯くは呼びたるなり、其畿內といふ文字の意味は、王畿の內と云ふ事にて、之は支那の制度に倣へるなり、支那にては、むかし王城の四方幾許かの地を王畿と云ひて、之を天子の直轄領とし、其他を諸侯に分ち與へたるものなるが、我國にては全國盡く天皇の直轄領ならざるは無き譯なれば、別に王畿と定むる必要も無い樣な道理なれども、丁度今から千二三百年前には、恰も明治に成つて頻りに西洋風が流行する樣に政府には無暗と支那の風を眞似た時代であつた故に、自然と此名稱迄も彼の地の風を倣ひて、用ひたるものと見ゆ、扨、古代の畿內の區域は如何にと云に、孝德天皇の時に定められた

る所では、東は伊賀の名張の横河、西は播磨の明石の櫛淵、北は近江の狭々波の逢坂山、南は紀伊の兄山を限りとして、其以内を畿内と成すとの事に傳へたり、尤も之は天皇の都し給ひし浪速即ち攝津の大阪を中心として、それより四方へ測り、街道の出口〳〵で限つた者なるべければ、其區域はハッキリとは判らねども、多分今日のと似たるものなりしならん、

此畿内は太古より明治に至る迄、代々の天皇の皇居のありし所なれば、土地もよく開け、人口も多く、殊に名所舊蹟は、他の地方に比べては最も多しとなす、依て筆の序に畿内五國の今日の行政上の管轄を述べん、

山城……京都府、(丹後及丹波の一部と共に)
大和……奈良縣、
河内、和泉及び攝津東方の一部……大阪府
攝津の大部……兵庫縣(淡路、播磨、但馬及び丹波の大部と共に)

◉山城の名蹟

○○○○○
山城の名義　山城はもとは山背と書いて、山の後ろの國といふ意味なり、之は大和に帝都のあつた時に呼びならはした名前で、其地から見れば丁度山北即ち後方に當つて居たものなれば、地勢上から斯くは呼ひし次第なれとも、其後桓武天皇都を此國の京都の地に遷し給ひてよりは、最早山背では無くなりしかば、特に勅して、「山河襟帶自然に城を成す」との御主意を以て、今の如く山城の文字を用ふる樣になりたり、

○○○○
山城の地勢　桓武天皇が山河襟帶自然に城を成すと仰せられた時には、何處の山を襟と見立て、何處の河を帶と見立て給ひしやら、精密には判からねども、此國の地勢は四方山を以て圍み、北から來た加茂川、西北から來た桂川、東南から來た宇治川、南から來た木津川等、何れも國の中央部に落ち合ひ、一つに成りて西の方山崎と男山との間に僅かに吐き口を求め、攝津河内の間を流れて、はては大阪灣へ注ぐ所、自然に城を成すと云ふも、然るべき次第なり、扨其四方から川の落ち合ふ所、即ち山城の中部地方は、土地が低くて今も尚巨椋池の樣な大きなる沼もあり、諸水が此所に淀むと云ふ所か

ら淀と云ふ地名も起り、其合流した川の名にも、淀川といふ稱呼を生じたり、此等の川々とほゞ同じ方向を取つて、數條の

○○鐵道 各地に通じ、之を利用しての交通極めて便利なり、此鐵道を説明するには、先づ其交通の中心と成る所を定むる事便利なり、其中心は、北には京都、南には木津、此二ヶ所を本として、略圖を引けば、ほゞ左の如きものとなる、

先づ東京より神戸に通ずる東海道鐵道は、東の方近江から來り、京都を過ぎて西の方攝津に入り、京都から丹波舞鶴に通じやうとする京都鐵道は、西北に出て丹波に入り、南に向いては奈良鐵道が、宇治木津を過ぎて大和奈良に通じ、又名古屋から大阪に通ずる關西鐵道は、東の方伊賀から木津川の上流と並んで來り、同じ木津で奈良鐵道を連結する支線を分つて、西北の方河内に入り、又此鐵道の支線が、木津の東の方加茂から分れて大和の奈良に通じて居るのもあり、されば東京等東國の人が、大和の奈良吉野、さては紀伊の高野などに行かんには、尾張名古屋で東海道鐵道から關西鐵道に乘り換へ、更に此加茂から奈良へ移るが順路なり、

我等は之より、先づ東京を出立して東海道鐵道の京都驛に下車し、順序に此國の名蹟を一周するものと假定す、扨此滊車の未だ京都に着かぬ前、即ち近江から始めて山城へ這入る所は、かの有名なる

○○逢坂越 で、之は山城から東國に交通するには唯一の要路なれば、むかしは此所に關門を置いて、畿内の守りを固めたるものなり、かゝる必要なる通路なれば、昔も今も行き交ふ人の絶ゆる事なく、蟬丸がこの關門のほとりに庵を結んでこれ等の往來の人を見て、

これやこの行くも歸るも別れつゝ
知るも知らぬもあふさかの關

と詠んだは、實に然るべき事なり、此歌定家卿の小倉百人一首にも撰み入れられて、極めて有名なるものと成つたが爲にてもや、あらん、今は此逢坂越に、蟬丸神社三所にありて、互に遺蹟を爭ふ有樣あり、但、此歌百人一首には、「行くも歸るも別れては」とあるは誤りなり、

又俗に蟬丸を盲目の如く云ふも據なし、盲目の人が行き交ふ人を見る筈なきものを、

鐵道は此逢坂越の街道の眞下を隧道で通過し、山城に出て、大谷、山科、稻荷を終て、京都驛即ち七條停車場に至る、此山科の邊には名蹟多し、其著しきものを並ぶれば、

醍醐寺、隨心院、勸修寺、等、（共に山科停車場から南西にあり）これは何れも眞言宗の大本山にて、維新前迄は御門跡と稱し、皇族方又は攝家（〇藤原氏の中にて、九條一條二條近衞鷹司を云ふ）の子弟の住職せらるゝといふ格式のよい寺院なり、殊に醍醐寺の三寶院は、開山理源大師が大和の大峯に修行の道を開いてから、長く修驗者即ち山伏の本山として有名なり、此近傍に

醍醐天皇陵　朱雀天皇陵　もあり、大和奈良の興福寺も、もと、此山科にありし故に後の世までも、山階寺と云ひ、

本願寺　もはじめは、山科にありしに、之は天台宗の嫉みを受け、燒打ちにせられて大阪に遷り、後に京都の今の地に遷りしなり、此外山科で有名なるものは、畏くも、

天智天皇山科陵　これは天皇天に登り給ひて、御行衞を失なひたれば、其御靴の殘れるを葬りたりとの傳說もあり、もとより正史になき所、信ずべきにあらず、次には忠臣藏で名高い

大石内藏助良雄の遺跡　といふもあり、近ごろ土地の人々は、良雄の忠義を彰はす爲め紀念碑を其所に立てる計畫なりとか聞こゆ、

又滊車の窓より右の方、山手を見れば、山の麓の方に

疏水の運河　の通りて居るを見る、之は先年北垣國道氏が京都府知事であつた時、近江琵琶湖の水を京都市へ引いて、一は運送の爲、一は水力を器械運轉に利用する爲、一は田地に水を灌ぐ爲にとて、起したる大工事なり、

滊車山科を過ぐれば、次は稻荷驛に止る、こゝに

稻荷神社　あり、朱塗の大鳥居鐵道の右側に見ゆ、此地方はもと

深草の里 と云ふた所で、慈鎮和尚の歌に

　衣うつ音に知れとや秋の夜の
　深きあはれも深草の里

ともあり、て極めて物靜かな片田舍なりしに、今は北は京都、南は伏見と、殆ど町つゞきとなりて、極めて繁華の衢と成れり、此より少し東南の方に、同じく鐵道の右側に深草帝即ち仁明天皇の山陵 もあり、小野小町に就て物のあはれを俗說に迄留むる深草の少將といふも、此邊りに住みしにや

稻荷より北の方一帶の地は、所謂京の東山 にて、殊に著しき名蹟相連る、我等は今玆に此等の京名所を說明する前に、聊か、京都市即ち平安京の由來沿革を述ふる必要あり、

今の京都市 は加茂川を中に取りて其左右に亙り、東の方は、嵐雪の

　蒲團着て寢たる姿や東山

と吟じた例の東山迄をも含む樣に成りたれども、古の京都即ち平安京 は大に之と場所を異にし、今の京都は、大畧を云はゞ、古への平安京の東半分に、加茂川以東の地を附け加へたものとも云ふべし、

抑 平安京は、今を去る一千百餘年前、桓武天皇の延曆十三年に都を奠め給ひてより、明治に至る迄一千七十餘年の間、常に帝都の地なりし故、其間、或は政權が鎌倉に移り、或は江戶より政治の出た事などあつて、從つて隨分盛衰の差はありしも、常によく其繁昌を保つて、今も尙三十餘万の人口あり、我國第三の大都會たるを失はず、東京に對して之を西京と云ひ、皇宮も前のまゝ今に存在す

もとの平安京の位置は、丁度加茂川と桂川との中間で其廣さは東西一千五百丈餘、南北凡そ一千七百五十丈、其形稍長方形を成し、東西南北に正しく數條の大小の道路を通ずる事、恰も碁盤の目を引きたるの狀あり、其中、中央を南北に通ずる朱雀大路は、廣さ二十八丈之を以て平安京を左京右京の二ツに分つ、左京は東で一

に東京と云ひ、右京は西で一に西京といふ、此右京は始めから衰微の徵ありて、次第に繁華は東方に赴き、今は西の京といふ名は村名にのみ殘つて、右京の大部分は田舍となれり、之に反して左京の方は人家次第に增し、遂には加茂川を越えて東山にまで接する樣になれり、此加茂川以東の地は、昔は一般に白河と云ひ、平安朝の末の比などには、已に京白河と並べ呼びて、立派な寺、貴顯の別莊など多く此方になり、極めて盛なる場所となりしが、西の方は小督の局が隱れるとか、祇王祇女が庵をむすぶとか、極めて物淋しい場所なりし、やうに見ゆ、

此の京の事を洛中と云ひ、白河の事を洛外といふ事あり、これは加茂川を洛水と見立てゝ、其河の內外と云ふ事なり、元來洛水とは支那にある河の名で、支那の帝都洛陽が、此洛水の邊にあるより、我が帝都をも洛陽と見立てゝ、遂には河をも斯く呼ぶ事となりしものなり、東山の事を洛東と云ひ、北山の事を洛北と云ひ、殊に華の都と云ふ事を華洛といふなどは、皆此の洛陽がもとゝなれるなり、一體支那の古代では、長安と洛陽と二ツの都があつて長安を西京となし洛陽を東京と成したものなれば、我が平安京では、左京が洛陽に當り、右京が長安に當る譯なれども、まへに云ふ通り左京は早く衰へたれば、左京の洛陽のみが其名を專にする事と成りしものゝ如し、今日にては都も東京に遷り、京都は西京と成つたことなれば、若し昔のやうに支那風の流行した世ならば、東京を洛陽と成して、隅田川を洛水と見立て、京都を長安と成して、加茂川を渭水と見立てる筈なれども、今日は左る馬鹿な眞似を成すものも出來ざるなり、

右ほゞ京都の由來を說明したれば、次號に於ては京名所巡覽に及ぶべし　（つゞく）

猫の話

女子高等師範學校敎諭　藤堂忠次郎

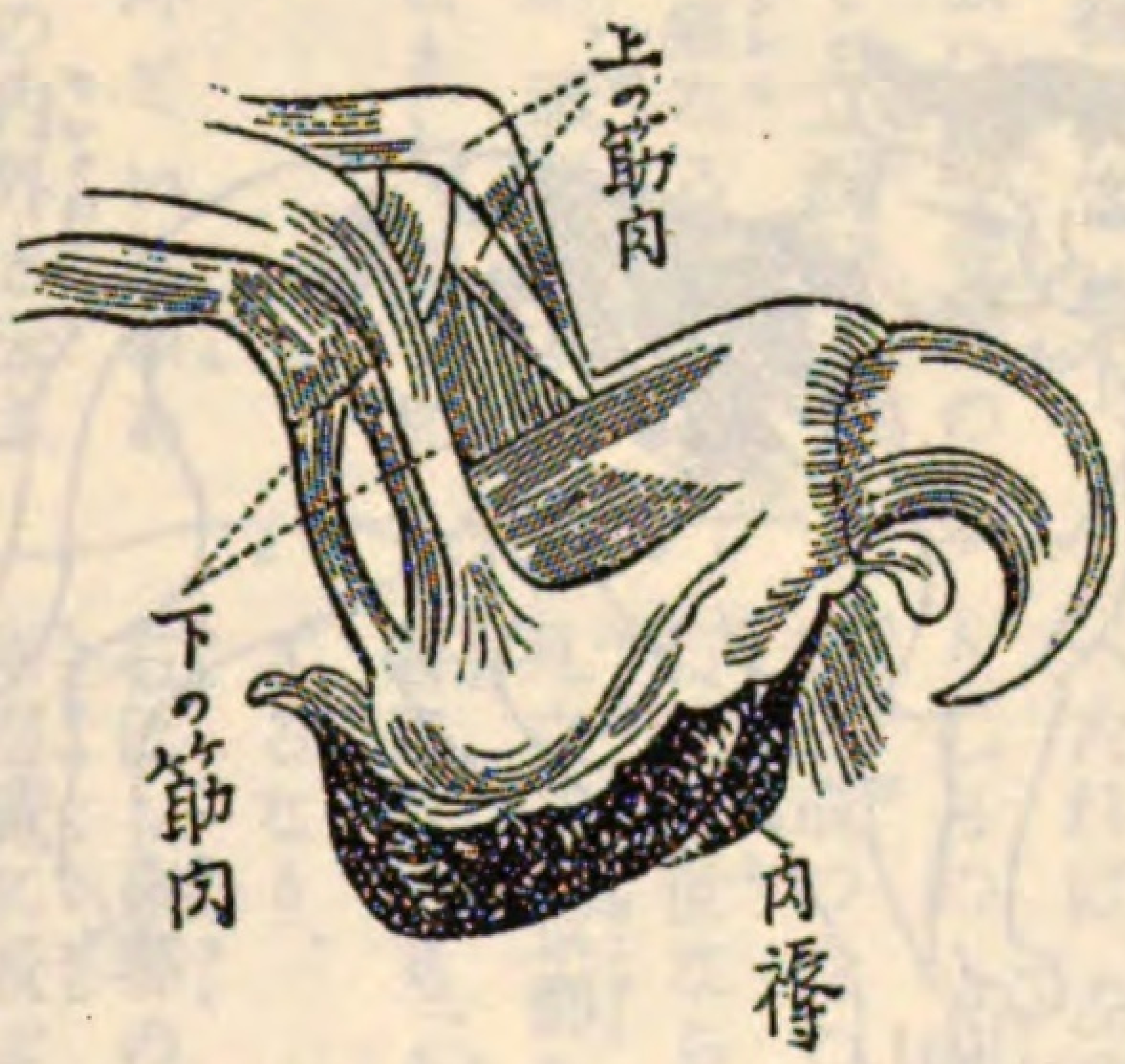
前號には牛の話をして先つ牛の歳を祝つた。それから今度は何の話をしようかと考へたが、何分此の博い理科のことであるから決断が着き難い、只獸類の話を仕出したものだから寧ろしばらく之れを續けることゝして、題目の通り兎も角猫を持ち出した譯である。

ところで前には牛……今は猫……何だか話が合はないよーで、大變大きな獸を咄したかと思ふと大相小さな獸に移るから丸で突飛である、成る程突飛である、ところが突飛も大きな突飛で、實は丸ッ切り反對のものである、それが却つて面白味が多いだらうと思ふ。

さて何が反對であるかといへば、大抵は分かるであらうが、先づ體の大きさが大變違ふといふを始めとして、彼れは體格が凡て重々しいが、此は一般に輕けに華奢に、跫音もしなければ耳も敏く目も鋭く、他を攻撃するに妙を得て居ることである。いひ換れば、猫の形態動作は悉ぐ他を攻撃するために出來て居ると言ひ切つて差支ないと思ふ。何を攻撃するかといへば、鼠であるとは誰れも知るが、決して鼠ばかりではない、兎にも打つてかゝれば、鳥にも向かひ、又蛙をも虐める、つまり己れの力で及ぶ所の動物に喰つてかゝるのである。その喰つてかゝるに、最も妙を得て居ることは、彼れの體が甚だ輕く出來て居ることである。彼れの胸幅が潤い割合に、腰が甚だ細くあるのが何よりも身を動かすに輕いものである、人間でも下腹が便々と太いものは屹度走られないで腰の細いものが競走に必ず勝を取る、猫は實に生れてから仕合せで、其の輕く捷いことは柱でも樹でも登り付く程である、我々が屢見る如く猫が犬に追ひ詰められると樹か屋根の上へ三十六計を出すことがある。



猫の體が輕いといふのは何も三十六計のためではない。寧ろそれを以て他を攻撃するためであるとは前にも述べた通りで、何がさて其の爪の鋭いに驚くばかはりである。誰れか猫の怒の爪に搔かれたものがあるか、正しく明晃々たる利刀で切り裂かれたよーである。鼠でも此の爪に罹つては堪まるものでない。それに間がな隙があれば、彼れはそれを研いて、いやが上にも之れを鋭くする、我々は見たであらう、彼れが時として疊を搔くことがあるを、彼れは無益に斯くなすのではない、即ち利刀を研ぎすまして居るのである。そうして此の利刀は常はよく鞘の中に藏めて置いて、妄りに出すものではない、利刀でも常は之れを大切にするものである。上圖に畫いてあるは獅の爪であるが、しかし猫も同じことである、先づ其の爪が如何に鋭く曲つて、そうしてそれが地に着かずに居るのを見よ、これは爪を引き上げたところで、丁度下にある肉塊が褥のよーに隔てゝ爪を地に着けさせないのである、それで爪は指尖の肉の中へ割り込んで見えなくなる、これを即ち鞘に爪を藏めたといふのである。このよーに爪を引き上げるのは上から筋肉が引張るからで、若し下の筋肉が引き付けるならば、爪は下向に下つて其の尖が地に着くよーになる。猫が勇み立ては忽ち此のよーになるのである、他の動物に喰つてかゝるときは勿論此のよーになるのである。

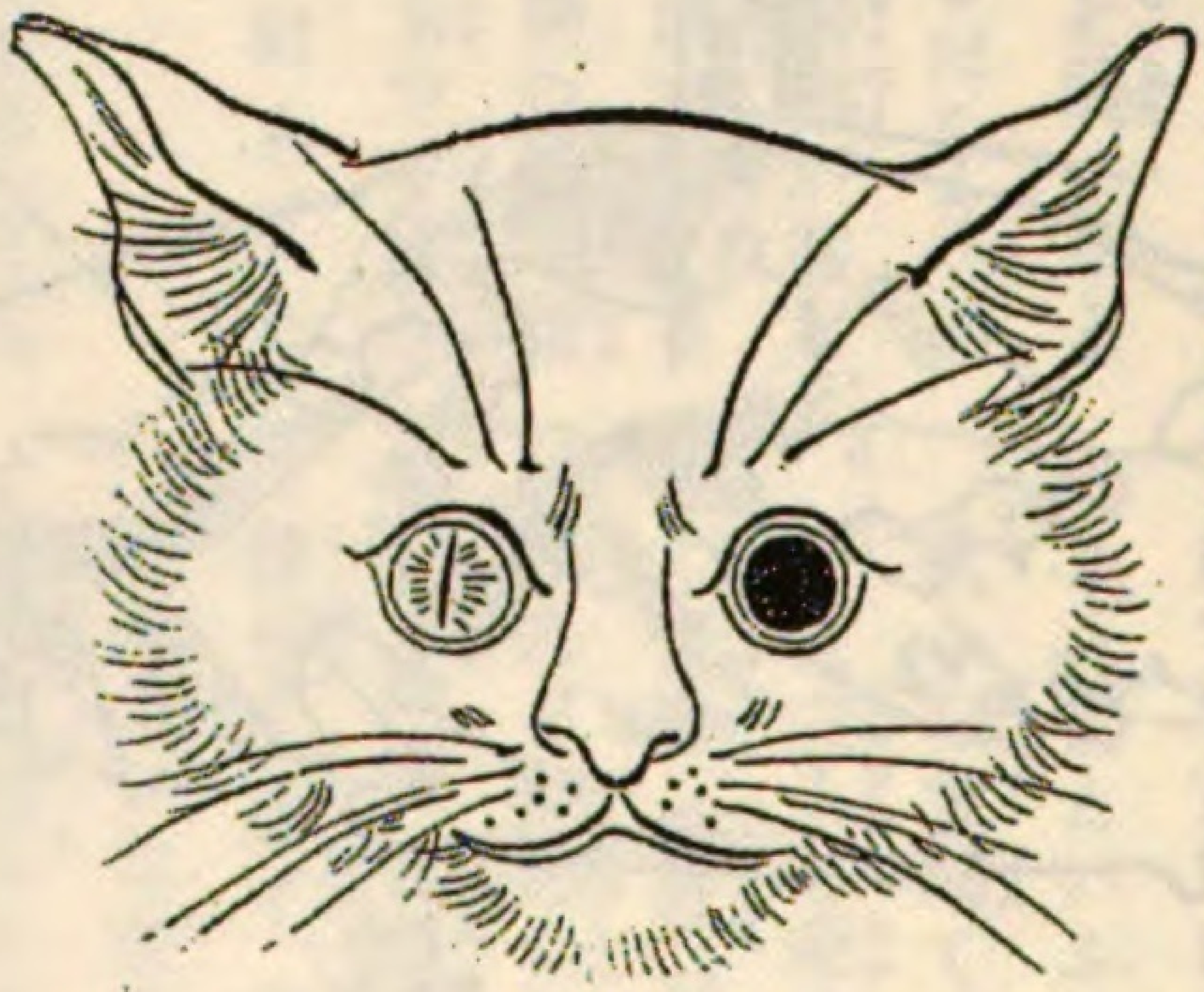


それから猫が足音を立てないといふのも亦此の攻撃のためである、たとひ彼れが他動物に飛びかゝるだけの技倆があるにしても、而かも驚くべき遠距離に達することを能くしても、足音が立てば目的物に近よつて程好い足場を測ることが出來ない。彼れは其れがために殊更にそのよーにするには及ばないで、彼れの足の尖が都合よく出來て居ることとである、即ち彼れの骨骼からして常に指尖で歩くように仕掛けられてあつて、而

かも肉褥が全たく音を遮るから誠に都合が宜しい、人でも忍足になるときは自然と指先で歩くものである、况して肉褥のあるものは萬事便利であることが分かるであらう。

それに耳の敏いことは、彼れが鼠の音を直ちに辨別ることをするので分かる、たとひ彼がよく熟睡して居る間でも、若しも何か怪しい音がすると、忽ち眼を醒まして圓い眼を益々圓くして、耳を聳てゝ、彼方此方を見廻はす。どうして耳が敏いかといふに、先づ彼れの耳殼を見よ、人間のよーに外へ向つて開かないで、大きな穴が眞正面に向って、而かも其の耳殼は横の方へも曲げて、背後側面からの音も巧に穴へ入ることが出來る。

敏いといふは耳ばりではない、彼れの眼の光である、彼れが能く闇黒に鼠を捕へ得るは全くその爲である。世間では人心の變り易いのを猫の眼のよーであるといふが、眞正にその通りで、それが即ち猫の眼光が鋭いことである。何ぜかといふと、彼れの黒球即瞳なるものは人間のよりは遙に大きい、それで僅の光明さへあれば、彼れは物色を辨へることが出來る。總じて人間でも室内に在るときは多少その瞳が開ひて窓外を見れば直ちに小さくなるものである、それといふは、室内の如き光明不足なる處と戸外の如き多過ぎる所があるからで、瞳はそれに應じて大きく又小さくなるのである、何も猫の眼ばかりが變り易いのではない、人間の眼も亦變り易いのである、只猫の眼の瞳が眼の大さに比して甚だ大きいものであるかから其大小變化する割合が著しいからである。圖中にある左の眼は充分に瞳の開いたところを示し、右の眼は甚だ縮まつたところを見せたのである、そうして其の閉ぢ方が人間のよーに周りからでなくて、左右兩方からするのであるから段々

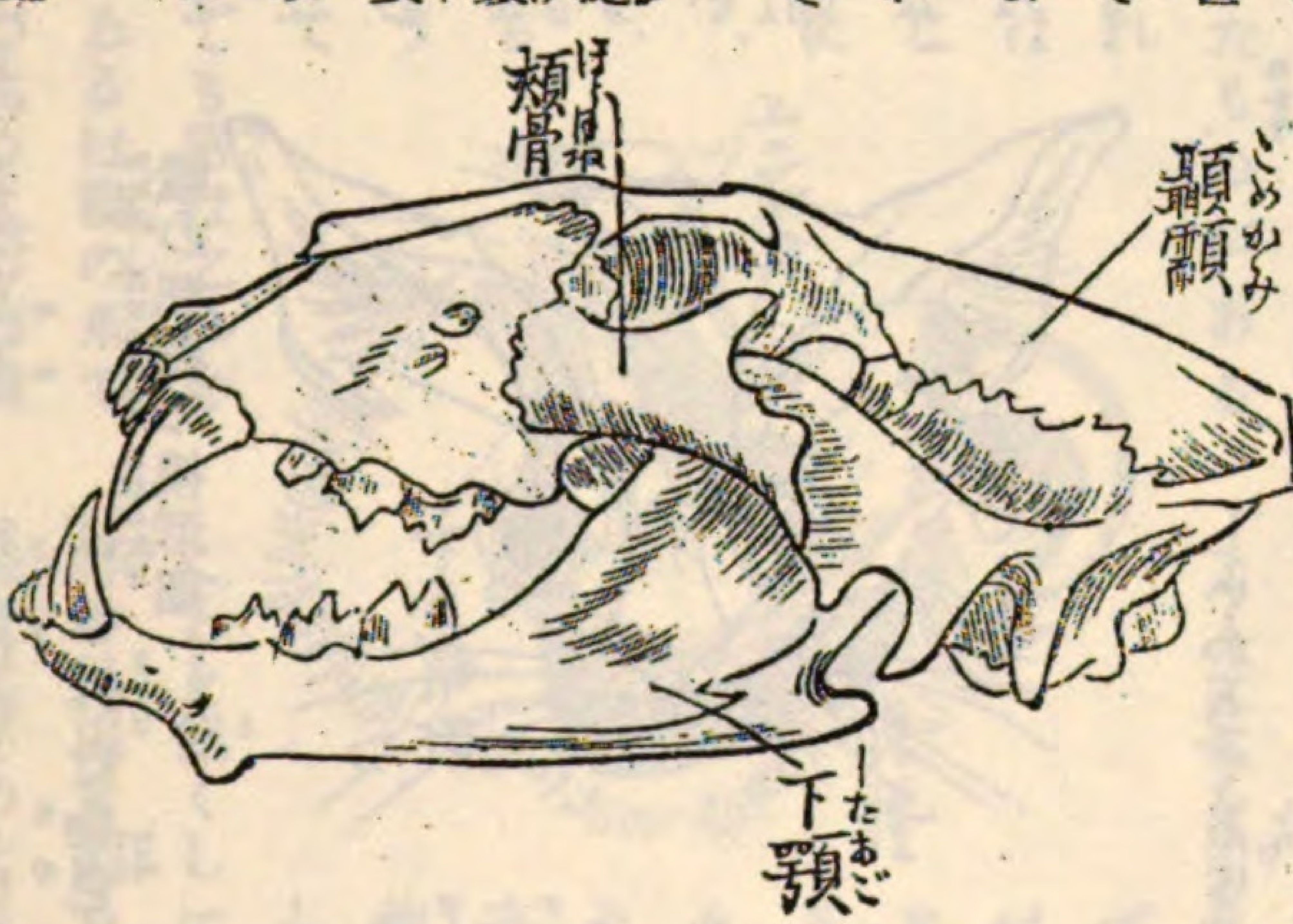


瞳の閉開の模形圖

と細くなつて終には一直線のよーになるのである。

猫はこのよーに眼も耳も敏いから、よく暗黒の中でも、餌を捕ることが出來るわけだが、こればかりではない、彼れの眉と鬚との甚だ長いのが大に助ける。成る程世間では猫の鬚を剪り取ると鼠を捕らなくなるといふが、如何にも其の通りで、之れが暗黒の所で眼の充分に働き難いときに、物に觸れて何かを悟るのである。我れの盲者を見よ、手に依るか杖に縋つて諸物を辨へるではないか、猫の鬚は即ち此の手よりも此の杖よりも重寶に働くのである。如何にも此の鬚を取られては、盲者の杖を失つたも同樣になるかも知れない。

これで猫が他物を狙ふ道具は先づ一通り揃つたが、愈〻飛びかゝつた場合にはどんなにするか、恐らくは彼れは喰ひ附くてあらう。さて喰ひ附くには眞前に歯を以てするに定つて居るが、其の歯がどんなであるかは一つこゝで研究せんければならない。牛のより見比べば、誰れも其の鋭いといふことを、知つて居るであらう、實にその通りである。第一恐ろしい大きな牙といふのが見える、牛には全くそれか缺けて居つた、猫は眞先に之れを以て他動物に喰ひ付くので、其の鋭くて而かも力の強いには驚くべきばかりである、一旦之れで鼠などの體へ刺し込んで一振二振すれば肉はズタ〱に裂けてどんなものでも堪つたことではない。このよーにして肉を裂き込めば今度は之れを奥歯で噛みこなすのである、それが丸で牛とは違つて、牛は扁い臼のよーな歯で上と下とを磨り合して草などを潰すのであるが、猫は左樣なことはない、細かに噛み切るより外はない、それで奥歯は皆甚だしく尖



づて上顎と下顎とを合せば上齒と下齒とが互に喰ひ合つて強く肉を刻むことが出來る、よく文章にも犬牙錯雜と書くが、即ち猫でもこの通りになるのである。そうして齒の數は總躰で三十枚あつて、前齒が十二枚、牙が四枚、奥齒が十四枚を合せたのである。

此の鋭い齒は亦噛む力が甚だ強い、猫に肴を與へると骨をもバリ〳〵音させて食するでも知れるだらう、そんなに強いのは頰骨から下顎へ渡つて居る筋肉が甚だ厚く發達して居るからである、即ち其の筋肉が縮まると、強く下顎を上へ引き付けるのである。猫の顔が圓くて愛らしく見えるのは、實は此の筋肉が太つて居るのと、之れを附着けるための頰骨が大きいからである。

それから誰れか猫の舌で舐められた人があらう、どんな感じがあつたか、ジヤリ〳〵と音がして磨られるよーで、少しも滑かといふよーには思はれないであつたであらう。それは舌の面に小さな棘をもつて居るからで、それが何のためかといふと、餌の骨に着き殘つて居る肉を舐めて取るので、たとひ僅かな餘りでも洩らさず食ひ盡すのである。

上に述べた色々の話を合せて考へると、愈々猫の形態骨骼から凡ての細かい點に至るまで、悉く他動物を攻撃するために出來て居ることが分かつたであらう。すると猫といふものは、甚だ恐ろしいものと考へられる。成る程世間では猫を犬と比べて月と鼈のよーにいふ、犬は主人を愛するが猫は家を慕ふ、犬は藝を敎へて能く覺え、性質が寛大で信用すべきもので、その敏いことなんどは熱心に眞面目に人々から賞められる所であるが、猫は我儘で己れの幸福を求めて他は丸で無頓着で狡猾で詐で、機嫌の好いときは恐ろしい毒爪をも天鵞絨のよーな毛の中に隱し、若しも不機嫌ならば、彼れの最愛の親友にまでその爪を向けるといふことである。さりながら人の經驗では如何樣にも見えるもので、實際に猫を畜つて猫の愛をもつて居る人では、彼れの最も敎へ易く最も順良で、犬の如く亦良い性質で、且つ犬さへも殆ど及ばない程の才智を表はしたことがあると

いふて居る。これは亦極端に猫の偏愛をする人であるらしいが、何さき猫を以て全く詰まらないもののよーにいふのは少し早計ではないかと思ふ。隨分猫にも犬のよーな奇談があることを聞くもので、萬更見棄てたものではない、左にその奇談の二三を述べて見よー。

或る酒倉の家に一頭の黒い老猫が畜はれて居た、此の猫の少くわつたときは、倉の細道に日々漂うて多人數が酒罈を運ぶ足に踏まれたり蹴られたりして難澁な生活をした、段々左樣にして居る其の場所に居慣れた、すると後に一頭の若い仲間を得た、此の若いのも亦同じ樣な難澁に出遇つたが、そこで二頭の間に都合好ひ約束が結ばれたことがある。それは年増の方が場所慣れて居るだけ年若の方を助けて此の難所を無事に生活させると、そこで年若の方は年増のために鼠を捕つて與へる、年増はさも嬉しそうに年若を傍へ引き寄せて自分と分配して之れを味はつたといふことてある。

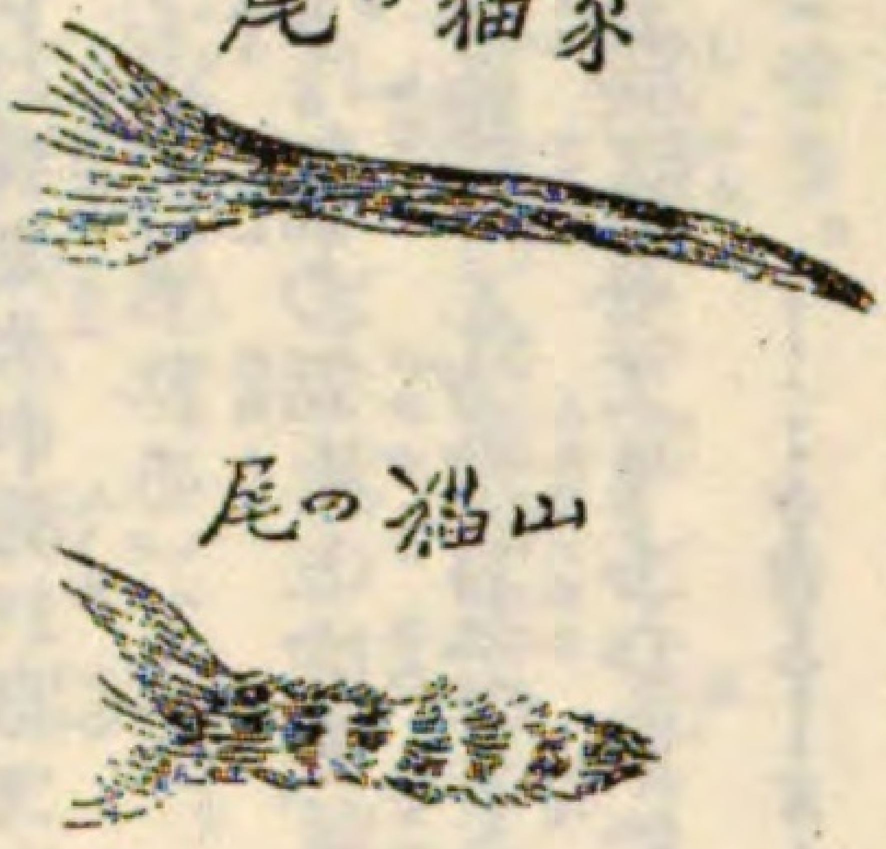
或る家の猫は名譽の心に富んで居て、己れを愛する人から賞めてもらふごとを、此上もない樂として居つた、その賞讃を得んためには彼れは屢々奇妙なる饗應をした、即ち主人の前へ種々な動物を持つて來て、現に鼠などは少しも之れを傷けないで態々己れの口から離して主人に取らせるよーにした、それで賞めてもらはうといふ考なのである。

又或る家の猫は屢々家の人に己れの子猫を奪はれるものから、終には後の子を身の後に匿つて見せなかつた、それでも効力がなかつたから、今度は屋根の外へ出て瓦と瓪との間で適當な場所を見付けて巣を造つた、實にその場所は瓦を剝ぐか、若しくは庇を破はさなければ達しないといふほとの好い隱家であつた。

こゝに大相猫を愛して居つた紳士があつた、或る朝その猫が紳士の居室へ行つたが、そこに見えないものから、彼方此彼と尋ね廻つたが、寢室で見付けた、すると喜んで咽喉をゴロ〳〵と鳴らして、紳士の枕元へ來て何だか機嫌を取るよーにした、ところが紳士が一向に笑つて呉れないばかりか、何事か病氣であるに考へ付いたらしく、俄に靜まつて其の傍で看病をするよーな

様子である、そうして看病婦が若しも唖りでもしようならば、其れを起こそうとして顔を撫でたり、頸を擽つたりしたそうだ。

これて猫の性質もざつとは分かつたであらうが、こゝに家に畜はれて居る猫は山野に居る猫と同じものであるかないかの問題がある。猫を以て性質の必ず良くないものと見るならば、此の山猫と同樣に見られるかも知れない。ところで實際の姿を見れば、彼れと此れとは隨分異て居る點がある、第一に其の尾が違ふ、上圖


家猫の尾
山猫の尾

にある如く家猫のは長くて、段々と細く尖つて居るが、山猫のは短くて太くて急に尖つて、そうして毛がフサ〳〵として居る。序にいふが、東京の猫では總躰尾が短かい、それで皆山猫の血統かといふに、そうでもなからう、奇妙にも東北のは上方邊のとは違つて居る、しかし其の原因は分からない、昔東北では子猫の尾を切つたとでもあつて、それが段々傳つて來て生れ付となつたのかも知れない。

それから山猫の體の色は一般に變化が少ない、地色は黄或は灰色で、それに黒い虎斑がある、そうして毛は可なり長く厚くある。體は肥えて長は凡そ三尺程


山猫の圖

もあつて、尾は一尺程もある。恐ろしい性質をもつて居つて、兎でも鳥でも手當り次第に喰つてかゝるから、山獵者には忌むべき嫌ふべき敵である。日本には居ないが、歐羅巴亞細亞の北部の山中には隨分多く棲んで居る、岩角や林叢の凹が彼れの屈竟な住所である。家猫が年取れば山や野へ往つて山猫になるのであるといふは、受取られない談で、それは右のよーに姿が違ふ所から考へられる。

永々と猫の話をしたが、これで切り上げよーと思ふ、どうか孃さん方は自分ところの猫を見て、右述べた事柄を比べ合せてもらひたいものである。

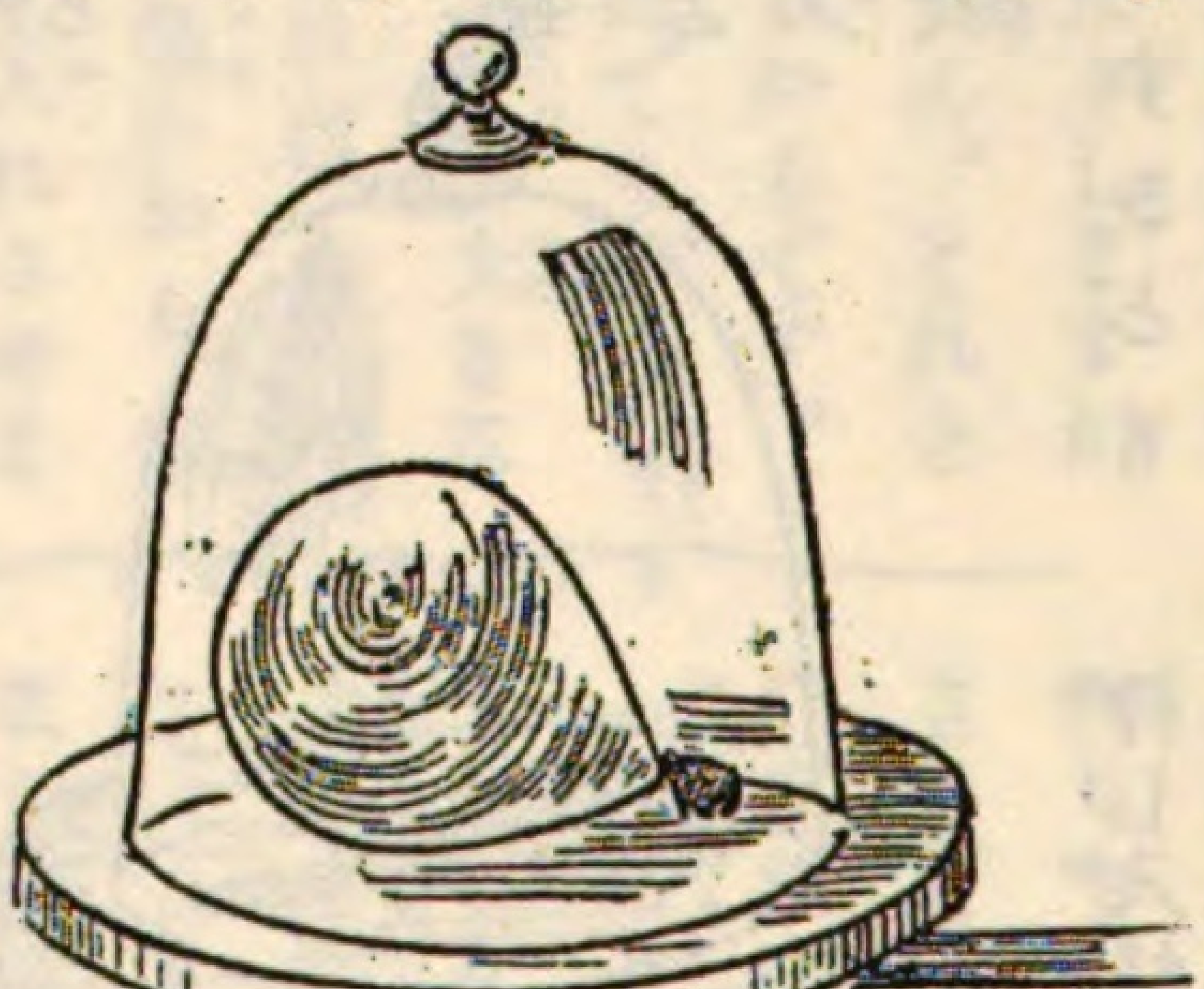
空氣の話（つゞき）

女子高等師範學校教諭　岡田みつ子

〇空氣中の塵埃　このまへ空氣の成分の話のところで、空氣は酸素が一、窒素が四の割合に混じてゐる外に、尙炭酸だの、水蒸氣だのといふものが、入つてゐるといふことを申しました。之について今一つ申しておきたい事は、右等のものゝ外に、まだ空氣中には、澤山の細かい土砂や塵埃が混じてゐるといふ事であります。之は皆樣よく御存じの通り、朝などまだ戸を開けぬうちに、戸の隙間から日のさし込んで來るところを見ますと、それは〳〵澤山の塵埃が飛び舞うてをります。人の目で見えるのがあれだけでありますから、其れ以上にどれほど塵埃が入つてゐるか分らぬ位で、吾〳〵が息をするたびごとに之を吸ひこむのかと思うと、實に氣味がわるう御座います。ことに東京などの都會の地は、人馬の往來が烈しう御座いますから、從うて空氣中に塵埃のちることも、夥多しいものであります。其れゆゑ人間にとつてはあたりの靜な、空氣の清淨な田舍に住むのが無論よいのでありますが、またいろ〳〵の事情があつて、そうばかりも參りませんから、休暇などには、なるべく、熱鬧な所を避けて、そういふ所や海邊などにいつて、こみのない、清淨な空氣を吸うのが健康のために肝要であります。

空氣の成分についての話は この位にいたしまして、これから空氣の性質について御話いたしませう。之をまへに空氣は氣躰であつて、動きやすく、擴がりやすい性質のものである、といふだけは申しておきましたが、未だ其の他にいろ〳〵の性質をもつてをりますから、これから以下におひ〳〵御話いたしませう。

一つ試驗をいたして見ませう。ゴムで作つた風船玉の中に、ごく少し空氣を入れまして、其の口を緊しく閉ぢておきましたらば、どうでせう。そのまゝにしておけば無論此の嚢は別にどうもなりません。が、もし之を排氣機と申して、空氣をなくなる程にうすくする機械のガラス鐘の下(圖のガラす鐘のふせてあるところ)におきまして、其の機械を働かせて鐘の内の空氣をだん〳〵拔き出しますと、この嚢は其のまゝでは居りません。即ちこの嚢が、だん〳〵脹らみ出して、恰度圖にあるやうになるのであります。



之はどういふ譯でありませう。皆様考へて御覧なさいまし。之は空氣にふくらむ力のあるといふ證據ではありませんか。

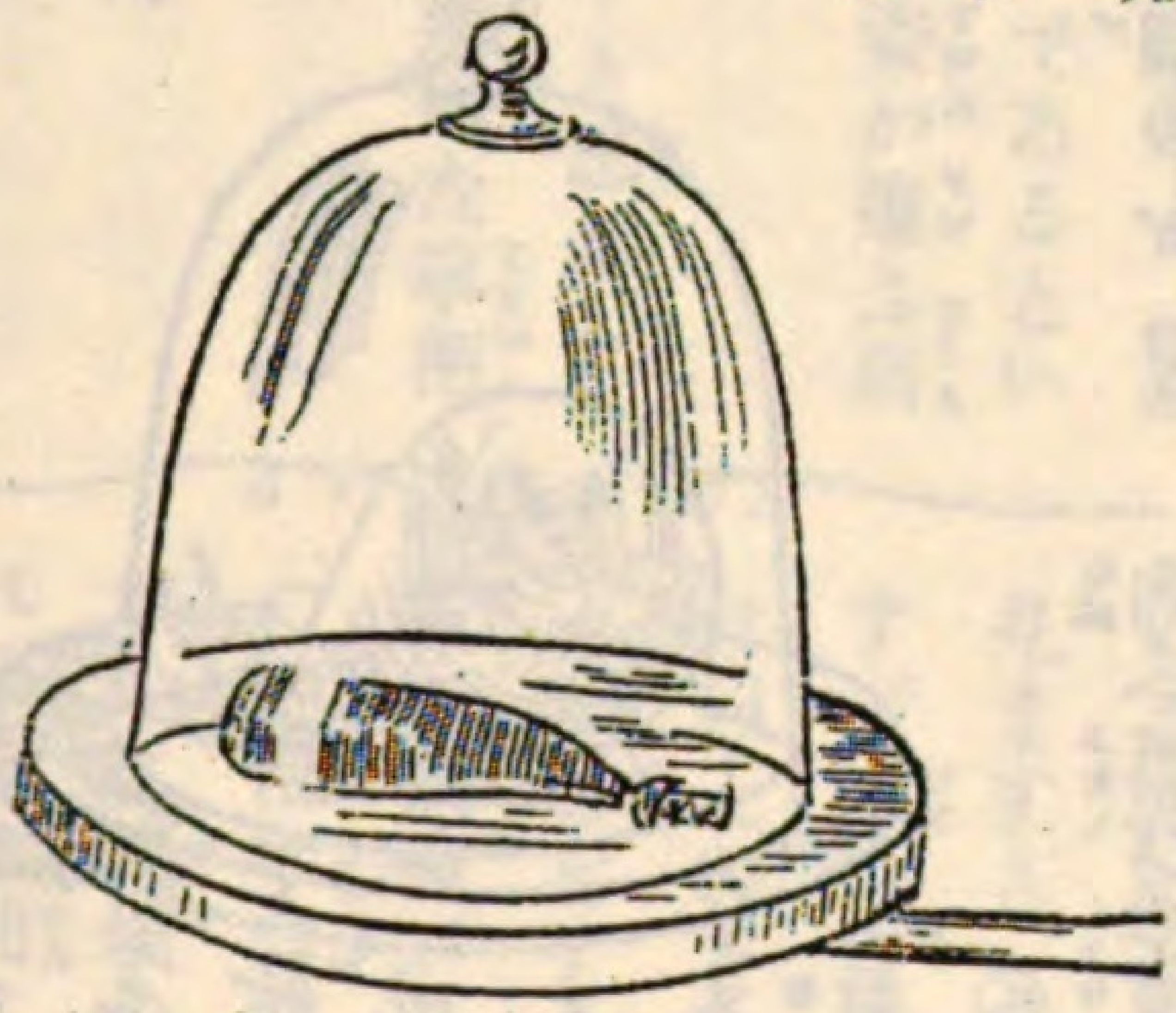
しかし何故通常の所ではふくらまずに、排氣機の内でふくらむか と申しますと、平生は嚢の外にも空氣があつて、外から壓してをりますから、脹らむことが出來ないので、排氣機の内で鐘の中へ空氣がへりますと、嚢の外からは、壓されかたしとか少なくなりますか、そこで嚢の中の空氣は思ふやうに脹らむのであります。このやうに空氣の脹れし力を空氣の張力と申します。

○空氣の壓縮性　空氣の減少して居る鐘の内へ再び空氣を入れましたらば、この嚢はどうなりませうか。そのまゝで居りませうか。そうでなく見てゐるまに、今まで脹れてゐたのが、縮まつて以前の通りの有様に立ちかへります。(圖のやうに)、之は空氣のどういふ性質をあらはすのでありませう。

之はまへと反對に、空氣は壓しちゞめることが出來るものであるとを示すのであります。嚢の外に十分空氣が參りましたから、嚢の中の空氣は其のために壓しちゞめられたのであります。

右の試驗によつて、空氣の二つの性質を知ることが出來ました。即ち空氣は張力があるといふことゝ、また壓されゝば縮まるものであるといふ事とであります。

も、一つ進んで考へることがあります。皆樣、玩具の空氣鐵砲を御存しでありませう。あれはどういふ理由によつて玉が飛ぶのでありませう。あれをやるのには、まづ活塞のついた柄をぬき出しておいて其の筒口にコロップをはめて柄を押し入れます。すると、もと筒の中に一ぱいになつてゐた空氣は活塞のために壓されますが、外に出道がありませんから、どん／＼縮まるわけて、いよ／＼壓されて行きどころがなくなれば、止むを得ず筒口のコロップを押します、其の勢が非常



に強いもてのすから、コロップはつひに飛び出してしまふのであります。

右の鐵砲については、空氣は壓されゝば縮まるといふ事のほかに、今一つわかる事がありませう。其れは空氣は壓し縮められますと脹らまうとする力も亦強くなるといふ事であります。あのコロップは全く壓された空氣が、元のかさにかへらうとする其の力で、押し出されるので、空氣は強く壓されしがおされるほど其の張力は強くなるので、今の鐵砲の筒口をどこへか當てゝ、コロップの容易に出ないやうにしておいて、柄をつよく押し入れて、そうして、手を放して御覽なさい。強く押し入れゝば入れるだけ、其の柄は強くはねかへります。もし空氣にこの性質がなくて、いくら壓されてもたゞ容積の縮むだけのものであつたならば、いくら柄を壓しこんだつて、コロップの飛び出す筈も、柄のはねかへる筈もないのであります。

空氣は壓されると、容積が縮まる。いひかへればせまい場所に澤山押しこむ事ができる。その壓し縮められた空氣は、張力が強いといふ事は、大そう便利な都合のよい事があります。あの水でありますが、人間はその上でこそ、自由自在に船をやつたり、游いだりしますが水の中ではどうもそういふわけに參りません。これといふのも全く人は空氣中に住む動物であるからです。處が空氣の是等の性質を利用すれば水底にでも行くことが出來るので、水中で人が働かうとする處へ、大きな管でもつて、どん〳〵空氣を壓し入れますれば、まへの理によりまして、その空氣はよほど張力が強いから、却てあたりの水を壓して、その管の中へ水を入れさせません。そこで、管の底で人は可なり長い間働くことができます。橋の土臺を据えつけるとか、港を築くとか、破船などして海底に沈んだ品物を引き上げるとかいふ時に、至極便利なことであります。其の他トンネルを掘るとか、鑛物をほるとか、いふ時にでも、大きなかたい岩石を、なか〳〵人力で破壞してゐるわけには參りませんから、壓し縮められた空氣の張力の強い處を利用して、其力で穿孔機といふ、穴をあける機械を押しこませて、岩石をほりこはす所も、あるさうであります。其れからまた進行中に滊車を止めるといふやうな場合にもやはり空氣の張力で齒止を車輪におしあてるのださうです

○空氣の重量　空氣の重さのことであります。空氣は一躰重さがありませうか。ごく輕いものでありますから重さなんか無ささうにも思はれますが。三千三百萬方里も面積があるといふこの地球を、五十里以上の深さにとりまいてゐる程の分量であるといふ事を考へたならば、いくら輕いものでも、なか〳〵の重さがあるだらうといふ事はわかりませう。實際ガラス瓶に空氣を一ぱいにしたものと、空氣を拔き去つたものとを、料つて目方を比べて見ますれば、後の方の瓶が輕いのでもわかります。すでに重さがあれば、ものを壓す力のあるのはあたりまへて、土の方にある空氣は其の下のを壓し、其れはまた其の下のを壓すといふ工合にだんだ

んに下を壓してをります。だから丁度綿を澤山積んでおきますと、上の重さで、下の方にあるのがおしつぶされるやうに、空氣も下へゆくほど壓しちゞめられる即ち濃くなつてをります。

學者の測りましたのによりますと、空氣の地面を壓します力は一寸四方の廣さの處に一貫八百匁をこえる程であります。下の圖は丁度一寸四方の大きさでありますからこの上だけで一貫八百目以上の重さを受けてゐる筈であります。吾々の身軆の全軆もこの割合でもつて壓されてゐますから、身軆の面積を、まあ二千方寸即ち一寸四方のものが二千集まつてゐるとすれば、吾々は一貫八百目の二千倍だけの重さをうけてゐるのであります。それだのに一寸四方の大きさの紙を持つたとて、一向重いとも思ひませんし、また吾々にしてもそんな目方を背負ふて居ながらつぶれ死にもせずに、平氣でゐるのは何故でありませう。



○空氣の壓力　空氣は上からばかり壓すのではなくて下からも左右からも前後からも、均しく壓しますから、一寸四方の紙の上でも、上から一貫八百目の重さで壓せば、下からも其だけで壓すので（下には空氣は無さゝうですが實際はあるのです）丁度平均せられて、ちつとも壓力がないやうに思ふのであります。吾々の身軆も同じく、軆の外がはを空氣の壓してゐるだけの力で軆の中の空氣や液軆が内から壓してゐますから、内と外と平均してやはり壓を感じないのであります。

ですから、もし其の平均をやぶりますれば、始めて其の壓の强大な事を知る事ができます。即ち次々にあるやうな場合であります。

一寸四方の大きさの紙を水に浸して、臺の上にベツタリ、ちつとも隙間のないやうに壓しつけますれば、紙の下の空氣は逃げてしまひますから、そこで紙の中央に糸をつけて、之を引き上げやうとして御覧なさい。氣氣は上からばかり一貫八百目の重さで壓しますから容易にはなれません。之て空氣が上から壓してゐるのが

分ります。蠅などの虫が天井や鏡の上をよく落ちずにあるくと思ひますが、あれは足に吸盤と申すものをもつてゐて、其の下の空氣をなくすやうにしますから壓力の平均を失うて上から許り壓されるから落ちないのであります。

輕氣球にのつて高く空中に昇りますと、上にゆくに從つて空氣はおひ／＼薄くなりますから、外から身躰を壓す力がへつて參ります。然るに人の身躰の中にある氣躰や液躰は、地面にゐた時とかはりませんから、内外の壓力の差が出來て、ために眩暈がしたり、氣を失ふたり、するやうな事がよくあるのであります。

また茶碗で口を掩うて其の中の空氣を吸ひとりますと茶碗が口についてはなれません、之は丁度まへの輕氣球のと反對で、外からばかり空氣の壓力をうけるからであります。

それから又コップに水を充たして、厚い紙でその口を掩ひまして、之を倒にしましても、水の流れ出すことはありません。それも氣空が下から壓してゐるからであります。（紙がないと此の試驗のできない事は別のところで申しませう）

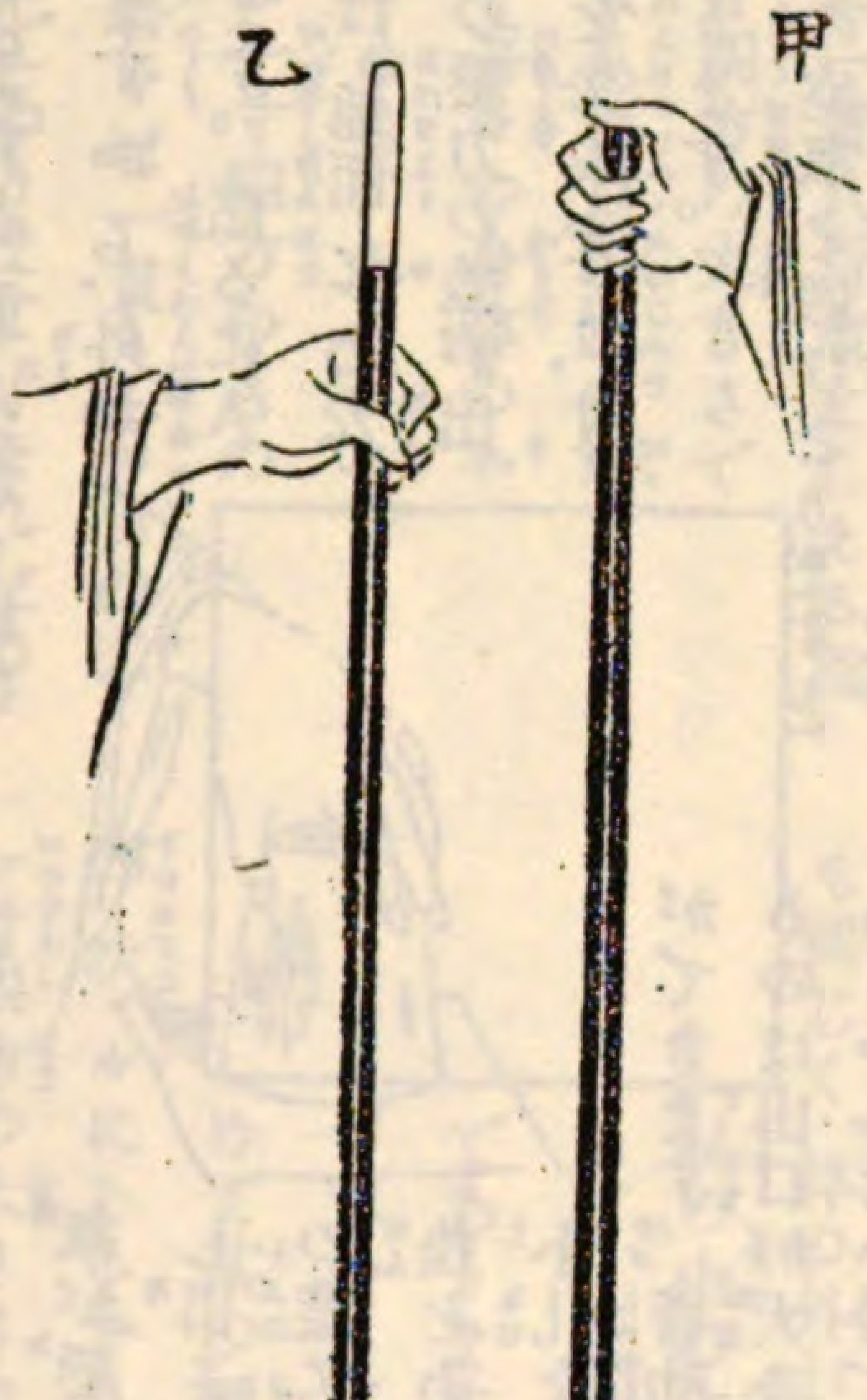


水入の一方の孔を指でふさげば、水入をたてにしても、横にしても、水の出ないのは、無論まへの理と同じ事ですが、指を放すと始めて水の出るのは、一方の孔から空氣が壓して、其がため他の一方より水が押し出されるのであります。之によつて急須の蓋に孔のあいてゐるわけも、また酒樽の栓をあけても一滴も出ない時に、鏡に一寸小孔をあけますとすぐ出るわけて、皆説明ができます。醬油樽などは通常ほかに孔がなくとも出るのは出口が大きくて、空氣の中へ入るだけの場所があるからよいので、ツーと出ないでドックン／＼といふのは、全く空氣が入つては醬油を壓し／＼するからであります。

以上の諸例で、空氣の上下前後に壓力のあることは御分りでありませう。

○晴雨計　空氣の壓力を應用して作つた機械は澤山あ

りますが、まづ空氣の壓力を測る機械のお話をいたしませう。それは晴雨計と申しまして、ごく簡單なものであります。一方のふさがつてゐるガラス管の三尺ほどあるのに、水銀を一ぱい盛りまして、(甲圖)指で其の口をふさいで、倒にして、水銀をいれてある鉢の中に立てゝ、指をはなしますと、管の中の水銀はかならず少し下りまして、鉢の中の水銀の面より測つて二尺五寸程の高さの所に止まります。(乙圖)そうして管の上部にすき間ができます。こゝには空氣も何もないわけですから、こゝを眞空とも申します。



管の中の水銀はどうして少し下がるか、またどうして中途に止まつて、皆鉢の中に下らぬかといふのは不思議の事であります。之が即ち鉢の外の空氣が、鉢の中の水銀の面を壓してゐるからなので。もし外は空氣がなかつたならば、水銀は管の中に止まるわけはないのであります。それから、水銀の高さが凡二尺五寸といふのは二尺五寸の水銀の柱の重さが、丁度、外の空氣の壓す力と均しいといふ事であります。いひかへれば外の空氣の壓す力で、鉢の中の水銀を二尺五寸の高さに押し上げているといふのであります。

晴雨計の構造といふのはこれだけの事でごく普通なのは水銀の入れものと、其れについてゐるガラスの管とが、木の枠の中に入つて、くだのそばに、度をもつたものがついてゐるといふだけであります。

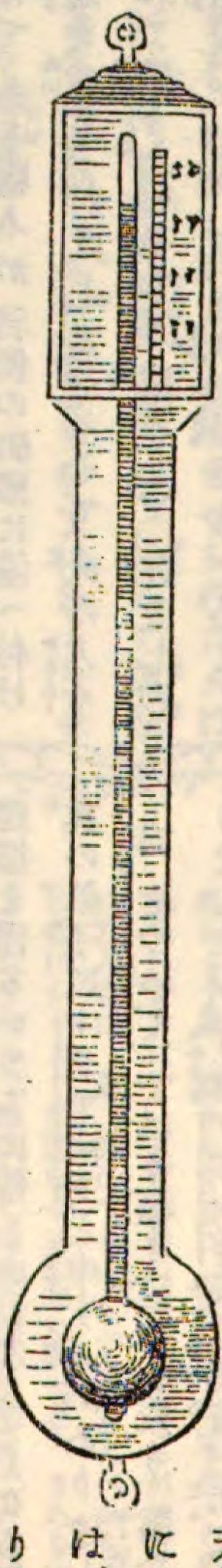
空氣の壓力と、水銀の柱の高さと、平均して二尺五寸の所に水銀が止まつたとすれば、もし空氣の壓力がへるか、增すかすれば、晴雨計の中の水銀柱も、其れとつりあふ爲に、必ず低くなつたり高くなつたりするわけて、

丁度寒暖計の水銀が、温度の上り下りに應じて、上り下りするのと同じ事であります。だから其の水銀柱の高低はよつて、空氣の壓力の多い、少ない、を知る事が出來るのであります。

しかし、どういふ時にか、空氣の壓力に増減があるかと申しますと、それはあるので、時によつてもちがひますし、場所によつてもちがひます。

たとへば、空氣が澤山水氣をふくみますと、其の重さはへるものでありますから、そういふ時には水銀の面を壓す力もへる。從つて水銀柱も下がつて度がひくゝなります。これを低氣壓と申します。其の反對に他の原因によつて通例より空氣が重くなりますと、水銀面を壓す力もふえますから、水銀柱も上つて、度が高くなります、これを高氣壓と申します。

それからまた場所によつて空氣の壓力のちがふのは、たとへば地面では空氣の壓力が水銀柱の高さ二尺五寸に均しくつても、高い山などへ上りますと、空氣は地面に於けるよりも、薄くなりますから、從つて其の壓力も少なく、晴雨計は下がります。



それで、晴雨計の上り下りによりまして、天氣の模樣も多少知る事ができますし、また土地の高低も測かる事が出來ます。

天氣のよしあしにつきましては、これにばかりよれませんが次の事ぐらゐは之によつて知る事ができます。

晴雨計の水銀が上がれば（即高氣壓ならば）好天氣で水銀が下がれば（低氣壓ならば）天氣がわるい。

急に水銀のひどく下がれば、暴風雨の前兆である。

水銀の上り下りが定まらない時は、天氣もさだまらない。

しかし誰がはじめて空氣に壓力があるなんといふ事を

考へたのでありませう。今でこそ誰でも少し學問すれば、その位はぢきに知りますが、昔地球の形もろくに知らず、理學なんて、どんなものとも知らない人の多かつた時分に、これを悟つた人は實にえらい人であります。この發明のお話は面白くもあり、有名でもありますからこゝに一寸申しませう。

今から、まあ、三百年ばかりまへに、イタリーのフローレンスといふ市で、ある職人が君侯の御殿に備へ付けるポンプの製造を命ぜられました。そこで、此の人々はごく念を入れて造り上げまして、試めして、見ました所が、これは如何に。どうしても水が思うところまでのぼりません。即三丈五尺ばかりの高さによりは上らないのです。大きに驚きまして、いろ〳〵吟味をしますけれども、どうも惡いところが分りません。時の學者に尋ねて見ましても、滿足な答をするものがありませんでした。

此の時にあたつて、ガリ、オと申す、其の時分にすでに七十をこえてゐた學者がをりました。この人は當時ことに名のきこえた人でありましたから、この人にといふので、かの職人らは尋ねに參りましたが、やはり分りませんでした。しかし此の先生は其の事が常に心にかゝつて仕樣がない。で、いろ〳〵考へた末に、始めて之は空氣の壓すせいではないかと氣が付きました。そこで空氣の入つてゐる瓶や、空氣を蒸發させたあとの瓶の目方を秤つたりして、試めして見ましたが、其の確な證據を得ないうちに惜しいかな、なくなられました。

其の弟子にトリチエリと申す人がありまして、亡師の志をついで、やはり種々試めしたり、考へたりしてをりましたが、丁度ガリ、オ氏の死後一年ばかりたつた時分に、かういふ事を考へついたのです。それは、もし、先師の考へが正しくて、水が三丈五尺より上らないのが、全く空氣壓力のためであるならば、水のかはりに、水よりも十四倍も重い水銀をつかへば、水よりも十四倍だけ少なくより上る譯であるといふので、試めして見ましたのが、まへにお話した試驗であります。處がチヤンと三丈五尺の十四分の一即二尺五寸だけ水銀

が上つたてはありませんか。
これでもつて、はじめて空氣の壓力があるといふ大發明ができたので、ガリーオ氏及トリチエリ氏の名譽は永く世に傳はつて居るのであります。常の人ならば合點のゆかぬ事がありましても、立ち入つて研究もせず、其のまゝに打ちすぎて仕舞ふのでありますが、さすがは當時にも知られたほどの人々だけに、考へのつけ方がちがうてゐます。むかしから大發明をせられた人は多くありますが、何れも辛苦困難にたへて、始めて出來たので眞理はさうたやすく見付かるものではありません。古人の申した言葉にも

掘りもせずしていかでよき鑛脈に當るべき。よき玉よき石は多くは堅き石地にあるものを

と實に其の通りであります。今までもすでに發明せられた事をよく知つて、尙まだ世にあらはれぬ眞理を尋ね出すのが將來の人々のつくすべき務でありますから、誰でもガリーオ氏やトリチエリ氏のごとく疑があらば其れを打ちすてず。どこまでも其の理を尋ねきはめて分るまではやめないといふ心がけがほしいものだと思ひます。

（未完）

五　堪　忍

五堪忍といふことあり、聖賢の旨趣より出でゝ、世業を爲すの基、人間安穩の大悟にして修身齊家の福機なり、之を守る時は勞する事なく、家富み榮え、是を守らざる時は亡ぶ、衣服は何の爲にか着る、寒さを凌ぎ暑さをいとはんが爲なり、さあれば寒からず着、暑からず着ば、麁服にても厭ふことあるべからず、美服に奢るは、いまだ寒暑の身にしまざるが故なり、寒暑の身にしみなば、縫、裸にてもいとふものあるべからず、食事は何の爲にかする、空腹をやめんがためなり、さあらば、添物はなくてたりなん、添物なくて食の進まざるは、いまだ飢の至らさるなり、飢の至る時は糟糠をだも嫌はず、家は何の爲にか作れる、雨露をいとはんがなり、さあらば、無益の造作などなくてありなん、水火の災に家を失はゞ人の軒端にても厭ふものあるべからず、妻は何の爲にか持てる、子孫を嗣がん爲なり、さあらば子孫あるものは妾などもたであるべし、妻子あるが上に妾を持つは色に溺るゝが故なり、財は何の爲にか求むる、世計の第一、衣食を足らしめんが爲なり、さあらば義をかき、耻をも忘れて、貪り貯ふるにも及ぶまじきことにこそ(柳澤淇園)

技藝

割烹科

女子職業學校にて　高橋章臣述

（一）消化の生理

食物の通ずる管を消化管と稱す、消化管は口に始まり口の奥は咽喉にして其次は食道となり食道は胃に通じて胃より小腸となり、小腸の次は大腸にて其の末端が肛門なり、其の全長は凡そ三丈に近し。

◎口腔

口腔の中

（イ）脣　は談話をなすに必要なり、又脣は頬と共に働いて食物を齒の外に出さざるやう咀嚼する時の用にも成る。

（ロ）唾液　は顎下腺（顎の下に在り）舌下腺（舌の下に在り）耳下腺（耳の前下方に在り）の三腺より分泌する液にして無味無臭、無色の液なるのみならず少し粘滑のあるものにて泡立つ、唾液は常に口中に在つて之を濕すものなるが、食事の時食物を想ふ時又は香氣等によつて多量に分泌せらるゝものなり、まづ其唾液の効用を述ぶれば大凡左の如し。

乾燥したる食物を濕す、例へば麵包、煎餅、等を食する時に、唾液は多く出でゝ之を濕す、若し唾液のなき時には嚥下に甚だ難澁なり。

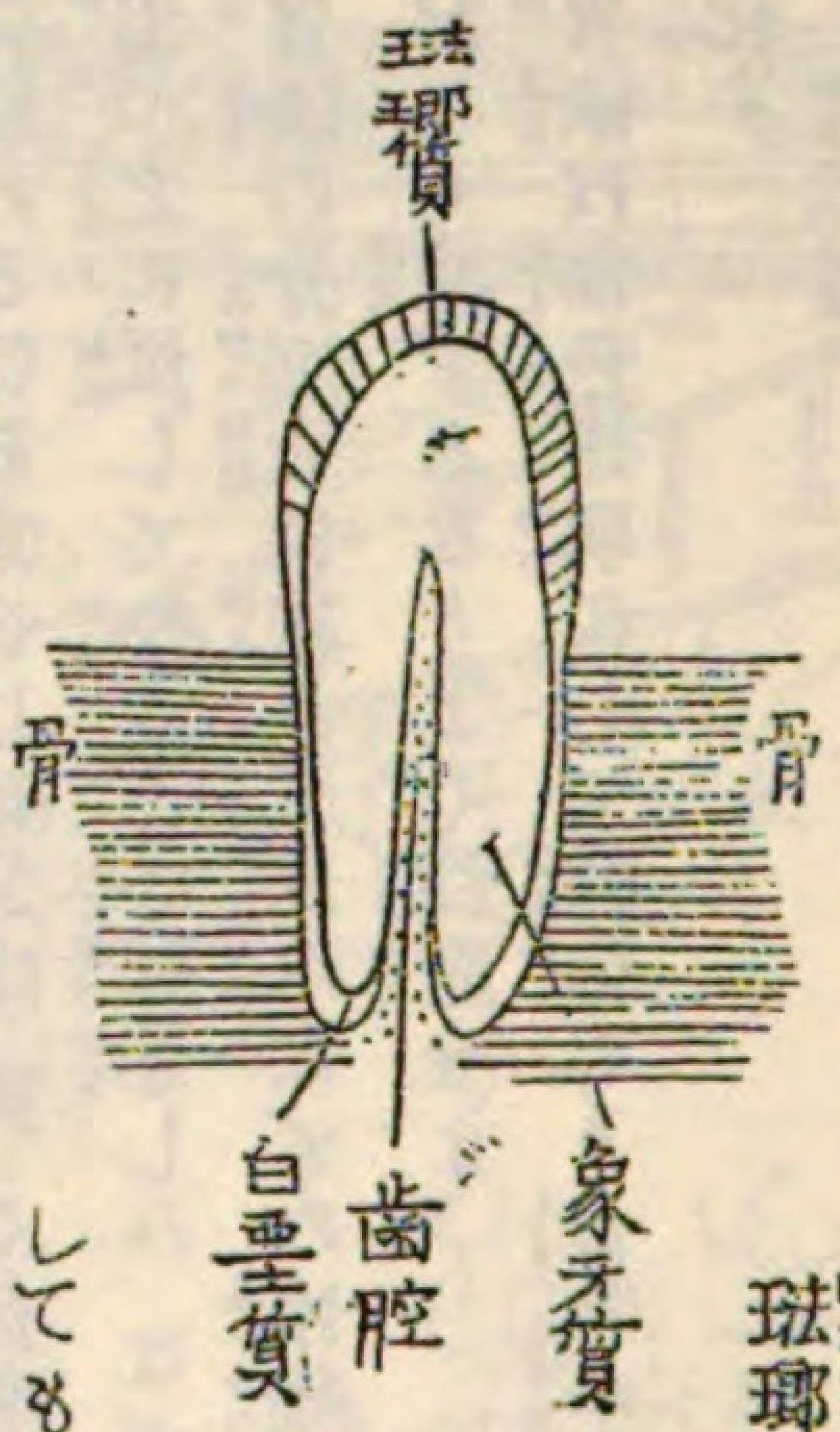
次に口中を濕ほして舌を自由に働かせる、口内の乾く時は談話を爲すに困難なり、次に澱粉を消化して砂糖に變化せしむ、是は大切なる働きにてあるゆへ口内にて食物と唾液とをよく混合せしむるを要す。

（ハ）舌　其れより其の次は舌なり、舌は全く肉より成り其働をいへば食物を齒の間に送り又其水を咽喉の方に送るのみならず、又味を感ずる役目を司るなり。

（ニ）齒　次に齒は上下の兩方の顎に生じ之を被ふ肉を齒齦と稱す、齒は生後七ケ月頃より生へ始めて二十

枚に至る之を乳歯と言ふ乳歯は七八歳にて脱落し新歯之に代る之を成歯と言ふ、成歯は三十二枚なり。

歯の組立は左の如し但し歯を縦に割りて示す。



琺瑯質は骨より硬いもので陶器のやうな光あり、此の物の爲めに歯が硬き物を咀嚼しても容易に磨滅せざるなり、併し此の物は破れることあり、而して一度破るゝ時は一生治することなし。

象牙質は骨のほど硬し併し容易に腐れ易し白堊質は歯根を顎骨中につるものなり。

歯腔とは歯の空洞にして其中に歯髄あり歯髄には血管及び神經を含む故に歯痛は此處より起るものにして血の出るも此處より出づるなり。

◎養生法

歯は食物を咀嚼して消化を助け味を感ぜしめ又談話を明瞭ならしめ顔容を正しからしむるものにて大切のものなれば之を健全に保たざるべからず、歯の悪しき人は多く腸胃の病に罹り長命するもの少し、故に次の養生法を守るべし。

毎朝必す洗ふべし

歯間に食物のハマリたる時は木又は象牙の如きものにて之を取去るべし、食後茶を以て口を嗽ぐとは大によし試みよ

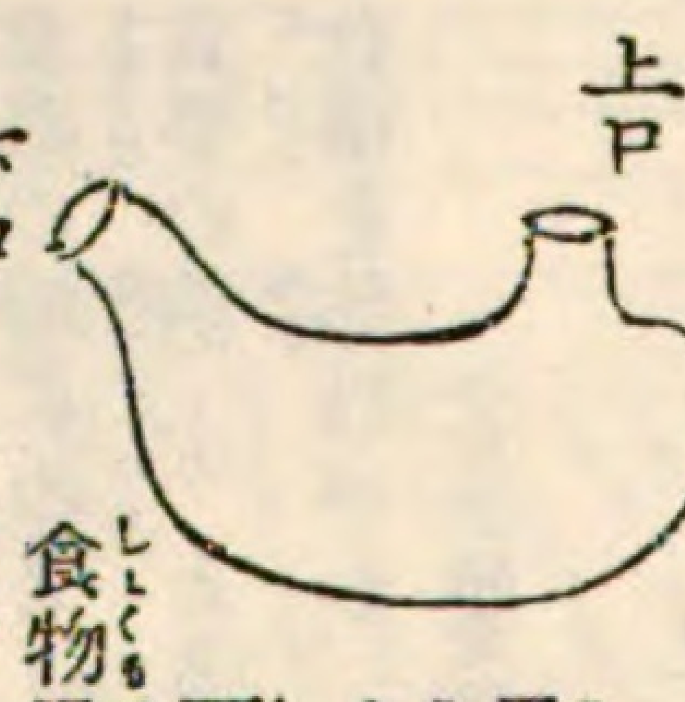
甚だ熱きもの又甚だ冷かなものを食す可からず

琺瑯質に疵の出來たる時は速に醫に請ふて之を塞ぐべし否らざれば歯の內部まで腐る

歯痛を永久に止むるの藥はなし

◎胃

胃の形は次の如し



上口は食道に通ず

下口は腸に通ず

食物胃の中に入れば胃は上下二口を閉ぢて食物の外に出でざる樣にして働を始める

其働は恰も手を以て物をもむが如くに食物をもみ碎くなり其間に胃液と云ふもの分泌されて食物に混合し粥の如き物となる消化のよき食物は一時間位にして終り又消化の悪しき物にても三四時間も過れば終る故に食後三四時間を經てば胃は空となるべし。

胃液は常に分泌さるゝものにあらずして食物の胃中に在る時にのみ分泌さるゝなり胃の內面は空なる時は灰白色なれども食物入る時は血が注ぎて紅色となり汗の出る如くに胃液が胃の內面より分泌さる、殊に好める物を食せし時又は快く食事せし時に多く出づ之に反して怒ると心配悲しみ、などのある時は胃液の分泌大に減じ又氷水などの冷物の爲めにも甚だしく減ずるなりよく注意せよ。

胃液は無色透明にして酸味あり食物中の蛋白質を消化す

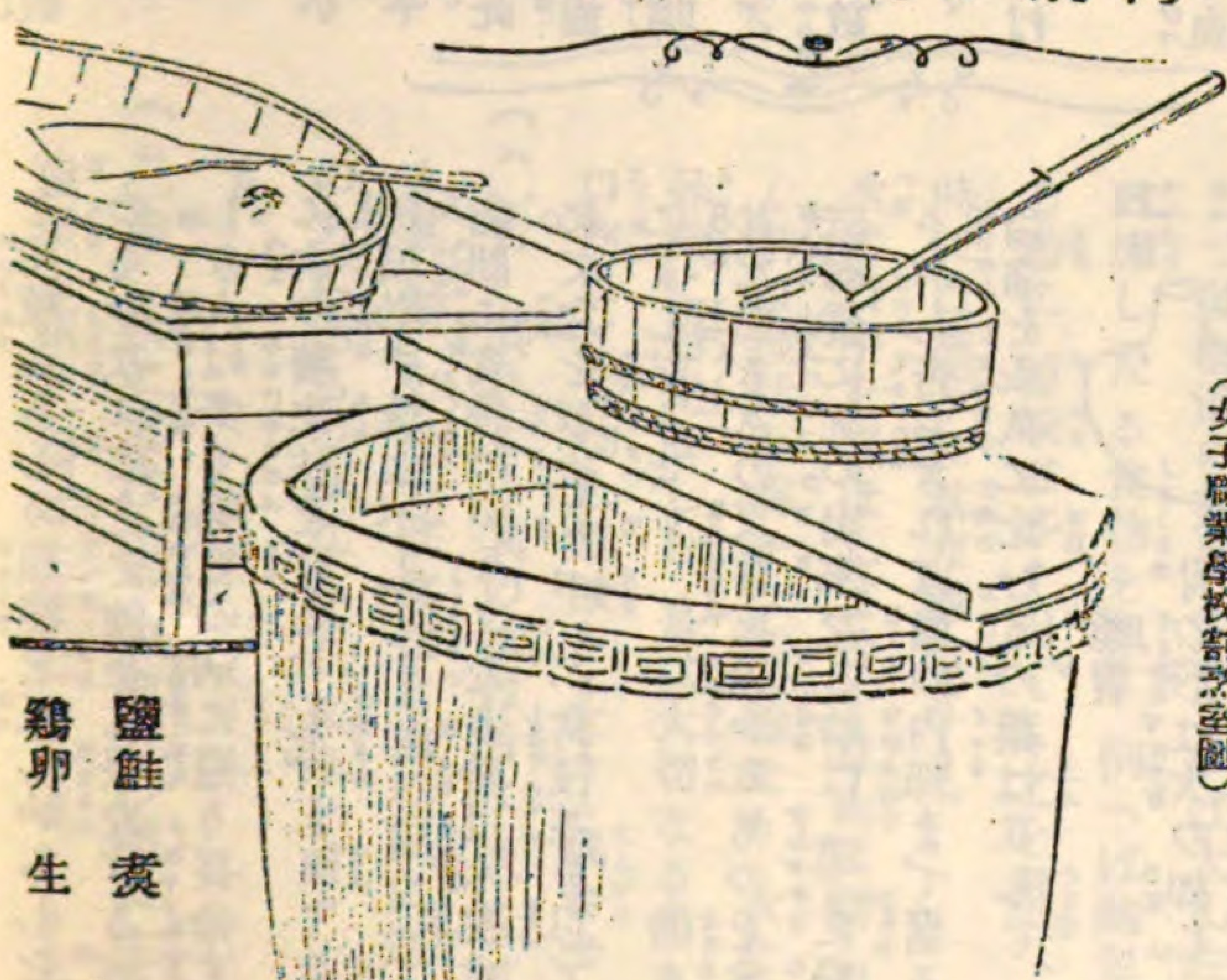
◎養生法

齒にてよく咀嚼し置ば胃を無益に疲れしむると少し

食事は時を定むべし胃を空にして一時間乃至三時間の休みを與ふべし間食は大に害あり、

食事の時にあまり多く液類を取るべからず、

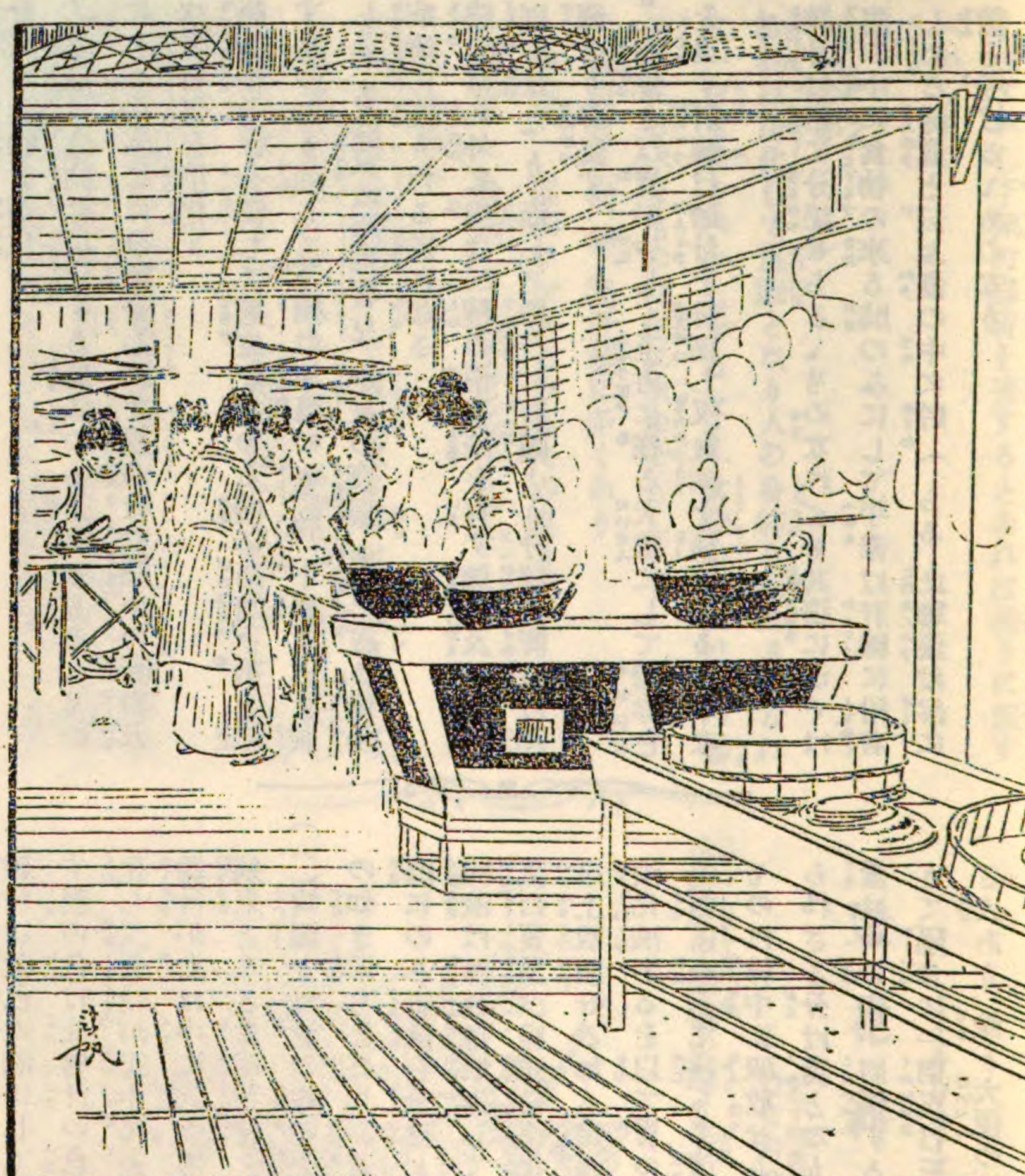
食事の前少くとも三十分食事の後少くとも一時間は仕事を休むべし、



(女子職業學校割烹室圖)

胃の中にて消化する時間は食物によりて異る例へば左の如し、

家猪羮	一時間
鮭羮	一、半
鹽鮭羮	四、
鷄卵生	二、



鶏卵	熟煮	三、半
牛乳	煮	二、
牛乳	生	二、十五分
牛肉	焼	三、
牛肉	油煎	四、

胃の中にて全く消化するものは蛋白質のみにて其他のものは消化せざる故に此等のものは粥の如きものとなりて腸の方に行く而して消化したる蛋白質は胃より吸ひ取られて血の中に入る。

◉腸

腸は胃の次より始まりて肛門に至り其長さ凡そ身長に四五倍す之を分ちて小腸と大腸となす。

小腸より腸液と云ふ消化液を

分泌し食物を消化す
（イ）膓液は食物を消化する時にのみ分泌せらるゝものにして平素には分泌せられず膓液は食物中の澱粉及び蛋白質を消化す
膓液多量に分泌して適度を越ゆる時に所謂下痢を起すものなり而して下痢は不良の食物、下劑などを服したる時又は膓加答兒、全身の衰弱、感冒、或る傳染病等に罹りたる時に起る、
膓には此外に尚ほ二種の消化液を有す膽汁及び膵液則ち是なり、而して膽汁は肝臟より分泌し膵液は膵臟より分泌す
（ロ）肝臟とは胃の少しく上方に在る大腺にして帶赤色を呈す肝臟は膽汁を分泌し又血液を淸くするものなり
膽汁は常に分泌せらるゝものなれども其膓に注ぐは膓の中に食物の來る時のみにして平素は肝臟に附着しある膽囊と云ふ囊の中に貯へらる、此膽囊は俗に膽と呼ばるゝものなり、
膽汁は黃色の液にして苦味を有し麝香の如き苦を有す糞の色は此膽汁の色なり、膽汁は食物の脂肪を消化し又食物が膓中にありて腐敗することを防ぐ
膽汁が血中に入りて全身に循る時は黃疸と稱する病氣となる皮膚黃色を帶び眼の結膜も黃色を帶ぶ
（ハ）膵臟とは胃の左の下方に位するものにして牛の舌の如き形ちを有し赤黃色を帶ぶ膓の中に食物の來る時にのみ膵液を分泌して之を膓に注ぐ
膵液は無色透明にして鹹味を有す而して食物の澱粉蛋白質及び脂肪を消化す
以上說明せる如く膓の中には膓液膽汁及膵臟液の消化液あるを以て胃の中にて消化せざりし食物は膓の中に來りて殘らず消化せられ其の養分となるべきものは躰中に吸收せられて血液の成分となり消化せられざる分は糞となりて出づ
糞は一日に一回便するを宜しとす、然れども人によりて隔日に一回又は三日或は一週間に一回位便する人あり、餘り大便の結する人は灌膓をなして之

を通ずべし下剤は腸胃を害するとあれば漫りに服すべからず

附

食物の事

食物は消化して血液となり人の身体を養ふものなれば一日も缺くべからざるなり、食物の内には人の養分となるべきものは主に次のごとし

蛋白質　肉、卵、乳汁等に多くあり

脂肪　俗にアブラといふものなり

澱粉　穀物、イモ類等に多くあり

水、鹽類等

飲料水は無色透明にして臭氣なく味は爽快にして少しも他味を交へず、久しく置くも變らず夏は冷にして冬は煖なるべし、食物は品々を混ずべし（献立のこと）

一種の食物にて右の養分を割合よく含むものは乳汁の外には之なきを以て、永く同じ食物のみを食する時は養分に過不及を生ず故に諸品を取交へて食すべし

造花科

女子職業學校造花科教員　伏見藤三郎君述

次は庚申薔薇の造り方を申上げます、此薔薇は何れに

蘇鐵

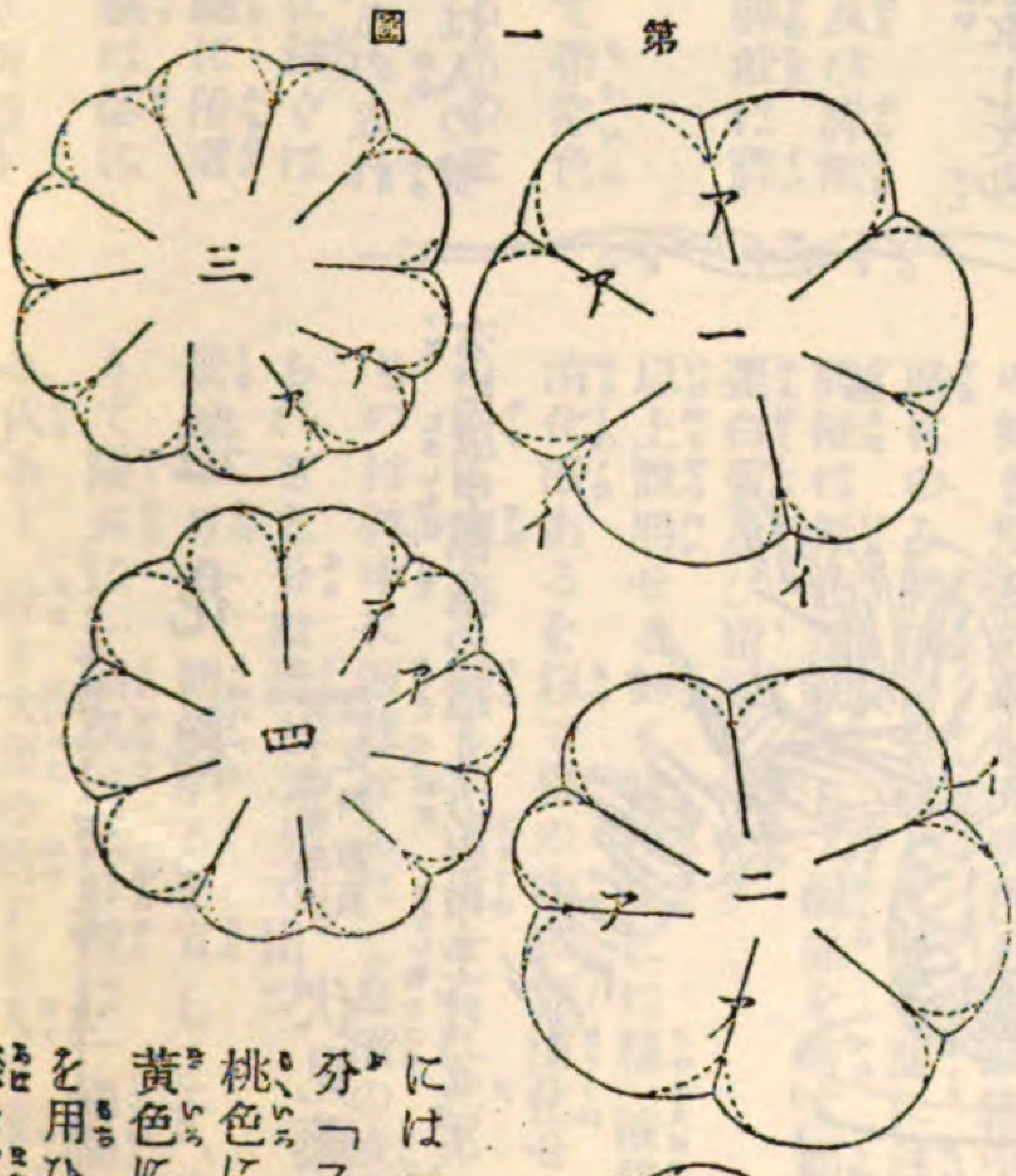


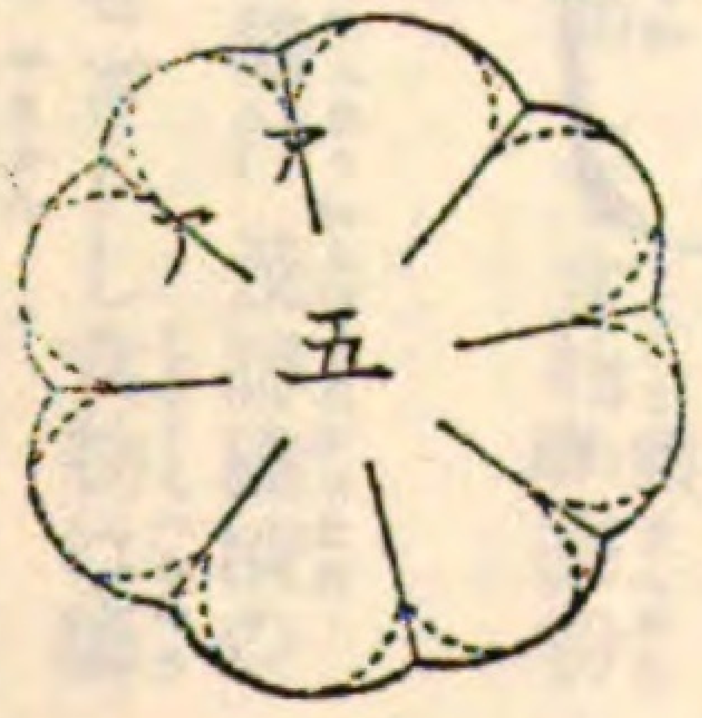
職業學校生徒製品

も御座りますもので、四季共に花が咲き其色も赤、桃色白、白茶、黃などいろ〳〵御座ります、先づ其花を造ろうと思ひますれば、其滿開致しました花をとり、委しく天然の組立を見て置きまして、夫れから花瓣の內部からだん〳〵と外部へ大小取り交ぜ凡四五枚ぬきとり、それを厚紙に張り付けまして其形をきりとります、之れて瓣の形がとれましたから、之を寒冷紗で其形の通りに、大小の種類を皆二枚づゝ裁ち切ります。

此花瓣の染方に付て先白茶色に染めます事をお話致しましやう、二ッの器をとり出し一つには熱き湯を入れ「レモンエルロー」を解し置き、又一つには全じく熱き湯で「ヨーシン」を極少しく解かし置きまして、前に切り置きました瓣（此瓣は染める前に其中心を角として六ッ程に折つて置かなければなりませぬ）を「ピンセット」て持ち、初めに「レモンエルロー」の中に浸け指先で輕くしぼり、次に其の中心の方を「ヨーシン」の中に入れ、凡そ中程まで染めまして極立たない樣に指先でよくしぼり、「ピンセット」で前のたゝみましたものを輕くひろげて乾かすので御座ります、斯樣に致しますれば、白茶色がほんのりと致し見へよく染まるので御座ります、其他赤に染めますには「スカレット」七分「フロクシン」三分桃色には「ローダミン」黃色には「ヲウラミン」を用ひます、色の濃き淡き又ぼかし樣などは

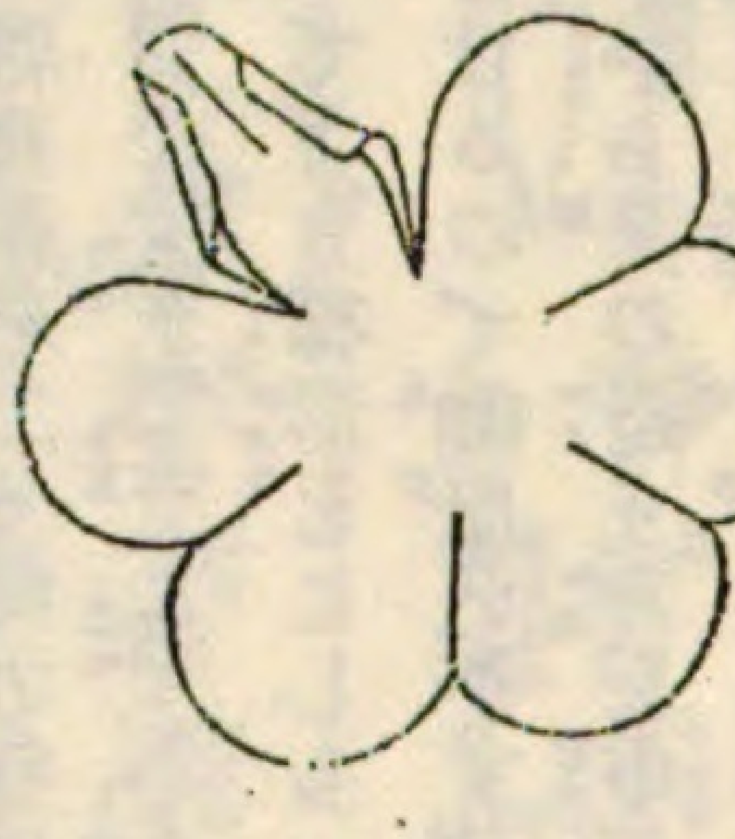
第一圖





よろしく天然のものを手本として加減致さなければなりませぬ。
扨又花瓣のまとめ方を申し上ますが、第一圖は實物の大さの瓣で御座ります、前に申上ましたやうにして色を付け、乾きました處で、一圖の(ア)の線のやうに瓣の外圍から切込を入れ、又(イ)のやうに角を落し(點線で書て御座ります通り)そこで筋鏝を焼き置き布の片を(通例手拭にて間に合ひます)疊みましたる上に、其瓣を上せ瓣の兩側から、其鏝の尖にて第二圖のやうに巻き返します、夫れから其瓣を裏返しにいたし、各の瓣の尖から中心の方へ筋を引きます、かやう致しましたものを、大きな瓣から二枚づゝ皆互ひに違ひに重ね、(此瓣を重ねる時には一枚々々にひめのりを付なければなりませぬ)眞中は錐にて穴を明け鐵の針金を通します、尚また此瓣がさがりませぬやう一まわり計り其針金をよじり堅くとめます、又蕊を入れますには最初にそれを造り置かなければなりませぬ、其造り方はカタン糸に糊をつけ、其乾きて固くなりましたものを、長さ大凡五分程にきりまして米の粉を湯にてよくねり、「ヲウラミン」で黄色に染め前のカタン糸の尖に付けます、之を花の大小に應じて大抵二三十本ばかりをカマ糸で堅く括り、前の針金の尖に結び付け置くので御座ります、之れにて花の造り方が終ります。

第二圖



次に萼を付けます、萼の上の方は葉の色と同じで御座りますゆへ、葉を染るのと同じ染方で色を出しまして、第三圖の「甲」のやうな形を切り、其下の方を「中の瓣鏝」にて丸みを付け、一つの花に五枚づゝ付けます、夫れから其下に「乙」のやうな萼(此萼は造花材料販賣店に御座ります)を通して全く開きの花が出來上ります。

第三圖



半開の造り方は開の瓣の内大きいものを、二枚切り込みを少し餘計に入れ、丸鏝にて瓣を丸くし、筋鏝で瓣の兩側を少し返します、又別に綿を程よき大さに丸く致

し、針金で其下を結びましたものをとり、前の瓣の中心に穴を明けまして其針金の下から通し、互ひ違ひに重ね付け（糊を付けながら）夫れから蕚を付けます、夫れは開きのときと少しも違ひは御座りませぬ。

蕾は雁皮紙を二寸四方程に切りまして、之れに綿を入れ、四つに疊み尖を細く下の方の丸くなる樣「ピンセット」でよき樣形をこしらへ、細き針金で前のやうな蕚を付けるので御座います。

夫れから葉の造り方を申ますが、之は如何なる葉にも應用する事が出來るもので、濃淡は其實物を手本と致して、加減致しましたら宜しいので御座ります、先熱き湯に「マセンダ」二分「チウラミン」四分「グリーン」四分の割合で、三種の繪具をよくとかし、後色どめの爲明礬を少し入れ、其内に寒冷紗（厚き葉のときは「キヤラコ」にてよろし）を入れ、よくしみたる後之を取り出し、竹しんしに張つて乾かします、乾きますれば尚又熱き湯の中へ「セルリン」七分「レモンエルロー」三分の割合で解かし、其の少し冷えました時刷毛で片面即ち表の方からそれをしきます、左樣致しますれば、表葉は濃く裏葉は少し薄く、實物のやうな色合に出來上るので御座ります。

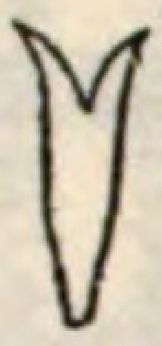
かやうの染方で出來上りますが、もし葉の色黒ろみがゝりました色であれば、「マセンダ」を右の割合よりも多く入れ、色のさゑました葉なれば、少量に用ひます樣に氣を付けなければなりませぬ。

かやうに染上げました上實物の葉を大中小三枚とりまして、前の花の形をとりました時と同じ樣に、先厚紙に張り付け形をきりとり置き、それに葉の柄を葉の裏の眞中は糊で堅く付けます、其葉柄を造りますには、眞鍮の針金を薄美濃の青紙（葉と同じ染方で染めました紙で御座ります）を一分位に切りましたものを卷き付けましたもので、それを葉の長さに應じ、二寸なり三寸なりに切つて葉へ付けるので御座ります、夫れから後「筋鏝」で表から葉の筋を付け「中の瓣鏝」で裏から輕く筋の間をおしあてまして後蠟をしき光澤を出すので御座ります。

光澤を出します、此蠟とは「パラピン」に「ニス」を入れ、能く沸騰させましたもので、是れを葉にしきますには、葉の柄を持ちまして、其沸騰致し居ります中へ一寸入れ出して、筒形の器の内に差し入れよくふり廻し、蠟の處々にかたまらぬやうしなければなりませぬ。

右のやうに出來ましたなら、大の分から五枚又は三枚づゝにまとめ、下の方に托葉をつけます、托葉け青紙で切りまして尖の方を「マセンダ」でぼかしましたもので御座りまして、第四圖のやうな形で御座ります。

第四圖



花と葉が皆出來上りますれば、實物にならひ青紙で隨意の大さにまとめるので御座ります。

此次は小菊の造り方を御話致します、先寒冷紗を「チウラミン」を濃くとかしました汁で染めをき、又別に眞鍮の針金を二分程に切りました青紙で巻きましたのを、三寸程に切り一方の尖を少しくまげて、花瓣の中心を通す用意をしておきます、夫れから布が乾きましたから、第五圖の一、二、三、四のやうに形をとりまして、

第五圖



其圖の中に御座ります點線の通りに、花瓣の外圍から中心の方へ鋏を入れ、そして重ねた布片の上に置きまして、「一筋の鏝」を一瓣づゝあてゝ、瓣の筋をつけます夫が終りますれば、各の瓣を二枚づゝ大より小と、だん〳〵に互ひ違ひに重ねまして、中心を錐にて穴をあけ、前に青紙をまきてこしらへて置きました針金の頭に糊をつけて、ずつと通しよく留めるので御座ります、次に香ひを入れます事を申しますが、此香ひは黄色の木綿糸を直徑二分位の細さに堅く捲き、少し糊をつけてとめて置、横に一分位に切り其切口の一方に糊をかたく付け、「ピンセット」で狹み花の中心へ入れ、左の親指にて押へて落ち付きます樣に致します、夫れから後に、靜かに前の紙をとりのけるので御座ります。

第六圖



半開の蕊即香ひを造りますには、開きと同じ糸と細き針金てくゝり、第六圖のやうに致します、夫から之れに瓣を付けるので御座ります、最初に瓣を四つにきり離し、夫れ〳〵饅をあて置、小より段々と大を付けます、又瓣の下らない樣に氣をつけ、大凡十二三枚も付ければよろしう御座ります、極小の半開を作りますには、大な瓣を用ゆるには及びませんで、饅をあてます時にも可成丸みを多く持たせ香ひの餘り餘計見へませぬ樣注意しなければなりませぬ。

蕾に糊をうすく解し置き、針金を二寸五分程にきりました尖に糊を付け、夫れに綿をまき實物のやうな形に固め、「チウラミン」六分「グリーン」四分を湯にとかしまして染めるので御座ります。

第七圖



イ　ロ

うてな

又萼の付け方を申しますが、先開きに付けやうと思ひますと花瓣四通りの内極小な形を青紙て切り、「ブローン」を湯て少し解しまして、第七圖のやうに其周圍をぼかし染に致し後、それを瓣と同じやうに切込み入れ、眞中に穴をあけ、花瓣の裏に張付けるので御座ります　半開の萼はこれを四つに切り、瓣から大凡一分半程下げて付けます、又しまいにもう少し小さな同じ形の（ロ）のやうなのを一枚はめ込みます。

第八圖



中　大　小

葉の染方は前に申しました薔薇の葉と同じ樣で、第八圖のやうに大中小三色の形をとり、青紙をまきました針金を、葉の長さより一二寸長く切り、い、ばらの葉と同じやうに裏に糊て堅く付け「ピンセット」の尖で細く眞中の筋をとり、又圖のやうに「筋饅」て表から横筋をつけ、又裏返しに致しまして、前の筋のきへませぬ樣、筋の間に「小の瓣饅」をあてるので御座ります、夫れから蠟をひきまして光澤を出しま

したり、又まとめましたり致します事は、皆薔薇の時に申しました通りで御座ります、之れて小菊の造り方はおしまいて御座ります。

（つゞき）

裁縫科

女子職業學校
裁縫科教員　金子銅子述

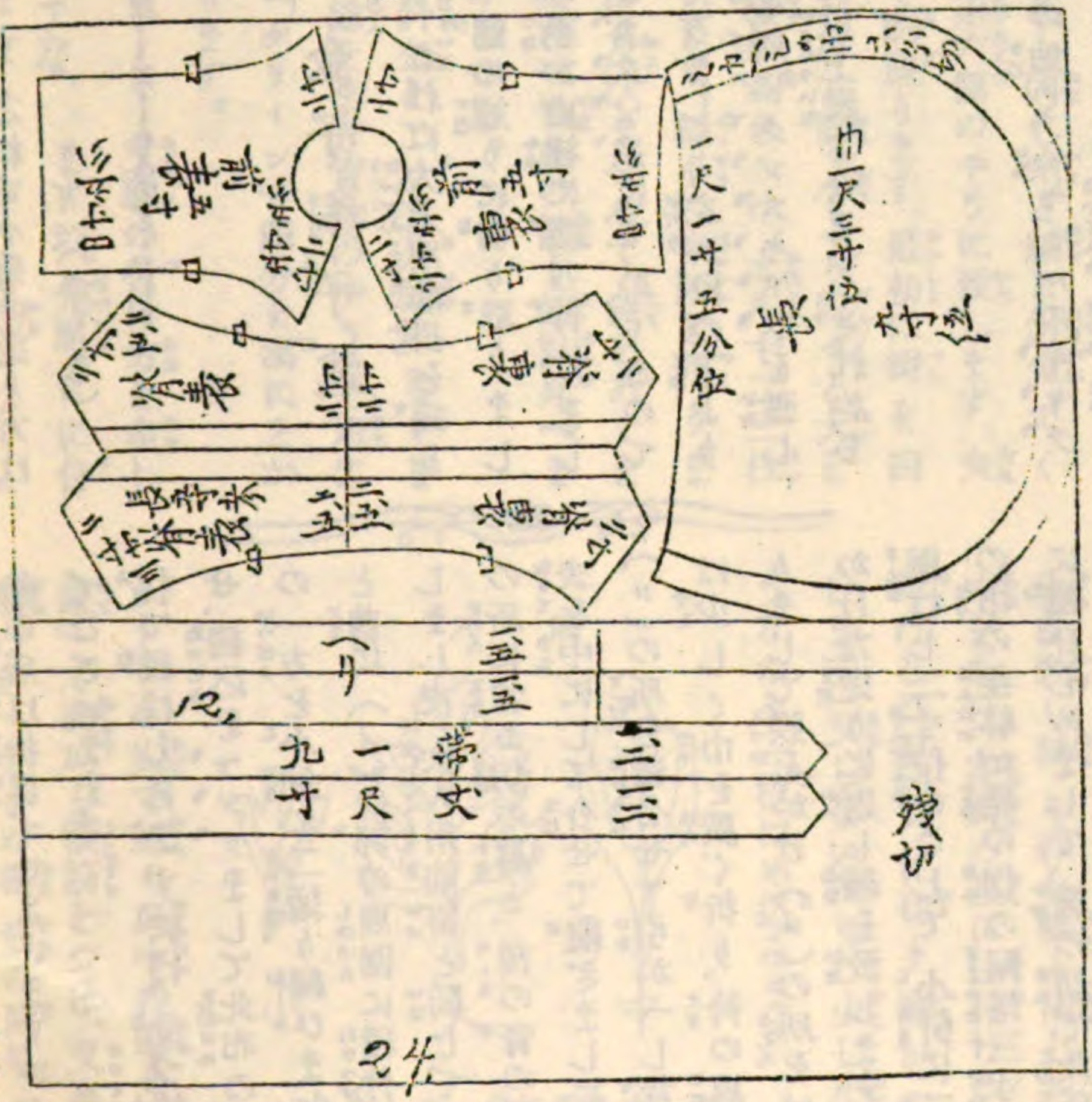
次は穴かゞりを致させます、これは大人用前掛を裁ちました殘切がありますから、圖の通りに切り取りまして三枚に折り、其周圍を布の動かぬ様に綴ぢ付けまして、鑿にて穴をあけ三十番のカタン糸にてかゞるのでござります、先穴をたてに持ちまして、左がはの下より始めて順次に一回して、終の所にタンヌキドメを致します、それで此練習を三十個以上致させます、それから次が

◎西洋形小兒前掛

てございます、先づ裁方は圖の如く、一ヤールのキヤラコより諸部分を裁ちます、これは四五才位の小兒用のてございます、一寸御注意に申して置ますが、圖中の點線の所は折目てございますから、こゝは殘して裁つのてございます。

扨て縫はしめますには、先づ緣になるべき布を繼ぎ合せ、縫込をマツリまして此布の一方のへりをマツリ、他の一方を小針に二通り縫ひまして縫しめ見かへしの切と共に、（イ）の部の周圍に縫付ること とは前に御話し致しました大人用前掛と同じてござります、次に前の胸の所に當る切の肩と、後の背の所にあたる切の肩とを、表を中にして合せて繼ぎまして縫込を割り、それより（ロ）の所を縫合せて引かへし背の巾をきめ、しだまへは少しく巾を廣く折り、衿の周圍の所も縫込を中に折りまして躾をかけ、（ロ）の所をはじめ殘らずミシンをかけた通りに返し縫を致します、次に（イ）の上の部を兩はし二寸位のこして、小針に二通り縫ひまして、此所の巾の全躰が帶の切の兩端三寸五分か、四寸位殘る位に縫ひしめまして、帶の切で此所をはさみて縫ひ付けます、それから帶の兩はし只今三寸五分か四寸殘して

揚ました所に、後の背の切をつけ、(イ)の部を縫ひつけてある帶の上には、前の胸の所にわたる切を付けます、此前の切と後の切とを付けますには、いづれも帶の表の方につけて置きまして、帶の裏の切は巾をそろへて綴ぢ付けます、次は帶の上まへの端を劍尖の樣に、下まへはなみに綴ぢて置きまして、帶の上下兩端皆ミシンの通りに返し縫ひにいたします、次は背の上まへの一番上の所と帶と其中央とに、穴をあけて穴カヾリを致しまして下まへにボタンをつけ



第一圖

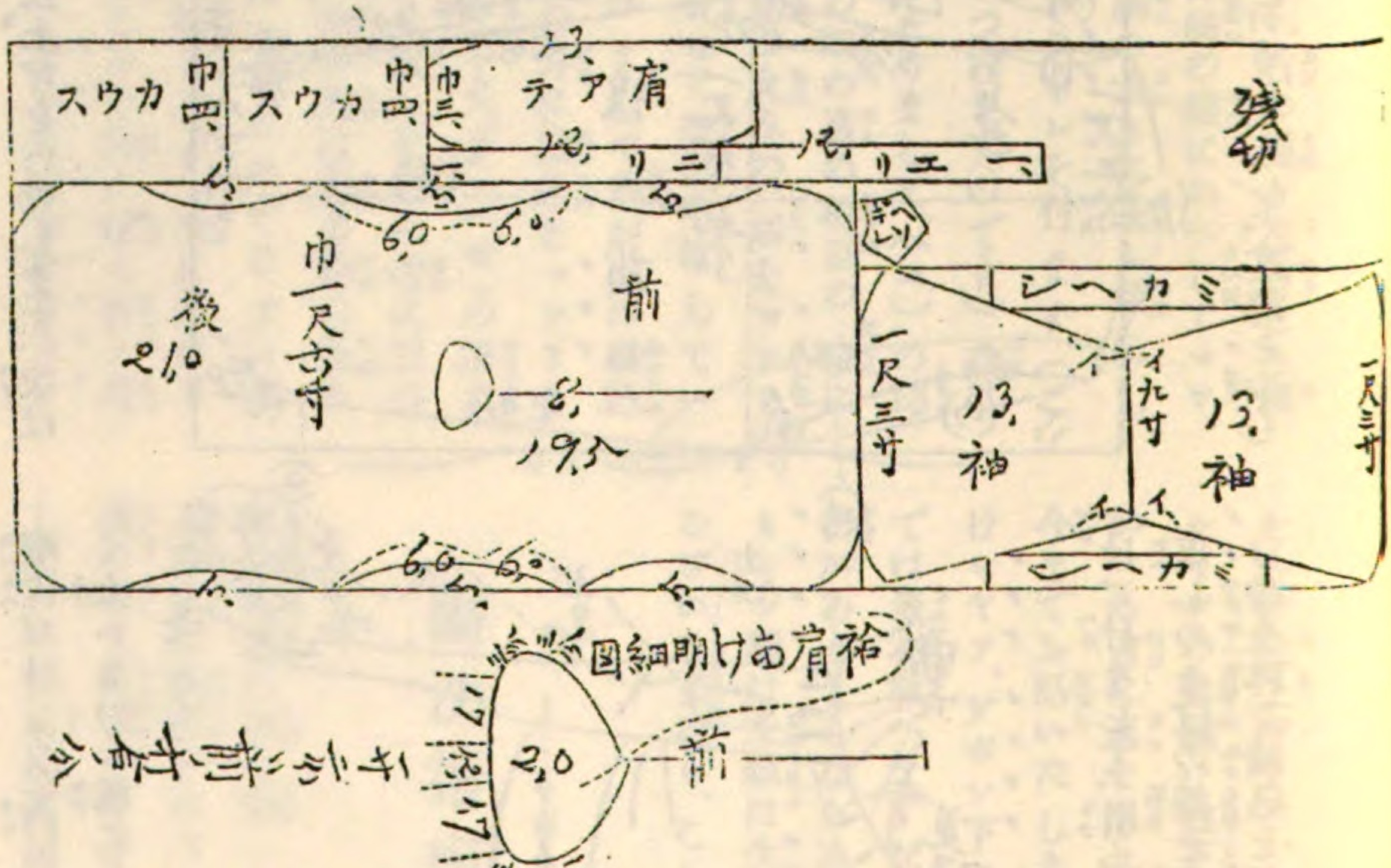
きりを吹き、アイロンをかけて仕上るのでございます。これで小兒前掛は出來上りました、さて次には

◎シヤツ

を致へます、先づなみは巾二尺長さ六尺六寸餘の切がいります、裁方はこゝに揭げた圖に付て御承知下さいまし裁方は始めに袖をとりまして、袖口より二寸位(イ)の所を三つ折にいたしまして、マツリ袖口を ギヤダ(小針にて縫ひしめる)かもしくはヒダに致しまして、六寸位につめて、カフスの兩端を縫シロだけ殘

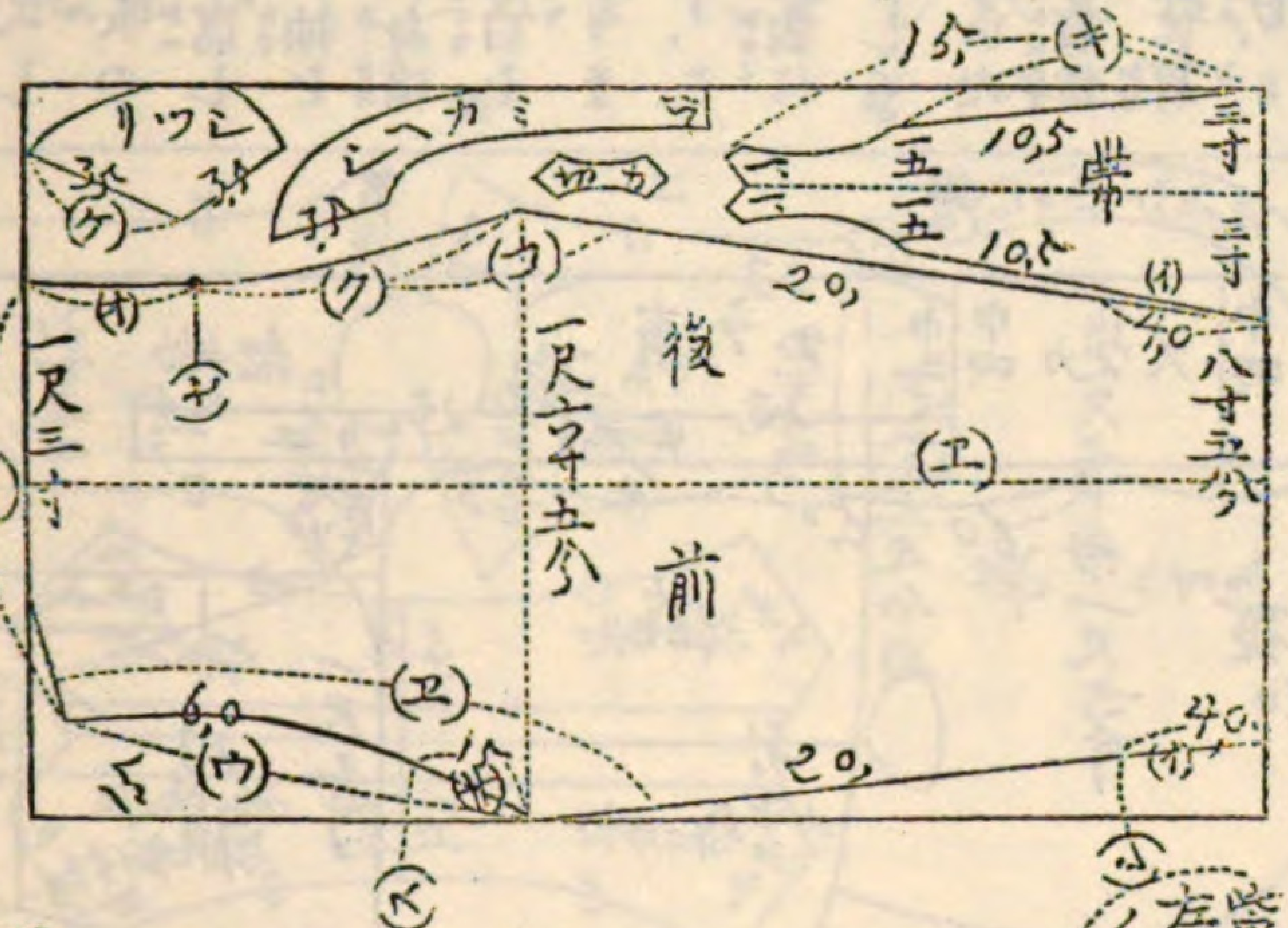
して袖口の表に縫ひ付けまして、カフスの巾を二つ折にして両端を縫ひ引かへして、裏を絎て後にカフスの周回にミシン縫の様に返し縫を致します、左右の袖を縫ひ終りまして、次に身頃をとりまして、先づ裾口を三つ折にしましてマツりまして見返しをつけます、これに右の方は裏に左は表にかり縫にて付けて置ましてミシンの様に返し縫をいたします、次に肩の所を肩當の切だけに縮め、其上に肩當の切をのせ躾をかけ、ミシンの如く返し縫し、次にへそ切をつけます、矢張返し縫にてつけます、それより袖を付け縫込を身頃の方に返してマツりまして、袖下より馬乗の所まで脇をぬひ縫込を後にかへしマツります、次に衿を付けます衿は衿山（衿の上のふち）を縫ひ表の方に縫ひつけ、裏をマツり衿の周回にミシンの様に返し縫をします、次に袖に一つ或は二つ、衿に一つ見返しに三つ若くは四つ穴をあけて、穴かゞりを致します、此穴をあけるときに注意することは見返しの所だけはたてにあけますのでございます、終に左右の馬乗と左右の袖下の縫始めの所に、カンヌキドメをいたします、後

第二圖



きりをふきアイロンをかけ、仕上げをいたします、次は㊥ツボン下

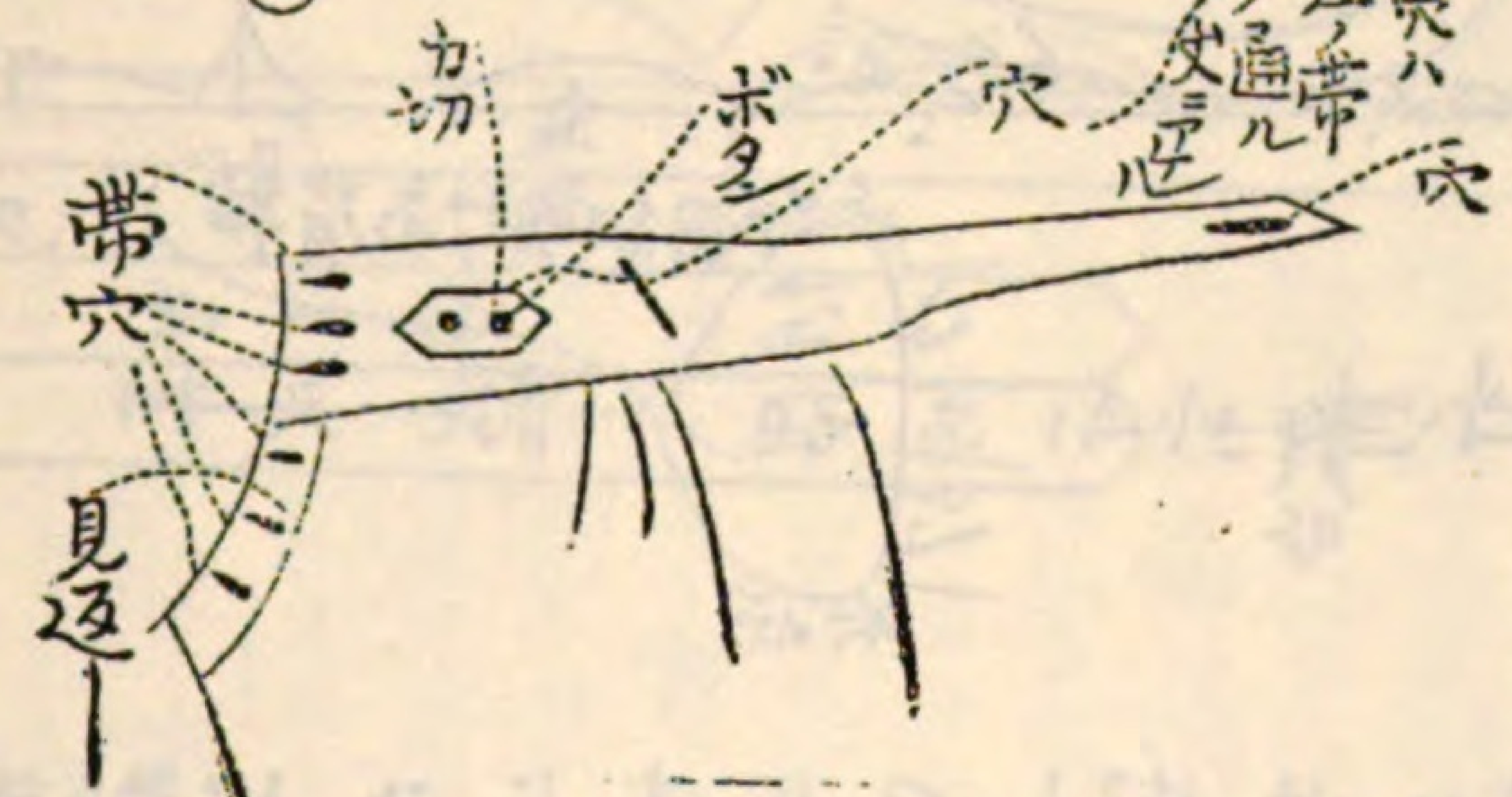
裁方は圖に就て御覽下さい、此圖は用布の巾を二つに折つて裁つのでございますから、裁ち切りました後は、此圖中の諸部分は皆二つづゝ出來るのでございます、



第三圖

縫方は(ア)の切をとり(イ)の所を三つ折にしましてマツリます

次は裾口を六分位に内がはに折りまして、其端を少し縫代だけ、また内の方に折つて、丁度單衣の裾がけのごく太いものゝ樣にしてこゝをマツリ(ウ)の所に見かへしを付るのでございますが、両方の切を表を中にして縫まして表にかへし、圖中點線の所(エ)の所に付て返し縫にてミシンの通りにかざり縫致します、次は(オ)の所二寸程三つ折にしてマツリます、次は(カ)の所をギヤダカヒダとして一尺位をつめ、帶の(キ)の所を此部の表につけます此時には巾廣き所を見返しの方に向けて付まして、引かへして帶の巾を二つ折りにして、見返しのそばの端を縫引かへして裏の方に帶裏を綴ぢ付け帶全躰を縫込を折りて綴ぢ付け縫目のある所だけに



ミシン様に返し縫をいたします、右の通り左右とも縫ひ(ク)の所を左右合せて縫ひ背縫の様にかへしてマツリ付ます、次に兩端の帶を合せ胴の太さに適ふ様にして、其帶先の當る所あたりにチカラギレを付ます、(この切は他の切がよわらぬ爲めにつけますのです)次にシックの(ケ)の所を縫ひ縫込をとりまして、(コ)の印のある所にかぶさる様に、(ク)の所の裏の縫目の所にとぢつけ置まして、此シックの切の丸みの所をマツリ付ます、次に(サ)の所を左右を合せて表を中にして一寸五分程マツリ、次に股下を縫ひまして前がはの縫込を五分ほど切り取りまして、前の方に縫込をマツリます、股下の縫終りの所(シ)の所左右と(す)(せ)の所にカンヌキドメを致します、次に見返しに三つ帶に三つ帶先に一つ中央に斜に一つ、此斜の穴は右の帶の通る穴でございますから、左のみにあけるのでございます)穴をあけまして穴カヾリを致します、次にはボタンをつけるのでございます、帶さきの穴に當る所と其他穴に相當した所につけまして、きりを吹きアイロンをかけ仕上げます、

シャツの脇縫ひ袖下袖付ヅボン下の背股下とは縫込のかへる方に裏を出して返し縫しますのでございます、

今までお話いたしました大人用前掛、小兒用西洋前かけシャツ、ヅボン下などは種類が澤山ありますが、こゝでは最初教へますだけにしてをきましたから、いづれ折がありましたらお話しする様にいたしませう、

ミシン縫は上級は生徒に授けますので、初めは手縫でございますから、こゝでは手縫の分だけを申上ました、

(つゞく)

書法指南

野口小蘋

用筆用墨の事は第一圖より第四圖に至る蘭竹を畵きたる時既に概畧をのべたれば玆に畧す第五圖に畵き出す處の菊も簡畧したるものなりそのゑがきかたのあらましをいへば菊は先づ花よりゑがく花は淡墨雙鈎を以て

作る次に枝を畫き而して後葉を作る枝も墨の濃ならざるをよろしとす葉をゑがくには濃からず淡からざる墨を筆に蘸し皿にて調和し筆尖に濃墨をつけて一葉のうちに濃淡相分るやう畫くべし花瓣は尖れるあり圓きあり長きあり短きあり、正開、初開、半開、花蕾將に放たんとして未だ放たず或は形側して蔕を見るあり葉も又形一ならず葉のかきかたもさま〴〵あれどはぶきて言はず花葉全く形成りて後中心に濃墨を以て點す葉筋も又濃墨を用ひてゑがくべし

第六圖の菊ゝ第五圖の菊に畫きかたに變ることなし畫菊花式數々あり、全放正面、初放正面、側面、平頂、正側其他は省畧す畫葉式、正葉、上仰、下垂、正葉背面、仰葉捲葉、折葉其他さま〴〵ありといへどもてまかに言ふも初心の人には却てわかり難ければ只概畧を玆にのべて畫きかたをしめすのみ

第七圖畫梅上發先づ樹幹よりはじまり樹幹成りてのち花を畫く形全くなりて濃墨を以て蕋を着け點を着くべし梅枝は曲れる事龍の如く勁きこと鐵のごとく蟠退して女字の形を爲す霜雪を凌ぐの勢あるを要す陰陽向背なかるべからず枝に六法あり、偃枝、仰枝、覆枝、從枝、分枝、折枝、梢に八法あり、長、短、嫩、疊、交、孤、分、怪、等なり

第八圖畫梅下垂枝これも前にのぶるところの畫きかたに異なることなし畫花式、正面仝放、偃仰平側、背面仝放、偃仰平側、初放偃仰平側其外種々あれど細に玆にしるさず

正誤

前號の「書法指南」中、第三行目に用筆用墨とあるは用筆用墨の誤、是れ校正の疎漏に出づるを以て訂正す、又た「書法指南」中に、行經、伊房公は卿、氣管は筆管、此の手紙は手本、筆書は草書の誤り、序に訂正す、

文苑

和歌

那木の下葉

竹柏園同人

雪

天地の物のおと皆しづまりて　侯爵夫人　伊藤梅子
心もきよきけさの雪かな

としぐ＼に冬にしなればふる雪も　男爵夫人　末松生子
又わたらしく見ゆるけさ哉

霜枯のまがきにつもる白雪を　男爵夫人　西　升子
きくよりのちの花と見る哉　竹屋雅子

幼子のよろこぶ聲に見出せば　増山三雪子
時雨はやみて雪になりけり

さし笠につもれる雪は重けれど　田中みの子
持ちしひさごはかるくなりけり

いつよりもおもく覺ゆる閨の戸を　加藤雛子
あくれば軒に雪ぞつもれる

年々にふるものながら白雪を　佐藤たに子
けさめづらしくながめつる哉

ふりつもる雪のながめは樂しきも　山崎刀禰子
音なふ友のなきが寂しさ

山をおほひ谷を埋みて雪はふれど　池谷久子
よどみもあへず大川の水

めなれたる松の姿も新らしく
見ゆるは雪のあしたなりけり　久保花子

二つなき寶となれるふじのねに
いとゞ光をそふる雪かな　三宅貞子

はせちがふ車の音もしづまりて
都の大路ゆきにくれけり　頭元春子

子供らの乘りすておきし竹馬の
たふれながらに雪ぞつもれる　峯百合子

歸り來む人やいかにと雪の夜を
すみたき添へて一人まつかな　大竹以勢子

ちりのよに積るものとも見えぬまで
雪の光の清くもあるかな　佐藤朝惠子

波枕まどろみしまに海原の
時雨は雪となりにける哉　大澤國子

さま〴〵に形ちをかへてふる雪も
つもれば同じ白妙にして　小幡八重子

ほそりゆくねやのともし火かきたてゝ
ひとりもきくか[illegible]の音　印東富貴子

塵ひぢの浮世のちまた夜は更て
風にともなふ雪の音かな　大塚楠緒子

あかほしも光をさめて靜けき夜
神はみ雪をよに降らします　片山廣子

北の風長城をこえてふきくれば
支那の大野に雪みつらんか　荒井萬子

雪の上にちひさき跡をとゞめつゝ
　幼なき子らの學びやにゆく　　印東昌綱

母の世に暖ためられてながめつる
　昔こひしきけさの初雪　　佐々木雪子

雪の上に木立のかげに黒くみえて
　月しづかなり有明の庭　　佐々木信綱

夢に見し天つみ國の心地して
　物みな清き雪の朝かな

大磯十首の内

松原にて　　侯爵夫人　伊藤梅子

めづらしく遊びにいでし松ばらに
　かたらひくらす日ぐらしの聲

長者林

はてもなくつゞく林のまつが枝は
　むかしも今も千代のいろなり

高麗神社

神がきに袖ひるがへすはふり子の
　かざしの花にはなちりかゝる

花水川

今もなほ其名にほひてさゝやけき
　小川にのこるはなみづのさと

丸山社

丸山のもりのしたみちものふりて
　もりくる月のかげぞさびしき

蓬萊園十首の内

たゆたふ道　　男爵夫人　末松生子

はる風にちりしく雪をふまじとて
　しばしたゆたふ花のしたみち

おもかげのみぎり

青葉さす池のみぎりにそひゆけば
　おぼろにうつる月のおもかげ

あやおる岸

さほ姫のあやおる岸にやすらへば
　　波とよせくるあをやぎのいと

下照岡

くれないの下てる岡のもみぢ葉に
　　にほひをそふる夕づく日かな

はつねばやし

くれ竹のねぐらを出てうぐひすの
　　はつねのはやし過がてになく

くれ竹のうきふし〳〵を歎くまに
　　わがよいたくもふけにける哉

をり〳〵草の内

男爵母堂　西　升　子

かもめ遊び小船うかびしうな原の
　　それとも見えず浪立ちさわぐ

岩根木立なきしをりつゝ時のまに
　　千里かけりてゆくあらしかな

天つちのむなしき中にふきおこる
　　風のちからのつよくもある哉

文　章

旅の命毛（其二）

中　村　秋　香

七日けふははこねやまこゆとて、人々まだくらきにこゝをたちて行く、朝霧はれ間なきほど鴫立澤に休む、氣色いとあはれなり

我もまたあはれとはみつ霧こめし
　　鴫立澤の夏の明ぼの

こよろぎの磯をひだりに見つゝ行く、この頃の雨あらたにはれ海ずらのどかにて、萬里活鮮なく百川倒流多し、岸根の松のむらだち千代の色を見せつゝ、日のうら〳〵とさし出たるほど、さすがに雨のなごりふかく、かなたの山ぎはより夏ともいはずきりたちのぼるさま、げに古里のかきねには見しらぬけしきどもなり、辰の

時過ぐるほど酒匂川を渡りて、小田原にやすむ、ずさども物たうべなどするを、かつうをといへるは毒ありといましめたりし法師はあなれど、こゝはふるきよりの名もゆかし、いざといふに、この比のながめに魚はなにもなしと云ふを、しぬばかりこひしがれはみなつきじろひつゝわらふ、聞かぬやうにてうそふくがにくければ、かうだにいへかし、法師こそいむもことわり、武士はかつといふ魚の名さへたのもしといへば、此人實法なるおもゝちして、まいて食ひたらまし、かばと云ふにとよみになりぬ、午の時より山をのぼる、山中なれどいと暑し、人はおりつゝかちよりゆくがいとうらやまし、馬蹄とゞこほりて且滑かに、羊腸また登るべからず、ふる里は山のあなたにへだて來て、日ごと／＼に遠ざかりつゝ、しらぬ國におもむくほど、年月のうきにたへぬる身のならはしに、猶行末もさてやすごさましと、糸によるものならねどこゝろほそさいはむかたなし、のぼり漸くけはしうなるを、もし世路の難にたくらべなば谷底より平かならんをずして過ぐるを、何といふ橋にか石にてたゝめる其下は岩川にて、山より落下る水の勢ひ強く、岩にせかれたるは、さながら白雪の降りかゝれるごとくなるに、流るゝ音いともおそろしく、いろいろ得もいはれぬあやしき石とものあまたたてるなど、たくみなせりともかうはと見ゆるに、岸には赤き青き小石どもうづたかくよりたる、實に時ならぬ秋のにじきからくれなゐとまであやまたるるに、谷より吹あぐるかぜいと涼しうて、暑さわするゝばかりなり、けすどもしばしうちやすみて輿をたつるに、いとうれしくてすだれ三寸ばかりやをらおしあげて人氣なき谷の底をのぞく、たゞ是程を心やりとするもいとはかなしや、畑といふに休む、もちひしるものに調じ、麥なはなどかてゝあきなふを、下衆どもとり食ふに、いとあつきをくひわづらひたるつらつきいとびんなくあはれなり、筧より落ちくる山水に手をひたして、しばしこゝろをなぐさむ、こゝよりは登り猶くるしうて人々行きなやむ、蘿を捫て煙嶺にのぼり、（此間滅字）躡て雲壑を穿つ、權現社のあなたにちりもはじめぬ山櫻雪かとまで咲にたるを、

思ひかけず山郭公の二聲までおとづきたるうち聞つゝ、蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一聲、とおぼえず ふとうめき出でたる、人や聞かんといとむくつけし、げにこの一聲はめずらかにもあかずと思ふ、眼前の湖は藍をすりたるやうなるが、むかひにかけたる菴の本立のしげみより見ゆるを、僧などや住めるにやかねの音かすかにきこえたり、かう世ばなれたらん山ずみ、いかにのどけからまし、とわが思ひしみにしかたなれば、こゝろひかれて行過ぎがたきを、つひにはいづこの山かげにも、こがくれつゝあらんなど思ひつゞく、

おと絶えて思ひいりぬる山もがな
　身にはほだしのあるよなりとも

金烏西にかたむく頃關をこゆ、女のさほふ有ることども關守萬づのゝしる、夕暮にたうげにやどる、從者のこゝろあるが先櫻をりてまゐりたり、我すき心やしるかりけむとうれはしけれど嬉しくて、ふところかみしておしつゝみ、郷里のたよりにつけて贈らんとぞ思ふ、げに郭公こそ今一聲きかまほしけれなどとり〲あかず思ふ、春のなごりも此頃なるものから、くもりがちなるそらの氣色に、不二の高根はさしむかひたるやうなるを、くれ行くまゝに薄墨もてゑがけるが、なにぞのやうに見ゆるは、けちえんならむよりはまた一しほに艶なるものから、千代をながむともあく世あらじとぞおもふ、

（つゞく）

女流の文學

佐々木雪子

東海の天に微笑みたてる佳人あり。名を富士と呼ぶ。雪をもて衣とし、雲をもて帶とし、波しづかなるあしたさしのぼる、日影に玉の顏ばせを匂させ、風すさぶ、夕べ狹霧の袖に淸き姿をおほふ。うべなる哉詩神の此佳人を慕ひ、此いたゞきにしも、宿りを定めましつること。

世界の廣き中には、聳えたてるヒマラヤの山もあるべし。岩根こゞしきアルプスの嶺もあるべし。しかはあ

れど我國の富士の根のごと、其かたち優に、其姿美はしき山はしも、いづこにかあらん。あはれ此佳人はしも、我國ぶりの優美なる女流文學を代表せるものか。優美なる文學は、悲哀の情ふかき女性に宿りて、あるはあつき涙と爲り、あるは暖けき血と爲り、其涙其血ながれ〳〵て今に至りぬ。今より後千たびの春秋千たび移りかはるとも、猶つきせざるは其流ならん。

嵐さけび波さかまく相模のわた中に、弟橘姫の命は、せの君のみ船の沈まんとするを救はんとて、波の上八重の菅疊をしき、さねさしさがむの小野にと歌ひましゝなむ、優美にして悲哀なるやまとをみなの心をうたへる文學の、はじめて世にあらはれし時といひつべき。それより後くものおこないに吾背子を待ちし衣通姫、春秋のあはれをことはりし額田の王、家なる人を思ひし坂上の郎女、さては但馬の王、大伯の皇女、譽射の女王、石川の郎女、笠郎女、松浦娘子を始め、肩のまよひを誰かとり見んと雲井のよその守りにいでたつ夫を思へる防人の妻、唐土の使に出たつ吾子を送りて、吾子はぐくめ天のたづむらと歌ひし母もありき。平安の朝に至りて、小野の小町は、其世の末にこそ身をうき草の根をたえてさそふ水にもまかせんと思ひつれ。六人の歌のひじりの中にも數まへられ、伊勢の御はすか川淵にもあらぬ宿も、瀬にかはりゆくを歎きしかど、かはらぬ名を千とせの後に傳へぬ。しかして延喜天暦の頃にきざしゝ文學の花は、一條帝の御代にしもひらきみちぬ。あはれ女性をあはれぶ心ふかき詩神は、同じ時にしもあまたの名媛をいだし給へりけり。槇ひ板戸をたゝく水雞にもはかられず、女の德女の操をまもり、吾子をよくおほしたて、さて源氏五十四帖に女子の心のおくかをしもゑがきつくされし紫のおもと、巧にこまやかにはた鋭き筆に世の樣をうつし出されし清少の君のうへは、殊更にいはでもありなん。赤染、和泉、馬內侍、さては母の名をおとさで狹衣をのこしゝ大貳親に先だつ道をしらねばと重き病の床にも母を思ひし小式部など歌に文にとり〳〵に名を殘せりき。又菅原孝標の女あり。菅原の流をうけて、幼きより學を好み、等身の藥師

佛をつくりて、物語みん事を祈り、后の位も何にかせんと、晝はひぐらし夜は目のさめたらん限りつとめしかひに、夜はの寢覺、みつの濱松、朝倉などつくりし事は、あはれなる生涯をうつし〻自傳に悉しく、更科の月よりもげにかゞやけり。世は院中政治となり保元平治の亂おこりて、女流文學の花もしばしが程冬ごもり居しかど、後鳥羽帝の御代、八島の波もしづまりたる春べにあひて、再び花さきいでぬ。そは式子內親王、待宵の小侍從、若草の宮內卿、沖の石のさぬき、俊成卿の女など、一時に匂を競ひぬ。少しおくれて阿佛尼あり。子を思ひ道を思ふ心の闇にあくがれいでし十六夜日記、極樂寺の松風に都の內侍を思ひし庭のをしへ、歌の道の奥かを二人の子に傳へし夜の鶴、とり〲にそを讀みて誰か涙に袖をかざさゞらん。南北の爭 應仁の亂に、女流文學の秋は來りて、紅葉のにしきも色うすく、名きこえたる人もなかりしを、元祿の始めつ方、春風春水一時に來れるが如き文學復興の時に當りて、荒木田麗女あり。假名の歷史のかけたるをおぎなひて、月のゆくへをものし、又池の藻屑をかきつぎぬ。縣居の門には、つくは子、よの子、倭文子、紅子あり。歌に文にいづれをいづれとかいはむ。近き世に至りては、風ふかぬ日は淋しと世を思ひすてし尼、やんごとなきわたりより桂子の名を賜はしり刀自、國を思ふ心あつくあまたの勤王家を家にかくし置きつる爲、捕はれ人となりて姫島の波に袖をぬらし〻望東女などありき。この外にも空ゆく月と仰がれ、ますみのかゞみと稱へられし人あげて數へがたくなん。西の國々さては高麗もろこしにおりいだせる綾のいろ〲美はしかるべけれど、我大和錦の色はたいかでよそにのみたちおくるべき。

詩神不二の嶺に天くだりましてこゝに三千歲、吉野山の櫻春ごとに匂ひ、琵琶の湖の月秋ごとにかげさやかなり。花は萬春に色相同じけれど、みる人は歲々にひとしからず。月は千秋に光かはらざれど問ふ人は年々に同じからず。惑へる心もて思ひ見れば、一生はあだかも死の淵の上にかけたる長き橋をわたり行くが如し。あるは三十步、あるは五十步、長きも百步にみたず

して、思はずふみそこなひて落ち、はた自ら死の淵に身を投じて、限なき水泡の一つと消えゆくなり。殊にあはれにはかなきは女の生涯なりけり。世にふるながめに唯いたづらにうつろへる花の色をかこちてのみあらんも何にかはせん。頭におく霜に一時の秋をくねるもいかにかはせん。心なき山賤も花のもとにはいこふものとこそきけ。花なくば文の林もあれぬべく、心の泉もかれぬべし。美文は文學の花なり。此花にしてさかずあらば、人の心いかばかり荒れまさらむ。文學は家のうちにもみてり。詩は炊ぐ煙のたまびく中にもこもれり。まづ女の道をふみ、家を治め、世のつとめを盡して、さて女子の心をよすべきは文學の園生なるかな。女子のたをりてかざすべきは、ことはにしをれず散らぬ文學の花なるかな。

講義

土佐日記講義（二）

文學士 鹽井雨江

廿七日。大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。

○大津。浦戸。共に土佐の海岸なる港の名なり。國府より大津までは、二里許りにて、此の間は、河を舟にて下れるなり。大津は其の河口にて、こゝよりはいよ〳〵海路となるなり。廿一日に住みたる館を出でたり。而して、僅に二里許り、はなれたる大津を舟出したるは、廿七日にて、門出せし日より數ふれば、七日目なり。現今の人情より考ふれば、いと心ながきを怪むべけれど、これぞ誠に當時の人の人情、まめやかなるしるしなる。去るを惜み、行くを惜み、まめ

やかなる離別の情にひかれての日數なればなり。

かくあるうちに、京にて生れしをむなご、こゝにして俄に失せにしかば、この頃のいでたちいそぎを見れど、なにごともえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ、悲しみ戀ふる。ある人もえ堪へず。

○かくあるうちに。かゝる間にといふも仝じ。これは、貫之が土佐の國守の任はてて、京へかへる用意などしつゝ、なほ土佐の國に在る間にといふ事なり。○をむなご。貫之の女なり。○こゝにして。この土佐の國にてといふ事なり。こゝとは土佐の國をさしたるにて、大津の泊りをいへるにあらず。○俄に失せにしかば。急病にかゝりて死にたるをいへるなり。京に居りたる時に生まれたる貫之の女が、なほこの土佐の國にある間に急病にかゝりて死にたるなり。大津の泊りにて急病にかゝりて死にたるにはあらず。この段の事は、宇治拾遺なる文によりて 明に知るを得べし。宇治拾遺に、今は昔、貫之が土佐守になりて下だりて有りける程に、任はての年、七八ばかりの子のえもいはずをかしげなるを、限りなくかなしうしけるが、とかくわづらひてうせにければ、泣きまどひ病まひつくばかり思ひこがるゝ程に、月ごろになりぬれば、かくてあるべき事かは。上りなんと思ふに、ちごの此處にてなにとありしはやなど思ひいでられて、いみじう悲しかりければ、柱にかきつけける」といひて、次なる都への歌を載せたり。貫之の女の死にたる時日は、この文にて 明に知るべし。○いでたちいそぎ。旅立ちのいそがしき支度をいへるなり。○何事もえいはず。えいはずとはいふ能はずといふ事にて、何事もわからず或は何事も手につかずといはむ如き意にて、亡き子を思ふ悲しみに、全く我が心を奪はれたるかたちなり。○女子のなきのみぞ云々。ありし最愛の女子の、今は死にて共に在らざる事をばかり悲みて、戀ひ泣くといふ事にて、はじめ土佐の國守となりて京より下る時には、

共に連れて下りたる最愛の女子の、ふと急病にかゝりて死にて、今や京へ歸へり上るにあたりて、共に連れて歸へらざれば、悲しく思ひ出でられて、いたく戀ひ悲しめる意なり。○ある人々。貫之夫婦の外の人々なり。同行の人々なり。○え堪へず。悲しみに堪え難ねたる事なり。貫之夫婦以外の同行の人々も、貫之夫婦の悲嘆をくみ、仝じ心に悲しく思ひやりて、悲しさにこらえずして、悲しみ泣くといふ事なり。

○この段は、今やいよ〳〵京に歸へり上るに臨みて、もと下りし時は共に連れたる女子の、急病にてはかなくなりて、共に連れて歸へらざるにつけて、悲しく思ひ出だして、心は悲嘆にかきくれ、旅の支度の忙き中にも、何事もわからず手につかずして、唯亡き子を戀ひ悲しめば、共にある人々も、貫之夫婦の心を察して、仝じ心に悲しみなげくといふ事をいへるなり。

この間に、ある人の書きていだせる歌、

都へと思ふもものの悲しきは
かへらぬ人のあればなりけり

また、ある時には、

あるものと忘れつゝなほ亡き人を
いづらと問ふぞ悲しかりける

といひける間に、鹿兒の崎といふ所に到るに、

○この間に。斯く悲しみて居る間にといふ事なり。○ある人。やがて、貫之自身の事なり。○都へと思ふも。今や都へ歸へる旅立ちなりと思ふにマアーといふ如き意なり。「都へ歸へる旅立なれば、常ならばうれしかるべきものなるに」といふ如き意をこめたり。○かへらぬ人。此の世を去りて再びかへり來ぬ人といふ事にて、亡くなりたる女子をさしたるなり。○あればなりけり。あればはある故にといふ意。けりは俗にワイといふ如き感動の詞なり。○此の一首の歌の意は、今や都へ歸へる旅立ちなりと思ふに、マアー、常ならば嬉れしく思ふべき旅立ちなるに、今日は嬉れしからずして、かくものの悲しまるゝは、今や

此の世を去りてかへらぬ我が子のある故であるよといふ意なり。かへらぬといふ詞、面白し。世を去りて再びかへり來ぬといふ上に、共に都へ歸へらぬといふけしきをもよせて、面白し。都へと思ふといひ出でたるも面白く、すべて、詞づかひ、誠にめでたく、あはれにきこえたり。○あるものと。今は既に亡くなりたる人を、なほ此の世にあるものと思ひてといふ事なり。思ひてといふ詞を添へて見るべし。○忘れつゝ。既に亡くなりたりといふ事を忘れてといふ事なり。つゝはてに感動をこめたる詞づかひなり。○なほ。やはりといふ意にて、第一の句のあるものとの上につけて見るべし。既に亡き人を、やはり此の世に存在せる人と思うてといへるなり。○亡き人。死にたる人にて、彼の死にたる女子をさせるなり。○いづらと問ふ。何處に居るかと問ふといふ意なり。○此の一首の歌の意は、「忘れつゝ亡き人をなほあるものと（思ひて）いづらととふぞ悲しかりける」といふやうに置きかへて見れば、判然すべし。今は既に我が子は亡くなりたりといふ事を忘れて、無き我が子を、やはり此の世に居る者と思うて、此處に我が子の見えぬは何處に居るかと、をり／＼問ふが、誠に悲しいワイといふ事にて、子を思ふ情、あはれに悲しく限りなくきこえたり。辭もよく上手にきかせ得たりといふべし。○いひける間に云々。かゝる歌など詠み悲しみて居る間に、鹿兒の崎といふ所に舟のつきたりといふなり。

かみのはらから、又こと人これかれ、酒などもて追ひ來て、磯におり居て、別れ難き事をいふ。かみのたちの人々の中に、この來たる人々ぞ、心あるやうにはいはれほのめく。

○かみのはらから。今の國守の兄弟なり。○こと人。他の人なり。○これかれ。前に「彼れこれ知る知らぬ送りす」の時にいひたる彼れこれと全じ。そこを見よ。○酒などもて追ひ來て。酒などを携へて、貫

之の後を追ひかけ來たれるなり。なほ別れを惜みてなり。○磯におり居て。磯べに下りて、そこに坐してといふことなり。○別れ難き事をいふ。貫之に別るゝ事の甚だ惜しくつらきよしをいひて、別れを惜めるなり。○人々の中に。にはにての意なり。○この來たる人々。貫之の後を追ひて來たれる此の人々なり。○心あるやうにはいはれほのめく。貫之の伴れの人々は、この追ひ來たれる人々を、國守の館の人々の中にても殊に眞實の情ある人のやうに、低き聲にていひはやしほむるといふ事にて、心あるやうにはのはは、感動詞にて、心あるやうにといふ事を強くひゞかせむ爲めに置きたるにて、別意なし。

かく別れ難くいひて、彼の人々の口網も諸持にて、この海邊にて、になひ出だせる歌、

をしと思ふ人やとまると葦鴨の
うちむれてこそ我れは來にけれ

といひてありければ、いといたくめでて、行く人のよめりける、

棹させど底ひも知らぬわだつみの
深き心を君に見るかな

といふ間に、楫取、もののあはれも知らで、おのれし酒を喰ひつれば、早くいなむとて潮みちぬ、風も吹きぬべしと騒げば、舟に乗りなんとす。

○彼の人々。その追ひ來たれる人々なり。○口網も諸持にて云々。多人數が力を合はせて、非常に苦みてやつとのことで詠みいでたる歌といふ事なり。人々の口重くして、容易く歌のよみいでられず、やつとのことでよみいでられたる歌といふ意なり。それを、例の諧謔にて、海邊にての事なれば、海に縁のある事を以て、かく戲れて書きたるなり。口網とは一種の地引網にて、重きものなれば、それを多人數が總がかりになりてかつぎ引くにたとへたるなり。○をしと思ふ人やとまると。別るゝを惜しと我が思ふ人の、

もしや此處に留まるかと思ひてといふ事なり。人とは京へかへらんとする貫之たちをさしたるなり。○葦鴨の。群れてといひ出でん爲めの序なり。葦鴨といふは、常の鴨の事なり。多く葦の生ひたるあたりに居る故に、葦鴨などともいふなり。鴨は常に群れて居るものなれば、うち群れてといひいでむ序につかひたるにて、歌の意義の上には關係なし。○うち群れてこそ云々。我れ〱は斯く多人數にて君があとを追ひかけ來たワイといふ事なり。○一首の歌の意は、我れ〱は斯く多人數にて君のあとを追ひかけてまゐりました。それは、斯く追ひかけて來たならば、我れ〱の情にめでて、別れ奉るを我が惜く思ふ君たちの、京へかへるをやめたまひて、若しやこゝに留まり給ふやうにもならむかと思ひて、かく追ひかけて來たりましたワイといふ事なり。○いといたくめでて。此の人々のよみたるをしと思ふの歌を貫之が、甚だ非常に心にほめたりといふ事なり。○ゆく人。貫之をさしたるなり。○棹させどそこひも知らぬわだつみの。この句は、次の深きといひいでん爲めの序なり。そこひとは、總て、物の至り極まる處をいふ。物のはて限り極みをいふなり。万葉集に「天地の曾許比のうちにあるが如く君に戀ふらむ人はさねあらじ」古今集の戀歌に「そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波は立て」後撰集に「限りなき名におふ藤の花なればそこひも知らぬ色の深さか」などあるにて、知るべし。そこひも知らぬとは、かぎりのわからぬ意なり。わだつみは大海なり。○深き心。深切なる心なり。まこと深くまめやかなる心をいへるなり。○君。追ひ來たれる人たちをさしたるなり。○一首の歌の意は、誠に限りなく深切なる心を、君たちの上に見るよ。誠に君たちのみ心は深切なるよとはる〱と追ひかけてまで來て別れををしむ情をよろこびての返歌なり。此の歌は、唐の李白の「桃花潭水深千尺不及汪倫送我情」といへる句より脫化したるものの如し。○楫取。舟の櫂をつかふ者にて、舟子の事なり。○ものの

あわれも知らで。情といふものを知らずしてといふ事なり。もののあはれとは、うれしき事、悲しき事、すべて物事にわたりて身にしみておぼゆる感情をいふ。もののあはれを知らぬ人とは、やがて、此の感情なき人、情をさとらぬ人なり。舟子どもの心荒く卑くして、感情乏しきをにくみていへるなり。○おのれし酒を喰ひつれば。舟子どもは、自分が既に思ふ存分酒をのみたる故にといふ事なり。○早くいなむとて。早く往かむと思ひてといふ事なり。○潮みちぬ風も吹きぬべしと騷げば。滿潮に成りたり。船を出だすによき時となれり。斯くぐづ〳〵して居らば潮はまた引汐となりて舟を出だすに都合あしくなるべし。それのみならず、風も吹きおこるべし。さすれば、舟路はいと難義なるべし。されば、疾く舟を出ださむ、早く往かむといひて、舟子どもが頻りにやかましく、別れを惜む貫之たちを促したてて、のゝしりさわぐさまなり。舟子どもは、情といふものを知らぬやつらにて、自分たちが既に大に酒を飲みて、最早用もなき故に、早く行かんと思ひて、かゝる事をいひて、やかましく騷ぎ立てたりとなり。○船に乗りなんとす。今までは、磯に下りて別宴をはりたるを、舟子どものやかましく促す故に、今はといよ〳〵船にのらんとするとなり。

百人一首講義（二）

文學士　大町桂月

九、小野小町

花の色はうつりにけりな、徒らに、我身世にふるながめせし間に。

○「うつりにけりな」は「盛りが過ぎて移り衰へたわいなァ」の意にて、散るともその中にこもれり。

○「世にふるながめ」は「降る長雨の」意にて、「世に經る眺め」の意を兼ねたり。「世に經る」は、世を過すこと也。眺めは、二義あり。今は眺望の意に用ゐれども、中古以前は、嘆息の意に用ゐたりき。こゝの「な

がめ」は眺望の意にあらずして、嘆息の意也。「世に經るながめせし間に」と言ひ換ふれば、「我身が世に立ちゆかんとて、色々嘆息し、心配せし間に」の意也。

〇この歌、下から上、かへす語格にて、之を正しく散文的に言へば、「徒らに我身世にふるながめせし間に花の色は移りにけりな」となる也。「徒らに長雨が降りつゞいて居た間に、あたら花の盛りが過ぎて、色がうつり變つて散つてしまつたわい」とは、正面の意にて、裏面には、「我身が世に立ち行かむとて、色々難義なる目にあひて嘆息せし間に、いつしか年をとりて、むかしの花の顔もどこへやら、やつれ果てゝ、見る影もない老婆になりぬ」の意あり。

〇別に奇抜なる思想にはあらざれども、長雨に花の散る自然の景致を捉へて、花を紅顔にたとへ、「降る」を「經る」に言ひかけ、長雨を嘆息に言ひかけ、譬喩穩當にして切に、正面の意と裏面の意と能く相融和して、毫も生硬ならざる處、作者の手腕を見るべし。元來言ひかけは、日本の歌人のよく用ゐる所なるが、非常に悲しきことを言ふ場合、もしくは崇敬の意を言ふ場合などに濫用すれば、眞情なくなりて、輕佻に聞ゆるもの也。歌を作るもの心せざるべからず。この歌の言ひかけ、自然にして面白し。且つ「に」といふ「てには」を四つも用ゐたれど、毫も聞き苦しからず、音調、やわらかに且つなだらかにして、思想と格調とよく相伴ひ、優婉なる女子の面目、言外に躍動す。女子に相應しき歌と云ふべくや。げに昨日までは朝日ににほひし櫻花、人も多く來てもてはやしけるが、無情の雨にあへなくも散りはてゝ、また人の來り賞するものなし。花もひと盛り、人もひと盛り、浮世の苦しみにやつれ易きは花の顔、昨日の可憐の少女も、今日は見る影もなき老女、昨日と變りし輕薄なる人情を恨むにつけても、悲しきは女の身の上、色衰ふれば忽ち人にすてらる。さだ過ぎし美人が、落花に對して、薄命相憐み、この一篇の悲歌を作る。眞情流露、人の肺腑を刺す。洵に可憐なる歌と云ふべし。

十、蟬丸

此れや此の行くも歸へるも別れては、知るも知らぬも逢坂の關。

○「此れや此の」は、「此れは」と云ふとを強く云ひたる也。而して下の逢阪の關にかけて、歌の意を取るべし。○「別れては」は、後撰集には「別れつゝ」とあり。「別れつゝ」の方が意義たしかにて、よけれど、「別れては」にても差支なし。「別れては」は、今日の俗語にもある格にて、「雪が降つては止み、止みては降る」など云ふ「ては」と同じつかひざまにて、こゝは「別れては又逢ふ」と云ふ意味也。即ち「別れたり逢つたりする」と云ふとを、一つに結びつけて、「別れては逢ふ」と云へる也。

○逢阪の關は、京都と大津との間にありし關所にして、逢阪の逢を知る人も知らぬ人も相逢ふに言ひかけたる也。

○逢阪の關は、京都の近傍にある關にして、往來ことに繁く、行くものあり、歸るものありて、互に相別るゝかと思へば、又知る人も知らぬ人も、こゝにて相逢ふ逢坂の關である哉。これ一篇の意也。初句に「此れやこの」を置きて、逢坂の關を強くそれと指せり。「こゝがその所謂逢坂の關の意也。逢坂の關の下には、「也」もしくは今少し強く言ひて「にてある哉」の語を添へて解すべし。

○逢坂の關の逢を旅人相逢ふに言ひかけ、別るゝを上に置き、逢ふを下に置きて、逢ふと云ふことが重く聞ゆれど、こは地名の逢ふを言ひかくる上より斯くせざるを得ざる次第にて、實際は別るゝ方に重き意味ある也。知る人も知らぬ人もこゝで逢ふかとすれば、行くもあり、歸るもありて、各別れ去りて、其行く所を知らず、實に集散離合定めなき人の世なる哉との悲歎の意をこめたる歌也。

○蟬丸、逢坂の關の傍に住し、日夕旅人の集散する樣を見て、感慨に堪へず。世の中に思ひくらべて、人世の無常を歌へる也。げに果敢なき浮世、今日暫らく歡會を同じうするも、明朝は忽ち相別る。生別又死別、人生長へに桓山四鳥の悲しみを免るゝこと能は

ず、年々歳々花相似たれども、歳々年々人は同じからず。泡沫の世、夢幻の世、あるかと見れば、忽ち無く、生者必滅、會者定離、集散離合常ならざる人世の小幅それを此の逢坂の關に見る。此一篇、世の無常を歌ひ得て、言外に無量の悲哀の意あり。百人一首中の傑作と云ふべし。

漢文評釋

文學士　久保天隨

阿藤傳（續）

父某會直、聞號疑有變、疾走而入、見之大驚、抱女將縛之、阿藤撞若山而倒之、排父手、乘若山背、極力刺小腹、而滾轉之、父復捉阿藤縛之、事聞、命下之士獄、阿藤顏色怡然、語人曰、憾不暇奸婦之喉也、然後一刀極力深轉、意必不生、果死、我事終矣、後數日若山以創死、

前節烈女が奸婦を刺す實狀、寫し得て妙云ふべからず。こゝに、父某會直の句を挿入したるは、突如たるに似たれども、決して然らず。蓋し篇首に父某爲永巷吏とあるに呼應して、苟くもせず。若し此事なかりせば、支離の病を免れざるなり。阿藤が若山を刺して、未だ殊せず、人もあらうに、其父の爲に妨げられ、怱忙の間、之を拂ひ退けて、若山を衝き轉ろばし、其背に跨り、横腹を目がけて柄も通れと刺し込みたる、何等の痛快ぞ。文章こゝに至りて、波瀾横生、頗る姿態あり。而して阿藤は、遂に其父の爲に取り押へられ、事侯に聞こえて、士獄に下さるゝこととなりぬ。烈婦すでに其意を達しければ、喜悅自ら禁ぜず、人に語りて云けるは、奸婦の喉を一つき留めを差さゞりしこそ恨なれ。さりながら、一えぐり、脇腹を思ひ切りて衝きたれば、必ず生くること無かるべし。若し果して死したらむには、我が本望達したるにて、思ひ殘すことあるべからず、と。奸婦之喉の句は、前節阿藤罵曰

とあるに照應し、一刀極力深轉は、前節懷匕首とあるに對映し、針線微と雖も、善く透れり。後數日、若山は果して劍を以て死せり。以上第四大段となす、全篇の精神にして、正に絶頂を窮めたる者なり。凡そ文章の體裁、分け方によりて、幾らもあるべけれど、要するに敍事と議論との二途あるのみ。敍事は易きに似て、其實は頗る難く、議論は難きに似て、其實は却て易し。從來わが邦の諸名家、議論に至りては、所長を擅にするもの乏からずと雖も、敍事を善くする者は、寥々晨星も啻ならず。息軒は古文に精通し、特に龍門の神體を得たる者あり、乃ち此篇の如き絶好の敍事を出だせしを知るべし。文を學ばむとする者は、その匠心の細を尋ね、自ら悟入する所あるべし。

侯令吏鞠阿藤、曰、汝發狂耶、敢爲此大膽事、阿藤色愠、徐對曰、妾何敢狂、若欲知公義與私怨、請詳述之、吏怵不敢問、曰、今日且休、他日再鞠之、久之命書其意上之、終不復訊、與送之飯田、夫人憫其忠而就死、賜金五圓、以給路費、別藏三圓於輿褥之下、竊諭護送者、爲身後祀奠之用、既至飯田、又囚士獄、地早寒、士庶恐其傷於寒、欲贈衣衾、諮之大夫、大夫曰、是士獄也、何害、衆爭贈之、衣衾山積、及饋美味珍羞者、日夜相望於途、

飯田侯、吏に命じ、阿藤を吟味せさせけるに、吏先づ曰はく、扨ても其方は氣でも狂ひしにや、いかなればかばかり、大膽不敵の事を成しつるぞ、と。阿藤いたく其無禮を怒り、覺えず色にも露はれけるが、わざと丁寧に對へていへるやう、いかで氣なぞ狂ひ候ふべき、妾の事を爲せしは、公義に盡せるのみ、若し公義と私怨との區別を問はせ玉ふとならば、事こまかに御答致すべし、といひければ、吏は奧向の秘事を述べ立てられては、事むづかしと思ひけむ、敢て之を問はむとはせず、今日は之にて止め、廳を閉ざし他日再び吟味を爲さむとて、引き下ろさしめしが、やがて其

意を書き留めて、上らしめ、復た訊問することなく、輿に載せて、飯田に送ることゝなしぬ。阿藤色愠云々といへるは、暗に上段の白中衣といへるに應じて、緊切を極めたり。素より身命を擲て、節義の犠牲となり、以て闔藩の禍根を除かむと期せしもの、豈に生死を顧みむや。况んや、發狂を以て擬せられしに至りては、心に慍らざるを得ず、公義私怨云々は、上文の汝而不死必誤公家といへるに照應して剴切なり。また暗に師弟義絶一段の事實に映射して、妙いふべからず。阿藤すでに飯田に送らるゝことゝなりければ、夫人は頗る其忠にして身を棄て、やがて死刑に就かむとするを憫み、金五兩を賜ふて、旅中の入費に充てしめ又別に三兩を輿中敷蒲團の下に入れ、護送の吏に命じ、阿藤が一朝死に就きし後、冥福を修むる用に充てしめぬ。夫人憫其死は、前段若山が夫人と相鬩ぐに至りしといへる事實より反折し來り、金五圓といひ、別藏三圓といへるは、阿藤が若山と義絶せしとき副金二圓とあるに反應せり。かくして、阿藤は事もなくして飯田に到着し、士獄に拘禁せらるゝことゝなりぬ。飯田の地たるや、寒の來ること早く、獄中の苦、自ら堪へ難きものあるは、誰しも想像すべきところなり。是に於てか、一藩の士庶、阿藤が寒の爲に病を得むことを恐れ、衣衾を贈らむとし、之を大夫に相談しけるに、大夫は流石に物の能く分りし人と見えて、士獄といふからには、構はなかるべしと、事もなげに言ひければ、士庶の喜いふべからず、物を贈るもの、引きも切らず、衣衾積んで山の如く、また美味珍羞を齎らして、差入する者、日夜途に相望むほどなりき。地早寒の句は、一頓をなし、衣衾山積は前段襲盛服に應じて章をなし、美味珍羞の句は、暗に上文安富主計が江戸に入りしとき饗于内寢といへるに反映せる如し。

既而侯令吏論、大不敬、當斬、斬有日、命劊手於三組卒、皆辭不肯斬、乃探鬮定之、到刑場、吏問所欲言、答曰、妾罪至重、粉碎無所怨、且事至此、又何所言、獨慮得無妾父

以妾故、觸重憲乎、吏曰、汝父貶一關卒、然亦以塞文法而已、不久、將復舊官、阿藤拜謝曰、幸甚、

大不敬は幕府時代宣告文の中に善く見えたる「公儀を憚らず、不屆至極」とある者、是なり。阿藤は既に打首に處せらるゝことゝなり、斬を爲すに先ち、劊手を三組の足輕中より選び出すことゝなりぬ。さしも心なき足輕ども、皆辭して御受する者なかりければ、止むを得ず、抽籤の法によりて、之を定め、厭でも應でもきかねばならぬ事となせり。嗚呼至誠人を感ずるの深き、賤夫と雖も、刀を烈婦の頸に加ふるに忍びざらしむ。その闔藩の士氣を鼓舞せしこと、想見するに足れり。阿藤が處刑に先ち、吏が何か遺言すること無きかといへるに答へし言の如き、また至誠の餘に出でしもの。粉碎無所怨の一句は、我事終矣を承けて、確にその決志の固きを證するを見るべく、唯だ今に心に懸り候ふは、妾が事を以て、禍妾が父に及び爲に重き掟に觸るゝこと無かるべきか」といへるに至りては、一讀人をして酸鼻に堪へざらしむ。孝なるかな、阿藤、父を懐ふの厚き、此に極まれりといふべし。眞に是れ忠孝不二の龜鑑と爲すに足るべく、男まさりの雄々しき心の底にも、優しき心ばえのほの見ゆるは、古今に類なき烈婦ならずや。文法は表向の法律といふことなり。吏、阿藤に謂て曰く、汝が父は與付役人の舊職を褫がれて、一關卒に貶せられしかど、そは唯だ表向の法律を立てゝ行かむが爲にして、遠からざる間に、屹度舊職に召し還さるゝなるべく、宜しく安心すべし」とありければ、阿藤は拜謝して辱なきには泣かむばかり、其狀宛として見る如く、用筆周匝、一絲も紊れず、一毫も遺さず、而して烈婦の精神、千歳死せず、紙上聲あるを覺ゆ。

因乞少間、吏曰、汝畏死乎、潮紅以答曰、不敢、妾有月事、恐貽醜於死後、願淨之、然後就刑、吏允之、既出廁、從容至場、合掌而坐、劊手恐驚動致誤、欲巾其目、阿藤微笑曰、妾雖女兒、亦生於武人之家、何煩巾目、

吏曰首側矣、且直之、乃取櫛於懷、梳髪、寛衣襟、端坐而斬、觀者垂泣、時年二十二、天保庚子十二月二日也、

死地に臨み、從容迫らず、身を清むるの餘裕あり、胸裡綽々、死を以て自ら分とし、決して畏れざることと知るべく、實に鬚眉の丈夫を愧殺する者といふべし。潮紅は「顏さつと打ち赤らめ」といふことにして、月事は即ち月經なり。堂々史筆、善く之を寫し、而かも鄙俚醜褻に流れず、誠に巧手といふべし。就刑の句は、大不敬に應じ、從容至場の句は、發狂に應ず。以下數語は專ら發狂せざることを引證し、以て阿藤の本領を發揮す。筆力の雄健、言を俟たず。妾は女子といへども、苟くも武士の家に生れしもの、死に臨みて、目かくしする程、臆病には候はずといふは、起頭第一山口氏之女也とあるに呼應し、文法上の妙を見るべきのみならず、意氣慨然、天を衝かむとする勢あり。吏が更に首少しく傍によれる故、之をに眞直に改めよといひ、やがて櫛を懷中より取り出し、髪のおくれ毛をかき上げ、襟を正だして、かくて端坐せしまゝ斬られしといふが如は、從容死に就くの風、言外に溢れて妙甚し、以上之を五大段となす。

初阿波侯與侯家有姻、聞阿藤忠烈、欲活之、百方說侯、久焉而聽之、是日赦書始至、則阿藤既死矣、衆益悼惜之、有司葬屍於長源寺、拜奠者日夜蟻集、僅浹月、廣坮穹碑、嚴若王侯、而不知孰營建之也、阿藤之就刑也、賦歌一首曰、信濃奈留、也末路乃由岐登、毛呂登毛仁、波留袁茂末多天、起由流希布加那、因人鐫之碑陰、侯聞之大怒、傳命毀之、而重建如初、有司不能禁、後侯免官、傳位世子、因不復毀云、

阿波侯姻戚たる故を以て、阿藤が赦免に就いて盡力されしを寫す、是れ倒挿法なり。而して赦書至れるとき、阿藤は最早や死せりといふは、文天祥が柴市に斬られしと相似て、人をして天道是邪非耶を浩嘆せしむ。當時士庶が悼惜せしもの、亦た宜なりといふべ

し。有司は暗に大夫安富氏に應じ、葬屍於長源寺の句は、夫人の賜金ありて護送者を諭し、以て身後祀奠の用となすとあるに照應せり。垗は墓地、穹碑は空を衝かむばかりに石碑を高大にせしことなり。かばかりの大石碑を建てゝ、その建設者の名をだに知らぬといふは、居然として至誠の人を感せしに因る者にして、阿藤たるもの、死して餘榮ありともいひつべきなり。阿藤之就刑也賦歌一首とあるは、中段書及ひ和歌を若山に學ぶとあるに本づけり。さて此段の碑垗を營建するに至りて、阿藤が辭世の歌を鐫刻せしことを寫し前段を收束して、餘蘊なし、誠に老手といふべし。これ即ち索線法を用ひたる者にして、筆路毫も紊れず、和歌云々は、自ら全篇を貫穿せり、讀者よろしく、作家の苦心を想ふべし。かくの如きは、もとより事實なれば、自ら當に然るべしといはゞ、それ迄の事なれども、選擇を爲し、數珠の玉の一條の絲につながれて、絕えて亂れ散らざるが如く、文章の終始をして照應せしむるは、固より淺者と道ふべき筋にはあらざるなり。拜奠するもの日夜蟻集すといへるは、闔藩衆庶がこの烈婦を悼惜するの深きを推知すべし。むかし五代の初、梁の忠臣王彦章は曰へり、豹は死して皮を留め、人は死して名を留む、と。阿藤の如きは、死して其名を千歳に留めたるものにあらずや。さてかの辭世の歌は、こゝには眞字を以て寫したれば、讀み惡くからむが、之を書き改むれば、下の如くなるべし。「信濃なる、山路の雪と、もろともに、春をもまたで、消ゆる今日かな」。芳紀二十二歳の女子、春をも待たでといへるも、宜なり。然れども其中には國の爲に盡せし決心の程もほの見ゆ。結末傳位世子云々とある、決して閑筆に非ず、即ち起首の奉仕世子とあるに應じ、首尾紊れずして、結び得たり

野史氏曰、甚矣女戎之蠹國家也、彼以其妖艶之色、行佞媚之辭、而其跡在黝冥陰晦之間、人君方視其可愛、而不察其可懼、而爲之臣者、堅執逆耳之説、以折未見之禍、是其勢固已難、況於挾輿援以制其君、如

若山者乎、

是れ論賛の提綱あり。前半は女寵の害の極まるを言ひ、後半はかゝる折人臣たるもの君を諫むるの難きを述べ、また又安富主計の事を暗示し、以て下を起す、すべて感慨の文字なり。

是以主計直諫能一黜之矣、而歸未安席、權削身貶、及其再入、群臣束手無策、國勢岌岌、有不可測之患、而阿藤以一女子、優爲髯丈夫所難、爲消伏禍於未發、志既遂矣、從容就死、毫無怨望之色、古今之久、四海之大、我未聞有如阿藤者、豈僅以女丈夫稱焉哉、

この段の事實の抽象的論述を爲せるもの、阿藤の精神及び功績を稱道して、筆力また遒勁なり、これを揚法となす。

雖然亦豈難事乎哉、士君子立身行道、苟以決死處事、雖其難十百於此、亦能談笑辨之嗚呼人孰無死、死而當義、國賴以安、而天下榮之、而趦趄齷齪、以貽無窮患者、獨非以畏一死耶、仕今之世者、聞阿藤之風、其亦可以鑑矣、

雖然の一句を下し、轉換力あり、妙甚し。長篇の大文字、この轉換なくむば、千篇一律の譏を免れず、強弩の末、魯縞を穿つ能はざるにも至りぬべし、而してこの末段の妙は、作者が滿腔の發憤、阿藤を假りて、吐露し以て能く一世の貪夫をして廉に、懦夫をして起たしめむとしたるに在り。これその風敎に補ある好文字たる所以、讀者は事實以外に、この精神を汲まざるべからず。

深長の意味屢ゝ小兒の遊戲に見ゆ　（シルレル）

愛は涙に濡かれたる時最も愛らし　（スコツト）

小説

みなそこ

大塚楠緒子

おなじ世に出づる榮もつ身なりせば、などて男には生れざりつる。歴史多き大陸の貴き土を、うひ〳〵しき靴の踵に踏み馴らしたまも、思へば夢のたゞ十七の春秋なりしよ。うら若草のわか〳〵と露にも堪へぬかよわき姿を、人はさいなみ世は苦しめて、あはれや逃るゝ方も無み、熱き情を胸の内にたゝみこめて去りしは何處、人の餌とらむ事の喜こばしきか、さゞ波立つる恐ろしの水の底をば慕はしとうち慕ひつゝ、今も浮藻に黑髮や亂れてかゝるらむ。溺れてうせし其くやしさを、誰れにか泣きて語るべき。ゆくりなく、我寫眞の君か手に入りにしも、生れつる國こそ異なれ、宿世の縁の淺からずありてならむを、珍らしとたゞ興がりてのみながめ給ふな。在りし面影の其儘に猶殘りゐるも、また今更の怨みにて、語らば長き身の上がたり、聽きて給はれそも、我れを何處の誰れとおぼす。榮えし國も衰へては過ぎし世界史かたばかり飾るといふも徒に空しき譽にて、紙くふ蟲もあるものを、文字の香も何時迄書の中にとゞまり侍らむ。雨に風に霜にくづれゆく壯嚴の美の殘んの跡も、思へば今幾年の命を大理石の苔の上に繋ぐらむかと、歎きは盡きぬ伊太利亞のかたほとり、ディアナの神の鏡と呼ばれつるネミの湖水のかたはらに、果物商なふ者の娘と生れしものにはべり。祖先は昔戰の疵受けてみまかりしと聽きつれど、其血つたへしとも覺えぬ我父は、劍握る人の物語かたるも憂しとて語らず。母はと人にとはるゝもつらし。それを吾身の悲しき事の始めにて、柩の前に燈しつる蠟燭の火の形に似て、濃き緑色の深きなげきをこめたる、彼の檜の下蔭に、朝は我がもて行く花に飾られ、夕はモン

テカァヴォーの峯出づる星の光に護られて、猶美しう若やげる身をも惜しまで、疾くしつらはれたる永久の眠りの床に入りにしは、我が十二のとしにて侍りき。清らかなる額に艶よく縮れてかゝりし髪の毛も、頑固なる父を始めて數多の人をよく懐けて情深く美しかりし眼も、明け行く空のあかぼしの様に消え果てつ。生れしは佛蘭西にて、父母の顔知らぬ程、ナポリの富みたる家にもらはれて育ちしを、故ありて又斯かる處にはさすらひ來しと、靜かなる夜語に語りきかされしもまことに由緒ありげにて、如何にして斯かる美しき人の我父の如き人に添ふらむかとは、幼なき心にも屢思ひぬ。ひとゝせ此地に遊びに來けるさる貴族の、そゞろありきに我家の前を通ひ馴れたるが、ふと我母欲しとうち亂るゝよし聽えたるに、父は怒り母は咽び泣き、われは父の腕に縋り母の膝に伏しまろびて、いかばかり小さき胸を痛めけむ。まことにさる事もあり侍りしよ。能く物知り居し人にて、殊に古き物好む性なりければ、天の樂園などには行きもせで、地の中に猶埋もるゝ前の世に伊太利亞の光さぐりてや在るらむと其時父の言ひつ。疾く背高くなれよ、十七にもなりなば、好き若者見出して許婚してむ、都人にと思へど詮なし。せめては都に親族にても持てる、餘りに鄙めかぬ人に嫁がせむなどいひて、膝の上に抱あげられつゝ、柔かき唇の頬に觸るゝに、赤くなりし我面見られむ事の恥かしと、後ざまに辷り下りて背を向くれば、桃色のきれ髪の毛に結びつけて、いざけふも葡萄の實とりて來、父にいひて、來む年の祭の衣は、惜しまずよき品を撰ばむとて、籠我手にうちかけられし優しき聲を懐しき面わも、此國の榮の再び此處に歸り來む日のありとも、また人には見せじ聽かせじとのやうに失せしにて、わが其時の悲しみを思ひ遣り給へ。さらぬだに深き痛みは何處にも滿ちわたりて、蝙蝠の飛びめぐる崩れし寺院の柱、菫の種のこぼれそめたる祭壇のきざはし、さては昔は露も滴ちむ乳色やせし、黒み青み、時てふものゝ踏み荒らしたる其か中より、技術の光明のあきらかにうち仰がるゝ石像の上などに、世の興廢をほゝゑみて、華やかに日の

光はさし添へど、いはむ方なく暗き淋しき蔭の、離れがたなげにひそみて附きまとふがいと詫しきに、飽くまでも憎き疫病のマラリヤの手は、強ひて人の黃泉の國へと誘なふなりけり。我母も始めは其熱よりにて、終に誘なはれてぞ行き侍りし。母みまかりてより暫時してなり、ひとりの兄は絹商人になればとて、遠きナポリへ旅立にしが、行迹をばたゞ其儘に爲して、去年はベルジアにて逢ひぬ、今年はローマにてとさへ去る人のいひつれど、己が家へは更に音づれもせず。そを語り出せば、父は僂痲質斯に惱める膝痛げに動かして、眉根よするのみ。兄は母の連れ子なりき。我れは父と母とのまことの子なりけれど、兄が爲には父の繼しきに、母の在らずなりしより、此家をいぶせく思ひての故とは思へど、かばかりに親しき睦ぶ妹をうち捨てゝいかで遠きわたり行ましゝぞ。今までは怖ろしき夢をみて寢られぬ夜など、眠ぶしといふを強ひて呼びさまし、兄の育ちをるナポリのにぎはしき祭の話など語らせては、いつのまにか寢入りて知らず。わけの朝たはふれに腹立つ兄に叱らるゝも猶はらからの心おかぬ樂しさなりしを、今は嵐の夜も雨の夜もいとゞしく物いはずなりし父の側に、如何ばかり邊淋しく思はれてかと、手業なき折は戸口に立ちて的もなき空をながむる事屡ありき。煩らはしきは兄の友なる彼のグリエルモよ。氣にくはぬ男なりとて、兄もさのみ親しうせざりしを、兄の居らずなりし後も、なにかと事ありげに出で入りしては、父に媚び我が顏色うかゞひつ。友と共にアルバノの山深く分け入りてかゝる花をとりて來ぬ、此色の美しき事よ、此匂のよき事よ、このほとりには見ぬ花ぞ、ひと束は汝が母の墓のまへに捧け來ぬ、ひと束は汝がほとりにおけかし、我が心とめて折りつるものぞとて、名も知らぬ赤き花を窓よりさし出して、氣味わろきゑみをもらしゆく。誰が邊におくものぞとて、たゞちに其花散らし捨てつるに、また二日ばかりたちて來つ。彼の花は如何にせしと問ふ。瓶の水のなくなりゐしを心付かざりしまに枯れぬ、惜しき事してけりといへば、氣にや入りたるまた折りてもて來むと、例の胸わろき眼遣ひ

して歸り行く後姿の、いかに醜くかりしよ。などてバオロの君にくらべむ。バオロとは、をかしとて笑ひ給ふな、身の上語り始めてはかゝる事をもいはでは叶はぬこそ恥かしけれ。男らしく美しき其姿かたちに我が初戀の燃えそめて、深くと胸に刻みつけしとこしへの名にこそはべれ。ある時互に心明しあひて、思はずより添ひて近づけし唇の、いかばかり熱き血燃えて、命もいらじと呼き交はしはべりけむ。とも知らで附き纒ふ彼のグリエルモの、終にはあからさまに恥ぢもせで、許婚の約を爲せ、我家にはしか〳〵の財あり寶あり、身の飾などにも金は惜しまじとて、やう〳〵迫る事の繁うなりゆくこそ疎ましけれ。かてゝ加へてまた憂き事の出て來はべりき。ある日バオロのふと音づれ來つ。われはゆくりなくその顏見し嬉しさに編みゐし靴下の糸の裾にからまるをも、解くま遲しと切り捨てゝ走り出て迎へしに、彼れはいつになく頸うなだれて、いたくうちしほれゐたり。なに事の起りてかと忙かしくとへば、さればよと我顏をながめて、俄にさりがたき事の出て來て、シチリアへゆくことになりぬ一二年が程は歸られじと、はや別のつらさの思はれて胸せまりて物もいはれずなれるわが背を撫てつ。マドナの前に祈りて契りつるわれらぞ、すこやかに待てかし、別るゝまの思出に寫眞とりかはさむ程に、新らしくうつしにやゆかん、さな泣きそと、男心の思ひさだめのよき。怨めしきやうにて、いつ旅立ち給ふぞととへば、カーネバルの祭の果の日にといふ。その日はたゞわりなき涙にのみくれて、次の日うつしにゆきし寫眞のやがて、鮮に出來上りきぬるをとりかはし、わかるゝまのまでゝろもて必ず肌にそへむと約しつ。わけもなき悲しさの胸に滿ちて、手業もなさで起き伏しする程、たゞちに廿日ばかりは走るやうに經ちて、カーネバルの日は來りぬ。いつもは待ち兼ねし其日も、此度はバオロ追ひ立てむ祭のやうにて忌はしきを、それのみかはまことに忘れもやらぬはその日よ。

酒を呑み肉をほふり顏を塗り姿を更へて、踊り狂ひ喜びておしなべて人は短き齢をも延ばすべき其日をわれ

は我身の最期の日になして戀をも此世をも夜半の寢醒の夢より果敢なく見捨にしてそ口惜しくはべりけれ。祭の中の日の夕つかた、今宵は心緩かに何處へかゆきて、パオロと名殘り物語せましと、共にうたはむといひ踊らむといふ煩さき人目をさけ〳〵て、昨日着し新らしき赤き衣をもわざと着けず、夕暮の色にまぎれてそと戀人の窓を音づれぬれば、とく待ちてありけり。町の方はマンドリ彈く音、ヴァイオリン摩る音、タンボリンの鈴のたえまもなく響きて、タランテラ踊るにか、彼處此處どよめきわたるに、人に見られなば强ひて彼處へいざなはれなむ、こよひ隱るゝには墓場ならでは外によき處もわらじ、母のほとりにとや二人が行末の事をも語らはむと、そなたへ歩み〳〵、パオロの君よ、まことわれを思ひ給ふならば、如何なる障碍にもうち勝ちて、たゞ樂しき行末を待ち給ひてよ、許婚の事今いひ出しとて、かたくなゝる父の諾なひげにもなければといへば、そを今更とふ事かは、汝れさへ心かへて誓ひつる言の葉を忘れずばといふ。などて我が忘るべきたゞ別るゝがつらくてとて、うち泣き〳〵ひたと二人、歩みにくき迄より添ひて、淸き戀の情の胸に溢れて、のちは物もいはで歩む時、靴音のにはかに近つき來りうしろより、抓みかゝらむばかりの聲にて、パオロか、わがいひなづけの女何處へ奪ひゆく、我手にかへさずば辛きめ見せむと、酒臭き息吐きて前に立ちふさがりぬるは、踈てや彼のグリエルモよ。如何にして斯ばかり執念く附きまとふらむと、腹立たしさにおのづから眉も逆立ちて、われは君といひなづけの約しけることもなきを、餘りに禮なき事いひ給ふな、今宵パオロの君と母の墓にまうづる道よ、とく立ち去り給へと、パオロをうしろにかこひたれど、いつもには似もやらぬ荒々しさにて、痛く酒をか飮みたる、足元も危ふげにて、わが肩を摑み、パオロが方へ拳を振りあげて、否といはゞ荒くれ男のある程の力してうたむと身構へたり。さては如何になりゆくらむと胸もうちふるひ、勇氣あるパオロには此男などの勝つべき事とも覺えねど、かゝる醉ひどれを敵手にて、もし疵などの顏につきたらむには、人の指さ

して笑ひやせむと、われながら賢こく頓に心定めて、あげたる拳に縋り附きつ。よしなき疑受けつるこそ口惜しけれ、さらば疑の晴れむやうに君とゆかまし、何處へなりとも伴へといひて、そとバオロに、惡しき酒呑みのなにせむやも量り難きを、今宵はわれ欺きてよきやうになせば、君はとく立ち去りて給はれ、あすの夜あすの夜と耳元にさゝやきつれど、醉どれは心附きもせぬげにて、わが腕をしかと取り、去れ〳〵と足踏みして、バオロが暗き並木の中へ立ち去りゆくを、睨みすかしつ。をりしも月さし出でゝ、見えみ見えずみ其後姿の消えも遣らぬを、あな殘り惜しやと追ひゆきてとりすがりたきやうに慕はるれど、痛きばかりにとらへられぬる腕の振りはなたれぬくち惜しさよ。町の方へゆきて踊の群に入らばやといへば、否とよ、踊らむとて汝が跡をつけて來しと思ふか、われを嫌ひてバオロ慕ふ憎さよ、こよひは二つのうちの答を必ずひとつ聽かではやまじ、否といはゞわがふるまはんやうこそあれと聲だかにいふ。悲しやわれは魔神などに魅入られしやうにて、果ては恐ろしうなりつ。よき程にあざむかんと思へど、もし見すかされなばいかなる憂目にかあはされむと身も震ひ〳〵、われ知らず從ひ來ぬるは湖水の上の崖のほとりなりき。月は淸らかに水の上に光を落して、繁りたるオリーヴェの葉の上にてりかへして、銀のやうにかゞやけり。果園にはチトローネ、オランジエの今年はみのりやよき、枝ぶりの豐けさ。遠き向ひの方はゼンツァノーよ。白き城の壁の月あかりに薄く見えて、其處にも燈火の繁きは人のうちぞめくにや。この邊に桂の樹やある、香はしき、香の衣の袖にしむやうにて、斯かる夜やディアナの神の下り來まして、水鏡見て化粧やつくると、驚ろかされたる胸のとゞろくまも、猶あまりに淸らかなる景色に見とれゐれば、などて答をなさぬ、なさずばするやうこそあれと、ひときは聲を張りあげぬるは、さきの程よりくど〳〵とわれをさいなみゐたるなるべし。何を答ふるにかと恐る〳〵その面を見れば、いつまでそしらぬ顔して見する、嫌ふわれにかくまで思はれぬるも美しく生れて汝が作れる罪

の報ぞ、妻にせずば如何にしてもやまじと、抱きよせる力の飽くまで強きも飽くまで疎ましくて、われは出來うるかぎり胸を掘ゑつ。今宵さへ此うはゞみのやうなる手より逃れなば、またなすよしもあらむなり、とかうしてあざむくに如かじと、氣味わるさにふるふ聲を態とつくりつ。ほゝゑみて嬉しげにしてみせて、ゆるし給へ今迄は君を試みてみしなりき、今は僞とも覺えねば、喜びて君がみこゝろの儘になり侍らむ、餘りに強くとり給ひぬれば、腕のしびれて痛くなりぬるを放ち給はぬかと、疎ましさを忍びて甘えて見すれば、愚かなる彼は忽ちに面を柔らげて、まことかと酒臭き息を近う吐きかけつ。まことならでやと再び腕にすがりて、この崖を下りて水のほとりにゆきて見まさずや、餘りに景色の清ければと、たくむともあらで思はず知らず誘ひぬるも、われから我身を死の淵にいざなひしに外ならずばへりけり。下りぬればあたりは物凄きまで靜かにて、浮草の漂ふ水の面は青みわたりき、底は何處までとも知られず。そなた彼なたの崖に圍まれて月影の

屆かぬあたりは、そよ〳〵と風の木の葉動かす音も、死神などのつぶやく聲音などのやうにて、つと身にしみて恐ろしう、餘りに思ひしよりもこゝろわろきまで淋しきに、とく歸らまじと側をかへり見れば、グリエルモは酒氣もやゝ失せて眠くやなりし。すべらばひと足にて飢ゑたる水に呑まれなむ、土もいさゝかくえたる處に足たゆげに立ちてあり。われはふとおとさきもなくパオロの戀しさの胸に滿ちわたり、遠く別るゝ苦しさも、今宵の物語にいさゝかはなぐさめばやと、パオロもわれも思ひかけるものを、あくまでも附きまとひさまたぐるグリエルモの憎さの、いやがうへに憎うなりて、盲になれる戀の瞳には何物も見えず。此男のなくば〳〵と、せめては醉ひ痴れし足の滑りて水の中へ入れかし、這ひ上らむまを逃げのびてパオロ慕ひてやゆかまし、溺れぬ程にわれ突き落さんか、されど〳〵あはれ溺れたらば如何にすべき、溺れて死したらば如何にすべき、あな恐ろしき事思ふわれかなと、さと吹き折たる風の襟元に冷たくてあなやと身を縮むるはづみ、いかにし

たりけむ小石につまづきて、身をさゝへかねてたふれかゝり、男の背へ手の觸れたるに、あやしや胸の動悸俄に烈しくわれしらず力を込めてその大きやかなる躰を水の面へと突き飛ばしけるも夢か現か、あはやすさましき音して沈み入りしと思ひしは愚か、さすが男の賢して踏みとゞまりて、此方を睨まへたるまなざしの、あはれ思ひ出でても恐ろしくこそはべれ。われは今更に惡しき事仕出しつと悔ゆるもなにの甲斐かあらむ。憎き女の仕業かなと飛びかゝり來る男の片手に、月の光の凄まじくかがやきしは、おそろしやよく砥ぎたる小刀をもちたるなりき。さては始めよりかゝるものを持ちゐけるよと、今は恐ろしきに身もすくみて、うち叫びながらも、のがれん程はと彼方へ走り此方へくゞれど、誰れのかゝる夜かゝる處へ救ひに來はべるべき、父も兄もさてはパオロに今ひとめの逢瀬さへ叶はぬくち惜しさも思ひ悲しむひまなく、終にははたと追ひつめられ、今は彼奴の手に殺されむよりはと、辛うじて身をうちかはし、水の面の月を亂し、怨をのみて底深く沈み入りぬ。くち惜しき我執着の殘りては、生き存ふるグリエルモによき事はあらせじ、たゞ戀ひしきはパオロよ、とこしへに戀わたる苦しきを思ひあはれみ給へ。さて我寫眞は其後、羅典人種の風姿に美しうあらはれをれば、よきモデルよとて、君のみ國のさる畫師の君の買ひとり給ひしを、またも君が夫君の手にゆづられて、行李の底深くをさめ入れられしかば、何處へもとゆかるゝかと、心安からずも思ひしを、山水の美のまた秀でたる日本の港に上りて、やがて君が机のほとりに置かれ侍りき。あはれかゝる悲しき身の上がたりのあるぞともしらで、あるは髮の結樣衣の着ざまゝ額つき口つきよしと惡しとさま〳〵に許し弄ばるゝ我寫眞こそ、猶しも憂世へ心殘りのひとつにはべれ。つれ〳〵にやおはせし、我身の上語りいかばかりよと、語り盡くして、聲はわが机のうへの寫眞よりぬけ出でつゝ、何處へか消え去りしと思ひしは夢か現か、不思議やエヌスの神にさも似たる美しきまなこのほとりに、露の涙の玉のやうなるしずくの。

（をはり）

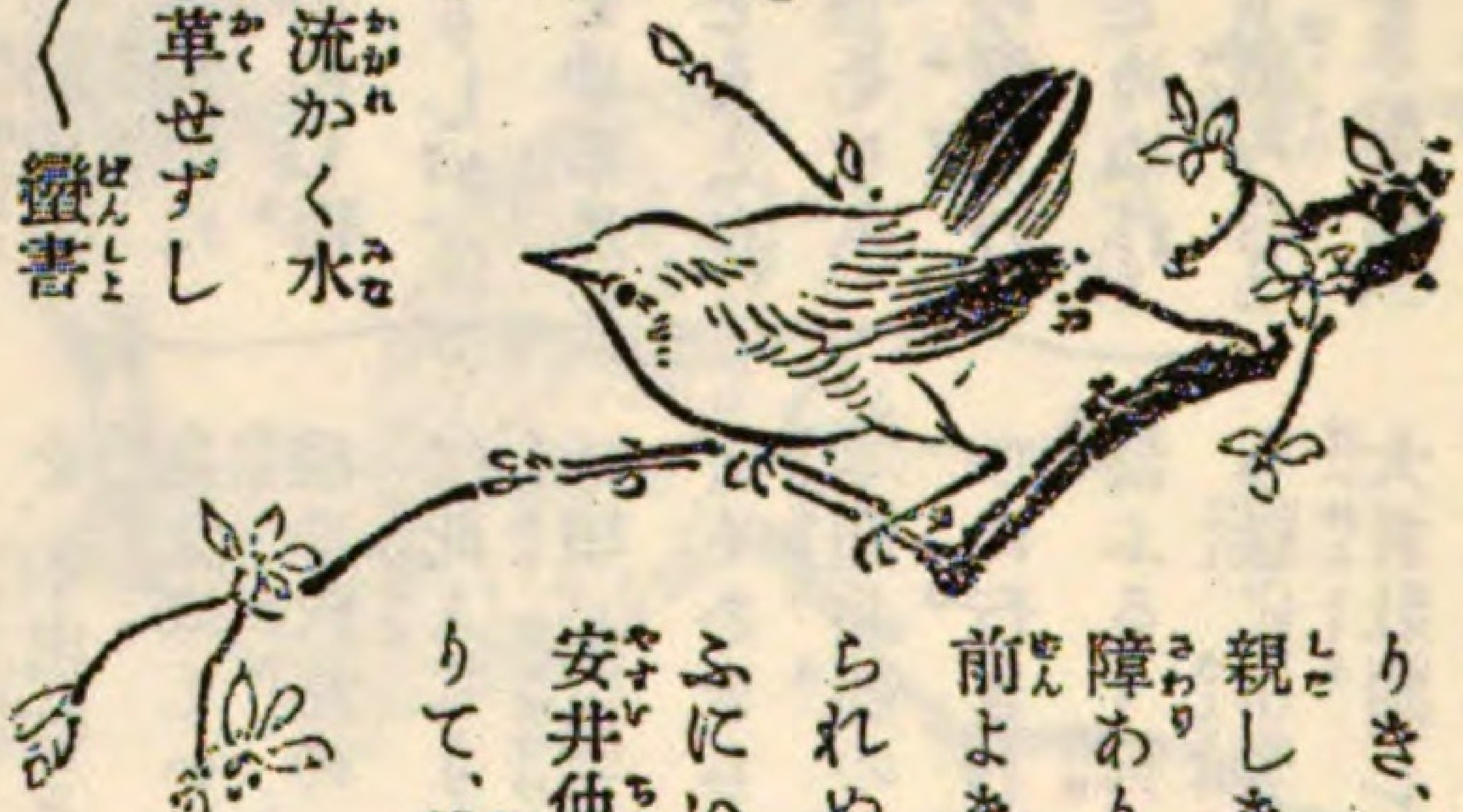
雑録

夜半の埋火（つゞき）

花圃女史

三　せき入るゝ苗代水

世の中は、日に／＼何となく騒ぞき立ちて、人心安からず、はやりかなる若人原は、そこにうちよりて、泰西の文明をとき、戎器の利鈍を引くらべて、彼の國に心を傾け、とても徳川の流かく水源にごりきつるを、清めんには、根本より改革せずしては有り經ん事かたかるべしとて、下におさ／＼蠻書をひもとき、一字／＼に字書をしらべて、同志より／＼相集ひては、勉學おさ／＼たゆみなきほどに、矢田堀景藏、武川五郎二郎、(山口駿河守)塚原重五郎(但馬守)など、開國進取の説を唱へ、予もこれに與しておさ／＼泰



西の文物を研究す。此文久慶應のころ老中に成給ひし小笠原圖書頭敬七郎とて、厄介にて居られつるが、深川の別業合江園といふに、名家をあつめて遊び給ふ事おりき、明山公子と唱へられ、文字を好き、父石庵も親しきものにいつもむかへ請じたまふ、或日、父は障ありて行がかたければ、同席すべき人の許へ、御前よきにとりなし給へと斷りてこよ、と予は命ぜられぬ、御代官をつとめられし羽倉外記簡堂といふにいたりて、かく／＼と述べつれば、鹽谷弘藏、安井仲平、尾藤高藏、齋藤順治竹堂など、其坐におりて、父御差文ありとなれば、吾子行きね、父の代りに子の行かむは當然なり、いざこれよりと、多人數にせき立られ、つひに伴なはれて、和泉橋のあかしやより、船にのり、柳橋の藝者などともにつれて、合江園に着きぬ。

其席にては、詩など作り、文字の物語などやゝ興すゝみ、盃の數も重なる程に、予の隣席なる久保田治部右

衞門とて、劍柔術の達人、聲高に鎖國論を唱へ、われは豁なるが心の違ひて聞ぐるしくおぼへければ、さても卑怯なる人かな、と口のうちにつぶやきしを聞とがめ、何をといひさまに、背を突きて、とつて引据へ、膝下にしかとふまれたり、すは何事、と人々立さわぎ、明山公子もかけ付けたまひて、まづ〳〵と和むるを、久保田はうち笑ひて、我片手にても、かほどに手向ふ事だにし得ぬ小僧の、口計りはつよがりて、我言葉を嘲けりしが、可笑しければ、一寸たはむれしのみなり、と膝をゆるめしに、人々も心落居て、明山公子はなほ事のもとをとひたまふまゝに、此方は若氣のはやかる色もなく、そも久保田如き鎖國説を唱ふる者は、花見群集の中の婦人の如かるべし、外人を醉人と見て、彼方に影を見とめぬれば、其婦人の爲に、何を爲べきやもしらず、たゞ恐ろし害や加へむと、逃げ迷ふ、卑怯なる振舞に似たりされぼこそ、卑怯とは申しつれ、と答へしに、それも一理あるべし、其意味をもて、一文を艸しね、とてかの引据へられしを心にとめず、なほくつろぎものしてよなど、面目をほどこして立歸りぬ、其日より二三日を經て、とひきたりしは、久保田の息、泉太郎といふ人なり、久保田は同じ三味線堀に住居すれば、以後同年輩の泉太郎と、親しく交際わりたしとて、藤田東湖の軸の、今も家にあるを、引出物として、懇親を結びにおこせつるなり、この泉太郎といふ人、有爲の士と見えつるを、惜しむべし、後に伏見の戰にて討死しぬ、久保田備前守といひしは此人なり。

此頃、高畠五郎とて、牛込赤城にすまゐするが、蘭書をよくあきらめしりたればとて、御勘定をつとめつる榎本圓兵衞の息、釜次郎(武揚)と、此人につきて讀てもらひに行きし事ありき、かゝる世の中に、二十前後の血氣溢ふるゝ程なれば、大道せましと肩はりて、大小のあたら腰に巾着の如く用なきを手持無沙汰に思ひながら、大言壯語しつゝ、あゆみくれば、牛天神の横の坂道にさしかゝりぬ、今の世だに、彼處は淋しく、人通りのなきほどなれば、其頃はまして、道すがら物がたりつゝ、足取もはかゆかず、夜は深々と更け行きて、我つく息も耳立

ほどなるに、喰こむ如き夜氣暗を冒して、吹風愁々と荒からぬが、ことに何ならむ物のけなどの聲の心地して、虚勢をしめして、二人の間にはさりとはいはねども、爪先ちゞむ心地しつゝ、ふと語りつゞけむ言葉も絶えたりける時、榎本ははた〳〵とかけぬけて、シヤ化物よと太刀眞向にふりかざして、道傍の大木の根へきりつけたり、共にありし予の驚きはいかなりけむ、そなたを見むも怖しく、しかすがに見ゆる往來の人影を追ひて、一散にかけ出しぬ、榎本はまことに木の根を怪物と見たりしか、はた又、何となく浮足たちたる時なれば、勇氣をつけむとて、かく太刀ふりかざし切つけしか、いかに親しき中らひなりとも、文弱の身にこそあれ、二腰の手前もあれば、其後は其夜のこわかりし事もかたり出でず、五十年後のけふ迄も、二人共にいひも出ずして忘るゝが如く成にしなり。

此物語をいひ出づるにつけても、今の子供等の前にははづかしき迄予は化物のこわかりき、二十過る迄も、夜



半に一人行くほどは、化物の事のみ胸にうかびたり、予の尤こわかりしは、某家にて、三尺の襖丈なる額あらはれ、バチ〳〵と交睫する音の、ほど遠くまで聞えしといふと、勤番の折、火鉢をかこみて物がたる程に、其座の三人の顔の、アナヤといふまに長くのびて、又もとにもどれりといふなり、なほ今の世の人の可笑しく思ふらむは、化物に名のあるなり、化物に三叉五郎右衛門といふあり、瞑目して二度此名を唱ふる時は、忽然として目の前にあらはるゝといふ尤予のおそれ思ひたる化物なりき、されども、世に驗ためしといふ事あり、一度物におそるゝ時は、ふたゝびさる心なくなるものぞといふ、これも予のこゝろみてまことに然なりと思ひし所なり、此榎本の化物退治より數年のちの事なれども、所用ありて、本所御舟藏前、今のセメント會社のある所を深更に通行きつる程に、闇の夜道をさまたぐるものなり、避けて行かむと一

足二足しりぞくうしろの方には、腰のあたりをしたゝかにうち据へられたり、時既に維新の初にありて士籍を辭して市人になりつる折なれば今はとかく引しらふ猶豫もなしたゞやにはにかけぬけて、ほど遠からぬ家にもどれば、腰の煙草入の煙草筒はくだけていさゝか腰にいたみもおぼゆ、さては物取り盜人の刀の峯打にしつらむものか、何とも思ひはかけず、たゞおそろしかりしとて、はては笑ひ興じつれど 其時より此方、夜中いかに遲くなり淋しき場所を通行すとも化物おそろしとおもふ心ひたとうせてたゞ盜人のみおそろしと思ふことになりにき。

かく臆病なる性にはあれども、なほ生兵法の國家に供へむ覺悟なしとにはあらず、二十四の年十一月に學問所教授方出役となり、家の業に勵みぬべき職ながら、なほ兄の鐵砲などをもち出で洋兵式調練などをするをいと心ゆく業に思ひつ。下田奉行、伊澤美作守亞米利加人よりもらひしといふモト込のカラビン(砲名)を持ちて角筈邊へしばしばうちに行たり、此頃、甲府徽典館學頭を申しつけられて、甲府へ行ことゝ成りて、我本意ならぬ事なれども出立す、甲府は人の知る如く、甲府樣といひて、德川家の連枝文照院この所より出で、將軍家を相續しつるより、甲府の城は番城になり、甲府勤番といふものを置かれて、二百人計あり、外に與力同心をおきて、城を守らせらる、又旗本御家人のうちに罪あり改易になる程の罪にもあらぬは、甲府へ逐らるゝさだめなり、寛政の初め樂翁公政事を行はせられし時、徽典館を設けられつ、甲府の與力に富田某といふ人あり代々教授となり居りしに天保弘化の際、甲府勤番支配淺野中務少輔徽典館の規模を大きくせんとて、昌平黌より教師を勤番せしむる事となりはじめは友野雄助、乙骨彦四郎行きつ、二度目には林伊太郎(鶴梁先生)父石庵行きつ、父石庵は二度まで行きたまひしなれ、予は蒔田幸一郎とゝもに行きしに、勤番支配、大久保豐後守、小笠原長門守などにて、小笠原は西洋銃隊を獎勵するに、教授不馴なれば、かねて好める事とて、號令をかけ、兵を操縱する、尤學頭の側に予のたのし

としてしつるなり。
序なれば、我伯母なる楠子刀自の事を物がたりてむ、楠子は前にもいへる如く、めづらしき心つき性の女なり。すべて田邊の家の女王の如く、心のまゝに振舞はれつれば、出入する弟子等は此鼻息をうかゞひて、心をとらん事をつとめたり、いかなる荒くれたる男をも、すなはち手の下のものに思ひて、はやよき所へきたまひし、これをしてゆきまたへ、など使ひ立てゝ、事とも思はず、時節柄の事なれば時勢を論じて語り更けぬれば、其部屋へ立出でゝ、サア〱いつまでやかましく何をいふて御出ぞ、御歸りなさらぬか、とせき立つるを、此人々怖れて、此頃、八十磅の砲の一番大きなるものなりしによそへて、八十磅のおばさんとふるひおそれていはぬ人もなし、栗本鋤雲は其頃、喜多村哲藏とて、中にもみにくき顔の澁面つくりたかやうなるを、此八十磅のチヤ哲さんか、よい所へ來



なすつたの、肩がはつていけないから、ちつとたゝいてもらひませう、といふを、迷惑さうに唯々としてうしろにまわり、たゝきし面影おかしかりき、と今も笑ひ草にのこりたり、彼高齋精一(號單山)ある時泥鰌を、桶に入れ、進物としつるに、八十磅は色を正して精一をねめ付けさても、御身は罪ふかき人なるかな、生たる物を進物として、他人に殺生をさせんとす、ましてや、今日は我家に志の佛の日なり、一時もかゝる生類を置く事かなひがたし、とく持歸りてよ、およそ人にものをおくらんには、其人のすくべきものこそよけれ、心得なくしての進物は、以後決してうけまじと劍もほろゝにいひ放なされ、高齋は坐にもたまらず、さりとて家に持かへらむも今更重荷なりとてもの事に放生會を、と直ぐ前の溝に不殘はなち捨たれど、さて此不興の儘にては、又後の祟もおそろし、八十磅の心に協ふ樣なる品を、と種々心をくばり

て、何なりしか其後過日の疎忽をうち侘びて、これをもてまかりぬ、とさし出したる品をこれはよくこそとてほく／＼とうけおさめたまへり、すべて人のかまで恐れ合ひし人なれば、彼榎本など、いたく嫌ひて、楠婆ならぬ、くそばゝよ、とかげにてはいひそしり合へり。

此姉に引かへて妹なる鎮子は、いとおだやかにあはれみ深くしかも又賢明にておはしき、此程父は世を去たまひき父の歿年の年齢はたれも知る人なし、父は年の事をいはるゝを、いと不興氣にて、われは猫の年なり、といつも答へたまひぬ公に記されたるは七十六なりし、長男は彼家業を嫌へば、弟子をば大久保敢齋といへる高弟にゆづりぬ、此不幸に引つゞき火災の爲、家を失し、いよ／＼困難をきはめつれども、兄は講武所出役となり、砲の稽古場などありしより其燒殘れる所に建ましなどして住居す、予は任みちて、甲府より歸宅し、久しく病ひに苦しみし程に、外國奉行といふもの出來、其手付書物御用出役といふものに命ぜらる、此時、御徒目付永井連藏といふ人、下田にありて死去し、相續人なし、親の職をたゞちにのがるゝなれば、是非に太一を養子にせんにはいかにとて、新見蠖藏といふ人の切ちにすゝめけるを、母はうち聞たまひて、御信切なる思召のほどは、不淺存じぬれど、太一は人の家をつぎて身をたつる程不能の者ともおぼえ候はず、他の人をもとめたまへとこたへたまへるに、新見は今更赤面して、過言を謝して立ちかへりぬ、この始終を側へに聞し予は脊に汗をおぼえて、母はさまで予にたのみを屬したまひしか、いで一奮發して、この御言葉にそむかぬ樣にならまほし、と思ひ込みたりしは、いかに、母の一言一句予の心を動かすものぞといふ事を思しりね、兒等の敎育は忽緒に成がたき者なり、尤細微なるふしに心をとめよ、親のさりとも思ぬ程の事にも、小やかなる頭腦はさま／＼の解釋を加ふる者ぞ、とかたり聞けたまふも、事のつひでの敎へ艸としたまふなるいとうれしかし。

四　島の荒小田

其時の外國奉行水野筑後守は、性剛直にして果斷なる

人なりければ、兩都兩港延期談判の爲歐羅巴へ使節に命ぜらるべきなりけれども先に神奈川奉行をつとめし時、ロシヤ人の浪士にころされし際一時奉職無狀の罪を以て奉行の職を付けられしを、今又使節になしてやらんには、彼國人の感情いかゞわるべしと、英國公使チールコックの忠言によりて、竹內下野守、松平石見守使節を命ぜられぬ、されば一方には水野の不平をなぐさめ、かつは此人程の才なくば、所置難儀なるべき小笠原島の巡檢を命ぜられぬ、折しも外國の公使より、同島は日本に屬すべきや否やを問合せきつるに老中安藤對馬守氣をもみて、少しも早く水野を巡檢にやらんとて、予も隨行する事となりこれを機として、水野より推薦する所あり、調並に召出され、世祿三十俵を賜り、新に一家をなすを得つ、小笠原島はもと無人島なりけるを文政天保の初め、アメリカ人住居し、其後、港をひらきて交易をする頃、舟の目錄にボインアイランドより來りしといふ事なれど其頃は父島母島を合せて人口二十一人、皆西洋人のみなり、水野の一行は



水野筑後守　通辯堀某
目付服部歸一　御徒目付佐藤眞一郎
調役由比太左衞門　同　松本房之丞
調役並田邊太一　御小人目付林和一
定役小花作助　御醫師小野某
同心松屋權之丞　畫　工宮本玄道

以上の人々にて、咸臨丸にのり、同島にいたりて、在住の外國人にさとして、歸化せしめ、日本の法律に遵がふ事として、今迄開墾しつる所は、地券を與へなどす、同島は地味豐饒にして、五穀實のりよく、中にも甘藷、馬鈴薯、生長すみやかなれば、客中の徒然に

畠のボテイトこれヤア小サいナ
かうしちや置かれぬ一思案
かぬ次郎草とれ鐵五郎糞やれ
大ちなつた〳〵

と拳の手振をつけてうたふ、唱歌は予の作りしなり、かぬ次郎、鐵五郎は、八丈島よりつれ行きし、百姓八人の中の名なり、

略、同樣の事務も運びければ、翌年筑後守に隨ひ歸京せし年の四月、荒井氏巳已子と婚す、其後、本家の兄、コロリにて死去されしより、隣家に引移して、家族の後見をする程に、我家に一男を擧しもほどなく死しき、此程の世の中の有樣すべて鼎の涌くやうにおこりたち、鎖國攘夷の說盛りになりて、少し洋書にても繙くものは、攘夷家の惛みはなはだしく、予も又、外國奉行調役の職にあり、開國の利をときなどするを、彼輩敵としねらひて、或は門前に張札して燒討にしべしと虛喝し、あるは途におやしき者尾行しきたり、あるは上野三橋など、人の目につくべき場所に、天誅を行ふべしと張札されしなど、家內の者は一日も安き心地はなかりしなり、然りけれども、予はいよ〳〵志を堅うして、青年輩の餓鬼大將となり、米田桂次郎の英語に熟せるをもて、これを家におき、志ある輩の、富永冬樹、矢野次郎、沼間守一、須藤時二郎、尺振八、乙骨太郎乙、益田孝、淸水卯三郎、又は箕作貞一郎麟祥、など一日として家にきたらぬ日もなく、片言まじりの英書つゞりして彼文物をしたひ、鎖國の不利をときなどすれども、時の勢の詮方もなく、上には鎖國の說、勝を得て、先づ鎖港談判の爲、歐羅巴、佛蘭西へ、池田筑後守、河津伊豆守、河田相摸守、さし遣はさるべく命ぜられたり、予も此時、組頭にて隨行を命ぜられつ、行なはれぬべき筋ならねば、いさぐよくこゝにて職を辭さまくおもひしも、水野筑後守、既に退隱の後なりつれど、深くその不可を忠告されたるをもて、彼地に赴きぬ、彼國にては時の外務大臣と談判の外さある用事もあらされば、一行の青年輩の爲、西吉十郎を請じ會頭とし、ホウイトンの萬國公法を會讀し、又佛人レオンロニーを招きて佛語を學びなとしたり、使節は固より、達すべき筋ならぬのみか、英佛諸國等の合同して、長州へ問罪の師を向へんとの事實を知り得たれば、打捨おくべきならずと、筑後守始め、佛國政府に公書を與へて、其師猶豫の約束をなし、歸朝し

て、其旨をも申上て將た鎖港の行はれざるを極論し、開國の國是を一定すべしと、一同歸朝し、横濱に上陸するや、幕府は大に驚き、其理由をも糾さず、出府を差留たり、筑後守はこれにかゝはらす、直ちに江戸表へさしかゝり、大森まできつる折から、幕府よりは、目付栗本瀬兵衛、後ち、安藝守鋤雲など立むかへて、使命を全うせずして立もどりしは、取もなほさず罪人なり、これよりは江戸の方へまかり通る事かなふまじ、と安宅關のそれならねども、權幕するどくいひ聞けぬるを、心剛き池田はいさゝかもひるみたる樣なくして、こはいぶかしき事をうけ給はるものかな、まことに使命を果すか、果さゞらんかは、此後の問題なるべし、百聞は、一見に如かずとぞ、實地の見物に得たる事々の、いかにして命に隨がひかたきを以て、反省を乞はむ爲に、立もどりしのみにて、あながちに使命をはづかしめしとはいひ難かるべし、斷じてわれは、今一度、此議を申開らき、かねての素志も合せのぶべき機會なり、通させたまふべし、と乞ひけれども、ゆるすべくもあらぬ氣色に、色を正うして、よしさらば、君の力の與ふ丈けとゞめ給へ、われはわが力の與ふ丈け通らむとす、御使者等の一命もらひうけむ迄も、と刀そりうつて立かゝるに、栗本は飛しさり、まづ〳〵待〳〵待たまへ、さらば、心の儘なるべし、命計りは助けたまへと手を合せて拜しぬとぞ、まことの事なりしや、席に居合せずして見ざりしが、人々は後の笑柄になしたりき。

池田はかくして、とかく江戸には入立つれども、思ふ事はかなひがたくして、遂に罪にとはれ、改易となり、予も又、小普請入百日の閉門を申付られき、若人の血氣なる心には、何も〳〵心外なる事のみなるに腹立しく、大小すてゝ、町人にならばや、寫眞屋こそよけれと道具など買とゝのへなどするに、又少しく心のなぐさめぐさぞ出來たる、其頃、洋癖家と聞えたる松前伊豆守は、はじめてテレガラフを家にかけなどしつる程の人なれば、同じ心の親しう行かよふに、又成瀬彌五郎といふ人有り、こは故石庵先生の門人にて、予が幼時よりの友なりければ毎夜の如く行き通ひて、物語ふかしぬるに、松

前は御老中にて、成瀬は御目付の、連絡つきて、予に意見をとはれ、又は予ののべし意見は、多く世に行はれ、所謂黑幕の位置にありて、先づ海外留學生をおくらむ事を思ひ付きて、説すゝめたるに其言行はれて留學生派遣の幕議定まり、箕作奎吾（菊地大麓）外山捨八（正一）中村敬甫など英國へ送られき程なく予は、再度外國局に出頭し、組頭の待遇もて、外交文書を專ら擔任すべしと委ねられけれど、局にありても、かゝる世の中の事なればすみ付わしく、今迄の外國と往復の書類の亂雑になれるを整理せんと、役所には出勤せず、山下の我家へ局をおき、書物方、廣澤、淺野、などいふ人々は、この所に出頭する事として、通交一覽百八十卷を編輯しつゝ、たゞ世の有様のおしうつるを手を束ねて見過しぬ。

結婚雜談

淺田空花

一　從兄妹同士

◎血屬結婚の危險、一度流傳されて以來、我國人が久しく馴致された從兄弟同士緣組の一習慣は全く排斥破壞されたる如き姿となつた否な全然排斥されざる迄も近年この種の緣組が著るしく減少したのは爭ふ可からざる事實である。

◎我國のみに止まらず、歐米諸國に於ても、從來從兄弟の緣組といふ事に就ては、迷信とも思はるゝ程の意見が行はれて、隨分流行して居つた、北米合衆國の如き、婦人の權利强大にして、自由結婚の極端なる程度まで是認せらるゝ國柄に於ても一時非常に流行して、結婚は從兄弟同士に限るが如き氣運を現はした事もあつた。

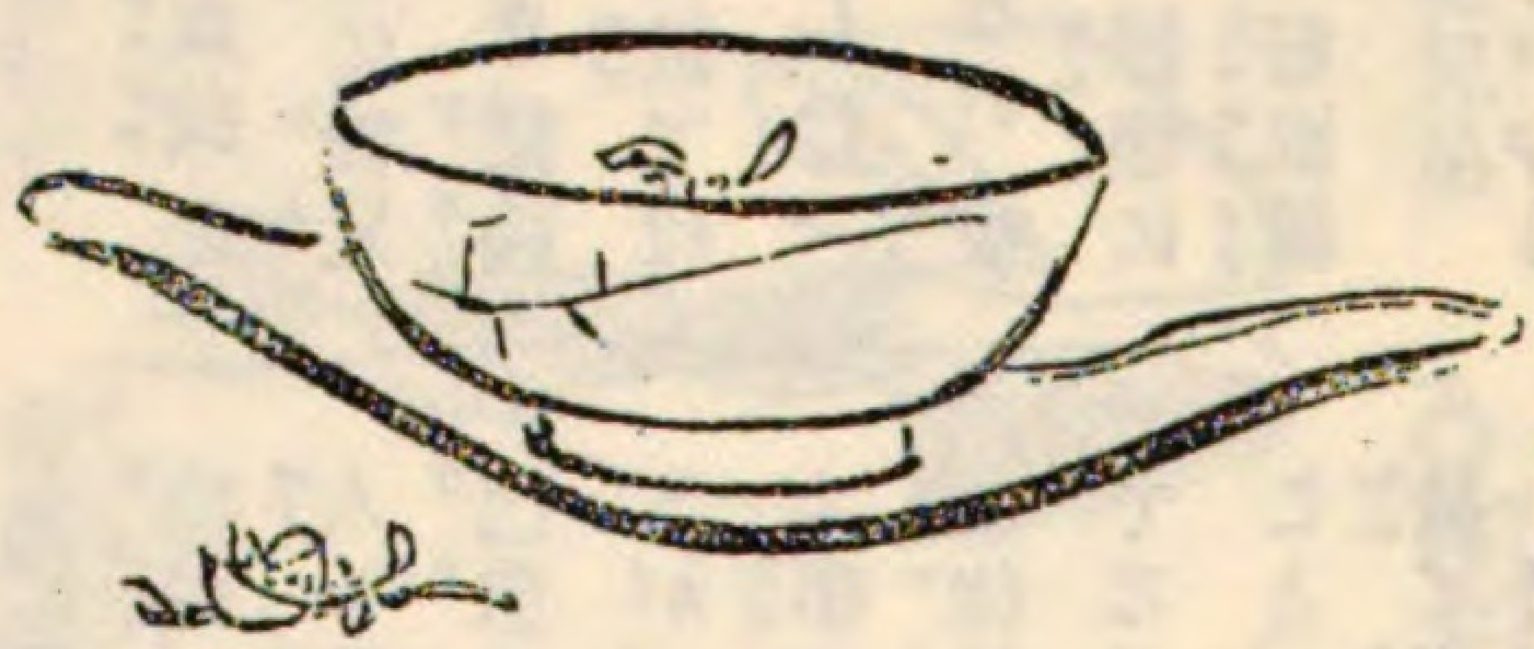
◎自然之に對する議論も旺となつて、一時結婚談は之れが是非得失を以て滿された如き時代もあつて、中に

は隨分極端劇烈の議論もあつた、が、一般の醫學者は、其害、其非を認むるも、從兄弟同士の緣組は決して些の利益もなく、理由もないもので、寧ろ恐るべく、避くべきものであるといふに於て一致した。

◎恰かも我國に其危險が唱道さるゝに至つたは、この劇しかつた議論の後を受けたので、彼等醫學者の記述した著書が旺に歡迎され、醫學の定論として行はるゝ時節であつた、固より我學者に創定の意見があつた譯ではなく、一も二もなく當時の議論によつて左右されて居つたのである。

◎其所說に從へば、この緣組に葬られた婦人は概して孕まない、この間に出來た子女は概して不完全で、體軀若くは其心性上必ず幾分か缺る所がある、聾、啞、盲、跛、痴鈍の子女が多く、早折し易い、殊に最も恐るべきは、瘰癧、結核、癲等の如き遺傳性惡疾に陷り易い、といふのである。

◎亞米利加の有名な某醫は是の說に從つて、種々の硏



究をした結果、愈よ其危險の確かなるを認めて、時の立法官に對してこれが結婚禁止法案を提起した事がある、斯くと聞たるケンタッキー一部の人民の恐惶いふばかりなく、合憎、其子女は多く、何れも暫時くは花の如く美しき生育を遂げつゝあるも、間もなく恐るべき疾病に襲はるゝといふ、現在の證據が夥しかつたので、多くの若く、互に相愛して居た約婚者は急に其約を破り、結婚せるものも未だ子女を擧げざるものは、旺に離婚を行ふた、この影響は單に玆のみに止まらず、合衆國全州に及むで、當時失戀者野に充るといふ如き奇觀を呈したそうである。

◎併し是れ等は既に三十餘年前の昔しに屬する事で、この種の議論の行はれたは既に過去の事である、學說も進み、統計的智識も頗ろ精確となつた今日、尙ほ是等の議論に重きを置て、一概に從兄弟同士の緣組を排斥するが如きは愚の極である。

◎勿論今日と雖も、之に對する新學說が一定したと言

ふ譯はない、學者學者に依つて多少の異同を免がれないが、要するに、之に依て從前學者の說く所の如き危險は一として認めない、寧ろ諸種の點に於て亦の他人と結婚するよりも多大の利益がある、といふ事に於て全然反對の議論が、行はれて居る。

◎遺傳的惡疾に陷るの危險は、偶々緣家相方の血統を充分詮議すべしといふに止まつて、之を以て特に從兄弟同士の緣組にのみ限るが如くいふは謂れなき議論でよし緣家の一方に是れらの惡疾ある場合に於てば尚ほ更らの事、之に依て却つて其惡疾を輕減せしむべきも、之が爲めに增進せしむる如き事は決してない、或る獨逸の學者がこの事を論じた書中にも、この緣組に依つて成立した家庭の健康上、發育上、著しき好成績を有して居ることを記して居る。

◎後兄弟同士の緣組が多く不任に了ると言ふ事も、頗る受取難い議論で、實際統計の精確に語る所によると、普通石胎女の平均數は、八人に就て一人であるが、從兄弟同士の緣組に於ては十人に就て一人の割合である、小兒早折の割合も、普通他人同士の結婚に依て生れた者の百人中七歲以下で病死したものが十五人、從兄弟同士の子女は之に對する十二人である。

◎痴鈍兒、不具兒の出生が多いといふに至つては更らに無稽も甚しい、種々研究を重ねた學者もあるが、痴鈍、不具と、血屬結婚といふものの關係に就て未だ何人も確たる說明を與へたものもないのである、數年前巴里に於て痴愚兒一千人に就て詳さに研究した者があるが、只の一人も健康なる從兄弟同士間の子女を見出す事が出來なかつた。

◎從兄弟同士の緣組が、毫末も危險を伏在し居るものでなく、寧ろ諸種の點に於て多大の利益を語つて居ること、斯の如くであるが、同じ一家に於て、同じ緣家に於て度々之を繰返すは、固より頗る危險である。

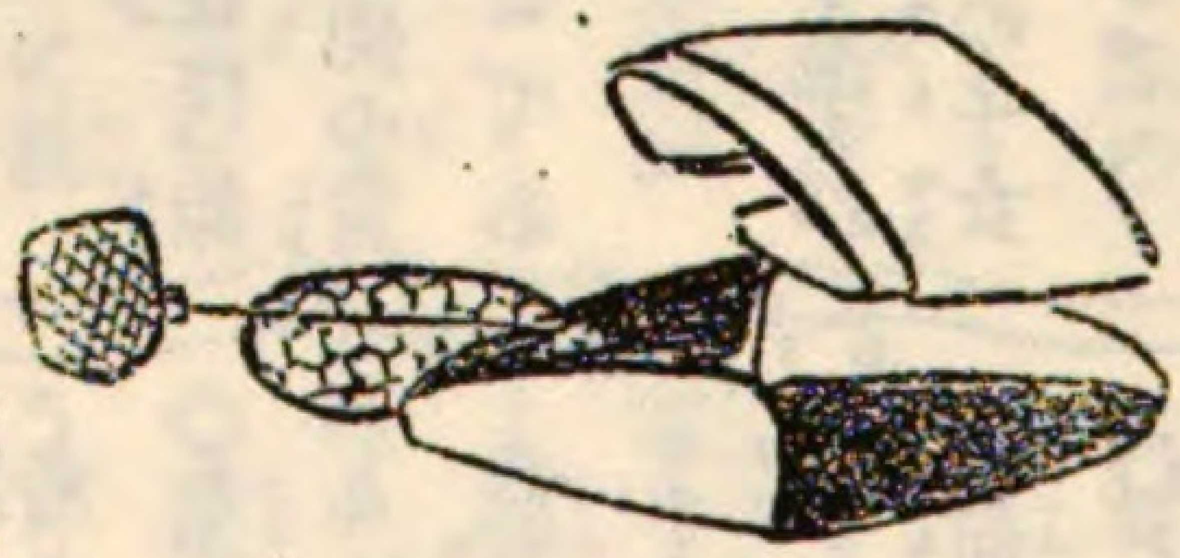
◎動物學者は其標本を撰むに、成可、血屬の近い間柄で、或る程度まで代々繰返された間に出生したものを最も完全の標本として居る、がこの血屬的關係が餘りに度々繰返されたものは、三代若くは五代、兎角、生

殖力の盡くる時季が來て、全く孕まざる者となると云ふて居る。人間の血屬結婚に於ても實に此通りで、狹い範圍に於て幾度も繰返す時は、不姙の結果を來し、一家滅絕の不幸を見る事がある。

◎故に屢々繰返されざる範圍に於て、健康なる從兄弟同士の結婚は殊更排斥忌避するの理由なきのみならず、日本の如き男女交際の未だ自由ならざる社會の現狀に在ては、寧ろ必要とする事情が多いのであるから、久しく便宜を感じたこの習慣に還つて、再び流行するとになるかも知れぬ。

二　外國人との結婚

◎外國人との結婚は、新法律に依つて明瞭に是認せらるゝ事となつた、從來とも正式の手續を履むで外國人と婚嫁したものも尠くないが、外國との交通が益す〳〵開け、各國との親交が愈々深くなるに連れて日本の婦人は今後一層、多くの塲合に遭遇するものと覺悟をしなければならぬ。



◎國家的觀念とか、祖先の位牌とか、血統の亂とかいふ如き問題は暫時別として、單に結婚其物の利害のみに付ていへば、外國人との緣組は恰かも從兄弟同士の緣組と略ぼ似寄つた得失を有して居る。

◎健全なる從兄弟同士の緣組が、或る程度まで頗る良好なる一家を爲すことを得ると同じく、健全なる外人との緣組に於てもいろ〳〵の利益がある、但し狹き範圍に於て屢々之を繰返すべからざるとも亦同樣で、之が爲め遂には一國を滅亡せしむる動機ともなるのである。

◎適當に外人の血を混へた國は、概して進取活潑の氣象に富み、文明の先驅となるものが多い、とは歷史家の屢々いふ所で、羅馬、希臘、英吉利、合衆國の如きは其著るしき例證である、之に反して餘りに外人の血を混せぬ國、例へば佛蘭西、露西亞、西班牙、支那、波斯等の諸國は、概して進步の程度が鈍く、滯り難で、其文明は多く外國人に負ふて居る。

◎一方醫學者の研究した所に依ると、亦頗る面白い現

象を現はして居る、如何なる理由に基づくかは不明であるが、外國人にして同人種間の緣組は最も子女多く、而して其子女の健康も同國人同士の子女よりも遙かに壯健であるといふの事實を表明した、同じ外國人との緣組も人種を異にする場合に於ては、自國人との結婚と差したる相違を呈して居らぬ。

◎左れば日本人と白皙人、即はち歐米人との緣組は、餘りに唱道するに足らざるも、支那人、朝鮮人、其他の黃色人種との緣組は、醫學の上より見て、頗る適當である、といふ事が出來る。

◎同國人との緣組に依て得たる子女を平均三人とすれば、同人種にして外國人との緣組に依て、得る所の子女は平均、五人乃至六人といふ比較を現はして居る。

◎佛蘭西に年々人口の減少を來しつゝあるとは顯明なる事實である、是れては種々の原因もあるが、醫學者は前陳の事實より、其主なる理由を說明して、最も子女の饒多なるべき田舍生活の餘りに保守的、迷信的なるに歸して居る。

◎佛蘭西には人も知る如く、古くより或る場所に住居を構へたものは容易に移轉せず、先祖代々より讓り受けた小な田地に衣食して、狹い其一村を何處までも樂しき世界として、夫れ以外には一歩を踏み出さぬといふ村々が澤山ある、無論外國人はいふに及ばず、他村の者とも容易に緣組をしない、自然其子女は減ずるばかりで、加ふるに折々其壯丁は兵役の爲に徵集せらるゝといふ譯で、人口は段々減少してゆくのである。

◎亞米利加合衆國の婦人も比較的子女の少いといふ點より絕えず攻擊されて居るが、これは全然外人の血が混らぬからといふ譯ではなく、婦人間に行はるゝ恥べき惡習慣が主として、惡因を爲して居るのである。

◎これ等の惡習慣もなく、健全なる米國婦人が外人と婚した家庭の子女は平均四人、乃至五人である、巴里婦人の平均二人乃至三人に比すれば、寧ろ子澤山といつてもよい。

◎外國人の血液混合が人口繁殖に多大の效果があるといふ事より米國政府にては嘗つて年々其沿岸に寄す

る殖民地の白皙人を擧げて一團にするの方案を立てたことがある、この方案に依つて外國人間の自由結婚を奨説するときは、其殖民地に在る幾万の獨、佛、愛、英諾威との血液を混合して、一世紀の後には、全然これ等の國別を際却し有力なる新米人の一團を作ることが出來るといふ目論見であつた、が、百年後の事業といふので、誰れも未だ容易に手を着くるものがない。

◎尠しく枝葉に亘る樣ではあるが、前陳の道理と略ぼ同一の軌道は出て、全たく反對の結果を現はす事實がある、黒人と白皙人との縁組である。

◎日本人にして黒人に嫁したものは未だ聞及ばぬ、支那人、朝鮮人との間に於ても黒人と縁組した話は未だ無い樣であるから、黄色人と黒人の結婚の消長に就ては利害何れとも判明せぬか、亞米利加の婦人は、屢々この物數奇な眞似を繰返へして居る。

◎其結果は何れも面白くない、假令子女を設くるとも、多くは短命で、孱弱で、普通の天命を全うするものは頗る稀れである、殊に其心性上の發育頗る鈍く、賢明、利發の子女をこの間に見出すことは甚だ稀である、假令其容貌魁偉に骨格逞ましき者あるも、其思想は到底不自然たるを免がれぬそうである。

◎之に反して、ニグロ、印度人間に出來た子女は、非常に壯健で、活潑で、利巧なるもの多く、體格も却々立派に育つものが多い。

◎此等の事實から推すと、白人、黒人の縁組は害ありと雖も益なく、赤人、黒人の縁組は害なきのみならず、非常の利益がある譯となる、併し黒人と結婚すべき赤人—印度人は無論中流以下の生活に慣れたもので莫くてはいかぬ。

◎要するに、以上の事實を總括して云へば、人種を同じうする外國人との縁組は生理上、醫學上、統計上頗る善美と結果を呈するの、人種を異にしたる外國人との縁組は是等の方面より見て餘りに思はしき成績を擧げて居らぬのである。

◎以上は何れも妻となるべき婦人の方面から研究したので、男子の方面からいへば、更に別個の研究を要すべ

きや云ふまでもない。

江湖叢話

錦衣公子

亞弗利加の勇婦

亞弗利加の東北方なるアビシニアは先年伊太利國と戰爭を始め、半開國の名あるに拘はらず、伊太利軍と戰ふて大に之を破り、其勢非常にて歐洲人の膽を冷さしめたるが、同國王メネレク二世の后は珍らしき、氣丈の婦人にして其名をタイトウといふ之を釋していへば、イシオピアの光と云ふ意味にて、容貌美麗、勇氣凜々、平生國家重大の問題は國王必ず之を后にはかり、后自ら緊要なる勅諭布令を草したることしば〳〵なりといふ同后は非常の酒好にて「シャンパン」を嗜み、尚武の氣風いとも盛にて、已に此間の伊太利軍との大戰にも、自ら近衛の一隊を引率して、敵に馳せ向はんとしたる程なりと、朝鮮の故閔后、支那の西太后等にも、比す可き、力量者とや言はん。



英國宮廷の不開室

英國女皇陛下の住はせらるゝウヰンソル城内には所謂る不開の室あり、三十九年の間如何なる人も其内部を窺ひ見し事なしとの事なるが、其由來を尋ぬるに、こは今を去る事三十九年前女皇陛下の連れ添給ひし良人が此中にて薨去し給ひしにぞ陛下には、哀悼の念に、堪へさせ給はず室内のもの何くれとなく當時の儘に保存し一生涯の間この室に手を觸れさせざる事にしたるに依るとぞ、此戸口には、女皇陛下手づから『この室の中なる總ての〇〇ものはわが即位二十四年にこの身の最も追慕に堪へざる良人が此身の爲めに配置したるものなり』と書かせ給へり、陛下が獨り折々此室に入りて懷舊の涙にくれさせ給ふや否やは知る人なしとぞ。

米國の女富豪

前號には世界第一の富める寡婦とて智利國セノラ女の豪華の樣を紹介せしが、それにも劣らぬ富有の寡婦は北米南テキサス州のノング夫人なるべし、同夫人が所有し且つ支配する地所は百廿五萬エークルとて我國の五十何萬町に當り其サンタ、グルツルヂスてふ所に有する牛馬遊牧所は實に世界第一にして、カルヂスルリスナ灣に瀕する四十哩、猶其上に垣を繞らすこと三百哩、夫人の私宅の戶口より表門までは十三哩ありて、何處へ向ひても一直線に六十五哩が間は他人の地を踏ずして通る可しといふ。キング夫人は當時六十歲にして、よく人を使ふと共に又よく人を憐む。其身代の莫大なるは遊牧所の牛馬の數のみにて、二十萬頭ありて之を處理する費用は一ヶ年我十八萬圓ばかりを要し、中の世話方三百人、其使用する馬千二百疋ありと云ふ。此莫大なる資産を、此寡婦一人にて十分に切て廻すとは、其力量の程思ひやられてすさまじけれ。



和蘭の少皇陛下の聰慧

本年二月十七日メクレンボルクシユベリーン公と御結婚遊ばさるべき和蘭の女皇ウイルヘルミナ陛下がまだ十二歲許りに渡らせらるゝ節の事なりとか女皇の敎育を司どる一人の英國婦人あり小女皇は彼れに對して何か惡戲を成し給へりとて女敎師は其の罰として女皇に歐羅巴の地圖を書く可き事を課したりける、少女皇は師なる人の命令とて詮方なく筆と紙とを取上しが、さても笑止やその復讐として英國の大きさをば和蘭の四分の一程に少さく書きなし玉へりとぞ。猶又玆に書き加ふ可き一の愛らしき話あり、そは少女皇が十歲許りの頃なりけり、女皇は世の常の少

女の如く數多の人形を持てる中に、殊に目出たき一個の人形に、女皇の服を着せ「人形の國の女皇」と名づけて、小さき椅子によらせ、他の人形には各々それ〴〵臣下の服を着せて、齋き册づくを常とし給へり。さるに一日女皇外に出でしに、和蘭國の人民は、甚く此可憐なる、女皇を愛する事とて、かくと見たる人民此萬歲を叫ぶにぞ少女皇は、頸もたゆき迄一々點頭かせ給ひけるが、宮中に還るや否直ちに「人形の女皇」を取出し、その頸の離るゝ迄幾度も點頭せ、「さあ、どうですもう、いたくなつたでせう、馬車に乘てコンなに頸が折る程お辭義をして御覽よお前だつて女皇なんか、もう〳〵厭になつちまうでせう」

婦人の國

露國スモレンスク州に四十哩四方ばかりの地あり。此處は「婦人國」として知られ、一年の多くは婦人のみ住ゐて、婦人の政治する土地なり。其を何故と云ふに、此處の男子は、年々其氣候に到れば仕事を捜して他郡に行くことにて、其跡には、婦人の町長村長あり、婦人の町會村會ありて、おの〳〵公共の問題を議し何事も都合よく運びて、財政の手際など中々グラッドストーン氏も三舍を避くるばかりなりとぞ。

英國皇太子女皇を驚かす

英國皇太子殿下が此上なき、芝居好きなる事は人のよく知る處なれど殿下が自ら其身を、扮し玉ふ事あるは、知る人稀なるべし。さて殿下は常に劇場に赴むかせらるるが中にも今は故人となれる、チャールス、フェッチヤーが、ライシアム劇場にて興行中の如き殿下は、屢々同優の部屋を訪ひ衣裳の着付顏の隈取等を研究し、猶同優より、扮裝術の敎授を、受けたりとの事なるが、一日殿下は母君なる女皇陛下を驚かしまゐらせんとて、宮中に於も見ても汚らはしき、乞兒に扮し、突然女皇陛下の居室に現はれたり、衣服は破れ裂け顏は汚れ垢じみ其髮の毛（鬚）は長く伸びて、蓬の如く、亂れかゝり、一見凶惡の相を呈せしかば、かくと見たる、女皇陛下の

御驚きは一方ならず、こは紛れもなく乞兒の宮中に紛れ入りしに相違なしと急ぎ飛びのきて慌ただしく呼鈴を打鳴し玉へり、されど待從の駈つくる前に殿下は衣裳襞をかなぐり捨て玉ふて母君の御心を安んじまゐらせたりとぞ、陛下は殿下の認め得ざりし迄善く扮し得たりとの事は殿下の常に誇らせ給ふ處なり。

衣服制限會

先つ頃英國ウォルウィック伯爵夫人等を初めとし、交際社會に名ある婦人等發起となりて、表服制限會なるものを設けぬ。其規則は一季には晝夜おの〳〵衣服は一枚を限りとすと云ふ定めなり、但し自轉車用衣服と毛皮等は制外なりと云ふ、物數奇千万なる會なり此ウオルウィック伯爵夫人は曾て英國財政困難の時八千圓の毛皮外套を失ひ、其奢侈の爲めに英人の物議を惹起したる人なりと云ふ。されば此衣服制限會も、勤儉博愛の企ならで、また一種の好奇心に過ぎざるならんか。

犬一匹の價十萬圓

二百文の爲に縊死する人あれば、一匹の犬に十萬圓を投じて惜まざる人あり、英米にては從來馬市大に流行し各素封家各愛馬を出して互に其精悍を競ふの風ありしが、是頃は犬の市大流行となり、バーミンガム市の大市には珍奇の犬未だ嘗て無き程に多く集りたりとなり、其中アームストロング夫人の所有に係る犬二匹各價十萬圓ニユーカッスル侯爵夫人の愛犬も亦十萬圓其他四萬五萬のと高價の犬數十匹もありたりと。

胡蝶姫

木村小舟

菫花咲くかの堤、糸遊もゆるこの岡の邊、うす絹のそれよ晴れ渡りたる空に、淸らけき日の輝ける日、この五色なす美しき羽衣を振りかざして、花に舞ひ花に戯ふれ、花に踊り花に休み、花に眠り花に覺めて、永きその日

を何の罪もなく、將た何の苦しみも知らで、樂しく暮らす面白さ。

窓は南に向かひて、あたゝかき日は心をきなく、照りさす邊に、小やかなる文机置きて、書讀み給ふ姫がその傍に、新に生けられにし梅が香したふて、とび來つる、春の新らしき胡蝶は物語りけり。

新らしき胡蝶は、その露にぬれける五色の羽衣をば、梅が小枝に打ち着せて、日方に向けつゝ、ひたすら乾けとこそ願ふものゝ如きに、姫はさこそ不憫に堪えでや、甘き花の其花蜜よりも甘き單舍利別の幾滴をば、その髪にさし給ふ花かざしの、つくり花なる薔薇の、黄色き蕋の中に入れて、姫が粧ひの時使はせ給ふ、バイオレットの芳ばしき滴りをさへ、打ち交ぢえて、梅の傍にさしてやり給ひき。



胡蝶は幾度か、その長き〳〵妙なる、金の飾々の數ある轍を動かして、薔薇の薫りにうつとりとしておれば、姫は『蝶々止まれ』の曲を謠ふて、手うち袖ふりて、興じさせ給へど、胡蝶に宛然、かひ馴らしたる小猫の如くに、馴々しく姫の御心を慰めたり。

暖かき春の日和なれど、下り日となりては、逍に未だ寒きに、姫は心付かせ給ひて、胡蝶の爲めにと、小さきストーブを取り出して、煖かなる空氣をつくりて、與へ給ひき、この小さきストーブは、紋々のうつくしき綾もて造れる、小判形の都懷爐と云ふ物なり。

姫はやがてこゝを起ちて、床の前なるオルガンの椅子に腰うちかけ、不意にもハ調なる一をひき出せし時、胡蝶はさも物に驚きし如く、かの煖かき寢床を飛び出して、逸早く硝子張りの障子目がけて、飛び行きながらも、その羽衣をばさも騷がしげに、うち振ひつゝありけるが、やがてオルガンの音は、高く幽になり行きしかば胡蝶はさながら安心せしものゝ如く、元のまゝに薔薇の伏床に入りて煖まりぬ。

今度は面白げなる、『蝶々止まれ』の一曲を、ひき初め給へば、胡蝶は目をば覺まして、又しも薔薇の床を飛び出しぬ、されど今度は障子にも行かず、羽衣もいとなよなよしく、さして驚ける風もなく、却つてオルガンひける姫の手の、藥指の中程にきら〱として光れる、指輪のダイヤモンドの眞中に止まりて、彼の金の節々ある鞭を動かして、歌の拍子をとる風をなしぬ。

かくして胡蝶は、七日の光陰を夢の間の如、姫に慰められて送り、姫も可愛ゆき胡蝶のために、七日の月日をいと心地よく送り給ひき、八日の朝となりて、今日も遊ばんと、例の机の上の胡蝶の伏床を見給へど、今日は例になく金の鞭も羽衣も見へぬに 姫は あやしと寄りそひて、よく見給へばあはれやあはれ、胡蝶七日の露の命は、もろくも夕の風に散りしなりき。

されど金色の鞭、さてはうつくしき羽衣の色は、さながら生ける時につゆも替らざれば、姫はしほれし氣をも少しは取り直しつ、やがて『悼蝶の曲』を奏しやりつゝ、そのなき屍は、かざしの花の薔薇と共に、同じうつくしき箱に收めて、明け晩ながめいりつゝ、いと悲しげに泣かせ給ふが常なりけり、さればにや、人よびて胡蝶姫と申し侍りき。

（完）

若き夫婦と亡き子

日東生稿

こは、實際世にありたることにて、人の口より洩れて予の耳に入りたるを、そのまゝ材料として、左に一篇の美的文をものしぬ、その悲哀的事實を描き、また之れに對するおのが情を抒べんと努めたり、もし讀者の同情を惹く能はずむば、予が筆と想の至らぬもの、而してその事柄のよいか、惡いか、羨むべきものあるか、戒むべきものなるか、はたまた單に悲むべきものかは、一に讀者の判斷と覺悟に任かせむ也。

戀愛と俠氣

夫妻の緣を結ぶは偶然なるか、偶然にしてしかも偕老の契りを破らぬこそ、まことの賴もしき夫妻なれ また夫妻は、若き時より苦樂を共にしてこそ、互に心のまこと

ども見ゆるなれ、年未だ少し、青書生の身で妻をもつは、早きに過ぎるとか、たとへ將來を約するにしても、煩惱の種にて學びの妨げとなるとか、それのみならで、未だ乳の臭の脫れやらぬ乙女子、いまから、夫のあるために、その狹く少さき胸を苦しめてはならぬなどは、相當の年頃に至らぬために、心配することとなるべきも、まことに、夫となり、妻となるべき人に、自然の默契のあるなれば、連れてはなれぬ鴛鴦の、情愛温かなる中となり行くも、げに是非なけれ。

四谷仲の町二丁目といへば、學習院の裏手、賑かなる傳馬町通とはなれて、晝さへも物靜かに、わけて夜になれば、森として淋しきほど閑靜なる所、こゝに見苦しからぬ一軒の住家あり、あまり廣からねど二階もあり、構造のおもむき、お庭の模樣などを見れば、いかにしても下等の人の住居とは見えず、門の標札には、宮城縣士族何某と記されぬ、家族は至て少なく、夫婦と娘と三人の生活なるが、主人は年頃五十位の男にて、定時に出でゝ歸るのを見れば、何所に出勤しておるならむか、長男の『秀雄』は、間稅官吏を奉職して地方に在り、大きい娘は何家へ嫁付き、內に居るは末子の小娘一人、まだ二八の乙女なれど、美しき容色に、溢るゝばかり愛嬌のある女子なり、それに秀雄の友人なる一人の書生が、一年ほど前より同居して居りぬ、この書生は、二十を超えたか超えぬかの年頃、言葉の訛音を聞けば、東北地方の人にやあらむ、粧はねど眉目清秀の美少年、言語動作は東京風に化せぬところもあれど、年の比較には、中々しまりありて、當世の書生には珍らしき好人物、その容貌には、柔ならず、剛ならぬ性質のあらはれて、一種の侵されぬ威容は確かに具へて居る、此の家は、人が居るか居らぬかの如く靜かにて、ことに夜は寂然となるは常なれども、適には彼の書生の書を讀む聲か、高らかに言笑するのに、女の聲の交りて、外に洩るゝこともあり、書生も、いまは住み馴れてわが家の如くにして居りぬ。

この家は、至て靜かなり、淋しきばかり靜かなり、靜かなるよりは陰氣なり、陰氣と思へば、いかにもたまらぬばかり陰氣なり、それを感じてからは、日の暮るゝのも

心細く、夜となれば、一種の凄氣のわが身を襲ふが如く、ことに雨のしと〳〵と降る夜には、ぞつとして身の毛の逆立が如き心地せらる、いやに思うては、いやでいやでたまらず、他の陽氣なる家へ越しまくも思へど、折角親切にせられ居れば、にわかに去るのも本意にあらず、書生一人は、げに困りに困りて、いかがはせむと思ひ居りぬ。

されど、家その者が淋しきにもあらず、また陰氣なるにもあらず、お化も居らず、古狸の洞窟でもなければ、いかにして凄味のあるべき筈もなし、たゞそれは神經なり、否神經なることは知られぬ、書生は嚴しき家庭に育てられたれば、容儀は正だしく、スレたところの露ほども見えぬより、娘の母なる人は、非常に書生を信用して、すべて實子の如くせられた結果、一とせあまりは包み隱せども、何時までか憂ひのあるを隱し得む、一家の秘密のあること、われ等の沈鬱なるもこれがため、家の陰氣なるもこれがためなりとて、その秘密の悉くをば書生に打ち明けぬ、それは、夫に愛妾あるために、家事意の如くならず、子供の教育も充分出來ず、殆んど十年の長き年月、子供等と共に泣き暮らせりといふあはれなる物語、その時、母は語りつゝ涕拭きあへず、娘も傍らにありて泣く、その赤心の吐露と、あはれなるさまを見たる書生の心はいかならむ、おぼへず腕を拱き頭を垂れて聞きつゝも、一片の俠氣はむら〳〵として胸に起り、また大いに同情の涙を灑ぎぬ、一旦この同情心を起してよりは、毎日かの老母と小女を慰めやりぬ また主人には十分苦諫もしてやりぬ、書生の前もあるためか、主人の外泊は少なくなりたれど、全く改めん氣色もなく、却てその反動は蔭にて妻子に及ぶ、されば、たゞ同情心あるのみにて、いかむともしがたし、書生の身、此の如きことに心を痛めんは、宜しからぬことゝ知りつゝも、いまは義務として去られぬ身となりぬ。

書生はその家のために、いろ〳〵と考へたれども、別に妙案もなし、『もしや、悴さまにても内に居らば、いくらか旦那の行ひを改めしむべきが、兎に角に家政を整理するのは、是非地方に居らるゝ秀雄様を呼ぶ方然るべ

し』と書生が意見したるに、母には固より喜ぶところ、父の方にては、あまり好まぬやうなりしも、遂に呼ぶこととなり、秀雄はあまり思はしき官職にもあらざりければ、直ちに職を辭して上京しぬ、秀雄と書生とは親友の間柄なれば、久振りにて相合ふたるうれしさに、一夜を明かしたることもありき、秀雄は書生に向ひて、留守中の世話になりしことを、頻りに感謝しぬ。

月日は白駒の馳するが如く、書生の上京せるは、はや三年の昔となりぬ、あるとき、書生は輕からぬ病氣にかゝりて、佐々木東洋先生の治療を受け、一ケ月にあまるほど、病床に悩みぬ、その時、彼の娘は、母の命なりとて懇ろに看病しぬ、彼れの母なる人も、わが子の如く慰め呉れぬ、また、父なる人も、妾ありとて性質の惡しき人にもあらず、その長男も、眞實なる人なり、書生は、内の人々のみな親切なるに感じぬ。

かくして長く居るうちに、書生の心も、内の人々の心も、互ひによく知れ合へり、知れ合ふほど親しくなり、親しくなるほど、信用のできるものなり、母なる人は、ことにも書生を信愛しぬ、いつの間にか、書生と彼の娘との結婚は約されぬ、こは全く双方の希望のコレスポンデンスにして、親どもの許諾を正式に受けたるものなり、苦樂を共にせむとは、この夫婦の契りに契り、樂みの樂むところ也。

わかき二人

人生の事は、渾て夢か、幻か、ともに東北の産れにはあれど、遙けき東都の地において、圖らずも同居したるが縁となり、浮世の苦惨をともに嘗め、ともに泣き、女の手に及ばぬことは、男の手にて之れを救ひ、男の手に能はぬことは、女の手にて之れを助け、一種の義侠心が凝りて憐愛となり、しかもその憐愛は、色情一片のものにあらねば、墻を穿ちて連れ添うたる醜もなし、二人は言はでものこと、親も兄弟もみなの希望の合致にて、遂に一生を契るべきことゝなりたれば、げに奇縁の夫婦とこそ言ふべけれ、書生も、娘もまことに夢心地をやなしぬらむ。

いまがいまゝて、女てふものゝ趣味を解せぬ武骨書生の、室内にのみ籠れる生無垢の乙女と、こゝに、連れ添うて、夫と思ひ、妻と思ふ身分となりぬ。

書生は、幼きときより、鄕の秀才と呼ばれたる人、塾生時代には、はや青年有志家を以て目せられ、自らも任じたるかの如く、從つて抱負も徒らに尨大なり、家運衰替のときに生れたれば、親は餘儀なく商業を習はせむとしたるも、おのれは好まずとて心に泣き、公共の事にのみ熱し、ために多少の財をば散じぬ、こは、武士なる祖父の衣鉢を襲ふところにやあらむ、着實なる親は家のために嘆くも、詮なしとて放任しぬ、商家に生れて地方の有志家と交り、訪ひ來るものは皆是れ書生的の人々、あるは學問上、あるは時事に涉る談ならぬはなし、漢籍は手に取るに任かせて讀破し、一時は支那思想に支配せられぬ、彼れの少時は、所謂漢學書生の風ありき、某政治家の學僕になり損ひ、志を決して鄕關を出づ、暫らく笻を仙臺に停め、五城の月に嘯く半年、飄然として東京に遊ぶ、もとより冒險的に出でたることゝて、上野ステーションに着けば、嚢中僅か七圓の金を剩すのみ、心細さは言はむばかりなし、友人の好意にて、その家に寄寓することゝなりたるは、いまの同居の家にして、その友人は秀雄君なり、田舍に生れたる潔白者のにわかに東京に出づれば、誰とて一時はまごつかぬものなかるべきに、まして金なく年少き身の、突然危地に踏み込みしことゝて、その凉しき眼は眩ずるばかり、炎々たる生存の氣に惱殺せられ、初めは頗る身の方向に迷ひしも、おのれの眞率なる性情は人に認められて、彼れは文筆の業を得たり、得るところの給金は僅少なれど、糊口と修學の資を得たることゝて、彼れは非常に喜び、未來の運命を樂みつゝ居りぬ、かくて偶然にも彼の女と結婚することゝはなりつるなり。

心は鐵石の如くに、わが影一寸も踏ませずといふ剛の青年も、戀か、戀ならぬ戀の、情愛に身を絆されて、嘗て村豪の娘をハネ付けたる氣概はいづくへやら、いまは軟化せぬと思ひつゝも軟化し、おのれの志望は確かなりと自ら信ずれど、確かなるが如くして確かならぬか、

初婚後一とせばかりの月日は、人生最も快樂のある時間の如く感ぜられ、彼の二人は、げに夢の好くにして過しぬ。

流石に書生は規律を紊さねど、何んとなく、沈着の風となり、昔日の慷慨熱の薄らぐと丶もに、殷々たる氣燄は失せ去りぬ、白木の薩摩下駄に、鳥打帽子、兵兒帶を締めて、淡りした服裝、棕櫚のステッキを手にして、飄然外遊したりし快書生も、變ずるものかな、もとの風姿は影も止めず、流行を趁ふの美裝はせねど、四ッの袖を聯らねざれば、外出も厭らしく、出づれば必ず二人にて行く、若き男女の血の躍ればにや、跡より聞ゆる駒下駄の音も、おのが感想を搖かすかの如く、わかき夫婦の面影は、一入清くまた美しきもの也。

未生兒の豫想

春の日の暖かなるころ、かの娘は氣色惡しとて床につきぬ、こゝとて指して惡しきところもなけれど、食事少しも進まず、強いて食すれば吐瀉たくなるとて、食を強ひらるゝを厭ふらしく、内の人々の心配一方ならず、醫師は診察して、こは妊娠せるが如しと言ひぬ、みなそれよと知りければ、その月より大學產科卒業の、それがしを呼びて、月々その手を煩はせり、床に就きおりたるは十日ばかりにて、あとは起きて健げに立働きおれり、五月にて少しくその樣子の外形にあらはれけるが、六、七、八と臨月に近くに隨ひて、だん／＼高まれる腹部は、もはや廣き帶にも隱されぬ如くなりぬ、初めてのことゝて人目を愧ぢ、外にも出でぬやうになりぬ、母なる人は、折角慰めつゝはやく孫を見るは樂みなりと言ひぬ、父も兄もみな喜びつゝ分娩の日を待ちぬ。

たゞかの書生と娘ばかりは、うれしきが如く苦しきが如く、一種の苦痛は二人の胸を壓しぬ、あまりに早ければ厭なりとは彼の女の繰言、まだ桃われや唐人曲の髪にて髷にも結はぬのに、とはかの女の感想なり、書生はこれより子の愛にほだされて、何事も出來ぬか、一生のことすべて休むかと思へば、心の中には情けなくも感じれど、また妻の心を察すれば、いかにもかおい想に思

はれて、されども宿せる子をいかにするや、と洒然として言ふ、こは慰めむとてなり、されば彼の女は答へていひけらく、いまさらいかにせむともあらず、またいかにすべきの理もなし、されど私の身をおもへば、文の道も學びたらず、せめて職業學校の中途退學をば、いまよりつゞけて卒業せむ、こもわづか一年の辛棒なり、と思ひしも甲斐なき身となりぬ、姉上は、麻布の明治女學校にも入り、國文も、漢文も、英語までも學びたる後にて、他家へ嫁ぎたれば、まづ不足もなからめど、わたしばかりは、何にもかにも不足にて殘念なり、子をもつては、とても自分の修業どころか、思ふことがすべて出來ぬ、とは母上も常に話されぬ、思へば思ふほど情なく、これにて人の母となるかと思へば、何んとも言へぬが如く感ぜらるれど、また考へ直して見れば、わが子ほど可愛らしきものはなし、ことには初兒なれば、可愛らしと思ふ心もまさりて、にわかに我子の欲しく感ぜられ、生るゝ子は、いかなる子ならむ、男の子ならむか、女の子ならむかと、生れぬさきには思ひやられ、また生まれたらば、拵へてある産衣を着せて、肩掛にでも包んで抱いて見たし、名は何んとつけらるや、わたしもいろ〳〵考へたれど、あまりよき名も思ひ浮ばず、女ならば『愛子』もよからん、もし産婆の言ふ如く男の子ならば、『一郎』もよかるべし、いづれにても、可愛い、呼びよい名の、よき名をつけたしと思ひまする、と彼の女の思ふことを打ち明けて語りぬ、あゝ、子が生まるれば、父よと呼ばれ、母よと呼ばるゝか、また子は、男ならむか、女ならむか、いかに愛らしき子ならむか、とは二人の感想、また未生兒の豫想なりき。

初兒の死

人の情、子を愛するの情にまさるものなし、この情ばかりは、古も今も變ることなく、貴き人も、賤しき人も、などて、子を愛するの情なからむ、世にわが子ほど愛らしきものはなし、また子を想ふ親心ほど脆きものはなし、これ親が年老ひたるとき、頼むべきは子なるがためにもあらねど、親の血をわけたる子なれば、自然に愛情

の起るも道理なるべし、まいて、はつ子は、父母の鍾愛一とかたならず、掌の上の玉のやうに愛でらるゝもの、初めて子をあげたるとき、呱々たる泣聲を聞き、愛らしき嬰兒の風貌を見ば、父母の心いかなるべき、げに天の賜なりとて、伏し拜むばかり、喜びに充たさるゝならむ。

子はしかく可愛らしきものなるに、恙なく育ち能はで、亡きものとなりたらば、父母の悲みまたいかばかりならむ、とても育たぬものならば、初めより無きこそよからん、ありと思ひしものゝ、にわかに、失せたるばかり悲しきはなし、生れたるまゝの嬰兒の、神の如き面ざしは、いまもなほ父母の眼にのこり、その無遠慮に泣きたる產聲も耳にのこれど、已に亡きものゝ數に入りて、此の世にはあらずなりぬ、忘れんと思へども、忘れられず、忘れざれば悲みは去らず、かゝる時の、父母の感想は、いかばかりなるらむ、げに悲哀の極なるべき乎。

臨月となりぬ、今日か、明日か、と氣づかひつゝ待つほどに、彼の女は、玉の如き男の子をあげたり、生まんとするとき、少しく難みたれども、產婆の技術の巧みなりしか、生む人の幸ひなりしか、ひどく心配もせずに、生み落すことを得ぬ、產婦はよほど疲れを感じたるが如くなりしも、子は別に何にも恙もあるべしとは見えず、產婆は抱き上げて湯にて洗ひぬ、身躰はよほど大きく、鼻の小高きは見立ちて見え、眼瞳は深黑にて、顏の色は眞赤なり、この子そだちなば、美男子なるべし、とは皆人の云ふところなりき、無事に生めり、母も健全、子も恙なし、とて一時は安堵の思ひをなしぬ、親戚の人々も來りて祝ひ呉れぬ、この時の父母の喜びいかなりしぞ、ことにも母は、うれしさ限りなく、はやく肥立ちて、この子を抱きたし、背負したしなど、言ひて喜びぬ、何んにも知らぬ嬰兒に向つて、一郞よ、一郞よと呼ぶも、喜びあまりての言葉なるべきか。

百日も立てば、可愛くなるものよと聞きつれば、はやく百日の經ぬることを願ふも、父たり母たるものにはま**ことに然るべき情にて、御宮參りは何日か、食初めは何**日かなど話合うも、兒の育ち行きを見たき親心ならむ、

わけても生みたる母は、肥立にさわると言はるゝもきかて、産褥の中から起きて抱かんとするなど、おのが身をば忘れて、子のことをのみさわげり。これ初見なればわけて可愛く思ふらめど、親子の情を去りても、げに可愛らしき子なり。日増にかわるを見るにつけても、いと愛らしく思はれ、親は貧こそすれ、年若くこそあれ、子の教育には志なき人ならねば、必ず立派に育つるならむ。メリンスの下着、黄八丈の産衣に、身を包み裹るゝのみにては、物足らぬ心地のせらるべきも、心の愛はなど富貴の子に劣らむ、親の愛情を一身に鍾むるこの子も、また幸福なるかな。

よき子よと愛でらるゝ子は、早く亡くなりて人に惜まるゝとの諺もあれど、生れて愛でらるゝ間もなく、露と消え失せぬるこそ、げにあはれならずや。かの子は、生れて二三日は健げに見へしが、四日目の夕方より、少しく熱わるやうなり。氣の勝れぬやう見ゆるとて、かの子の母のさわげば、内の人々も心配して、早速醫師に見せぬ。醫師の言ふには、風氣もあれど、一たいこの子は、丈夫なるやうにて、弱きところあり。ことに嬰見なれば、大切にこゝろせよ。二三日の間はわけて大切なりと。されば、心配なほまさりて、寒くせぬやうに、藥を服しめよとさわげど、嬰見はことばもなく、苦しければ泣き出だすのみ。いかにも可憐なり。可憐なれどいかんともすべきなし。母は食も喉を下らずとて、憂ひに滿たされぬ。神佛にかけて、その治らんことを祈りぬ。

生るゝも、死ぬるも、げに命なるか。良醫の治療も、折角の看病も、神佛への祈願もその効なくして、かの子は、生れて七日目、日もほと〳〵と暮れ行くとき、母の懐に抱かれたるまゝ、眠るが如く、何んの遺憾もなき如く、人の悲むをも知らざる如くにて逝きぬ。

死せりと知るも、死せぬが如く、抱きたるまゝ母は泣きぬ。父もその他の人々も、みな泣き伏しぬ。いかに泣けども、死したるものは歸り來らず、少さき遺骸は冷かに、愛らしき泣聲も寂として止みぬ。子に對する前途の豫想はすべて畫餅に歸しぬ。親を悲しましめんとては、生れざらんに、彼れは一週日の生命しか有せざりしか、

失ひたる人の、たゞ悵然として天を恨むのみ。

愛情は死したりとて變ることとなし、死後のこと丁重にせむとは、せめてもの情なれや、嬰兒ながらも、大人同樣にすべてのことをなして、調ひおきたる衣物は、よきものは着せ、あしきものは、施しにとてお寺に贈り、時は三十二年十月二十日、黄菊白菊いまを盛りと咲きみだるゝ頃、牛込佐内坂上の道長寺に葬りぬ。

死兒の追想

流れゆく水は、また歸るのときなし、亡くなれる子の、いかで、再び見ることのあらむ、思へばとて何んの甲斐もなく、甲斐なきを知りつゝも、思ひ出すことの絶えやらず、思ふことのたえねば、いかで、瞬時も忘るゝときのあるべき、古の人の歌にも詠じけむ、『あるものと忘れつゝ猶なき人を、いづらと問ふぞ悲しかりける』とげに亡き子のことの、いかにしても忘れがたきは、親たる身のみな同じかるべきことならむ。

かの母は、子の亡くなりてより、氣色すぐれずとて、物言ふことも多からず、たゞ鬱々として月日を送りぬ、世の愛でらるゝ子のこと、見るにつけ、聞くにつけ、思ひ出すものはおのが亡き子なり、生きておりたらば、いま頃は如何なるべき、半年も立ちなば、乳母車に載せて見んと樂みしも、叶はぬことゝなりぬなど、絶えずむらならと悲みの胸に湧くのみ、彼れは子なき人となれり、樂みを奪ひ去られたるのみならで、新たなる悲にその身を苦しめられぬ、さらでも、繊弱き女の身のなどで堪ゆべき、亡き子の、五七の忌日の來ぬ頃より、かれは病なりとて床に伏しぬ、日を經ぬれど、顔色青く、氣力なくなりて治すべしとも見えぬほど、ひどく痩せ衰へぬ、父なる人も、いたく弱りて外にも出でず、内にのみ籠りて、樂むこともなきが如くなりぬ。

不平ならば、慰められて解くることもあらむなれど、かゝる悲みは、いかに慰めらるればとて、などて消え失することのあるべき、悲みのつきぬ苦しさに、もはや忘れむとも思へど、月日を經て薄らぎゆくよりは、外に悲しきことを忘るべき術もなし、古の人の、海邊に忘貝を

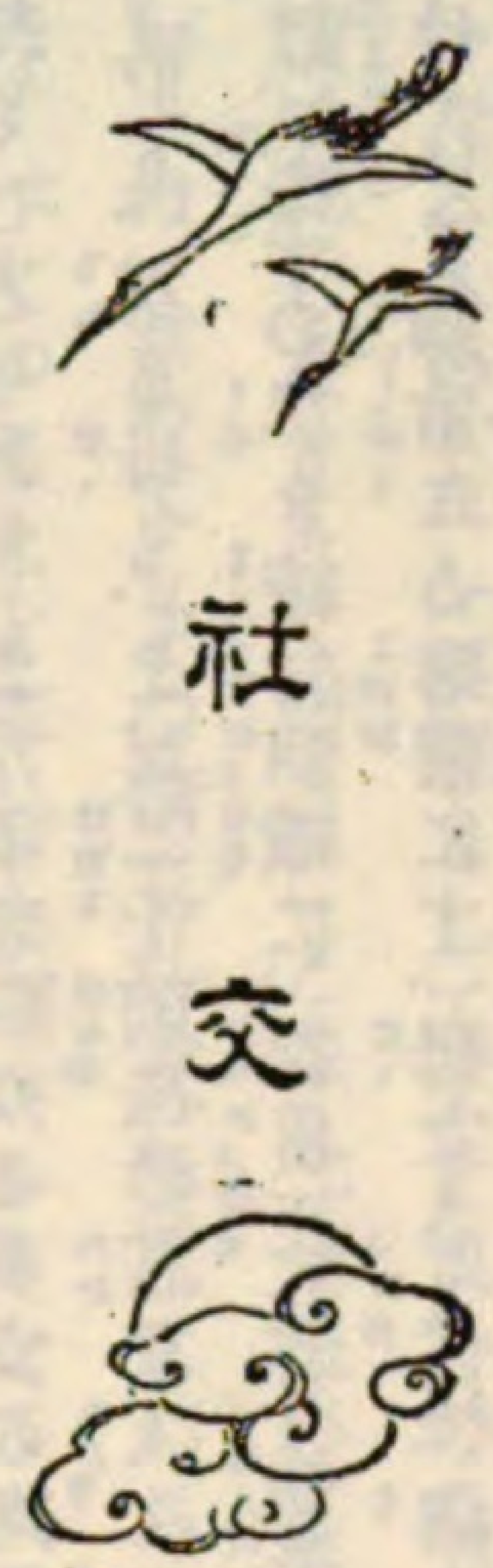
拾ふを見て、『人忘れ貝ありて拾はむ』と喞てるも、かゝるときの心にやあらむ、と今更の如く感ぜらるゝなれ。

さりとて、亡きものは、いかにしても亡きなり、せめて亡きあとの勤めを怠らぬこそ、まことに愛する情をつくすの道なれ、死したる忌日には、供物せん、墓參りして香花を手向けむなどは、悲む人の心を抒べんための業ならむ、亡き人の墓まゐりばかり悲しきはなし、情けなくも、かの人の肉躰をば、この地下に埋めたるかとおもへば、弔ふ人の双眼には、などて、涙の露を堪えざらむ、みな幽明を隔てゝ音のふ由もなきを、悲しまんなり。

子を失ひたるかの父と母は、時に墓參りにとてお寺に行くこともあり、二人そろうて行くこともあり、一人づゝにて行くこともあり、また年老ひたる男女の見ゆることもあり、父も母も、まだ二十前後の若き人にて、父なる人は、七子の黑き紋付羽織に、折目正しき仙臺平の袴をつけ、いと靜肅なる容儀にて、母なる人は、濃き髪をエギリス巻に結ひ、藤色の縮緬の重着に、繻珍の帶を締め、駒下駄の歩調もしづかに、女は流石に相應の身裝はなせども、いかにも悲哀のとれやらぬ如くにて、いつかお寺に見えしこともありと聞きぬ、愛らしき子を失ひたる二人の身の上、同じとに逢ひたる人は言はずもがな、然らぬ人とても、誰れか憐れと思はざらむ、誰れか同情の涙をそゝがざらむ。

（完）





交際の栞（承前）

翠香女史

◎菓子は、小盆にて出すと、紙に乘ると、兩樣あり、紙ならば、其儘包て、持返る、小盆なれば、喰べくば、喰ひ、喰はずば、懐紙に、取包、附てありし、楊枝をも、紙に包て、持べき也、是を其儘、置べからず、又柏、櫻、などの葉付たるも、其葉を殘し、或は是を、煙草盆中へ、入置人あり、甚失敬也、必包て、持歸るべし

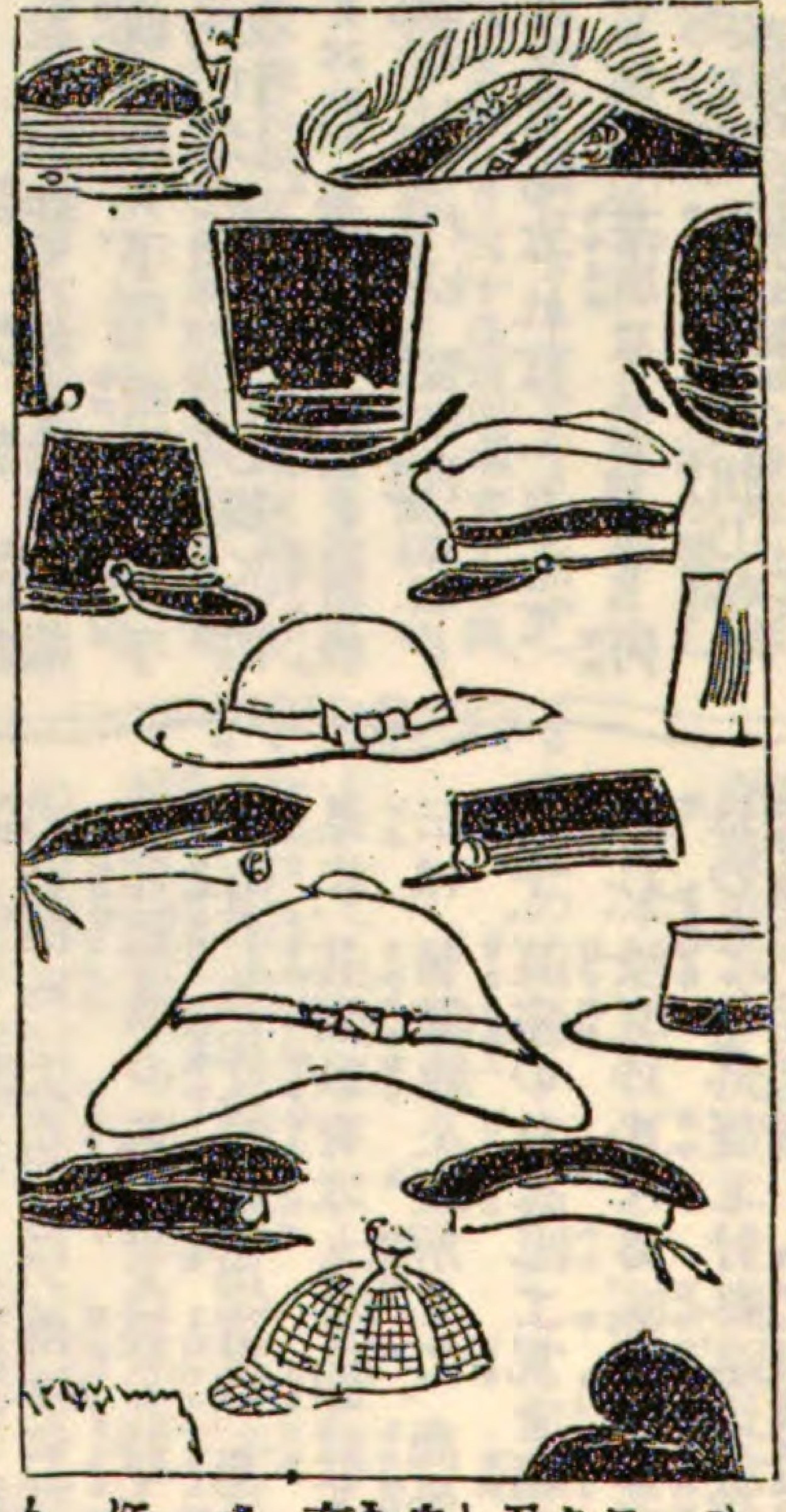
◎客は客の、座すべき、定座あり、主人も又、主座あり、然るに、世なれぬ人、客となれば、とかく座敷の入口、敷居際に居りて、出入の妨となるを思はず、主人方より此方へと請ずれども、固辭して動かず、主人も、給仕人も、通行に苦み、大に迷惑を感ずる事あり、傲然と、上座するこそ、惡からめ、當然の席に着ずして、主方を困却せるは、謙讓にあらで、失敬也、又菓子を始、膳部にても、何にても、饗應の爲に、出せるを、お辭義ばかりしていかに勸めても食はず、蓋をだに、取らねば、嫌かと思へば、久敷して後、箸を取、汁も何も、冷果たれば、取替て參らせんといへば、又固辭す、かく主方に、種々世語をやかせて、折角の志も、無にして、之を、謙讓と思ふは、甚敷心得違也、主人の、志を、厚く受て、冷めざるうちに、賞翫するこそよけれ、もし又喰られぬ、事情あらば、先、其膳を、押頂きて、下におき、蓋せる物、取て、中に入たる品を見て後、又蓋し扨、御丁寧の御ちそう、恭けれど、實は、箇樣々々と、其食難き、理由を告て、呉々も、失禮を、謝すべき也

◎多人數、並居る席にて、其席廣く、入側等有時は、人の後を通ふは、勿論なれど、狹き席にて、壁、襖の際、一ぱいに、座したるを、沒理に俯かせて、後を通行するとて、裾、袂の端を蹈、置たる物を、蹴ちらす抔、誤にもせよ、無禮も又極れり、人前を通るを、一概に、無禮と思ふ故

の、心得違なり、通路なき時は、御免被下と、聲を掛て、前のあきたる所を、小腰をかゞめて、通るべし、更にくるしからぬ事也、

◎他家に行たる時、不意に、釜の懸りたる席へ、通さるゝ事あり、茶人ならずとも、普通の事を、心得をれば、いかにしてよき歟と、狼狽する事なし、其心得は、始ての家ならば、先其入口より、内部の様子を窺ひ、みて、我一人ならば、進み入て、先床前に至り、掛幅を見、次に挿花をみて、一寸かろく一禮し、一禮するは床前に限る餘は禮せすさる知るべし爐前に廻り、釜の掛りたる樣を見て、棚飾あらば夫をもみて、扨、床疊一帖を除て、客疊の中央の處に座し居るべし、連あらば、床疊の際より、居並ぶべし、入口を、踏込疊と云て、主人の、出入する處なれば、其處は明て、居るべからず、先客あらば、目禮して、其前を通り進みて床より次々、見廻る、忘れても、脊後を通るべからず、甚、無禮とする事也、扨、見物終らば、先客の、次に座して、挨拶すべし、我先客なる時と、跡より來りし人の、そこらを見廻る間に、次座へ下りて、上座を讓る、然れども、先客なれば、是非と乞時は、一應は辭退するも、強て爭はず、進む方よろし、總じて相客は、其身分と、年齢の多少等にて、自然と、座の上下は、定り有ものなれば、我上たるべきが、當然ならば、いかに云とも、超られぬを、知りつゝ爭ふは、人困らせなれば、早く、然らば御免と云て、進むがよき也、殊に、茶席にて、喧しく爭ひ、時間を費して、主人の手筈を狂はすは、主人へ對して失敬なり、

帽子づくし



◎主人、手前中に、行合せたる時は、言葉をかけず、唯目禮して、進み入、先客の次に座して、手前の終る迄、無言

にて、謹て拜見し、主人、物を運び終たる時に、立て、掛物其他みる事、前條の如くして後、始て挨拶すべき也、

◎客たり主たるに拘はらず、人前にて、物を請取、渡し其他、何事を爲に付ても、手の指先を揃へて、大指の外は、四本とも、粘にてもつけたるが如く、指と指の間、離れざるやうに、すべき也、人前へ出す手の、指隙て、熊手の如きは、甚見苦しきものなれば、平日より心掛て、四指を離れぬ樣に爲を、癖とすべし、茶道にて、物を取扱ふに、此手容を、やかまし敷、云をしゆれば、習ひ性となりて、常にても、自然と、其手容となるなれば、一見して、其茶の心得の、有無、しらるゝなり、茶席ならずとも、何事をなすにも、指の間、すかざるは、取落し、仕損じ等の誤なく、かつ見えのよきもの也、交際場裡にたつ人は尤、心掛て可なり、

◎何にても、物を持はこぶには、其姿勢を、正格にし、反らず屈まず、手に持物は、凡乳のあたりを、適度とす、向ふへ突出さず、我身に觸れず、胸と物との間、五六寸計、あきたるを程とす、尤其物の、大小に依て、差あるべし、一概には、定がたし、扨下に置には、先篤と、尻を下につけ、而て後、持たる物を、卸すべし、尻の浮たる儘に早く置は見苦し、持て立時は、其物の前に、進み向ひ、正しく坐したる後、手を出して採上、小きは左掌にのせて右を添へ、大なるは、兩手に持て、足の爪先より立べし、

◎叩頭するに、尻を高く持上るは、猿に似て、野卑なる事甚し、田舍の這出者は、男女とも、大概かくの如し一見に、其無敎育なるを顯はす、然るに近頃は、行儀など云は、舊弊也と誤解して、粗暴なる擧動を、開化と思ふにや、良家の兒にして尻を高くする者多し、男兒はともかれ、女兒のかゝる、野卑なる擧動を、いましめざる、父母の心こそ、怪しけれ、又かやうの女兒は、坐するにも、足頭を、横へ出し、身を斜捩りて坐す、凡十歲未滿は、骨柔軟にして、身體、いかやうにも、曲らるゝなれど、捨置て、癖と成ては、直しにくゝ、身體發育の、害ともなる間敷にあらず、一日も、忽に爲べき事ならんや、是又、無敎育なる、下婢、子守等より、傳染するが多ければ、發

見次第に、叱りて直すべき也、
◎上流に、交際する人は、先上件の事どもを、克服膺して、後其時宜に從ひ、取捨すべし、坐作進退を、應用すれば、いかに急しく、走廻りても、禮は亂さぬやうに、なるもの也、

●醜男子は女子を樂ましめ得るか　葡萄牙の王后は種々の興味ある疑問を記したる一書を有せられ其疑問の一なる「醜男子は女子を樂ましめ得るか」と云へるに對し諸國王后の回答を求められたるに露國皇后は「然り美男子に近附き能はざる時は醜男子を厭はざる女子ありと信ず」と答へられ伊國マーゲリタ王后は「十五歳より三十歳頃迄の女子は美男子を愛し三十歳より五十歳頃迄の女子は美男子を好み五十歳以上の女子は男子の容貌を意に介せず」といはれバッテンベルグ王后は「醜男子と雖女子の愛を受くるもの多し只容貌の美なるのみにては美男子と雖女子の愛を得る能はず」と答へられたる由なるが葡萄牙王后は又自ら問に答へて「性質純良なるものは女子と男子とに論なく兩性の愛を受くるに足る最も賤劣なる男子は自ら美貌に飾りて女子を侮蔑するものなりといはれたり」と云ふ



流行

初春の晴衣

前號春衣の流行には禮服及び略服二樣の流行を紹介せしが本號には更らに初春の晴衣として高尚、華美、意氣質素の四通りに區別して記載すべしまず

◉婦人向

として上品なるは上衣地に平瓦斯、シルクケット、八重織、利休紬、唐棧雙子の紺、亦は革色に胡麻柄だちの縦縞は梅華織の薄藍亦は焦茶の片端子持、下衣に同地質の薄縹、又は革鐵にて縞柄のパットしたるもの、若しくは瓦斯織、繭紬織の朱入古代印花、羽織に斜子織、綾瀬織、本諸織の紺地、間明筋又は大島新紬、同風通の縞、及び龜甲絹絣を用ふれば此れに上越す好みはあるまじく

◉少しく華美

になりては都織、錦光織、琥珀織、絲入八重織の縹色、亦

は紺地に煤茶、又は白茶の縦縞の上衣、富貴織、小原女織、錦光織の亂縦縞、格子縞、新風通織の古代裂模樣の下衣、利休革、牡丹納戸、●縹色地の琥珀御召、富貴織、錦光織の羽織、いづれも優美なるべし、又

◉意氣向の好み

には上衣に古渡織、唐棧雙子の納戸地、諸瓦斯織、篗織の紺地にて華美ならぬ色絲を入の縦縞、下衣には同地同柄又は瓦斯本染印花の柳色牡丹色桔梗色にて淡泊なる模樣、羽織には錆赤絲入亦は紫紬の茶絣、吾妻紬の白茶間明樺筋など動かぬ好みなり、若き婦人は以上の内に就て金茶鶯茶などの入たる柄行を選むぞよき、裏地は薄縹を普通として老たるは濃縹、意氣向には褐色にて胴裏は瓦斯、紅秩父、慥かに紅絹の代用たるべしとぞ、少女には新機の霞織朧織などにて赤海老茶、牡丹色、桔梗色など入たる縦縞、暈縞、霞絣、山道絣など最新の流行なり、



◉男子向

として高尚なる好は本八重織、鶉織、斜子織、新機の綾瀬織の黒地又は鐵地の大明筋若くは琥珀織、大島新紬の縦縞をよしとす、其下着としては梅華織の小格子、唐棧雙子の洗納戸地の小縞、美濃屋好みの古渡織、新機の紫紬の茶地柳絣など最も雅致あるべし、以上の裏地は、キヤラコ、繭紬織、眞岡、瓦斯に拘らず、薄縹色に止めたり、羽織には本諸絲織、綾瀬織、諸綾織、錦光織にて色目柄行とも上着と大差なく分て地風縞柄とも上着と對の物を好む傾きあり、また書生羽織には右の外に大島新紬の絣、風通大島絣吾妻紬の縦縞など似合しき取合せとぞ

◉洒落なる好み

唐棧双子の古渡り柄、平瓦斯織、八重織、錦光織の紺地革色地に素鼠利休茶等の金通しだちの物を上衣とし、唐棧双子の赤絲萬兩亦は瓦斯織シルケツト織の古代印

花布を下着とし是に褐色の裏を着くるが新流行なり、此分の羽織には本八重織斜子織、諸瓦斯織の鐵地茶地の立縞物こそ好き取合せならむ、更に

◉質素なる方

上衣に綾絲織、八重織、唐棧双子、の紺地片端萬兩、變り子持の縦縞、和絲結城、シベクケット結城、榮紬等の小格子又は亂縦わりて裏は濃縹色、羽織は紬入結城、本諸絲織、瓦斯結城、唐棧双子の紺地黒地の縞目華美ならぬを用ゆべし、少年向には平瓦斯織、諸瓦斯織、熨斗横織、八重織、大島新紬等にて紺地に白茶利休茶海老茶鼠など各色配合の牛蒡縞又は格子絣、市松絣、段絣など十一二歳までの子供に用ひて愛らしく勇ましからん(東京㊙呉服店)

ば、来る新年の御題に因める呉竹鼠を始めとして新牡丹、楓茶、御所納戸、紅帯紫、昔納戸、千家茶、素鼠、紅鼠、櫻鼠、八千代紫、熨斗目納戸等すべて赤み又は紫氣を含みたるが當世とこそいへ、刺繍は別に異りなけれどその中にも、平絲繍、本熨斗目、絡、織掛、匹田、大内、両面責任繍などこの頃の好に適ひ、模様は年にかゝはらず大模様よりも小模様にて織掛繍なるが持囃さる、御題に寄せたる雪の竹はいろ〳〵に意匠をこらし古代の錦づくし、出合雲に有職のあしらひ、縷金波に神代の松平金破れ麻に楓、遠の春山など高尚にして好く黒地は粋人の顔にそひ砂金の結襟はた流行し又無地の共色二枚揃三枚揃は昨年よりおひ〳〵貴婦人向に注文あり之を年齢に配すれば十歳前後は地赤の縮緬地白の羽二重にして色金絲絲の華美なる草花模様、二十歳前後は乙女藤、紅鳩羽、紅かけ藤の縮緬地に綴縫、織込縫、巻縫、熨斗目、相良等の優美なる刺繍模様なり、友禪にても色絲若くは金絲の縫入りならねば行はれず、綴錦は高尚にして雅致に富めば大いに愛せらる、三十歳前後は梅

初春の流行(關西)

◎襟　顔のうつりの好惡は襟にあれば婦人が襟に好みを凝すもさることなり先づその色合の流行を擧ぐれ

利休、梅茶、紅かけ鼠、紅納戸、栗鼠の縮緬地に染色に適應したるけし、、、相良、卷、織込の刺繍に限れり、儀式用の白衿は縮緬、羽二重、紋羽二重、一樂織、鹽瀬等にして共色の刺繍ならんか（大坂ゑり卯報）

◎帯揚　前年始めて賣出したるに太く好時に適ひたるは刺繍の帯揚にて新年の禮服用殊に適當のものなりその意匠のあらましは麻形、結び輪ちがひ、破れ立桝、菱桐結び、酸漿くづし、青海波、結金に定紋ぬき等從來のに一々斬新の趣を加へたるもの、友禪縮緬にては鹿の子次第にすたりて匹田染の世の中となれり

段なり



◎頭巾　是まで流行せぬにはあらねど殊に本年は大流行にて別織出し附にて、端妻形更紗、鹿子の定紋附呼物となり色めは襟と略同じ

◎手帛紗　紺地に刺子染の両面形、雪中の竹色色、又東京竺仙染及大彦染も高尚優美とて美人の手に携へらる中にも雪中の竹は新年持ちとして各種の意匠ともに専ら愛用せらるゝ傾あり（同上）

◎櫛笄　極めて高尚なるには本甲の揃物昔より動かぬ所なればそれよりは比較上手の出易ければにや甲代の蒔繪、無地金もの等淑女の頭に上すもの多きに至りぬ目下の流行をうつせば元祿形透彫の上品にをとなしき方に向き、操形青貝入金蒔繪、半京形の高蒔繪に最も粋なるにむき新月形の流し無地金、青貝入の蒔繪などは物々しからず殊に瀟洒したるものなり以上は新年ざしにとて模様を雪中竹にちなみたるいろ／＼あり

◎根掛　けば／＼しきものよりは元結の結びがはり

に金属製の引結びを掛くること當今の流行にて殊にプラチナと純金との捻合せが優美なりとて粋婦人の間に持てはやさる

◎帯〆　紐物のバチン止は金物のかさ高う見ゆるより當世むきはかき印花、七絲綴をおもに用ふ年頃に應じて二分五厘より五分（五厘さがり）の幅にて純金の金具はおもひ〳〵ながら年ふけたるには無地物が愛用せらる（同上）

◎肩掛　婦人の吾妻コートが貧乏かくしなど嘲らるゝにつけてはあまり大層ならぬより肩掛の流行は盛んなり形は大いなるよりは帯の上にて留る位が程なるべし、色は令孃向に本年新渡の牡丹色特に顔うつり能くマルーン（俗に舶來茶）紫　これに次ぎ年ゆきたる方には、濃標色、茶など去年に異ならず、地合は無論レース織にて太總（猫ぶさとも）天鵞絨總（モールふさとも）が淑女の肩にかゝりスコッチ總はその次に位してあまり稱へられず、類に依りて記せば男子の首管巻は防寒用として從來行はるゝが舶來品はおもに色もの模様ものにて價の廉ならぬより廣くは用ひられずそれよりは色白にて斜綾目魚子地、無地羽二重のヘムトが多く賣れゆく、その製造は西陣、桐生などにて大きさは二尺、二尺二寸、二尺五寸の三種なり、これに似かよひて益す實用を主とするにはレースの首巻流行の徴も見ゆ　（大阪上中支店）

人形出



婚禮の式服（東京）

婚禮に襠を用ひらるゝは其の地方により其の習慣はあれど關西よりは關東の方最も多く用ひらる其の襠は惣模様で模様は蓬萊山とか松竹梅に高砂とか何れも目出度もので色糸金糸の縫ひ入り地質は繻珍、緬縮、綸子なぞにて色は緋、白、黒、鼠、袖は振袖と並

袖あり裏は何れも緋の通し裏で上等では緋の鹽瀬、緋縮緬、緋羽二重、並は本紅絹を付くるなり其の並にして仕立上りの代を言はゞ繻珍織の振袖――七十圓より九十圓並袖――五十圓より七十圓緋縮緬の振袖――四十七八圓より五十五圓並袖――四十圓より四十七圓緋綸子の振袖――四十圓より四十五圓並袖――三十七圓より四十二圓白綸子の振袖――三十圓より三十八圓並袖――二十四圓より三十圓黒綸子の振袖――三十八圓より四十三圓並袖――三十二圓より四十圓色縮緬の振袖――三十五圓より三十八圓並袖――三十圓より三十五圓位以上仕立上り寸法は振袖丈け四尺五寸袖二尺八寸並袖丈四尺五寸袖一尺八寸なり次ぎは帯付き衣裳にして

▲腰模様　縮緬の黒亦は銀鼠、櫻鼠、紅空色なぞの紋付にて暈模様色糸金糸の縫ひ入り紅絹の通し裏で仕立上り振袖――三十五圓より三十九圓並袖――三十三圓より三十七圓位なり

▲高裾模様　やはり縮緬の紋付き暈縫ひ入り模様紅絹の通し裏で仕立上り振袖――三十二圓より三十七圓並袖――三十圓より三十三圓位から亦た裾模様は振袖――三十圓より三十五圓並袖――二十七圓より三十二圓位とす

▲緋無垢　緋縮緬の引返しで胴裏は紅絹を付け仕立上り振袖――二十四五圓並袖――二十二三圓位

▲緋紋縮緬　の引返してやはり紅絹の胴裏を付け振袖――二十七八圓並袖――二十四五圓位緋の紋羽二重なれば振袖――三十圓より三十五圓並袖――二十五圓より三十圓位當時緋紋羽二重大ひに流行す

▲白無垢　白は二枚揃ふを普通とす此の仕立方は一枚づゝ別々に仕立つるもあり亦は比翼仕立もある白綸子の引返しで胴裏を白羽二重とし仕立上り二枚なれば振袖――三十七八圓並袖――三十四五圓比翼仕立にせば振袖――二十八九圓並袖――二十四五圓白紋羽二重でやはり羽二重の胴裏にて二枚は振袖――五十五圓並袖――四十圓位白羽二重の無双二枚は振袖――三十二三圓並袖――三十圓位比翼にせば振袖――

一二十七八圓並袖——二十五六圓位
▲長襦袢　緋縮緬の通しで半衿白紗綾形綸子袖裏紅絹胴裏紅木綿を付け友裾で仕立上り振袖——十七八圓並袖——十四五圓緋の紋縮緬で半衿はやはり綸子袖裏時色縮緬胴裏緋の秩父時色の裾廻して振袖——二十二三圓並袖——二十圓位なり（東京大丸呉服店）

●童兒の恐怖するもの　米國教育局に於て一千五百万人の兒童は就きて彼等の最も恐怖するものを取調べたるに其結果最も多くの兒童は雷鳴を恐れ次に蛇類を恐れ其次は見馴れぬ人、暗黒、火事、死、家畜、疾病、野獸、水、蟲、怪物等なりと又同一數の女兒と男兒とに就きて恐怖する物の數を比較したるに女兒は千七百六十五個を有し男兒は千百〇六個を有したり又女兒の鼠を恐るゝもの七十五に對し男兒は十三なり而して男兒の恐怖心は七歳より十五歳まで次第に增加して夫より漸次減少し女兒は四歳より十七歳まで男兒よりも激しき割合に恐怖心を增加す雷鳴、蛇、盜賊等を恐怖することは年と共に增加す怪物を恐るゝ心は多くは他の兒童の談話或は繪畫より得るものにして百分一は兩親より其話を聞きたるものなりしと



娯樂



◉雪すべり

冬季の戸外遊戯として雪すべりは最も興味あるものゝ一なり寒國にありては必要上橇亦は滑靴にて雪の上を滑り歩るく事なり、瑞典、獨逸等に於ては數多の組合を設けて雪の降り積みたる日に相集りて其の技術の優劣を較べ、列をなして市中を逍遙し、或は遠く郊外に遊ぶなどは常の事なり、獨逸瑞典等にて行はるゝ雪すべりには長さ五六尺幅三寸乃至四寸程の木を滑かによく削りて一方の端を細く尖らして、上方に反らせ、中央に靴留を造り、それに足を結びつけて自由に滑り行くなり、不熟練の者には足の運び意に任せず往々倒るゝ事ありと雖も熟練を歴るに於ては其速かなるよ奔馬の如く縦横自在に駈け得らるゝなり、されば或は之にて競走を試み或は斜になりし岡の上より滑り落つる等種々の遊

戯をなして樂しく暮らすなり。

◉氷上の舞踏

之れは佛國に於て行はるゝ處なり、巴里市の一隅に天井を硝子張にしたる長方形の廣大なる一室あり是は巴里人民が氷上を舞踏し又其他の遊戯をなす倶樂部にして兩側は二階ありて上下共見物人の坐はる座席に充て後方の壁は種々美麗なる彫刻を以て飾り所々に電氣燈をつるし恰も水晶宮のごとし斯くて其内部は長三十間巾十五間の廣さを一面甃石にて敷つめ傍らに一棟の建家ありて其所に製氷械機を据付絶へず運轉して甃石の上に三四寸の氷を張らしむるなりされば地上に張りたる天然の氷と少しも變る事なく滑靴を穿ちて其上を彼方此方と滑り廻るなり。此中にて最もよく行はるゝは舞踏會にして傍らの音樂室に於て奏する音樂につれ男女相携へて踊ると元より尋常舞踏の法に違はざれども滑かなる氷の上にて滑靴を穿ちて踊る事なれば其運動迅速輕妙にして尋常のものよりか遙かに興味深し其他或は競爭鬼ゴッコ種々の運動遊戯も行ひ得らるべく樂師は常に一室に扣へ居れば望に應じて音樂を奏し以て興味を助くるなり又葡萄酒シャンパン菓子果實コーヒー等すべて美酒佳肴等を備へありて欲するまゝに飲食せられ得るなり。殊に尤も贅澤なるは見物人の居る處には大なるパイプに蒸瀛を通じて冷氣を防ぎ適當なる温度を保たしむるなり、これが爲め自然氷の溶解すると速かなれば絶へず器械を運轉して新に氷らしめて解けたるを補はざるべからざれば、其の費用尠少ならざるなり

何人にても三「フラン」（凡我二十錢）程を投ずれば場内にて見物すとも、又自から遊戯しても可なれど此道の名人數多入り居れば初心の者は此處にて試み得べくもあらずといふ、場裏の氷上には決して泥に汚れたる靴にて這入ると又塵芥を投入るとを許さず常に四五人の番人注意して掃除し又兩側に少なる水吐造ありて解けたる氷をそれより流出せしむれば、常に一點の汚物なく單に場内に臨むのみにても精神の爽快なるを覺ゆるといふ。

才媛詞藻

第一回懸賞文披露

歌のしほり

佐々木信綱先生選評

天賞

鏡　長崎縣西彼杵郡浦上山里村　芦塚よし子

木下やみひるものすごきみ社に
かゝれるかゞみ神さびにけり

地賞

同　岡山市柳屋町九番邸　新谷美穂子

たらちねの母のかたみのますかゞみ
むかふすがたぞたゞされにける

同　愛知縣愛知郡熱田神社　内田とく子

くもりなきますみのかゞみ影すみて
心も見ゆるこゝ地こそすれ

入賞

同　本郷區湯島六丁目十番地　小林静香子

古のこゝろのまもりいたづらに
姿見るべきものとはなりつ

山家早春　名古屋市門前町二　鷲尾米子

都にはいつかにほはんわか山の
梅の林の春のあさ風

同　下野國小山町二六　沼部林子

山里のかけひのつらゝとけそめて
春をつたふる水のおとかな

秀逸

鏡　信州　小岩井佐吾子

形見なる母の鏡に向ひては
また思ひ出でひとり泣くかな

同　静岡　酒井なか子

いかばかりやさしからましまま鏡
ひとの心もうつらましかば

同　　　武藏　保谷てい子
折向ふかゝみのみこそまことなれ
　いつはり多き世にはあれども

同　　　栃木　小曾根茂子
くもりなき神の御前のかゞみこそ
　尊き神のこゝろなるらむ

同　　　廣島　翁　正子
天の下國やすかれと皇神の
　授け給ひし八咫のみかゞみ

同　　　甲府　新海榮子
ひとりたゝくもりなき世にかけたるは
　心をうつすかゞみなりけり

同　　　松本　岡野みや子
朝な朝な向ふかゝみにくもりなき
　心のかけもうつむとそ思ふ

同　　　仙臺　菊池たね女
かくてだに親まるゝよ朝鏡
　思ひ捨てにし浮世にやわらぬ

同　　　磐城　松崎操子
あきらかに世の事皆のうつるべく
　心の鏡磨きてしかな

同　　　神田　平山いね子
母君のうせまし丶よりますかゞみ
　くもりかちにもなりにける哉

同　　　神戸　青木京子
ゑめばゑみ怒れは怒る世の中に
　さながら似たるますかゞみかな

同　　　備後　妹尾千代子
見るたびにかなしさまさるかゞみ哉
　我世ふけゆくかけをうつして

同　　　山梨　土屋みよ子
よしあしのかたちをうつす鏡にも
　こゝろの影はうつらざりけり

同　　　神田　大塚こう子
給はりし折もありしをますかゞみ
　うつりやすきは人こゝろかな

同　　　神田　須原たん子
みどり子の笑顔うつくしわが影の
　うつるとしらでむかふ鏡に

同　　　松本　島田治代子
顔かたちうつすかゞみにてらしみよ
　おのが心のかけはいかにと

同　　備前　重松たき子
こゝろのみすきし昔にかはらねと
　かゞみにうつるかげぞ老いゆく

同　　下野　田村恒子
みがきてもひかりなき身は打むかふ
　かゞみの前もはづかしき哉

山家早春　　静岡　酒井なか子
四方の山積れる雪も消ぬ間に
　うら〳〵霞む春の山里

同　　尾張　村瀬胤子
村消の雪またのこる山かげの
　しつかかきねに春風ぞふく

同　　甲斐　東みよし子
山里の泉の氷まづとけて
　春の姿ぞ湧き出でにける

同　　山口　草賀菊野
立ち歸るとしを祝ふと山越えて
　學びの庭に通ふうなる見

同　　大和　武田ことみ
白雪は未だ消なくに春立ぬ
　谷のうぐひす途まどふ覧

同　　四谷　大川茂登子
やまふかみまだ雪消えぬ柴の戸の
　南のかたに梅咲きそめぬ

漫言

佐々木信綱

投稿せられし歌どもを見るに、中には未だしと覺ゆるもあれど、姿調とゝのほれるもの、想の新らしきものはた少なからず。これを數年前の婦女雜誌時代の歌と比ぶれば、雲泥の違にて、世の中の歌の進歩と共に、女子の歌も又大に進歩したりと云ふべし。元來女子の文學に成効し、其名を不朽に傳ふるもの、小町式部の昔はいはず、近き世にても其例尠しとはせず。我常に、歌に志す人に、想を深くせよ、想を廣くせよと敎へをり。近き頃は、漫りに想の新らしき事のみを戒めて、深きもの少なく、詩材はたいと狹く、動もすれば最も厭味多き熱情を歌ひて、得たりとするもの多きはあかぬ事なりかし。女子には女子の性質として、物事に緻密にして、着想また男子の思ひもよらぬ、やさしく、女らしく、はたあはれなる情を保てるものなれば、古きに偏よらず、新しきに泥まずして、

よく其想を練り、趣ある所をとらへ、明治の女子の歌として、今の世にはた後の世に傳はらんほどの歌をよみいでられんことを望むものなり。

文のしほり

坂　正臣先生選評

甲賞

細川忠興夫人

神戸市中山手通五丁目　青木京子

あはれ、三戸野の里の柴のとぼその明暮よ。如何にわびしかりけむ。淺からぬ前の世の契あればこそ、夫とも妻ともよばれたれ。心にもあらでたち別れては、たゞかなしき我が子を、世に名しられむ人になさばやと、その父の心掟をおもひはかり、死ぬべき命ながらへて、くさ／＼の世のそしりを身ひとつにうけつゝ、物憂き年月過して、ひたすらに立てば歩めとおぼしたつる程に、よのつねならぬ操のふしを、人にしられて、一度きれしえにしは、再び結ばれぬ。あはれこの時の心よ。如何に嬉しかりけむ。　さるを難波江のあしのさはりの多くして、程もなくはしき夫は戰の場へ、あづまの方へいでたつべくなりにたれば、武士のならひに、生きて又見む事は、夫も妻もはた親も子も思ひ絶えながら、思ひきや。ゆきし其の人ならで、あとに殘りし人の、死出の旅路を急がむとは。年月めでにはぐゝみし幼き人々の玉の緒を、あはれみづからたちし、その母のむねのうちよ。如何にくるしかりけむ。殘るくまなく心まうけして、やがておのれとうせし人の心の、親に似ぬけたかさは、さすがの敵にさへ、人質の沙汰思ひとゞまらしめけん。げに命こそは、草の葉におかぬばかりの露とおぼゆれど、年頃住みなれし館の炎と共に、其の名もたちのぼりて、細川の流れて後の世にも、かたりつぎつゝ、そのかみの心をくむ人も多かりけれ。あなあはれ。

樅屋評　三戸野の里にすてられしは、節に死にし時よりも一層悲慘なり。此をとりて冒頭とし、深く同情を寄せられたる、まづいとよし。段落の明瞭ならぬ所いさゝか飽かず覺ゆれど女子の文にはありがちの弊にて咎むるに及ばず。すべて此夫人の傳記をおのが胃中に消化せしめて新に吐出せられたるぞめでたき

乙　賞

細川忠興夫人

兵庫縣城崎郡西氣村字塚本　和多田文子

貞烈は女の徳として守るべきことになむされどこの道はあやまり易くしてさせることもなきに身をはかなくなしはてゝ潔よしと思へるもの古より其例少なからずこゝに細川忠興の夫人はよく此道を全うせしものなり始め父の爲に大に斥けられて山中にあるときあだにながらふべからざることを戒めし人ありけれどもいかに女の身とてみだりに朽ちや果つべきとていとゞ辛き目を忍びつゝ時を待ち得て再び夫につかふることゝなりぬ一たびこと起りてまた去りがたければいまはとていさぎよく其身を捨てぬこれまことに貞の顯はれて烈となりたるものになむあはれかりこものみだれ〳〵てまことの道の明かならさりし世にしもまして父のさかしまなる心にも似ず正しき節を守りてあだし小道にふみ迷はざりしはますらをとてもなか〳〵に及びかたかるべきふるまひにこそ

縦屋評　簡潔をむねとせられたれどもいふべきふしは漏さず取捨のよろしきを得られたるものといふべし

乙　賞

細川忠興夫人

飯田町五丁目八番地物集様方　風間ゆき子

今は昔徳川家康と申すおはしけり下をもなでうつくしみ給ひければ草木の風になびけることと國ひろしといへども從はぬものなかりけり奉行とてありける三成にくゝねたましく思ひてこの君をばなきものにしておのれひとり世をしらんとより〳〵に謀めぐらして方人あつめなどす時しも慶長といひし頃上杉景勝をことむけにとうちたち給へりしかば折こそ來つれと細川忠興をも語らはんとして思ふやう女のかみすぢをばよれる綱には大象もたやすくつなかるゝならひなりましてかなしうする妻子ならはいかにたけからんともほだされぬべきは一定なりと妻なりける人のもとへことよげに云ひなして人質に迎へとらんとしけれど夫人は三成が心の底を汲みはかりたればうけがはず今は云ふともかひなしとてつはもの數多やりて館とりかこみても具せさせんとしければ夫人はおもへらく吾が子もろともゐて行かれぬと聞き知り給はゞせの君の猛き心のもしくじけもぞするかゝらば武夫のあるまじき業かなとしりうで

と云はれ給はんさては女のみさをもたつべからずおのれを殺してもしかじ夫の爲にせんにはと思ひとりてをさなきものをかいいたきてはふり落つる涙おしぬぐひてあごよなれも父君に孝つくすへきなればねんしても苦しとな言ひそたのしき國に率て行かんとてさし貫きて吾身も心靜かに咽かき切りて失せにけりとそいかにを丶しき夫人ならずやかくたけ〳〵しき方にのみす丶めりし人かと思ふにつねはおだしくみやびかにて歌をもよう詠まれけりとそ

なべての女はたいらかによしと見ればあまりになよびすぎかとありとみれはそれもおに〳〵しくありなどしてとあればか丶りあふさきるさに難つくましきはすくなきをこの夫人のつねは女しくてこと丶あれはかくを丶しきふしあるをこそ誰もか丶みには思ひ定りぬべけれ

縦屋評　中むかしのふみぶりによく擬せられたるはかいなでのちからにはあらぬなるべし

丙賞　細川忠興の夫人

荏原郡大崎村下大崎　立石まさ子

慶長五年奥の上杉會津によりて反きたる由聞えしかば五月ばかり家康らを鎭めむとて細川忠興等を從へて馳せ下る大阪の奉行等は此の時に乘じて亂を起し家康を失はんと計りつる事なれば内府に從ひて關東に下りし大名の妻子を召捕らへて城中に質となさば諸侯は必ず大阪に味方すべしこれ家康を孤立せしめよわからしむるにはこよなきてだてなりとて先づ細川の妻子をむかへむとす夫人は明智光秀の女にして日頃夫の心の奥も知りぬ妻たる務を盛すべきはこの時ぞよくあともりて夫に内顧の憂なからしむるこそ吾が務めなれとかたく心に誓ひつ丶使者度々に及べども拒みて入れず石田等甚く腹立ちて邸を攻むるは必定なりとて齡七十歲にあまる姑に向ひ萬一石田等邸を攻め候ひなば妾は召使ふ者共と逃れ候ひなむ御身は齡もいたくつもり給へば御ありきも御心にまかせられざるべければ今の中に長子忠隆の妻と共に實家なる浮田氏に難を避けらるべしといふ又日頃愛で使ひたるお霜といへる侍女をよび敵邸に迫らば妾は自害せむと欲す汝は賤しき者に身をやつし邸内に火起らばいちはやく逃れて關東におもむき吾が君に見えて妾が最後の有樣を告げよとて御國ぶり一首をかきそへて之に與へ又老職を召して窓をへだ

てゝいふやう吾が父さきに織田侯を弑せし時吾が君妾にいひ給ふやう眞は主を弑せり逆之より甚だしきはあらさるべし吾れ今汝を離婚せずば世の人は必吾を逆に與みする者とやいはむとて妾を丹波の國三戸野村に送らしめき妾はこゝに世をわびつゝも住ひける程に口さがなき村人等は妾を逆賊の女としていたくのゝしりはづかしめき妾世にも口惜しくいきとほろしくて覺えず自害せむと懷劍を手にせし事も幾度かさりながら凡天地の間生きとし生けるもの誰か子を愛せざるべき此の時與一郎猶幼し今母にはなれなば誰か又之を養ひて父君に還す人のあるべきあはれまな子の爲には憂さも辛さも物かはとて恥を忍びつゝ片田舍にをしからぬ命をながらへしが思へば幸なりき天正十二夫は豐臣公の命のまに／＼再び妾を迎へ給へり妾の喜びいかばかりなりけむ公は妾の恩人なりさはれ又倶に天を戴かざる父の仇なるをいかにせむされば其の後公あるは散樂を張りあるは醍醐の花見のうたげの催しにも病と稱へて赴むかざりしは子としていかで父のかたきを見逃得べきさりとて又まのあたり恩を受けし人をなどか刺すに忍びんとおもひはかりてなり妾こゝに死を決し夫に事ふること年久し今此の變に遇ふになどて驚くべき今こそ妾が命を捨つべき時の來りしなれと云ひしかば老職等皆感じあつき涙にむせびつゝ退きて門をとぢ堅く守る幾ばくならずして敵果して攻め來り十重二十重に邸をかこみ矢玉は雨あられの如し夫人今はこれ迄なりと覺悟し十歳になる男兒と八歳になる女兒を膝ちかく呼びよせて頭を撫てつゝ曰く汝等よくきゝね弓矢とる家に生れたるものは死すべき時に死してこそ武士たる甲斐はあるなれ若し死すべき時に死せずばいかなる生耻さらすらむ今敵已に迫れり兒よ母と共に死せむゆめな恐れぞとて之を刺し已れも又自殺す召使ふ者共皆從ひて死せり忠興變をきゝ辭世の歌をみて且つかなしみかついかり遂に東照公に從ひて先鋒となり關が原に於て石田等の軍を破り熊本五十万石に封ぜられたりこれ忠興のいさをにもよるべけれど夫人死節の力によること多しとぞ

あはれ夫人のかぐはしき名は流れたえせぬ細川の家と共に千年の後までもいやつたへに傳へて永く婦人の鏡なるべし

縦屋評　委しけれどもくだ／＼しからず

丙賞

細川忠興夫人

伊勢國飯南郡松坂町字新町　安保れい子

夫人の父は明智光秀なりけり夫人みめうるはしき上に性質すなほにして才めでたく天正七年の二月忠興にかしづきて偕老のちぎり淺からず比翼の語らひいくとせをふともかはらじとみゆる仲に子さへあげたりと思へば無殘『逆臣の女を我妻とはなしおきがたし』とて一朝離別せられたる時夫人の心は如何なりけんそのやさしき胸には夫を思ひ父を思ひ將た我子を思ひてしば／＼もだへがたかりしならむ生きてうきめを見んよりは早く刄に伏して相果てんとは覺悟ありしならむされど夫人は一旦のなげきに沈みてさることとせんはなか／＼に女々しく思ひたりしなりあまり愚かしく思ひたりしなりそも夫忠興は夫人の父が罪をにくみてその夫人に及びやがてまたその子に及びたるを見て實に夫人は己がかなしみを忍びてなすべきことのあるを覺りしなりき我死なんかあはれこの子を如何にせむ我死なんかこの子は直に路頭にまよはむ我死せずしてはぐくむにあらずば永く浮浪の身となりてはかなく朽ちはてなむ我兒は實に我兒にあらず夫忠興の大切なる胤なるものをあはれ之を路頭に迷はしめ浮浪の身とならしむることの罪深かさよ我已に夫に捨てらるゝも夫は尚夫なり身は今三戸野にあるも思は尚我夫の傍にあり即ち今尚夫婦なるをなど我かゝる罪を犯し夫婦の倫を失はめや父討たれ給へど我は死なじ家臣どもの自害を促す者あれど我はきかじ世の人の臆病とそしれど我は心にもかけじ吁例へ如何ばかりつらかりとも我よくたへ忍ばむと雄々しき夫人の心は思ひ定められぬかくて朝な夕な幼兒をいたはりはぐゝみて或る時は五常の倫をさとし或る時は文まなぶわざを敎へて幾多の月日を送りけりあゝ倘詳かに夫人が此間の消息を伺へ實に夫人が此間の消息をもて天下の婦女たるものの心得定まるとや云はまし

吁あはれさてもいかばかりあはれなるぞ此の貴き夫人三戸野の山中に埋れて雨になやみ風にさらさるゝ事二とせ漸くその正しき操とをゝしき節とは天にや通じけん谷の埋れ木のつひに朽ちはてゞ覆水のなげき舊にをさまり再び花の春にめぐり逢ふ事とはなりしがさては宿世のつたなかりけん將たある因緣の其身にさへ及びたりけん夫忠興は遠く東の軍にありて已れなにはの館

に留守しける間にあゝ一大事は起りつ夫人は仇なる者に逼まられてつひに最後の節操を夫に立てぬ見よ無殘男山より吹き荒む嵐にハッと燃え上りたる炎は血煙こめて物凄く
吁細川忠興の夫人の高く清き名はかくて萬代の末に向ひつゝあるよ

縦屋評　文に氣力ありわかき女のおもひつきぬべきすがたなり

丙　賞

細川忠興の夫人

鳥取市吉方町　津田雪子

平らかに治まる御代に生れ來て、足らはぬふしもなう。のどかに日を送りながらおのがじし親につかへて孝をつくし、夫につかへて、よく操を守るべき、日々のつとめすら、怠りがちなるはいかにぞや
まして世はかりごもとみだれつゝ、あかねさす日もはれやらず、あやめも分ぬ暗となり、たふとき古人のとき玉ひし、仁義五常の道はすたれはて、踏み分け行かんよすがもかたき、其中を、あだなる道にふみも迷はず、曲玉の曲ることとなく、うつすみのたゞ一すぢに、まことの道を誤らざるものは、たけく秀でし丈夫にさへいと稀なり。さるを、かの細川忠興の夫人の、よくこの道を心にとめて、操を全くせられしは、げに生ひ茂れる。雜木の中の櫻花とこそたゝへつべけれ。夫人は明智光秀の女にして、心のおきて、いとたゞしく、万すぐれてかしこき人なりき。されば忠興にとつぎてより、よく夫につかへていささかも、妻たる道を失はず、賢夫人の名いとたかゝりしが、父なる光秀まさなきふるまひありしにぞ、ために夫人はつみなうして丹波の奥にうき月日をすごせしも、つゆ心をみだしたまはず、人の諫のことの葉も、夫の命のなきものをと斥けたまひし心の内思ひやりまゐらすも中々になん。これすら並々ならぬふるまひなるに。破鏡再び元にかへりし程もなく關が原の戰に、石田がために危く人質にとられんとせし折男子すらたゆたふばかり決心に、朝夕なでし其手もて、いとしき我子をさし殺し、自ら刄に伏したまひ、夫の心を勵まし人々の難を救はれしはたらきは、妻たる道つゆあやまたずげにたぐひまれなる烈女ならずや。
さればこそ、呉竹の世々に其名は香しく大和女の鑑ぞともてはやされたまふもうべなりや

縦屋評　文勢さながら夫人の意氣に似たり

甲賞

虚飾を戒むるの文

くれたけ

御身が常にめでたまひし、南の窓の梅の花、きのふけふ咲きいでしを見るにつけても、いかにおはすとなつかしうぞおもひまゐらする。あはれ此花の、ふる白雪をしのぎ、寒けき風にたへて、ほころび初めし其姿の清らさ。貞淑なる女子が、容儀端正なるにたぐへつべく、又其かをりのこよなくゆかしきは、擧止の閑雅なるに准ふべくなん。牡丹の艶なる、女郎花のなまめきたる、ふと心ひかるゝものにはあれど、此梅の節操には及びがたかるべし。ことに御身のごと、物學びに餘念なき際は、虚飾に心ひかされて、なすべき業を怠るごとき事あるべからず。さりとて女の身として、蓬髪垢衣、みだりに磊落書生をまなばんは、片腹いたき極みに候。たゞ常々心がけて、清らかに奥ゆかしきさまこそあらまほしくこそ候へ。こは姿形のみにはあらず。友垣との交り、其他なべてのわざ、眞心をもてとり行ひ給ひ候はゞ、人も慕ひなつかしみ候事、梅の花を見るがごとくに候ふべし。かく山川をへだて候程に、梅の花の咲くを見てだに、まづ御身の上の思ひ出でられて、學びのやにて、我よりもなほ深くこまやかに學び心得給はんことを、老いたる人の如きくり言、あしくなおぼしそ。いとしき妹よ。我はいまださばかり老はしはべらず。夏の伐みの待たれぬる哉。共に濱邊に打つれて、美しき貝や尋ね侍らん。かしこ。

縱屋主人評　此篇は實妹の他國に留學したるに遣す文と見えたり。妹が家に在りし時愛せし梅の、今年もかはらず咲きたるにつけて、同居せし頃を思ひ出せる、姉が親愛の情、まづ靄然たるを覺ゆ。さて妹の年齡、やう〳〵世の人なみに、身のまはりを飾らまほしくする頃なるを、常々心がゝりに思ひしかば、その親愛の情と、警戒の意とを一團となし、梅花によりて諷諭したる、迫らず擱たず。いと〳〵婉曲に聞えたるこそ、げにも本題に對する女子の作文とうべなはれ候らへ。およそ世の中の事、中庸は行ひ難く、修飾すなと教ふれば、あまりに見にくゝ女らしからずなりゆき、それを矯めむとすれば、又なまめきすぐるが常なれば、作者はこゝにも注意して、尙一歩を進めて、百般の事、皆眞心よりすべしといへり。眞心よりせんことは、げにも虚飾にはあらじかし。他にもよき文はあれど、婉曲の點に於て、皆この篇に讓らざるを得ざるに似たり。女子が女子をいましむるには、かりにも圭角をあらはさざらむことをつとむべし。議員が政府を攻撃し、新聞紙が反對黨を論破するやうにては、中々にさきの人をして、感服改悛せしむることは能はざるおそれありぬべし。

乙賞

虚飾を戒むる文

東京麹町區元園町十三番地　戸田愛子

さえかへりたる如月の空の、寒けさ身にしむ様に候を、例の月花もよそにして、御いそしみのヿと、嬉しう存じ候らひつるを、いまはしき御噂こそ、承りて候らへ。扨も御許様には、ありしにも似させ玉はで、此日比は御身のまはりを、始め、萬づの調度ども、きらびやかに、けば〳〵しう、人目をひく様に遊ばされ、文の上に御心ひそめ玉ふべき折も、御身の装にのみ、御心配らせ、自然學びの道わくるヿも、おろそかになりもて、ゆき玉ふとか、誠にて侍らば、淺ましき、御心にも、ならせ玉ひしものか共に學びし比には、いつも質素勤勉もて、聞え玉ひ、虚飾をば、人の身の仇とまで、語らせ玉ひし御身の、如何なるまが神の御心みだせばか、かく人の口端にかゝる様のヿ、しいて玉ひしぞ、様々のまがどは皆戒を忘るゝより始るとかや、誰しも若き身、若き心にはよき衣うち着よろづの調度くしくめでたきをしたゝめたきなれど、さらぬだに、文學べる女子は、世の人に注目せられをる今日なれば、わけて身をつゝしみ行をたかくし、すべてのよそひも、めだたぬ様にし、只身の内淸らに、取り亂さじとつとめ給はゞ其心もおのづからやさしく見えてゆかしかるべけれど、はやりを逐ひて何も〳〵華やかに取したゝめ候はんには其心の程も計られて人のかげ言口をしく候らはんましてはやりなど逐ふはうかれめ等のむねとする業、心の内をば磨くヿを怠り外面のみ形づくらんはうたてあるヿに候ふる里の御母君には心に錦着よとこそ望み玉ふべけれ御身のみ飾れとはいかで願ひ玉ふべき御父君み國の爲はえある戰死遂げ玉ひにし後は女乍らも子たるに耻ぢぬ様家の名をも擧ぐるやうと重き責おひ玉へる御身には候はずやされば常に心を戒め恐るゝヿを忘れずはげみ玉ふべきを、よそに御心そらし玉ふは何事に候ぞ申迄もなく一時の思召たがひとは存候へ共學び屋の花と迄稱へられ玉ひし御身の殊には高根の花かざし玉ふべき日も遠からぬを少しのたゆみより學科の出來ばへよからぬヿなど候はゞうたて口惜かるべく誰しも過はあるもの之を改むるがいみじとかやあはれさやかなる月の一度は曇るともやがてはもとの影淸く一きは人に仰がれ候はんを御許にも御母君の御上など思しめぐらされはやう元のすが〳〵しきみ心に御たちかへりの程ねが

はしう候日比の御したしさに甘えいやなしとは存乍ら打ち思ふまゝを廻らぬ筆にいはせ御面をかし參らせ候をもとの友垣へだてなかりし折のみ心になりてきゝゆるしとり用ゐ玉はらばいかにうれしく候はん何ごとも後の日をちぎりてとあら／＼かしこ

縦屋評　これは同窓なりし學友の、今は所をことにしたるがもとへ、近來の不心得をさがめやりしものと見ゆ。語氣峻厳に過ぎんかとは覺ゆれども、友を愛する熱情はあふれたり。

乙　賞

虚飾を戒むる文

下野宇都宮　山里ゆき

文して申上候此頃はしばし御とほ／＼しく相過し居り申候へ共定めて御替りもなく御勉學なされ候筈と御察し申上候然るに此程うす／＼承はり候へば御前樣是迄の御志にも似ず殊の外人目に立つ程きらびやかに美しく着物はき物頭の物迄皆々わたりまばゆき迄に御取飾りなされ候などとり／＼のうはさ之れあり始の内は唯々世の嫉み心にて評する事よと聞流しに致し候處愈〻惡評うるさき迄にとりはやし申候に付き折入て相尋ね申候に思の外なる事にて誠に驚き入り申候抑も着物の目あては寒さを防ぎ肌をかくすに外なければ垢付かざるを以てあき足り申すべきは人々忘るまじき事に御座候まして此宇都宮は舊藩侯の時日々の御膳は一汁一菜めし物は綿衣を用ゐられ萬事專らつゞまやかを旨とし職業を勵まし給ひしより今に至る迄皆質素を守り人々豐かに家榮え安らかに生を過し申候此のあり難き地に生れし人々は誰にても御教訓を守りゆめ忘るまじき事と常々妾等と語らひ給ひしをしばしの程に忘れ給ふとは何事ぞ行末遠き御出世の首途にかゝる御振舞は誠に嘆はしき至りに御座候兼てよりさとき御生れつきなればわか氣に任せ一時の御心違とは存じ得へ共斯くては世の風評も益〻惡しく隨て是迄の御苦學も水の泡に相成り候て後悔致され候ても取り返しの附かざる事となるべければ篤と御心中に御思慮成され候て御改めの程ねんじ上候人誰か過なからんとか又は過ちては改むるに憚る勿れとやらも聞き侍れば能く／＼御反省の上早速御改心下され度兼て親しき御間柄寸時もだし難く取り敢へず書中を以て御忠告申上候猶御面會の折も候らはゞ縷々御相談申上ぐべく候先づはあら／＼かしく

縦屋評　これもまた、親友に善を責めたるものならん。上なると、さ

せろ庭遜なきに似たり。

丙　賞

虚飾を戒むるの文

豊前豊津本町　柳　瀬　鎣　子

親しき友どちのおひだがらとてぶしつけをもかへりみで一筆申上候時節がらとは申しながら今年の寒さは殊の外なる思いたし候をいつもかはらせなう御すぐし遊ばし此上なううれしき事に存候さて人の噂に聞き候にあなた樣には此の頃衣服より髪飾足のものまで華美やかなるを好ませられ候てかりそめの外出にも綺羅をかざりたまふよし此は御身のためいとをしき御事と存候さなきだに今の世の中はなべて價高き華美やかなる見えよき品を好み申し候が流行の事に候も古人の敎しへ遺されし如く奢は身を亡ぼし國を傾け候基となるものなれば愼しみても愼しまざるべからざる事に候日頃賢こきあなた樣なればかゝることはとくより御わきまへのはずゆゑ此度の事はまたく一時の出來心より知らず〳〵にふみまよひたまひし御事ならんと推し申し候何とぞかゝることは一日も早く御改めなされ候やうひたすらにこひねがひまつり候一時の迷も速かに改め候はずては身に染みてやめがたきやう成り申すべく候かへす〳〵も御心ひるかへし儉素を旨としあまりの財は積み畜へて國の爲めまた救助の爲めなどに用ゐさせられ候やういたされ度いと〳〵申上にくき御事なれど悪しき事一旦耳に入りたる上はそのまゝにいたし候事本意なき業にて友どちの甲斐もなきことゝ考へられ候ほどにかくは御いかりもかへりみずさかしら言進め申候間何とぞ私の心の中御推もじありて御取りあげ下され度ひとへに願ひ入り申し候かしこ

縦屋評　友を思ふ情善を責むる勇氣ともにあふれたり

丙　賞

虚飾を戒むるの文

長野縣諏訪郡敎念寺塚　加藤ふみ子

雪げの風は針以て刺すが如き折からいかに御すごし遊ばされ候にやいと心もとなくなむ、こなたには別に變る事もなういさみ居候まゝによそながら御心ゆるべさせ給へ、げにや君にくらへては遙におとれる童などが今更にさかしらだちて聞えあくるもいかがはしき業なれども、ふりわけ髪の昔より心知られし友垣はらからとまで睦みかはしし御方なればゐやなさも打ち忘れ今

こゝに思ふふしかいつくねてまゐらするにこそ、さても日々月々進みゆく此時に當り世の人はいよいよ輕佻浮薄にながれ美貌佞言を以てよく人に媚び身には綾の衣錦の帶をまとひよそほひみかきなす車に乘り大路をほこり顔す、ふとみれはいとも尊く氣高かけれども、一旦事に當りては、人のなすへきゐやをもしらず人の知るあはれも知らず、げに車引く馬にも劣りたりといふべし、古より虛飾の爲にあまたの財を費し國家をあやふくせし例少なからず、それのみならずいまはしきは我國女流中にありては柳腰を愛で外つ國にては胸を細うし足の少さきを以てこよなく貴しとす世のならはしによるとはいへ皆虛飾の爲に天賦のからだをそこなへり思へば淺ましき事の限りに候はずや、第二の國民をも養ふべき若なてしこをしてかゝる樣ならしめんには我國勢を維持すべき事いともいとも覺束なく、思へば思へば口惜しき限りに侍らずや、君のさかしき御心や既に辨へさせ給ふらんが此愚言をも捨て給いて御心にうへないますます愼み戒め給はゞこよなきうれしさになむなほきこえ上度き事難波の葦のいとしげけれどもおくるる雁の便にとかきもらし申候

返す返すも御寒さの折からいたはらせ給ひてよ

あら〳〵かしこ

縦屋評　虛飾の弊を論じてうらみなし

丙賞

虛飾を戒むる文

米澤市元籠町　大熊信子

其後は誠に御申わけなき御無沙汰いたし候事平に御ゆるし下され度候、さて人つてに承れば御許樣には都にて名もしるき學校に御入學遊ばされ何一つ御不自由の事もなくくさくさ御敎を受けさせられ早や御卒業の期も間近き御身にてありながらひたすらすがたをつくろひ衣服の撰擇にのみ御心をこめさせられ學びの業は少しも御心にかけ給はず日夜身のけはひにのみ御心を奪はれ給ふよし幼きよりむつびなれし御許樣の事なればこは世のうわさと思ひさのみ心にもとめ候はざりしにこたび歸國せられしさる知り人より承ればまたく世のうわさのみにも候はぬよし誠とはおもほえずいといとおどろき入り申候御存じの通り我が米澤は鷹山公のひたすら儉約を旨とし給ひ貴き御身にてありながら御自ら人人の模範とならせられ粗食粗衣を召しおごりをしりぞけれきされぱこそ米澤は今日の位置にあるを得し

事にて候らへこれ皆儉約のたまものにて候さるを今は開け行く世の御惠にて遠き都に物學ひあそばされ諸人にうらやまれ給ふ御身今こそ大切なる時期にて候もし只今御あらため給はずば今までの御勉學も水の泡と消え申すべく殊に御兩親さまの御なげきはいかばかりとおしはかり參らせ候御老母樣度々御こし遊ばれ御許さまの御卒業のみ御まち遊ばしいつもいつも其御うはさなし給はぬ日とては御座なく候ものをもし此事御耳に入らばいかばかり御氣落しあそばさん何とぞ何とぞ御心かへさせられ目出度御卒業遊ばし御兩親さまの御氣安め給ふやう伏してねがひあけ參らせ候まづ〻一寸なめげなる事をもかへりみず御親しきにまかせ御いさめまでかして

縱屋評　鷲山公の德を稱して同鄕の友の奢侈をいましめられたるこの友のためには尤も大なる癇擊なるべし

番外

◉細川忠興夫人

下野　神山ふみ子

わが天つみ國いにしへよりほめたゝへつべき、閨秀なか〳〵に少なからず、袈裟御前松下禪尼、さては小楠公が母など、われらのかゞみとこそ仰ぐべけれ、そがなかに細川忠興公の夫人こそ、いみじうすぐれてたふとくおぼゆれ、されど世の人々このいともめでたき、夫人の事どもふかくもしらず、言ふ人さまで多からぬはいと〳〵うらめしきことになむ、さはれ妾がつたなき水くきに、夫人のことどもかきしるし、ふみよむまどの心やりにするよしもかな、

夫人はかの名高き明智光秀の第三の女とぞきこえし、かほかたちいとうるはしきがうへ、よろづの才かしこく心ばへさへ又雄々しく、やさしき心をもそなへたりき、よきゆかりを得て細川越中守忠興公にとつぎつ、忠興公は名を得たるもののふなり、夫人はならびなき才媛なり、あはれ人々のほめたゝへつるも理や、やがて二人の公達をあげ給ふ、かくて細川のながれはますます波おだやかならむとする所に、思ひきやつれなき嵐のあだなみたてゝにごらさむとは、父光秀其主信長をうらみ遂に本能寺に弑せしより、かなしくも逆臣の名をうけぬ、忠興公織田方にふかきゆかりのありければ、逆臣の女を妻とせんこと心よからずとて離別されぬ、哀れ夫人が心のうちいかなりけむ、たきなす涙のかはくひまなく、二子をいたはり丹後國三戸野の里に庵をむすび、行すまして夫のいかりのおさまらむ日をぞまちたりける、心なき山がずら、朝な夕なこゝを逆りありくとて、こは逆臣明智がむすめよな、越中守殿にすてられて死もえせぬおくれものあなおかしやとて、わらひのゝしることたび〳〵なり、あはれ夫人が心のうちいかばかりくるしかりけむ、いかばかりかなしかりしならむ、なまなかいのちさへなくばかゝるなげきはなからむ、自害して死するこそなか〳〵に心安けむとて、思ひしこともまたたび〳〵なりしならむ、されどわれ今しなばこの兒らをいかにせむ、はた夫君の名をけがすをいかにせむ、死なむもはぢ、しなざらむもはぢ、さらばよし此身をなきものと見てしばしながらへ、この兒らをはぐゝまむ、夫君にもおとらぬ大將となして後わが身はしするもおそからじ、さなりと思ひ

さだめては、ひたすら公達の養育にこそつくされけれ、あはれ夫人が雨のあした、風の夕べの、物おもひはいかなりしならむ、必ずや二子の公達をひざのうへにだきしめて、そらにしられぬ小夜しぐれに二つの袖をしぼりたりしならむ、

あはれかくまでにめでたき夫人を、天はなどて幸ひせざらめやは、豐臣秀吉夫人が世のつれならぬさまをしり、忠興公にすゝめかへさしむ、ふく水またぼんに歸りて夫人のよろこびいかばかりなりけむ、かくていよいよ末たのもしくありけるに、慶長五年、石田三成上杉景勝としめしあはせ、德川氏をほろぼさんとて、景勝まづ東國にことをおこしければ、德川氏これをしづめんと東の方へくだらる、そがいくさに忠興もしたがひて、夫人は大阪のやかたに公達をともなひて居りぬ、三成はかりけるは、今德川に從ひて東國へくだりつるもののふの妻室あまた大阪にあり、これをしも城中にさそひ入れ人質とせば、諸將の心をかへさむことかたからじと、まづつかひを夫人の館につかはしていひけるは、世のなかさわがしく物事おだやかならねば、夫人世子も城中へきたり、しばししづまるをまたるべしとなり、夫人こは石田がはかりごとと おぼゆるぞ、とはやくもさとり、いなまれければ、三成おしかへしてまたいはる、夫人のいらへさきの如し、三成いかり三百騎をさしむけとらへしむ、夫人はかれて期したることなればちともさわがず、人々を浮田秀家のやかたへさけしめ、二人の公達をよびよせ、もののふの家にむまれたらむものは、死すべきときに死せざればしするにもまさるはづかしめをうくるものぞ、いまかたきゝたりてこの母といましらをはづかしめむとす、げに死すべきときなり、あはれいましら母の言の葉きゝわけつるかと、つむりをなづるに二子ひれふしつゝ、母上の仰せにいかでそむきはべらむ、兒らなどて死をいなみ申すべきと云ふ、雄々しき夫人もいまさらにむれつぶれ、短刀もちし手もふるへわなゝきしばしはわれにもあらずなきくづれしが、やがてはふりおつる涙のうちにさらば我子と、齒をくひしばりまなこをふさぎて、二人をさしころし、なみだの中に

露をなどあだなるものと思ひけむ
わが身も草におかぬばかりを

と、一首の古歌をかきしるし、いまはの念佛まをす所に、三成が手の者ときをつくりてせめよせしかば、今はためらふべきにあらずとて、やかたに火をかけさせ、こゝろしづかに自害しはてぬ、あはれさきには三戸野のいほりにそでをしぼり、いまはたなにはのやかたのけむりと立ちのぼる、あはれ、あなあはれ、

あはれかなしくも雄々しき夫人が一生かな、もし夫人をして世のつれのなみなの如く、三成がはかりごとをしらず、此時のいのちをおしみて城中にとらへられなば、たゞにその身をはづかしめらるゝのみならず、ひいて忠興公をはづかしめしならむ、さるを夫人の雄々しき、いのちをすてゝ天下の大事をあやまらざりしは、いかにめでたきかぎりなりけむ、身はなにはのやかたの血烟とともに消えうせたれども、名は細川のきよきながれとともによろづ代にかぐはしく、くまぬ人のあらめやは。

此文の中ひとあるべき所をへとしたるが多し地方の訛にや

◎細川忠興夫人

肥後　佐々有鄰子

細川夫人は。明智光秀の女にて。從三位源忠興卿が。いまだ與一郞と稱しころ。結婚の式をあげ。男女の兒あまた生てありしに。父の光秀。織田內大臣を討亡したりけるを。忠興は。いたくにくみて。ある山中にながしやりしかば。夫人は。いとゞかしこみ恥入て。草庵にあまたの年月。

閉居なして。父のため。夫のために。婦道をまもること。朝夕怠りなかりけり。その貞心のあらはれぬとて。秀吉公媒人となりて。再縁をむすびきとなん。かゝる貞烈の夫人なれば。石田三成が謀計におちいらず。嫡子忠隆の夫人は前田家令孃なれば。加賀邸につかはし置て。夫人は老人。小笠原少齋入道に深意をしめし。稲富伊賀に館門をまもらせて。玉造屋形の煙と消失せぬ。あはれ芳名を萬代にのこして。婦女の龜鑑とこそなりにけれ。

◉虚飾を戒むるの文

三重縣師範學校　桂　蘭　子

明かに治まるてふ大御代の、いかにありがたくはべるよ、日のみ光はやぶしわかれば、鄙の里の賤が伏屋にも春は來りて、中庭の梅が枝も色香はのかに匂ひ、破垣のあたり鶯の來鳴く初音いとゆかしうこそはべれ、さるにても都の御すまひいかばかりさち多くおはしますよ、うらやましうてこ、そこさにわが君にはいさ健やかにまし〳〵、元氣いやましに壯に、御勉强おさ〳〵おろそかならず、文の林にふかう分入りて、學の道もいさ御上達あそばさせられ、御成蹟は校中いさ〳〵すぐれさせわたる由、いさ〳〵うれしう、妾の肩身までが廣きやう心地しはべるものから、ふと仄かに承れば、頃日君にはやう〳〵懶くおはしますか、學の業もはげませられず、書や筆や壓にまかせて、姿見に心をくだかれ、簪櫛いさもの好みして、彼れやよき、此れやあしうなどさりざたはべる、のみかはいさ派出に着かざりて、見る目もはゞかりたまはぬさのこさ、もさよりざえさかしう智明かにまします君に、さるやうのとはべるさもおもほえす、いづれ何かのまき違ゐにて、あるは君の秀いでおはすをねたむものからの、さがなきさりざたにこそあめれさて、一度は心にもかけはべらずわたりしが、近日そのあとなきうはさにもはべらぬをたしかめて、いと口惜しう、いかなる惡魔のみいりぬるかさ、夢のやうおどろきはべりき。古のひじりなむ道に志しつ惡衣惡食を耻ぢぬるは未ださもに議るに足らずさもまうし、衣は寒暑をしのぎ食は飢を凌げばよし、美なるを要せずさも戒しめはべる、ことに御父上母上樣には御身の一日もはやう御歸郷あそばされむとを祈りたまひて、つれ〴〵我靜子も來む年の春なむいさもたうさき學びやを卒ふるよ、いづくにか嫁入らせむ、誰をか婿とせむなど口々に村人にきこえつたえて、ほく〳〵喜ばせられ、その身にはいたましくもいさどやれたる衣をまとゐて、鍬を肩に鋤を手に、暑き日も寒き日も、朝に星をいたゞき夕に月を踏みての御勞苦おさ〳〵筆にもつくしがたくこそはべれ、かくて玉なす汗より得たまへる御報酬はみな御身のもさにおくらせらるゝよ、あはれ〳〵夜靜かに人定まるの後彼を省み此を鑑みたまひて一日もはやう本心に立ちかえらせられむこそ、わが神かけて祈るところになむはべれ、わがなつかしき花の友垣よ。まだ筆さりてものしまゐらせむとて、硯の水かき改めぬるさき、中庭の梅にさえづりける節おもしろき鶯の歌はたさゝだえて、彼方に飛びさりつる音しければ、いさくちおしうて窓のさうじ排しぬるに、門の戸をほさほとおさなう擘のきこえければ、おしき筆擱きはべりぬ。

◉虚飾を戒むる文

東京　大石はな子

寒に入り候處一入寒さも肌にしむ心地致し候を御地は定めし嚴烈しく白雪うづたかく積り候はんと察し上候まづ〳〵皆々樣御揃ひ遊ばし御機嫌うるはしう渡らせられ候由何よりの御事と存じ上候次に私事も變りなく暮らし居候まゝ憚ながら御安心下され度候世の奢侈に流れ行くに從ひ女

學生の髷も一般奢に流れしとか耳に入り候へども御地のみは質樸を以て賞せられかげながらたのもしうぞんじ居り候を某よりの御文によれば御校も奢に流れ虚飾をさへ好むの傾ありとか生徒としては質素を貴び奢侈を戒めまして虚飾を禁ずべきものなるを御身に於てはかれこれの善惡は百も御承知に候へば決してあるまじき事と存じ候も惡に入りやすきは自然の勢に候間此噂は全く空言と致し候もいはるゝだけ何處かに非難を受くる點あるにあらざるかと存ぜられ候まゝ御許樣より卒先し惡風を脫し給ひ漸く全級に及し引て全校生徒の虚飾を改むることあらんには如何に喜ばしきことに候はんかく迄に致さんはかたきことに候とも先づ身獨りを愼むは其人の心がけにあることゝぞんぜられ候間よろしく御心に問ひ給ひかつは我切なるこゝろを御くみとり下されにがきうさましきものに候へども今後の良藥ともなりなんにはこよなき幸とぞんじ御憤りなきを願ふ例の老婆心を以て申上候

普遍投書

たどる思ひ

栃木　幾久子

（一）

文金の高髷文字にしてこそ美しけれ、元とは遊女の結ひそめしものとか聞けり、世の浮きたる男など美の趣は得知らで只管こよなきものにもてはやすは心得ぬ事なり、ましてやいたく俗向きて品好きものとも思はれぬをや、母樣の折々結ひて見よなど云はるゝは世の常の女子にならへよとの心附なめれどさて我が眼にはさほど氣高しとも思はれず彼の髷など結はんよりは寧ろ銀杏返こそよけれ如何にしても彼の髷結ふ事に妾は氣の進まぬぞかし、それにしても妹の下げ髮の品よき事よ蝦茶の袴にあの下げ髮は實によく似合ふものかな、嗚呼妾も今一度あの御下げに結ふて學校に行つて見たきものを、

御下髮に結ふて紫の伏紗かゝへて蝦茶の袴はきて佛蘭西革の靴穿ちて絹ばりの洋傘さして靜かに淸らなる聲にて御友達と「青葉しげれる」の歌うたひつゝ旭町の學校に通ひし頃の如何に樂しかりしことよ、そは今とて樂しからぬにはあられど髮結ふ樣までとやかく氣遣ふやうになれては世の人達の小供としては許さぬことぞ是非なけれ、まして上町の松本樣の御祝儀の話など聞きては羨ましくもあり又何となう氣もそは〳〵して女子と生れたる際の一度はかくぞあらんとは思へど之れも氣がゝりの種ならし

やんごとなきあたりの此度のよろこび事はさらにも云はず世に慶ばしき事のさはにある中にも慶ばしき限りは婚禮の事にて一生の大事と云ふべきも亦之れなめり、さるにても此の慶ばしき事には妾もいつかは邂逅ふなるべくそも遠からず來るべき事なるにさて其時となりてはともせんかくもせん、今は唯樂しき夢にても見て置かんかな學校に通ひし折には互みに親しかりし友垣もいつかは疎くなり行きて今は顏見あはすさへ稀なるも多かり御隣家の櫻井樣さへ今は便だになくさても變り易きは紫陽花のゆかりの色なごさきつ年よみたりし歌にもかはらで此二三年の中にいたくも變り果てたる世の中かな

（二）

野澤のみよ子樣あの頃は「生長」にて御座しけるが今はさる時めける華族さまの嫁君となりすまされ松本のよし子樣さのみ勝れたる質ならぬ人さへ早くも良緣の整ひさせ給ひて合卺の式の花やかなりし事は見し妹が話

にても知られぬべしかく妾の親しくせし友達の中にはさ程零落れたる人の話も聞かれど一級下の生徒の中には隨分聞きぐるしき話の種となりし人も多かりきとかや、

かく友達の事など思ひ續くれば昔ありし事のあり〳〵と胸に浮びくるぞかし、いつぞや野澤樣の妾の家に立ち寄らせ給へしとき今の妹の五つか六つの頃にやあの方のかけ給ひしりボンのいと美しきに座らせ給へる後にまはりてリボンをそと引きつゝ姉樣この蝶々がと微笑ける時の可笑さ一座の人のどつと笑ふにはづかしげに打ち俯したる事などありけるよ、妾の幼なかりし折なども今仙臺に遊學せらるゝ兄上樣などにはよくからかはれて泣きたりし事なども今うす〳〵は覺え居れり、

（三）

妾の幼かりし折殊に可笑しかりきと母樣の後に語らせ給ひ、折々の笑ひ草にも云ひ出さるゝは妾九つの折にて尋常科を卒業せし時の事とか今日しも卒業式とて全校の生徒は皆滿ちにみちたる喜の色もて晴衣花やかに着流しわきて高等尋常共卒業生の揃の紫の袴は一層目立ちし由にて其時參列せられし母樣もいはききさて其時の卒業に妾逃よくも首席を占め次席は野澤樣何れも優等生にてありしなり、

定めの時刻も來りて生徒はおのがじゝ指揮する先生の命にて何れも式場に入れば大きなる花瓶には梅の若枝まだ苔ながら挿されて場の中央にあり正面には花やかなる被ひ物したる机の上に卒業證書入れたる箱に紫の袱紗をそつと被ひピヤノのまだ新らしきがさも莊嚴に備ひ付けられてあり、右は來賓の席左は職員の席萬端の用意殘りなく整ひられやがて視學官を始め重なる司人達校長の案内にて座に列なられ職員席も父兄席も參觀人席も皆一ぱいの人によりてうづめられたり、

やがて 彈奏者の奏し始めしやさしき 樂器は合圖と 共に式は始められたり、めぐみあまれき「君が代」の唱歌二回終りて校長はしづ〳〵さ式壇に登り、滿場を見渡して證書授與の旨を告げ讀み上ぐる姓名によりて證書を授けられけるが其高等科の卒業證書を渡し終り尋常男子の卒業證書を授け終へて次に呼ばれしは妾の名なりき、小さき胸の如何に喜びても溢るゝばかりなりしよ、

呼ばるゝまゝに妾は座を立ちて靜々さ歩み出しぬ嬉しさは滿々たれど男子の如くに勢よくは行かず莞爾しながら進み出で最早よき場所さ思ふ所にまづ立ち止まり默禮して一足二足三足さ胸の中に數へつゝ足を運びたれども如何にせん小兒の足幅狹くして未だ適宜の場處までは屆かず妾は直ちに手をさしのべ校長も臂長く出せども妾の手にまで證書は屆かずやむなく校長は右の方の臂を殊に長くさし出して漸くに渡されぬ滿場の視線は此時皆妾に集まりて微かなる笑の聲さへ聞えたり

式もすみて一同は退場したり玄關口に待たれし母樣は世になき喜はしき樣にて妾の手を握りつ待たせし腕車に二人、乘りて家に歸り更にあらん限りの情もて母上は妾に頰すり寄せてさ妾の喜びは云はずもがな、

今夜は家内中寄り集ひて祝ひの酒たうべぬ母上はやがて妾に向ひて云はるゝは「そなたは何故猶一足進みて證書を受けざりしか校長樣も出しよかるべきに」妾は答へぬ「そは前に師の君の敎へられし事なれば遠かりしとも 三足より外には 進まざりしなり」さ母上はほゝと打笑み 玉ひて「さるにても無邪氣なる事よそれ故人の子を敎へんものは殊更氣を用ふべきものにこそ」など語られて叔母樣の訪はれし折にも此事語り出でゝ打興ぜられ給ひき

（四）

妾高等三年の折にや宇都宮に物學びせられし山川樣より懷かしき玉章ありて中には市街の景況女學校の模樣などいと細やかに申し越されし上に

御身には暫らくの御暇たまはりて宇都宮に出でられずやなどあり久しく過はざりし人の便り一入懐かしく繰り返しつゝ讀み終りやがて母上がりもち行きて手紙の趣を物語れば兄も試驗休みには歸らるべきに父上にも篤と相談すべければとの御言葉、妾も半ば危みしかど、はてなり行きはと獨り氣を揉み居たり、兩親も兄上も集まり給ひたる處にて此原案は先づ母上より出されたり、思ひがけなくも反對は兄上の口より言ひ出ぬ、そは例の女は學問すれば生意氣になるもの、其例はそなたに此間都の關口樣より寄せ越されし手紙の封皮にても知らるべし、そなたの名の下に君と書き剩へ我が名を臆揚に英語にて書きたるなど女業とも思へずとなり兩親殊に母は一ひしぎに兄上の說を打ち消し給へり、こやそなたは今の若人にも似ぬものかな、さのみ妹を見くびりてか親とても子の生意氣するを好むにはあられど、そは人のさがによりて異なるものぞ關口樣などゝは、家柄よりして異なるに、まして妹とて山川樣にさへ學問にては多くおくれは取らざりしものをと、父上は兎も角くもとて同意せられて兄上は一しよげに萎れ妾の胸始めて穩かなり斯くて事もなく話は纏まりて妾の前途の想像は樣々になりぬ、山川樣へは嬉しき便して送り手續の色々も賴み申して、

（五）

入學試驗は首尾よくをへて、一先づ家に歸りたるに學校よりと山川樣よりと二通の及第通知を得たりあはれ翼なくとも飛び立たんかな、さりながら之れも皆山川樣の御蔭よと殊にうれしく覺えたり、

山川樣、妾よりは一級上なれど、露、傲る氣色などなく友達との交際にも一々妾の瑕瑾を蔽はれたる心には妾も鬼のみなき世なりと思へり、殊に山川樣の學問の外すきの道まで人に優り、容貌は殊更美しく口さがなき書生共まで噂々々と通ろたびに云ふさか聞けり、おれば末席の人達とは志合はず能く親しかりしは同級の鳥海樣、宮道樣及妾の他多からざりき、

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

其後の事は云はざるべし、春雨しめやかなる夜更けて、燈の影はのぐらき處、筆を捨てゝ長火鉢に細き手かざしつ左の手の指、口にあてゝ爪かみ切りつゝ物思ふ時に如何に多くの希望が之れより彼れに移り行くよ斯くて畫きたる理想の鄉には果して何時、如何にしてめぐりあふべきにや。

構想は平凡を免がれねど、筆致は流麗なりと許すべき乎、(N.T)

◉亡き友

和歌山　藤田しん

花のあした、月のゆふべ、手をひきては、山里にちりゆく花をおしみ、袖をつられては、大波小波よする濱邊にふけゆく月をなげき、其の親しみ、血をわけしはらからも及ばざりし妾が友、山本まさ子孃の病の爲めに、このよを去りたまひしも早や去年とはなりぬ、我友とともに暮れにし月日はめぐりて元にかへり、共に散りし花は又もとの如くに枝に登りたれど、みまかりたまひし我友の、いくひさしくまつとも、ふたゝびこのよにかへりたまひて、元の我友となりたまふべき、のぞみのなきぞいともかなしききはみなりける。

花、春を忘れずして來ん春ごとにさかんかぎりは、妾は我友をわすれ得ざるなり、ことしも春のなかばとなりて、南の窓の下なる一もとの梅の花の、一りん二りんほころびそめたれば、妾に亡き友のことづてもやと、庭におりたちて問はんとはすれど、心なき花のこたふべくもなく、たゞ

そのうろはしきうすくれなゐの花の色に、ゆかしかりし友のすがたを思ひ出さしめ、かんばしき香にやさしかりし心を思はしむるのみなり。あまりの愛らしさに、折りとるもおしきここちのしたるなれど、亡き友の形見にもとて、一枝手おりて花瓶にさしぬ。我友よ、妾はもはやこのよにあらん望みなし、たゞこの上は、君のあさな夕なつとめはげみて怠らず、かれて日頃の目的を達したまはらんことを、草葉のかげより祈りたてまつるにこそと、いまはのきはに云はれし友の言の葉思ひ出づるごとになきつ、なくと共に心をはげまして强て、机にむかひ文よむこともありしかど、問ひもしつさはれもしつゝもろともに、よろこぶべきはよろこび、かなしむべきはかなしみたる、親しき友のなくなられたることなれば、さすが心も平らかならず、半ばかなしみの内に去年はくれはて、妾の學びの業のいとすゝみしさも思ほへずになん。

さればことしよりは、亡き友ののこされし言の葉をしをりにて、いよいよはげみつさめ、まなびのみちに分け入ちむ、目あての山に達すまで、望みの海に届くまで、おりしも、梅の枝にたまをころばすがごときうぐひすのこえ、やよ、鶯しばしまたれよや、我なき友のことづていかに。

輕妙の筆致、一誦するに足る（N T）

◉新　年

栃木　印東しん子

地軸一轉して、のどけき御代の春はめぐり來ぬ、朝日のかげも昨日にかはりて、なんさなう、うらゝかに軒にかゝげし日のみ旗、門にたてたる松竹の、いづれ新まる年の始のことほぎさ知られけり、空吹く風は枝をならさず、降る雨は壤をうたず、五風十雨いさ靜けき大御代に新玉の年を迎へけんは、げに我　大君の御運のありがたきに感泣せぬものやはある、あな尊しあな畏し、己らの如き、いぶせき草の庵にすみぬる身にも、かゝるめでたき大御代に生れ逢ひぬるは、げにうれしき事の極みにこそ、諺に曰う一日の計は朝にあり、一年の計は元旦にありと、あはれ、ことしは、こぞにまさりて、一入學の道にいそしみ、はげみておのが志のほどをも果しなば、進みて、國につくすところながらでやはさ、いさゝか今日の祝詞にかくなむ、

その文字は、妙ならず、巧ならねど、新年の感想さして、穩健なるもの（N T）

◉わが服裝

米澤　白川まり

羽織の表は双子飛白にて、裏は更紗形なり、こは五させばかり過ぎし秋の頃購ひしものにて、今は二度も裏返して着せしものゆゑ、色澤も縞柄も昔の樣は消え失せぬ、上着は地織の縞木綿にて、一させの昔母上が御自づから仕立給ひしものなり、下襲は双子縞にて、着ふるしたれば處々破れしを繕ひしもの、襦袢の胴は形付の木綿織にて、袖を綿子ルさし、襟は唐縮緬なり、こはいぬる年吾自ら裁縫せしものなり、帶は友禪染の唐縮緬を腹合にしたるものにて、初の程はいさ花やかなりしも、此頃は色褪せぬるを倚棄てがたくて用ゐおりぬ、吾は平常斯る粗服を纏ふにより、公衆の前に出でし時などは、いさ耻しき心地して顔あからむるこさあれど、勅語の御聖旨を遵奉し、又吾校の本旨とする勤儉質素に能く適せりさ思ひ起すさきは、何さなく心强う感ずることもありき、唯垢染みて衞生上の害とならざるやう、師の教訓を守りて常に注意するのみ、

殊に吾家は、世に聞えたる富貴にもあらず、富貴の子ならぬ吾身には、斯る服裝こそ適當ならめ、世には其心穢さ賤しき人の、綾錦さり重れたるよりは勝りなむ

質朴の風、瑣々たる文字の間にあらはる(N.T)

◉亡友を懷ふ

新潟　吉田春野

月影半ば浮雲に蔽はれ雁がね二聲三聲虛空に鳴き渡り叢には露深くやどり秋草の打ちしほれたる中にも蟲の音いさ哀れなりさらでだにあたりさびしき夜頃なるを年頃親しくむつみし友を失ひし此身には心なき蟲の音さへ身に染みて哀れにもはた悲しくて袖の露さへ乾しあへず去年の春白菊を君が手づから植ゑまして愛で給ひつゝの給ふは秋の頃美くしき花開くべし咲きなば君に進らせん我は手折りて文机のかざりさせん等約せし時は行末をのみ樂しみてかゝるなげきのあらんさはつゆだに知らず花の朝月のゆうべいさむつましくへだてなく姉よ妹よさ呼び慕ひ書讀み文字かき諸共に互にいさめはげましつゝ學の隙の折々に春は咲き匂ふ桃櫻を尋ねて野に山にあくがれ出でゝ長き日を短かしさこそ思ひしが夏は河瀨の螢がり秋はさやけき月の下をさまよひていにしへいまのしなさだめ話に心うばはれて月影のかたむくをも打ち忘れかたりあかせしこさもありき嗚呼妾は桃櫻の咲き匂ふがごさし照る月影のまどかなるがごさし此のさちはがはらじさこそ思ひしを花には嵐月に雲さだめなき世のならひかなしたしき君はいぬる年志をたてゝ學の庭にいり給ひ螢をあつめ雪を積みその道にいそしみ給ふこさこゝに三年すぎし四月のはじめつ方妾の此學びやにいらんさせし時君も此上なう喜び給ひ妾に向ひの給ふは君よまさきくつさめ給へしなこそかはれ道こそ異なれめざす高嶺は只一さつさくゆけ君よいざやゆけ文の山路をわけゆきてもろさも譽の花を手折り來んさいさも嬉しき言の葉を力にて數草つみつゝも朝な夕なに慕はしく風のふく日も雨の夜も君いかに在さんさ思ひわづらはぬ日はなかりけり垣根の卯の花散り初めて杜鵑なく夕まぐれ千々の思ひにさざされて愁にしづむ折もあれ故郷よりのおさづれこさに至急さかきたるはいかなる事にかとおぼつかなく轟く胸を押ししづめいそぎ讀み下せばこはいかに友の君には皐月のころよりあしのけありさて故郷へ歸り居給ひしが母君妹君の介抱名高きいしの藥さへすこしもしるしなく遂に心臟痲痺さやら云ふ病にかはりさる文月の三日さ云ふにつれなき嵐に誘はれて朝の露さきえ給ひしさはさても悲しやこはそも夢かはたうつゝかさうたがはれしばしがほごは淚も出でず文をにぎりつめしまゝ只茫然さたち居しが思へば思ひまはすほご果敢なきは人のうへなるかな諸倶に一日も早く業なしはたし御國のためにつくさんさかたく誓ひし言の葉も今は甲斐なしあな悲し賴みし友を失ひてよるべ渚の捨小舟よすがもすべもあら磯の浪にたゞよふみをつくし身をつくしてもなか〳〵にひさり浮世に殘りしぞ長き恨を思ふなる昨日までおなじ世にすみてありきさ思ひしに今日は早や緣の苔むす墓さかはりしぞ浮世はいさゞ果敢なしやあゝ君に別れしその日より文よむこさもかく事もいさゞもの憂くなやましく學のこさも怠りがちに日を送りしぞ愚かなるさはいへ君のいたつきを一日なりさもみさりせば少しは心もやるべきを妾に心なやませじさてしらせ給はぬ母君のなさけぞ今はうらめしき親しき君に別れてより照る月影を仰ぎても去年のまさひの慕はしく袖には淚せきあへず慕はしきおもひに堪へやらず御寫眞さり出しながむればいますがごさき御笑顏かたみこそ今はあだなれこれなくば忘るゝ隙もなりなんさいにしへ人の言葉を思ひ出でてはなか〳〵に戀ひしさのみぞいやまさる故郷の君が手植ゑの白菊は美しき花咲き亂れつゝも愛づる人なきを恨みてやあらむ君の御靈に捧げんさ手折りし菊の棺より心ありげの露一しづく思はず袖をぬらしけり亡友を追想するの眞情あふる

亡友を追想するの眞情あふる（N.　T）

女學世界春季増刊

懸賞文募集

才媛詞藻　壺すみれ　春の卷

投書締切　二月廿日

種類

●小説（二十四字詰三百行限）短篇各種

●國文（二十四字詰二百行限）文題隨意

●普通文（二十四字詰二百行限）文題隨意

●書簡文（二十四字詰百五十行限）文題隨意

●新躰詩（七五調三十句位まで）詩題隨意

●和歌（短歌に限る）春季雜題

我が女學世界は名媛才女の詞藻を江湖に紹介せんが爲めに、四季に定期増刊を行ひ、題して『つぼすみれ』と云ふ、その第一回春の巻に收むべき資料を一大賞を懸けて汎く天下に募らむとす、此卷は紙數二百頁を超え、その三分の二を懸賞文に充て、剩餘の部分には女界第一流の筆に成れる佳篇傑作を蒐む時はこれ和氣靄々たる陽春に際せり、天下の妙齡才媛の此好季に方りて、大に神を養ひ想を錬りて佳作玉詠を寄せ、以て新春の文壇に光彩を放たんことを望む、而してその文の種類と賞品は、別項に記するところに就て見られよ、

賞品

特賞　婦人用袴地　壹反
（特賞は小説、國文、普通文の最優等者一名に與ふ）

甲賞（圖書切符）金　貳　圓

乙賞（圖書切符）金一圓五十錢

丙賞（圖書切符）金　一　圓

番外（圖書切符）金五十錢

（注意）

小説、國文、普通文（特賞を除くの外）書簡文、新躰詩にて當選者甲賞五名乙賞六名、丙賞十二名外に秀逸廿名を精選して賞品を與ふ又和歌は天地人の三名に乙賞以下の賞品を外に秀逸二十首に薄賞を與ふること

投書の封筒に『壺すみれ原稿と』必ず附記すべし

此募集廣告に特定あるもの丶外は例刊の投稿規程を準用すること

三月十五日發行

懸賞文募集

本誌には初號以來『才媛詞藻』の欄を設け、毎月一回賞を懸けて海内才媛の詞章を募集す、是れ方今の才媛文學を奬勵せんと欲するの趣旨に出づ、其の選評者は何れも國文學界の泰山北斗とも稱すべき大家先生也。海内の名媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄して新春に於ける才媛詞壇を飾られんことを

◉國　文（一行廿四字詰五十行以下）　◉小　説（一行廿四字詰百五十行以下）

◉普通文（一行廿四字詰五十行以下）　◉新躰詩（七五調二十句位）

◉消息文（一行廿四字詰五十行以下）

右各種の投稿題はいづれも寄稿者の隨意たるべし但し政治的時事論に渉らざると、亦小説は可成優美なるを佳とす（〆切毎月十五日限）

優等者懸賞品（今回の分）

甲賞　日本女禮式大全（上製一部）

乙賞　明治才媛美譚（一部）

丙賞　家政の栞（一部）

秀逸　女學全書（一部宛）

三品

和歌兼題

三月分　春興　幼稚園（〆切二月十五日）

四月分　雲雀　瀛　車（〆切三月十五日）

（天地人三名を選び懸賞文に揭げし賞品の乙以下を呈す）

投稿規程

一、本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す

一、投書の種類は文章（文躰は國文及普通文に限る）詩歌（新躰詩及短歌今樣の類）小説は優美にして卑猥ならざるもの等とす

一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る

一、投書の用紙は半紙二ッ折（和歌は端書に限る）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る

一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す

一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すると

一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

◉寄書募集

社會的見聞の材料として、左記各項の範圍に就て、普く江湖諸君の寄稿を募る

▲家庭及び地方風俗に關する雜聞　▲古今東西の兒童に關する譚話　▲各地方に於ける婦女子社界の狀態▲孝女節婦の美談佳話▲其他本誌の參考となる者

學事

東京女學館參觀記

前號には職業學校の狀況を報じたれば、這回はその趣を異にせる東京女學館を參觀せんとて、例の學校視察員は車を驅りて同館に到る、伊露公使館の前を通りて突當り、即ち虎の門内の右側（麴町三年町）にあたりて、三棟の赤き煉瓦造りの建物の駢立するを見る、左方の二棟は宮内省の御料局にして、右方にある一棟は、是れ當地著名の東京女學館なり、この三棟は同構内に在りて、構内の敷地は頗る廣く、女學館の運動場は、校舍の左方にありて、草毛濃かなる一帶の平地なり、場の周圍に立てる大小の植樹は、未だ春暖にあはねば蒼鬱の景もなけれど、又一しほの風趣を添ゆるが如くに見え、校の四邊は至て閑靜にして、女學校設置には頗る適當の位地なるが如し、いま其參觀せる狀況の大畧を左に述べんとす、

●調査　校は女子敎育奬勵會の設立維持に係かるものなり、明治十九年の頃、時の總理兼宮内大臣たる伊藤博文氏を始め、その他朝野有力の名士等が、皆從來の女子敎育を改善せざる可らざるを感じ、即ち女子敎育奬勵會と稱する團躰を設けて、朝野の名士二百八十名を集め、會員一名二百五十圓宛を出捐せしめて、七万圓の基本金を送り、この基金を以て適當の學校を設立せんと欲し、初めて本校を赤坂見付に創設したるが、その開校したるは二十一年にして、最初は生徒員數七八十に過ぎず、校勢も至て振はざりしが、女子敎育奬勵會にては、必ず之れを成功せしめんと欲し、開校以來十有餘年の間、校の經濟頗る苦かりしも、收支相償はざるときは、基本金中より支辨し、殆んと基金の三分の二までも費して之れを維持したる結果、昨年度に至り六千六百圓の校費は月謝收入を以て支辨し、始めて收支相償ふに至れり、それば本校の成立は全く女子敎育奬勵會の力なりと云ふ

現校舍は、元と工部大學の校舍にして、後ち學習院の校舍となり、また其後東京女學館にて宮内省より借受け使用し居るものにして、校舍の建造は頗る壯麗、總二階建坪五百坪にて、敎室は十五、その他寄宿用の勉强室及寢室は八室あり、また大講堂もあり、各室内の装飾設備は、和洋折衷に造られて中々立派に見ゆ、

現職の敎員は、英國婦人ミス、ショー、ミセズ、ベンス

テッドの二人重もに英語を擔當し、その他長谷川きた、濱田ちき(英語)國分みさ、(國語習字)河井いね、平川とよ、内海をとめ、秦りん、岩上りう、(普通科)塚越くか(音樂)水澤つき(圖畵)西村はせ、江崎やす(裁縫)松浦ふじ(生花)等にして、幹事西田敬止氏の國語倫理を、主事大村美福氏の漢文を兼任擔當するを除けば、悉く女敎師のみを以て組織せらる、

館長は開校以來三たび更迭あり、三十年頃までは辻新次氏たりしが、三十一年よりは吉村虎太郎氏之れに代りしも、氏は故ありて在職一年位にて辭職したれば、その後任に現館長土方伯を推したるなりといふ、又幹事は開校以來校務を執掌せる西田敬止といふ人なり

觀察

此校元來の主義は、社會の中流以上即ちよき家庭の女子を撰みて入學せしめ、一方には學術を敎ゆると共に、一方には淑德を養はしむるが如く、即ち學術技藝の智能を發達せしむる外に、思想と品性を高尚ならしめ、以て中流以上の社會と家庭に於ける完全なる婦人を造らんとするに在るが如し、されば、他の或る女學校の如く、高尚なる學理の注入のみに傾かず、また實用的の技藝を敎ゆるにのみ汲々たらず、只その社交に於て、家庭に於て、所謂品よき婦人を造るを唯一の目的とするが如く見ゆ、從つて此校に於ては、必ずしも入學女子の多きを望まず、また妄りに校勢の尨大ならんことをも願はず、此種學校の勢運は、社會に於ける實際的必要に伴ふものなりと解釋し、開校の當初より自然發達主義を執り來たれるが如くなれば、その入學志願者に對するや、之れを他校に比較すれば、甚だ熱心ならず、否寧ろ冷淡なりといふも酷評にあらざるべきか、聞く所によれば、入學志願は年々增加し來り、而して校舍は現在學生を容れて尙ほ餘地あるにも拘らず、容易に入學を認可せず、たとへ學術の入學試驗に合格し、また學業履歴に於て相當の學力ありと認むるも、尙ほ其上に、志願者の身を調べまた其家庭までも認知し、且つ女子敎育奬勵會員の紹介なければ、入學を許可せぬ内規ありと、されば生活又は門地のよき家の女子は入學するに易きも、その他の志願女子は適當の人なりとも入學に容易ならず、是れ或は家庭のよからぬ女子を混居せしめば、よき家庭の女子まで悪風習に染むの憂ひあるに由るならんも、亦是れ此校の維持者たる奬勵會員の閥族的思想に出でたるものか、それ敎育を人に施すは宜しく平等なるべく、決して人爲的階級を眼中に措くべからず、されば其の入學者に對す

る詮議は、入學すべき本人の性格の良否を糺さば可なるべし、まして一種の偏狹なる性格を有する良家の女子に、心氣健げなる異分子の女子を混せば、混居感化の方法によりて、從來の弊風を調和し、敎育上一の術義に副ふやも知るべからざるをや、兎に角入學者に對し八釜しき方法を設くるは、所謂杓子定規を守るに外ならざるのみ、一見するところ、此校の女生徒は、みな服裝の華美を競ひ、ピヤの練習に浮かれさわぎ、何んとなく纖弱の風の見ゆるも、是れその本質にして止むを得ざるものか。

さりながら、こは校の缺點と弱點を捉らへて批評したるのみ、以て校の主義目的の悉くを否定したるにあらず、此種學校の必要なるは、吾人と雖とも固より之れを認む、まして校の成績を見るも、此校に養成せられたる婦女子にして、富貴の家に嫁ぎ、良妻賢母の聞え高きもの少からざるをや、されば吾人は此校に益〻整美の域に進まんことを希ふ、只之れを希ふの餘り、一言校に進むるものあり、即ち校風と敎育と徒らに形式に流れて、實質を缺くの弊を生ぜざらんことを。

東京女學館署則

第一章　總　則

第一條　本館は女子教育奬勵會の設立に係る

第二條　本館は女子教育奬勵會の趣旨に基きて女子の德性を涵養し併せて必須の學術技藝を授くる所とす

第三條　本館の教師は殊に教育に經驗あり且熱心なる內外人を選擇して其の任に當らしむ

第二章　教　則

第四條　本館に普通科、高等科、特別科の三科を置く

第五條　普通科の學科課程は高等女學校令に準據し修業年限を五箇年とす(別表第一號參看)

第六條　高等科は普通科を卒へたる後猶進て高等の學科を修めんと欲するものゝ爲に設るものにして修業年限を二箇年とす(別表第二號)

第七條　特別科は已に人に嫁し又は其他の事情の爲めに一般生徒と同しく出席すること能はざる者に特別の時間を設けて其の希望の學科を教授するものとす但し修業年限を定めず

第八條　普通科の學科目中生徒の希望により二三科目を選修するを許す

第九條　本館の學年は四月十一日に始り翌年三月三十一日に終る

第十條　一學年を分ちて三學期とす第一學期は四月十一日より七月十日に至り第二學期は九月十一日より十二月二十四日に至り第三學期は一月十一日より三月三十一日に至る

第三章　成績調査

第十一條　學期の終に於ては其學期間を成績を調査し學年の終に於ては一學年間の成績を調査して合格不合格を判定す

第十二條　成績の良否は點數を以て之を表す但し各學科百點を以て最高點とし全學科の平均得點以上を合格とし平均得點六十未滿及び一學科の得點五十に充たざるものを不合格とす

第十三條　普通科の第五學年末及び高等科の第二學年末成績調査に於て格したるものには卒業證書を授與す

第十四條　本館に在學すること一箇年以上にして成績佳良なるもの已を得ず退學するときは其の希望により證明書を附與することあるべし

第四章　休日

第十五條　（本條は之れを略す）

第五章　入退學

第十六條　入學期は學年の始（四月）とす但し缺員あるときは第二第三學期の始に入學を許すことあるべし

第十七條　年齡十二年以上にして高等小學第二年の修業を卒へたる者は無試驗にて本館第一年級に入學を許す但し入學希望者募集定員に超過するときは學力檢定の上許否を定む

第十八條　本館第二年級以上に入學を希望する者は相當年齡に達したる者に限り學力檢定の上許否を定む但し時宜により學力認定を以て入學を許すことあるべし

第十九條　父兄若しくは相當なる監督者の許に居住する者にあらざれば入學を許さず但し通學の便を有せざるものは本館内に居住する教員の許に寄宿することを許す

第二十條　入學希望のものは入學を申込むと同時に新定の書式に據れる學業履歴書を差出すべし（書式は略す）

第廿一條　入學の承認を得たるものは直に保證人より在學證書を差入るべし但し證書用紙は本館より交付す

第廿二條　生徒の保證人となる者は丁年以上にして東京市内に本籍又は寄留籍を有し一家計を立てたる者に限る

第廿三條　生徒又は保證人の轉居したる時は其旨直に届出づべし

第廿四條　生徒は故なくして中途退學するを許さず若し疾病事故により退學せんと欲する時は其事由を詳記して保證人より届出づべし

第廿五條　生徒疾病事故により遲刻早引又は欠席するときは保證人より其旨通告簿に記入して届出づべし

第廿六條　事由なくして一箇月以上出校せざるものは退學者と見做し學籍を削る又何等の名義を以てするも引續き一箇年以上出校せざるものは退學を命ず

第廿七條　學業進歩の見込なきもの及び體質虚弱にして修業に堪へずと認むるものは在學を謝絶することあるべし

第廿八條　傳染性の疾病に罹りたるものは一時出校を停め或は退學を命ずることあるべし

第六章　學費

第廿九條　本館生徒の學費を定むること左の如し

一金三圓也　束脩
一金三圓五十錢也　高等科月謝
一金三圓也　普通科月謝
　普通科
　選科月謝
一金一圓也　ピアノ使用料一箇月分（但し使用者に限る）
一金一圓也　寄宿舍費一箇月分

第三十條　束脩は入學の承認を得たる時其他每月十日以内に納むべし

第三十一條　生徒各自の都合により久しく出校せざるも本館の學籍に在る間は必ず月謝を徴收す

第三十二條　割烹、挿花等の稽古をなす者は其の使用したる材料の實費

を徴收す

第三十三條　生徒の負擔すべき臨時の費用は本館に於て豫め其の金額を定め保證人の承諾を得るにあらざれば決して徴收することなし

第七章　生徒心得　（省畧）

第八章　賞罰規定　（省畧）

第九章　職　員　（省畧）

普通科課程表　（第一號表）

	每週時數	一學年	每週時數	二學年	每週時數	三學年	每週時數	四學年	每週時數	五學年
修身	一	人倫道德ノ要旨	一	仝上	一	仝上	一	仝上	一	仝上
國語	四	講讀作文書取	四	仝上	四	仝上及文法	五	仝上及詠歌	五	仝上
漢文		—		—	一	講讀	一	仝上	二	仝上
英語	六	讀方、譯讀習字書取會話	六	仝上及作文	六	仝上	七	仝上及文法	七	仝上
地理	二	本邦地理	二	仝上、及萬國地理	一	萬國地理	一	仝上、及地文概要		—
歷史	二	本邦歷史	二	仝上	一	萬國歷史	一	仝上		—
數學	二	四則應用	二	比例問題	二	仝上、及百分算		—		—
理科	一	博物示教	一	仝上	一	物理	一	化學	一	生理衛生
家事		—		—	二	禮法衣食住	二	仝上、及簿記割烹	三	仝上、及看護育兒
習字	二	行草書	二	行書假名交り	二	仝上	二	仝上	二	仝上、及楷書
圖畫	二	毛筆畫	二	仝上	二	仝上	二	仝上	二	仝上
唱歌	二	單音複音	二	仝上	一	仝上	一	仝上	一	仝上
裁縫	三	運針縫方繕方	三	仝上	四	仝上	四	仝上	四	仝上
體操	一	遊戲普通體操	一	仝上	一	仝上	一	仝上	一	仝上
計	二八		二八		二九		二九		二九	
手藝隨意科	一	裁縫	一	仝上	一	編物	四	茶、挿花、洋琴	四	仝上

高等科課程表　（第二號表）

	每週時數	一學年	每週時數	二學年
修身	一	人倫道德ノ要旨	一	仝上
國語	五	講讀、作文、文法詠歌、修辭	五	仝上及文學史
漢文	二	講讀	二	仝上
英語	一〇	講讀、作文、文法會話、飜譯	一〇	仝上及修辭學
家事	二	看護、育兒、衛生、割烹	二	兒童心理、保育原理、割烹
習字	二	楷書、行書、假名交り	二	仝上
繪畫	二	毛筆畫	二	仝上
計	二四		二四	
隨意科 音樂	二	唱歌洋琴	二	仝上
隨意科 裁縫	二	裁方、縫方、繕方	二	仝上
隨意科 體操	一	普通體操	一	仝上
隨意科 手藝	四	編物、挿花、茶、割烹	四	仝上

新刊月旦

『歐山米水』を評す

其の歐山と言ふ、必らずしも歐羅巴の山容を描きたるにあらず、其米水と言ふ亦必ずしも亞米利加の水態を畵きたるにあらず、而かもアルプスの高きに躋らざれば以て歐大陸の大なるを知るべからず、而かもミシシッピーの深きを渉らざれば以て米大州の廣きを知るべからざるなり、大橋乙羽氏世界周遊を志して昨年四月程を發し、遍ねく歐米諸國を歷遊し、アルプスの山嶺に攀ぢ、ミシシッピーの大江に濯ぎ、巴里の花にあこがれ紐育の月に嘯き、周遊凡そ八ヶ月、同十月を以て歸朝せり、本書『歐山米水』は即ち氏が世界漫遊の紀念品として廣く江湖に頒ちたるものなり、卷頭の口繪挿むに世界の名畵十數品、並びに各所の風景數十葉を以てす、坐ながらにして世界の名勝を知るものは是れなり、本文歐山米水は即ち氏が羇旅中の隨見錄にして歐風米俗の巨細旅ち得て才華爛熳、表裝の美、體裁の綺、亦現代出版界の珍とするに足るべし。

◉新文藝　第一號　　新文藝社發行

年の改ると共に、『新文藝』は生れたり、その發刊主旨に曰く、「今や二十世紀の新舞臺は開展せられたり、然るに顧てわが文壇を觀れば、靡々として振はざるのみか、文藝の趣味は未だ充分に國民の間に普及せられざる

の慨あり、されば吾曹は一日の長を以て、將來の文運を鼓吹せむと欲す、而して希望の極致は、天下の青年文士が、鞍を並べ轡を列れ、馳驅奔趨、一大勢力を形成し、無限逕路の中に入らむと欲するにあればなり」とその呼聲や壯快なり、されど呼聲の壯大は各新誌皆然り、その實行のいかむは將來に徵せむのみ、さりながら、この雜誌は、重もに赤門文士の筆に成れるものを載せ、清新の作を以て紙面を充たさる、而して泰西文學の趣味を具ふるはその特色なるか、評論の「勢力の濫用」は中内蝶二氏の筆に成るもの、こは今の新聞記者の勢力濫用を痛慨し、その無責任極まるを罵倒せる壯快の文字也、その內容は稍〻帝國文學に類して、形裝は頗る新聲文庫などに肖たるが如し、要するに、いま少し材料を精選せばやと思へど、こを新刊の雜誌に攻むるは酷なりとせば、兎に角現今の文學雜誌中の錚々たるものなりとも評すべき乎、

◉家　庭　第壹號　　大日本佛教婦人會

この『家庭』といふ雜誌は、一月十四日を以て新たに生れたるもの、大日本佛教婦人會の機關誌なり、その主義は、「佛陀の訓誡により婦人の智德を涵養し圓滿なる家庭の實現を期す」、とかいふ一種の特色を具えて頗る、その主義を諒して見ば、指して云々すべきほどの個所もなけれど、いかにも淋誌あふるゝばかり佛教臭味を帶ぶるは、家庭の伴侶としては、あまりよき讀物にもあらざるべきか、附錄の『藪路』（夢白作）、まで佛教思想を骨子とせる書きぶりなるは、一躰に趣味の缺乏せる雜誌と評するの外なし、

◉四季の花　（春季發刊の分）

是れ大丸吳服店より發行する非賣品雜誌にして流行の衣服品柄と代價を記せるもの、片々なる小册子なるも、當今流行の品柄の如何を知るには頗る重寶なるものなり、殊に卷末に記せる「裁縫の栞り」は婦女子の一讀すべきもの、蓋し衣類の裁法は少々の寸法取りの相違に依りて着用の際品格上にも及ぼす所多ければなり、

●皇室の御繁榮

天日嗣の御位にそなはらせ給ふ、我が大君の御室に於ては、從前有栖川、伏見、閑院、山階の四の宮は、皇室の御連枝として代々親王家に備はらせたまひけるが、明治維新の始め、仁和寺法親王の宮は故一品伏見邦家親王殿下の王子をもて御稱號を小松宮と稱らせたまひ、又上野輪王寺法親王の宮も同上邦家親王の王子をもて御稱號を北白川宮と稱らせたまひ、從前四の宮の外に更らに二の宮加はらせたまひたり。其後故大勳位朝彦親王殿下に王子數多おはしませしより、更に從前の御絶家を御再興あらせたまひ又御新家を興させ給ひ、久邇宮、賀陽宮、梨本宮、華頂宮の四家を加へさせたまひて茲に親王家並びに諸王家は都合十宮とならせ給ひたり、斯くて我が大君の御園は金枝玉葉繁りに繁りて儔稀れなる御盛觀をぞ呈しける、實に芽出度くもまた畏こき御事にこそ。(本誌第一號附錄『竹の園生』參看)

今上天皇 御名 睦仁
御降誕 嘉永五年壬子九月二十二日
寶壽 五十 歳
御即位 明治元年戊辰八月二十七日

皇后宮 御名 美子 故從一位一條忠香公御三女
御誕生 嘉永三年庚戌四月十七日
御歳 五十二 歳

皇太子 御名 嘉仁親王 第三皇子陸軍步兵少佐 海軍少佐大勳位
御誕生 明治十二年己卯八月卅一日
御歳 二十三 歳
東宮宣下 明治二十年丁亥八月卅一日
立太子 明治廿二年己丑十一月三日

皇太子妃 御名 節子 從一位大勳位九條道孝 第四女勳一等
御誕生 明治十七年甲申六月廿五日
御歳 十八 歳
太子妃宣下 明治三十三年五月十日

御名 昌子 第六皇女 御稱號 常宮 御歳 十四 歳

御名 房子 第七皇女 御稱號 周宮 御歳 十二 歳

御名 允子 第八皇女 御稱號 富美宮 御歳 十一 歳

御名 聰子 第九皇女 御稱號 泰宮 御歳 六 歳

有栖川宮 威仁親王 故大勳位幟仁親王第二王子 海軍中將大勳位功四級

御誕生　文久二年壬戌正月十三日
御歳　四十一歳

妃　慰子　故従三位前田慶寧第二女　勲一等
御誕生　文久四年甲子二月八日
御歳　三十八歳

御母　董子　故従四位溝口直博第三女　勲一等
御誕生　安政二年乙卯六月二十五日
御歳　四十六歳

小松宮　彰仁親王　元帥陸軍大将議定官大勲位功二級
御誕生　弘化三年丙午正月十六日
御歳　五十六歳

妃　頼子　故従三位有馬頼咸第一女　勲一等
御誕生　嘉永五年壬子六月十八日
御歳　五十歳

御継嗣　依仁親王　故一品邦家親王第十二王子　海軍少佐大勲位功五級
御誕生　慶應三年丁卯九月十九日
御歳　三十五歳

妃　周子　正二位勲一等公爵岩倉具定長女　勲一等
御歳　二十六歳

伏見宮　貞愛親王　陸軍中将議定官大勲位功三級
御誕生　安政五年戊午四月二十八日
御歳　四十四歳

妃　利子　故大勲位幟仁親王第四王女　勲一等
御誕生　安政五年戊午五月二十一日
御歳　四十四歳

山階宮　菊麿王　故大勲位晃親王第一王子　勲一等功五級
御誕生　明治七年甲戌三月十六日
御歳　二十八歳

妃　範子　従一位九條道孝第二女　勲二等
御誕生　明治十一年十二月四日
御歳　二十四歳

閑院宮　載仁親王　故伏見宮邦家親王第十三王子　陸軍騎兵大佐大勲位功四級
御誕生　慶應元年乙丑九月二十二日
御歳　三十七歳

妃　智恵子　故正一位大勲位公爵三條實美第一女　勲一等
御誕生　明治五年壬申五月二十五日
御歳　三十歳

陽賀宮　邦憲王　故大勲位朝彦親王第一王子　神宮祭主勲一等
御誕生　慶應三年丁卯六月朔日
御歳　三十五歳

妃　好子　故侯爵醍醐忠順第二女　勲一等
御歳　二十七歳

久邇宮　邦彦王　故大勲位朝彦親王第二王子　陸軍歩兵中尉勲一等
御誕生　明治六年癸酉七月二十三日
御歳　二十九歳

妃　俔子　公爵島津忠重姉　勲二等
御誕生　明治十三年庚辰二月
御歳　二十三歳

華頂宮　博恭王　大勲位貞愛親王第一王子　勲一等功五級　陸軍歩兵大尉
御誕生　明治八年乙亥十月十六日
御歳　二十七歳

妃 經子（ツネコ） 正三位公爵德川家達先代從一位慶喜九女勳一等
御歳 二十一歳

御母 郁子（イクコ） 故從四位南部利剛第一女故三品博經親王妃勳一等
御誕生 嘉永六年癸丑八月五日
御歳 四十九歳

北白川宮 成久王（ナリヒサ） 故大勳位能久親王第三王子
御誕生 明治二十年丁亥四月十八日
御歳 十五歳

御母 富子（トミコ） 故從一位大勳位公爵島津久光養女故大勳位能仁親王妃勳一等
御誕生 文久二年壬戌九月朔日
御歳 四十歳

梨本宮 守正王（モリマサ） 故大勳位朝彦親王第三王子陸軍歩兵中尉勳一等
御誕生 明治七年三月九日
御歳 二十八歳

妃 伊都子（イトコ） 正二位侯爵鍋島直大第二女勳二等
御歳 二十歳

◉御歌會始

新年御歌會始めは一月十八日宮中鳳凰之間に於て行はせられたり今其次第を記さんに係り官一同參集し奉行懷紙を案上に置き諸般の整備をなし出御を奏請すること例年の如く 陛下には午前十時三十分徳大寺侍從長、田中宮內大臣、岡澤侍從武官長、川口宮內次官、丹羽書記官、東園、慈光寺兩侍從、井上松村兩侍從武官の扈從皇后陛下には山內皇后宮亮、柳原權典侍、津守權掌侍、西命婦の扈從にて出御あらせられ場外御廂下には御歌所主事心得小出粲、同寄人坂正臣、參候松浦伯爵、長谷子爵、竹屋子爵、宮地嚴夫、荻原嚴雄、植松有經、鎌田正夫、大口鯛二諸氏及び拜觀人石黒男爵、諏訪子爵、渡邊（清）男爵、萩野由之、島津久實の諸氏參列したり頓て讀師蜂須賀侯爵披講の床に進み着き懷紙を整へて講師に目し講師入江子爵は目を受けて同じく床に進み着き發聲大原伯爵、講頌前田子爵、同大宮子爵、同西五辻男爵、同金子男爵は講頌の床に進み次で讀師懷紙を引延べ硯蓋の上に置き講師之を讀み發聲及び讀頌の諸員之を講じ大臣以下題者及所役並に預撰の歌下位より上位に至る各々一反、親王同妃下の御歌各二反講じ次で皇太子妃殿下の御歌二反皇太子殿下の御歌三反講じ奉り畢つて讀師は皇后宮御前に參進し御懷紙を賜はり講師奉讀し發聲講頌の諸員講じ奉ること三反、次で讀師 陛下の御前に參進御懷紙を賜はり講師等の奉讀奉講すると五反にして御式を畢り 兩陛下には正午頃入御あらせられ各所役には南溜の間に於て御酒肴を賜はりたり御製を始め奉り預

撰歌に至るまでを録すると左の如し

御製

この上にいくへふりそふ雪ならむ
たかむら高くなりまさりつゝ

皇后宮御歌

よの程のあらしはたえてくれ竹の
雪しつかにもあくるそらかな

東宮御歌

ふりつもるまかきの竹のしら雪に
世のさむけさを思ひこそやれ

東宮妃御歌

かきりなき君かちとせもこもるらむ
竹の御山にふれるはつ雪

元帥陸軍大將大勳位功二級　彰仁親王

雪にふすみかきの竹にくに民の
うちなびく世をみそなはすらむ

海軍中將大勳位功四級　威仁親王

ゆきふかき御園の竹生このなつは
いかなる竹の子かおひいてむ

勳一等　慰子

しら雪もうつみかれてそみへにける
竹の園生のしけりしけりて

侍從長從一位勳一等侯爵　臣藤原朝臣實則上

くれ竹のはすゑなひきて千代の色の
かくれぬ程につもる雪かな

宮内大臣議定官陸軍少將從二位勳一等子爵　臣藤原朝臣光顯上

此の君の御代なかゝれとふる雪に
ふしていのらぬ時なかりけり

題者 點者　樞密顧問官兼御歌所長正三位勳一等男爵　臣藤原朝臣正風上

しつれては又ふりつもる竹の雪
千代のちからをためすなりけり

讀師　樞密顧問官正二位勳一等侯爵　臣源朝臣茂韶上

ふりつもる雪に色そふくれ竹の
ちよのすがたはあくよしそなき

宮内次官海軍主計總監從四位勳二等男爵　臣源朝臣武定上

御園生の千代の竹の子おひいてむ
春をは雪のしたにまつかな

發聲　正三位伯爵　臣源朝臣重朝上

なか〳〵になひきやすかるなよ竹の
ふりつむ雪にをれむともせす

講頌　御歌所參候從三位子爵　臣菅原朝臣利貞上

つもるかと見れはしつれてくれ竹の
みとりは雪にうもれさりけり

講頌　正四位子爵　臣藤原朝臣以季上

くれ竹のみとりはゆきにうもれねと
千年へぬへきかけはかくれす

奉行　御歌所參候正四位子爵　臣源朝臣忠敬上

ふりつもる雪のうちにもみそのふに

千代へむ竹のいろは見えけり　　従四位子爵　臣藤原朝臣爲守上

講師

雪ふかくしたゆくかはのそこにのみ
みとりをうつす岸のくれたけ　　正四位男爵　臣源　朝臣文仲上

講頌

村すゝめねくらをしめて千代さよふ
たけのはやしに雪そつもれる　　正四位男爵　臣物部　連　有卿上

講頌

うきふしはうつみはてたる雲間より
ふかくも見ゆる竹のいろ哉　　御歌所參候東京美術學校教授従七位　臣忌部宿禰櫃郎上

奉行

ふる雪にうつもれなからこの君の
千代のみさをは隱れさりけり　　東京府平民　中島　歌　子上

撰歌

雪のうちに根さしかためて若竹の
おひいてむ年の光をそおもふ　　大阪府平民　龜　一　山上

撰歌

ゆきにふす竹をおこしてあら玉の
としほき人をいさむかへてむ　　愛知縣平民　小島　新　吉上

撰歌

うくひすのちよの初音そまたれける
雪をも白きたけのそのふに　　秋田縣平民　伊藤　秀　子上

撰歌

年のたつあさ庭きよしくれ竹の
千代しめなはにゆきもつもりて

▲謹で承はるに文學に關する宮中新年の御公事は御講書始と歌御會始との二なり中就歌御會始は最もおごそかなる御式にて萬世一系の帝室と共に變る事なき敷島の道を奬勵せさせ給ふ大御心の程かしこしとも畏み奉るの外なし維新の後は明治三年以後年々引續き行はせられ最初は皇族、華族、勅任官に詠進せしめ給ひ次で判任官に至るまで歌道に心掛けわるものは詠進致すべしと仰せ出されしが明治七年よりは一般臣民にも詠進を許され其歌は當日叡覽に供へ奉ることゝなり十二年よりは更に一般臣民の詠進中より屬籍の尊卑を論ぜず點者の撰拔に預りたる秀逸の歌五六首を御製及び一座の懷紙に加へて披講せしめらるゝことゝなりぬ、

延喜の聖朝に和歌所を置き古今集を勅撰せしめられし以來歷朝勅撰の御例はあれど貴賤、貧富、長幼の別なく一般臣民の詠進を許し其詠進を　天覽あらせらるゝは立國以來唯明治の聖朝あるのみ其　天覽の御順序を承るに帝國はいふも更なり海外よりの詠進を併せて數萬首にも及ぶを仰出されし詠進書式に違はぬ限りを精査し皇族、華族、高等官等と種別し一般人民の分は臺灣道廳府縣別に次第して之を製本し御式後直に御手

許に奉る御例なりと

御歌所に於ける撰歌の次第を聞くに數萬の詠進歌中より三五名撰拔せられて　兩陛下の御前に於て披講せらる丶光榮に與るものなれば當局者の注意は頗る周密なるものにて當局諸員は固より一般詠進期日迄に詠進の分を各員相互に再三閲讀し其秀歌を標示し之を筆記者に交付し其筆記者は秘密に之を保管し其閲覽了るを待ち歌首に番號を付し無名の集を調製して之を當局各員に頒ち各員は無名集中の歌を撰拔し密封して之を御歌所長即ち題者點者に差出し點者も又無名の集に就て其得點を調査し各寄人等と熟議して始めて決定に至るなりと云ふ

▲歌御會始詠進數

△皇族御詠進	
懐紙	一一
竪詠草	一
計	一二
△臣民詠進懐紙	
御前披講	二〇
華族及高等官	四一
女官	一六
御歌所	一五
神宮職員	一一
華族女學校生徒	六
京都向陽會員	一七
懐紙計	一三八
△臣民詠進竪詠草	
華族	四六
高等官	二三三
華族女學校生徒	六九
東京府	八九八
京都府	三三六
大阪府	二七六
神奈川縣	一五五
兵庫縣	二三七
長崎縣	二三二
新潟縣	三八五
埼玉縣	二二二
群馬縣	一六七
千葉縣	二七九
茨城縣	二二三
栃木縣	九〇
奈良縣	八三
三重縣	一、三九一
愛知縣	一二三
静岡縣	二八六
山梨縣	二〇八
滋賀縣	二五四
岐阜縣	三一三
長野縣	七三〇
宮城縣	二五二
福島縣	二五六
岩手縣	一四六
青森縣	一六二
山形縣	三六六
秋田縣	二四七
福井縣	六八
石川縣	一一四
富山縣	一五一
鳥取縣	五三
島根縣	四八
岡山縣	二八六
廣島縣	二五六
山口縣	三一八
和歌山縣	六九
徳島縣	一一三
香川縣	七九
愛媛縣	一四五
高知縣	七四
福岡縣	一九一
大分縣	一二三
佐賀縣	九六
熊本縣	二七五
宮崎縣	七一
鹿児島縣	二〇七
沖繩縣	四七
北海道	一五九
臺灣	二八
海外	四
計	一一、八四〇
右の外に	
長歌	一一
違式	三二一
期日後到着	四七
計	三七九
總計	一二、三五七

◉女教師の定期叙勲

寶冠章は從來勳五等迄なりしを明治二十七八年戰役に於て看護婦等に授與するの必要より勳八等迄設けたるも爾來女官吏に授けたる事なかりしを今回女教員にして定期に達したる者あるより叙勳の奏請を爲したれば目下賞勳局より伺出中なるを以てその内　陛下より御沙汰あるべしといふ

◉棲谷女史の櫻會

瀧和亭の高弟として近來錚々の名聲ある野口小蘋女史に次で頭角を顯はしたる佐久間棲谷女史は展覽會等にて常に銀銅の賞牌を得たるが花鳥に妙を得たる中にも殊に櫻花に巧にして櫻圖の注文絶ゆることなきより來五月頃より櫻會と云ふを起して廣く櫻圖のみの求めに應ずると聞く

口繪說明

▲梨本宮同御息所

梨本宮守正王殿下は故一品大勳位朝彦親王殿下第三の王子におはして明治七年三月を以て御誕生あらせられ夙に兵式の御敎育を受けさせられ現に陸軍步兵中尉たり、又同御息所殿子は舊佐賀舊主侯爵鍋島直大君の第二女におはして御名を伊都子と稱し昨年十一月を以て御婚儀あらせられたる御方なり

▲有栖川宮御息所

御名を慰子と稱し故正三位侯爵前田慶寧卿の第二女に渡らせられ、明治十三年十二月を以て御入輿あり、夙に賢貞の御聞へありて貞淑の德に富ませられ大日本婦人慈善會を始め、其他の獎善救濟の諸會に御心を寄せ給ふと淺からず、現に同會の會長たる御資格にあらせらるゝ御方なり

▲花房男爵夫人

帝室會計審查局長正三位花房義質君の夫人にして名を千鶴子と稱し閨秀社會に淑德の譽れ高く、日清戰爭の當時は赤十字社篤志看護婦人會幹事として廣島に出張し、數多の看護婦を指揮して慈善事務に熱心鞅掌されし方なり。

▲鳩山春子夫人

法學博士鳩山和夫君の令夫人にして巾幗社會に令名高く、現に大日本女學會、女子職業學校、女子敎育獎勵會等に名譽會員、商議員、幹事長とし婦道の爲めに斡旋盡力さるゝ處多し。

▲棚橋絢子女史

刀自は文學士棚橋一郎君の母堂にして夙に我國婦人敎養の普ねからざるを嘆慨し、嘗て高等女子師範學校に敎鞭を執るの傍ら校舍を設けて專ら女子敎育の普及を謀り、後ち敬愛女學校を設立し、今猶同校に校長として普ねく婦德の敎養を圖らる。

▲東京女學館卒業生とランケン孃

同孃は女學館、語學の敎師として聘されたるが同館創立の際には頗る盡力せし人にて同校創立より明治二十九年まで勤續し女學の爲め貢獻する處多かりしと。

▲ウヰンゾル宮の內殿

英國女皇陛下の別業にして陛下の避暑地として知られたるものなり

▲サラミスの凱旋

巴里美術館內にあり世界名畫の一にして希臘軍がアルメニヤを征伐して歸り市民の歡迎を受くる光景を描きたるものなり。

正誤

本誌第一號第一號大附錄「竹の園生」中華頂宮御息所御肖像の下に「郁子殿下」とありしは「經子殿下」の誤にして右は印刷の際活字の誤撰に出たるに付爰で茲に其の粗漏を謝す

次號要目

『論說』には、女子大學創立者成瀨仁藏氏の斬新痛快なる女子敎育意見を掲載し、『講義』には鹽井、大町、久保諸學士の續稿を載せ、『傳記』には石澤文學士の明快の筆に成れる「英國女王」『地理』には歷史地理硏究會主任者喜田文學士の考證精確、趣味津々たる「名所古蹟談」『學術』には藤堂忠二郞氏の「鼠の話」『家庭には』三輪田眞佐子女史の衣服改頁意見と題する文、又女界の名流平尾光子刀自の實驗上より斷案せる「家庭敎育談」小說には文壇の老將依田學海翁の優美にして壯烈なる物語『割烹』には斯道の名家石井泰次郞氏の「割烹談」其他久しく朝鮮に在りて同國人を娶りたる木村唖虎氏の「朝鮮婦人」と題する觀察を揭ぐ、是れ尋常外人の觀察し能はざるもの朝鮮婦人社會の狀態を描きたるもの也又才媛詞藻には例に依り重賞を懸けて募れる江湖才媛の詞藻を揭ぐ、其他清新幽麗の資料頗る豐富なり

毎月一回五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）‥金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册
　（增刊四回‥‥三、六、九、十一月價格同一

郵税　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治三十四年二月五日發行　第一卷第二號

編輯人　松原岩五郞
發行人　大橋新太郞
印刷人　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千八十番　二千六百二十番

著名文學大家執筆◎有名和洋畫伯挿畫

洋裝菊判美本

少年讀本

壹冊百卌頁餘

全部五拾冊◎毎月壹回發行

1 再版 高島秋帆　福地櫻痴君著（年方畫）
2 白河樂翁公　中郵秋香君著（永洸畫）
3 河井繼之助　戸河殘花君著（半古畫）
4 三條實美公　佐田學海君著（廣業畫）
5 曲亭馬琴　饗庭篁村君著（觀山畫）
6 井伊掃部頭　澀谷小波君著（沖舟畫）
7 山田長政　遲塚麗水君著（春草畫）
8 錢屋五兵衞　桐生悠々君著（永洸畫）
9 春日局　岸上質軒君著（春草畫）
10 水戸烈公　野口珂北君著（大觀畫）
11 桐野利秋　春山鶴峯君著（象堂畫）
12 藤田東湖　大和田建樹君著（不折畫）
13 伊能忠敬　幸田露伴君著（永洸畫）
14 新井白石　武島羽衣君著（敬中畫）
15 水野越州　中村桂軒君著（永興畫）

春山鶴峯君著（第三拾編）

島津齊彬

中澤弘光君畫

正價金拾三錢・郵稅四錢

島津齊彬公は勤王諸侯の唱首、開國論の先驅にして、人物の英邁なる、見識の卓越なる、經綸の、手腕の雄と待ちて、實に維新第一流の人傑なり。此書、事實精確にして、議論また公平公が生涯五十年の事蹟は、著者が得意なる流暢婉麗の筆を以て縱橫に發揮せらる、蓋し近來の好傳記といふべし。

16 池雅　田山花袋君著（觀山畫）
17 木內宗吾　松原廿三階堂君著（春汀畫）
18 西鄉隆盛　川崎紫山君著（年方畫）
19 阪本龍馬　坂崎紫瀾君著（年方畫）
20 横井小楠　大野酒竹君著（不折畫）
21 貝原益軒　石原笠堂君著（春汀畫）
22 渡邊華山　渡邊霞亭君著（年峯畫）
23 中濱萬次郎　石井研堂君著（耕溪畫）
24 近衞忠凞　勢多章之君著（不折畫）
25 間宮倫宗　文學士笹川臨風君著（古洞畫）
26 周布政之助　堺枯川君著（松亭畫）
27 荻生徂徠　內田魯庵君著（華舟畫）
28 松平伊豆　森山吐虹君著（華邨畫）
29 中江藤樹　國府犀東君著（古洞畫）
30 島津齊彬　春山鶴峯君著（弘光畫）

正價　前金壹冊拾錢◎六冊金七拾錢◎拾貳冊金貳圓五拾錢◎郵稅壹冊に付四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（戊の二）

世界お伽噺

巖谷漣山人著

毎月壹回發行

●世界お伽噺二十四編

アイヌ **白い鳥**（しろいとり）（田井月耕畫）

全壹册菊判 密畫入美本 正價金七錢 郵稅貳錢

白い鳥は蝦夷即ち北海道の口碑にして趣味多き物語なり話体頗る本島の復讐談に類し普通の口碑と稱するものに比しては大に進化せるものゝ如し殊此編我版圖内のとなれば讀んで同情の感更に深く兼て彼の地の風俗習慣を覗ひ知るべきものなり『稗の神』『川の男』共に稀らしき物語と云ふべし、之を世界お伽噺の第二十四編とす

全部壹百册

●世界お伽噺二十五編

コサック **消炭太郎**（梶田半古畫）

全壹册菊判 密畫入美本 正價金七錢 郵稅貳錢

魯領コサックと言ふ所に消炭ばかり食べて居た怠け者がありましたが、これがお父さんに森の中へ連れて、行かれて森のぬしに邂逅ひ、それからだん／＼化け出して鳥にもなれば羊にもなり、犬にもなれば鷹にもなり、馬になつたり、驢になつたり、森のぬしとの化け競べさう／＼森のぬしを化けまかして、王樣の婿になつたと言ふ目出度いお話、二十五編はこれでございます、

●第壹編…世界の始…中村不折畫
●第貳編…五色の石…梶田半古畫
●第三編…珊瑚の島…水野年方畫
●第四編…魔法博士…富岡永洗畫
●第五編…無人島大王…渡部審也畫
●第六編…鬼婆と少女…中村不折畫
●第七編…法螺先生…山中古洞畫
●第八編…二人王子…小坂象堂畫
●第九編…小人島…筒井年峯畫
●第拾編…孫悟空…梶田半古畫
●第拾壹編…驢馬姫…渡部審也畫
●第拾貳編…大人國…筒井年峯畫
●第拾參編…豫言書…山中古洞畫
●第拾四編…王城乘取…渡部金秋畫
●第拾五編…續法螺先生…小林清親畫
●第拾六編…猿智慧小僧…水野年方畫
●第拾七編…酋長征伐…遠藤耕溪畫
●第拾八編…夢の三郎…尾形月耕畫
●第拾九編…鷲の踊…渡部審也畫
●第貳拾編…光明姫…中川蘆舟畫
●第廿壹編…鶏の使…鈴木華邨畫
●第廿貳編…日の車…中川蘆舟畫
●第廿參編…三人片輪…山中古洞畫
●第廿四編…白い鳥…尾形月耕畫

毎編密畫挿入 **洋裝菊版美本**

定價 ●壹册金七錢●六册前金四拾錢●拾貳册前金七拾八錢●郵稅壹册貳錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

（戊の四）

婦女必要

博文館發行圖書數萬卷其中に就て女子諸君の必讀を要する者最も多し今其一端を摘載して江湖貴孃諸彦に告ぐ請ふ多少に關せず御愛購あらんことを

下田歌子女史著	◎家政學	（正價金六拾錢 郵稅金拾貳錢）
下田歌子女史著	◎家事要訣	（正價金三拾五錢 郵稅金六錢）
下田歌子女史著	◎婦女家庭訓	（正價金三拾五錢 郵稅金六錢）
下田歌子女史著	◎母親の心得	（正價金三拾五錢 郵稅金六錢）
醫學士三島通良君著	◎はゝのつとめ	（正價金七拾五錢 郵稅金拾錢）
寒澤振作君著	◎家政の栞	（正價金貳拾錢 郵稅金六錢）
岸上操君著	◎家政案内	（正價金貳拾錢 郵稅金六錢）
坪谷善四郎君著	◎家政整理法	（正價金拾五錢 郵稅金六錢）
三浦智之君著	◎實用家事經濟學	（正價金貳拾錢 郵稅金四錢）
石井治兵衛君著	◎日本料理法大全	（正價金貳圓 目方四百匁）
藤本藤蔭君著	◎實用料理法	（正價金貳拾錢 郵稅金六錢）
下田歌子女史著	◎料理手引草	（正價金三拾五錢 郵稅金六錢）

（戌の六）

東洋戰爭實記
《第十九編第二十編》

博文館編輯局編纂

上編……一月中出版
下編……二月中出版

北清戰史

◎寫眞銅版口繪十六頁海陸將校及地圖挿入

全二冊洋裝紙數
一冊三百五十頁餘
正價一冊金三十錢
郵稅一冊二錢

東亞の一角に起りて忽ち全世界を震動したる北清の戰亂も十九世紀の終末と共に一段を告げんとす、而して其戰亂や、世界最多の人口を有する清國が東西八大强國を敵として戰へるもの、太沽の砲臺攻擊より天津停車場の激戰、天津城の攻擊、偖は北倉揚村の戰鬪に續いて、終に北京總攻擊の激戰となり、光緒帝の西安蒙塵に至るまで近世稀有の大戰を演じ、其間北京籠城の大苦戰シーモア救援隊の大困難、或は滿洲に於ける露軍の蹂躙、保定府山海關に於ける連合軍の占領等に加ふるに、文明各國軍隊が行へる總ての虐殺姦淫掠奪等の暴行は、日本軍隊の勇武節制仁愛等の名聲と相俟て、疑も無く帝國を世界の第一等國と爲せり此等戰爭の顛末は東洋戰爭實記に於て零ほ之を叙述せしも、事實は得るに隨ふて排列し、前後錯綜通覽に便ならず、故に今特に其發端より最後の外交談判始末まで、前後一貫詳細に編述し、以て北清戰史と爲し、東洋戰爭實記第十九編及二十編と爲さんと欲す故に此兩編は發行規定を變更し、毎號口繪寫眞及紙數とも平時の三冊分を一冊と爲し一、二兩月各一冊づゝ發行し、殊に口繪寫眞は最も材料を精選し本文と相俟て坐ながら戰地に臨むの感あらしめんと欲す、從來も戰爭實記の愛讀者諸君は勿論、苟くも北清戰亂の始末を知らんと欲する諸君は必ず各一本を購讀せられんことを請ふ

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（虎の八）

（並平製本）

中學世界春季增刊

懸賞文募集

英才詞苑の春の卷

懸賞課題

㊀小説 題隨意（二十四字詰四百行限）
㊁論文 題隨意（二十四字詰百五十行限）
㊂抒情文 題隨意（二十四字詰百五行限）
㊃敍事文 題隨意（二十四字詰百五十行限）
㊄書簡文 題隨意（二十四字詰六十行限）
㊅英文 My child food（本誌一頁限）
㊆新體詩 抒情詩題隨意（七五調三十句以下）
㊇漢詩 觀梅 絕句（限七絕）
㊈和歌 春夜 ㊉春海（短）
㊊俳句 自轉車（春季）

題を定めざるものは季節に關するものは春季なるべき事但し小說は此限にあらず

投書締切二月七日

我中學世界は本年亦四季に定期增刊を行ひ英才詞苑と題せんとし其第一回春の卷に收むへき資料を懸賞を以て募集す、此春の卷は紙數二百四十頁にして、其三分の二を懸賞文に宛て殘餘の部分に知名家の筆に成る佳篇を收む、天下の青年諸秀才よ、此春光和暢に向はんとする好季に際し大に想を養ひ案を凝らして佳篇を寄せ新春の文壇に異彩を放たんとを望む、課題懸賞品は左右に記せる如し、投稿締切期限較急迫せり、寄稿者注意して期限に後るゝなかれ

二月二十五日發行

懸賞品

甲種 小說
（天）懷中銀側時計……壹個
（地）雙眼鏡 壹個
（人）日本大辭典大和田建樹君編 壹個

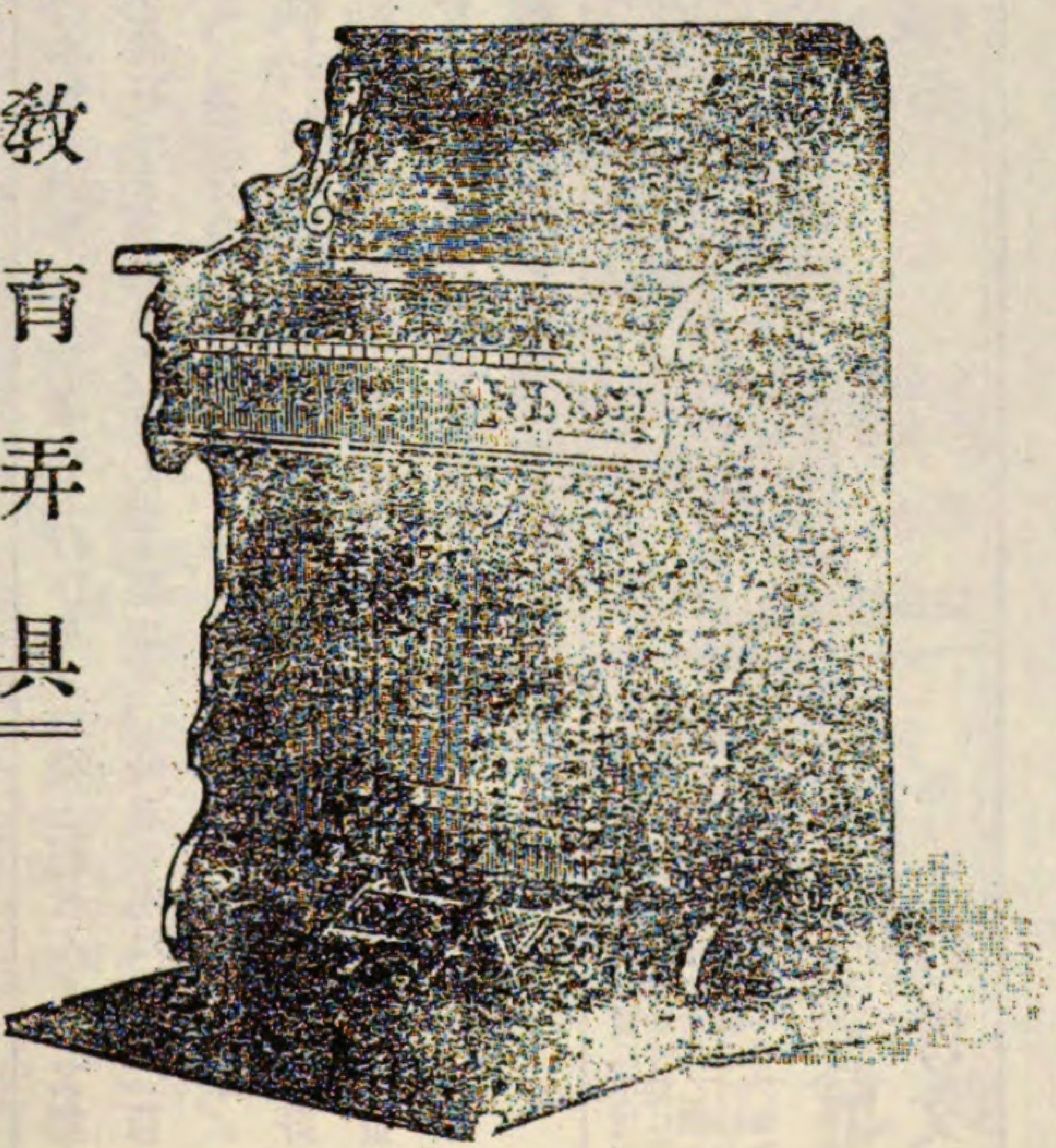
乙種
第一賞 圖書切符 金貳圓
第二賞 仝 金壹圓五拾錢
第三賞 仝 金壹圓
第四賞 仝 金七拾錢
第五賞 仝 金五拾錢

（注意）

小說、天地人三篇に甲種の賞を附す。論文以下新體詩に至る迄の優等者三十五名に乙部の賞品を配附し、漢詩、和歌、俳句の優等者は第二賞以下に於て別に相當の賞品を定む
投稿規定は例刊の中學世界に準す、但封筒には「英才詞苑原稿」の文字を附記すべし

發兌元 東京本町 博文館

女學世界
毎月一回五日發行
(明治三十三年十二月廿五日 第三種郵便物認可) 第壹卷第貳號 (明治三十五年二月五日發行)



(東京市牛込區市ヶ谷秀英舍第一工場印刷)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版①
明治34年1月～2月（第1巻第1号、第2号）

2005年12月10日　第１刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2835-2　C3321